京都市内遺跡発掘調査報告

平成30年度

2019年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡発掘調査報告

平成３０年度

２０１９年3月

京　都　市　文　化　市　民　局

１　第５調査区全景（北東から）

２　第６調査区　鋳造関連土坑１（南東から）

巻頭図版２　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡，室町殿跡（花の御所）・上京遺跡

1　講堂正面階段跡とコンド山（南から）

2　濠124（南東から）

例　言

1　本書は，京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した，平成30年度の京都市内発掘調査報告書である。本書では平成29・30年度に実施した発掘調査成果を報告する。

2　調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。

3　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は，下記のとおりである。

Ⅰ　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡　（受付番号　18A005）
京都市南区唐橋西寺町11番 地内
2018年10月1日～11月8日　119㎡　　鈴木 久史

Ⅱ　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡　（受付番号　30N028）
京都市南区唐橋西寺町57
2018年10月2日～11月2日　117㎡　　西森 正晃

Ⅲ　植物園北遺跡　（受付番号　18S272）
京都市左京区下鴨南芝町30-1
2018年11月5日～11月21日　106㎡　　清水 早織・熊井 亮介

Ⅳ　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　（受付番号　17S614）
京都市上京区築山北半町230
2018年4月9日～5月18日　54㎡　　熊井 亮介

Ⅴ　白河街区跡　（受付番号　17S349）
京都市左京区聖護院中町8-4，9-3，9-4，9-5，9-8，9-9，9-11
2018年1月22日～2月28日　109㎡　　新田 和央

Ⅵ　中臣遺跡　（受付番号　17N650）
京都市山科区栗栖野打越町33-1
2018年4月9日～4月18日　105㎡　　黒須 亜希子

Ⅶ　中臣遺跡・中臣十三塚　（受付番号　17N853）
京都市山科区西野山中臣町71-29
2018年6月18日～6月26日　59.5㎡　　黒須 亜希子

Ⅷ　伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡　（受付番号　18A003）
都市伏見区桃山町泰長老　桃山東合同宿舎敷地内
2018年8月20日～9月28日　126㎡　　新田 和央

4　本書の執筆分担は，本文の末尾に記している。

5　本書に使用した写真の撮影は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し，遺構・遺物の

一部は調査担当者が行った。

6　本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は，一部を除き，小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号，（財）京都市埋蔵文化財研究所，1996年に準拠する。

750頃			840頃			930頃			1050頃			1080～1090頃			1180頃			1270頃			1360頃			1440頃			1500頃			1580～1650頃			1660頃			1740年代頃			1820年代頃		
Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ			Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ			Ⅶ			Ⅷ			Ⅸ			Ⅹ			Ⅺ			Ⅻ			ⅩⅢ			ⅩⅣ		
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

7　本書で使用した土壌名は，農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書中で使用した方位および座標の数値は，世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし，単位（m）を省略した）。また，標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお，調査における測量基準点の設置は，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。

9　本書で使用した地図は，本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）「植物園」「船岡山」「相国寺」「御所」「吉田」「中河原」「梅小路」「勧修寺」「丹波橋」「中書島」を調整したものである。

10　本書の作成及び編集は，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で行った。

本 文 目 次

Ⅰ　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡

1．調査経過 …… 1
（1）調査に至る経緯 …… 1
（2）調査の経緯 …… 1
2．遺　跡 …… 2
（1）歴史的環境 …… 2
（2）既住の調査 …… 3
3．遺　構 …… 8
（1）基本層序 …… 8
（2）遺　構 …… 10
4．遺　物 …… 14
（1）遺物の概要 …… 14
（2）土器類 …… 14
（3）瓦　類 …… 15
（4）その他 …… 19
5．ま と め …… 19

Ⅱ　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡

1．調査経過 …… 24
（1）調査に至る経緯 …… 24
（2）調査の経緯 …… 25
2．遺　構 …… 25
（1）歴史的環経緯 …… 25
（2）遺　構 …… 29
3．遺　物 …… 32
4．ま と め …… 36
（1）講堂について …… 36
（2）コンド山について …… 37
（3）今後の課題 …… 37

Ⅲ　植物園北遺跡

1．調査経過 …… 38

２．位置と環境 …… 39
３．周辺の調査履歴 …… 40
４．遺　構 …… 41
（１）基本層序 …… 41
（２）検出遺構 …… 43
５．遺　物 …… 45
６．ま と め …… 45

Ⅳ　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡
１．調査経過 …… 47
２．遺　跡 …… 48
（１）歴史的環境 …… 48
（２）周辺調査事例 …… 52
３．遺　構 …… 53
（１）基本層序 …… 53
（２）遺構の概要 …… 53
（３）第１面の遺構 …… 56
（４）第２面の遺構 …… 58
（５）第３面の遺構 …… 61
（６）第４面の遺構 …… 62
（７）第５面の遺構 …… 63
４．遺　物 …… 64
（１）第１面の出土遺物 …… 64
（２）第２面の出土遺物 …… 65
（３）第３面の出土遺物 …… 65
（４）第４面の出土遺物 …… 65
（５）第５面の出土遺物 …… 67
５．まとめ …… 68

Ⅴ　白河街区跡
１．調査経過 …… 69
２．遺　跡 …… 69
（１）立地と歴史的環境 …… 69
（２）周辺の調査 …… 71
３．遺　構 …… 72

（1）基本層序 …… 72
（2）遺　構 …… 74
4．遺　物 …… 78
（1）土器・陶磁器・石製品 …… 78
（2）瓦　類 …… 88
5．ま と め …… 90

Ⅵ　中臣遺跡
1．調査に至る経緯と経過 …… 94
（1）調査に至る経緯 …… 94
（2）調査の経過と調査方法 …… 94
2．位置と環境 …… 96
（1）遺跡の立地と地理的環境 …… 96
（2）周辺の既往の調査成果 …… 96
3．調査成果 …… 98
（1）基本層序 …… 98
（2）遺構と遺物 …… 98
4．ま と め …… 104

Ⅶ　中臣遺跡・中臣十三塚
1．調査に至る経緯と経過 …… 105
（1）調査に至る経緯 …… 105
（2）調査の経過と調査方法 …… 105
2．位置と環境 …… 107
（1）遺跡の立地と地理的環境 …… 107
（2）周辺の既往の調査成果 …… 108
3．調査成果 …… 110
（1）基本層序 …… 110
（2）遺　構 …… 112
（3）遺　物 …… 115
4．まとめ …… 115

Ⅵ　伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡
1．調査経過 …… 116
2．遺　跡 …… 117

（1）立地と歴史的環境 …… 117
（2）周辺の調査 …… 119
3．遺　構 …… 121
（1）5区 …… 121
（2）6区 …… 123
4．遺　物 …… 130
（1）土器・陶磁器・金属製品 …… 130
（2）瓦　類 …… 132
5．ま と め …… 134

報告書抄録 …… 137

図　版　目　次

巻頭図版１　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡

1　第５調査区全景（北東から）

2　第６調査区　鋳造関連土坑１（南東から）

巻頭図版２　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡，室町殿跡（花の御所）・上京遺跡

1　講堂正面階段跡とコンド山（南から）

2　濠124（南東から）

図版１　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡　遺構

1　第５調査区犬行３・東側溝６（北から）

2　道路４（北から）

図版２　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡　遺構

1　第６調査区全景（北から）

2　内溝３断割り（北東から）

図版３　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡　遺物

1　出土遺物

図版４　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡　遺物

1　炉壁

2　鋳型

図版５　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡　遺構

1　２区全景（西から）

2　礫敷き整地層（北西から）

3　礫敷き整地層と階段（南から）

図版６　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡　遺構

1　３区全景（南東から）

2　３区西壁９層と基壇土の高まり（北東から）

3　１区瓦溜り10（南西から）

図版７　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡　遺物

1　出土遺物

図版８　植物園北遺跡　遺構

1　調査区全景（西から）

2　建物１全景（北西から）

図版９　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　遺構
１　第１面全景（東から）
２　第２面全景（東から）
図版10　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　遺構
１　第２面　柱列Ｃ（東から）
２　第２面　土坑２７・５８（南東から）
３　第２面　建物Ｄ（東から）
図版11　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　遺構
１　第３面全景（東から）
２　第５面　濠124検出状況（南東から）
図版12　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　遺物
１　出土遺物
図版13　白河街区跡　遺構
１　第１面全景（西から）
２　第２面全景（西から）
図版14　白河街区跡　遺構
１　SE80（東から）
２　SX91中層下端遺物出土状況（南西から）
３　SX91完掘状況（北西から）
図版15　白河街区跡　遺物
１　出土遺物
図版16　白河街区跡　遺物
１　出土遺物
図版17　中臣遺跡・中臣十三塚　遺構
１　第１調査区全景（南東から）
２　第２調査区全景（東から）
３　第３調査区完掘状況（西から）
図版18　伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡　遺構・遺物
１　５区全景（西から）
２　６区全景（東から）
３　出土遺物

挿　図　目　次

Ⅰ　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡

図1　調査位置図（1：2,500）…… 1
図2　調査区配置図（1：500）…… 2
図3　第5調査区調査前風景（南から）…… 3
図4　第6調査区作業風景（北西から）…… 3
図5　第6調査区山下主任調査官現地指導（南から）…… 3
図6　第5調査区埋戻し状況（西から）…… 3
図7　南区発掘調査体験状況（西から）…… 3
図8　現地説明会状況（南東から）…… 3
図9　周辺調査位置図（1：2,500）…… 4
図10　第5調査区平・断面図（1：80）…… 9
図11　第5調査区断面図（1：80）…… 10
図12　第6調査区平・断面図（1：50）…… 11
図13　第6調査区断面図（1：50）…… 12
図14　鋳造関連土坑1・2実測図（1：30）…… 13
図15　道路4出土土器実測図（1：4）…… 14
図16　出土土器類実測図（1：4）…… 14
図17　出土軒瓦実測図及び拓影（1：4）…… 16
図18　出土丸瓦実測図及び拓影（1：4）…… 17
図19　出土平瓦実測図及び拓影（1：4）…… 18
図20　西寺西面築地及び西大宮大路関連調査区位置図（1：500）…… 21
図21　西寺西面築地模式図（1：100）…… 22

Ⅱ　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡

図1　調査位置図（1：5,000）…… 24
図2　調査前のコンド山（南西から）…… 24
図3　現地説明会風景（北西から）…… 25
図4　遺構養生状況（南西から）…… 25
図5　調査区配置図（1：500）…… 26
図6　第1・2区断面図（1：50）…… 27
図7　3区断面図（1：50）…… 28
図8　調査区平面図（1：100）…… 30

図9　2区中央平面図（1：50）…… 31
図10　土器溜り10検出状況（東から）…… 32
図11　出土遺物実測図（1：4，1：2）…… 33
図12　出土軒瓦実測図及び拓影（1：4）…… 34
図13　出土瓦類実測図及び拓影（1：4）…… 35

III　植物園北遺跡

図1　調査地位置図（1：5,000）…… 38
図2　重機掘削（北西から）…… 39
図3　作業風景（北東から）…… 39
図4　植物園北遺跡と周辺遺跡（1：20,000）…… 39
図5　調査区配置図（1：400）…… 41
図6　調査区平面図（1：200）…… 41
図7　調査区北壁・西壁断面図（1：50）…… 42
図8　建物1平・断面図（1：60））…… 43
図9　建物2平・断面図（1：60）…… 44

IV　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡

図1　調査位置図（1：500）…… 47
図2　調査前風景（北西から）…… 48
図3　機材搬入風景（東から）…… 48
図4　調査風景（南東から）…… 48
図5　埋戻し風景（北東から）…… 48
図6　調査区配置図（1：200）…… 48
図7　周辺の調査事例（1：2,000）…… 50
図8　調査区断面図（1：60）…… 54
図9　調壁区断面 土色 …… 55
図10　調査区断面 土色 …… 56
図11　第1面平面図（1：80）…… 56
図12　第1面　遺構平・断面図（1：50，1：40）…… 57
図13　第2面平面図（1：80）…… 58
図14　第2面　遺構平・断面図（1：40）…… 59
図15　第2面　建物D実測図（1：40）…… 60
図16　第3面平面図（1：80）…… 61
図17　第4面平面図（1：80）…… 62

図18　第５面平面図（１：80）…… 64
図19　第１面　出土遺物実測図（１：４）…… 65
図20　第２面　出土遺物実測図（１：４，１：２）…… 66
図21　第３～５面　出土遺物実測図（１：４）…… 67
図22　遺構の位置関係（１：500）…… 68

Ⅴ　白河街区跡

図１　調査前全景（南西から）…… 69
図２　作業風景（北西から）…… 69
図３　調査地点と周辺調査（１：5,000）…… 70
図４　調査区配置図（１：500）…… 72
図５　東壁断面図（１：80）…… 72
図６　北壁・南壁断面図（１：80）…… 73
図７　第１面平面図（１：80）…… 74
図８　SK57断面図（１：40）…… 75
図９　第２面平面図（１：80）・Pit64断面図（１：40）…… 76
図10　SE80平・断面図（１：40）…… 77
図11　白磁椀（第１面～第２面掘り下げ中出土）…… 79
図12　出土遺物実測図（１：４）…… 79
図13　SX91上層出土遺物実測図（１：４）…… 81
図14　SX91中層出土遺物実測図１（１：４）…… 82
図15　SX91中層出土遺物実測図２（１：４，１：２）…… 83
図16　SX91下層出土遺物実測図１（１：４）…… 85
図17　SX91下層出土遺物２・試掘坑内出土遺物実測図（１：４，１：２）…… 86
図18　第２面遺構出土遺物実測図（１：４）…… 87
図19　SX91出土瓦実測図及び拓影（１：４）…… 89
図20　出土瓦実測図及び拓影（１：４）…… 90
図21　SX91出土土師器皿Ｎの口径分布…… 91

Ⅵ　中臣遺跡

図１　調査位置図（１：2,500）…… 94
図２　調査区配置図（１：500）…… 95
図３　人力掘削作業状況（北から）…… 95
図４　遺構面検出状況（北東から）…… 95
図５　既往の調査位置図（１：2,500）…… 96

図６　調査区壁断面図（１：50）…… 99
図７　遺構面全体図（１：100）…… 100
図８　遺構平・断面図（１：25）…… 102
図９　遺構の配置と川田道（１：500）…… 104

Ⅶ　中臣遺跡・中臣十三塚

図１　調査位置図（１：2,500）…… 105
図２　調査区配置図（１：200）…… 106
図３　人力掘削作業状況（北から）…… 106
図４　第３調査区西壁断面（東から）…… 106
図５　既往の調査位置図（1：2,500）…… 107
図６　基本層序模式図 …… 110
図７　調査区壁断面図（１：50）…… 111
図８　遺構面全体図（１：100）…… 112
図９　遺構平・断面図（１：50，１：25）…… 114
図10　出土遺物実測図（１：４）…… 115

Ⅷ　伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡

図１　調査地と周辺調査位置図（1：5,000）…… 116
図２　５区配置図（１：1,000）…… 117
図３　６区配置図（１：1,000）…… 117
図４　５区調査前全景（東から）…… 118
図５　６区調査前全景（東から）…… 118
図６　調査風景（北東から）…… 118
図７　近隣説明会風景（南東から）…… 118
図８　「伏見古御城絵図」調査地周辺 …… 118
図９　５区北壁断面図（１：50）…… 122
図10　５区平面図（１：100）…… 124
図11　６区東壁・西壁断面図（１：50）…… 125
図12　６区南壁断面図（１：50）…… 126
図13　６区第2-1面平面図（１：60）…… 127
図14　６区第2-2面平面図（１：60）…… 128
図15　６区遺構断面図（１：40）…… 129
図16　出土遺物実測図（１：４，１：２）…… 131
図17　出土瓦実測図及び拓影１（１：４）…… 132

図18　出土瓦実測図及び拓影２（１：４）…… 133

表　目　次

Ⅰ　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡

表１　調査成果一覧表 …… 5
表２　調査成果一覧表 …… 6
表３　調査成果一覧表 …… 7
表４　遺構概要表 …… 8
表５　遺物概要表 …… 15

Ⅱ　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡

表１　遺構概要表 …… 29
表２　遺物概要表 …… 32

Ⅲ　植物園北遺跡

表１　遺構概要表 …… 41
表２　遺物概要表 …… 45

Ⅳ　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡

表１　周辺調査事例一覧 …… 51
表２　遺構概要表 …… 53
表３　遺物概要表 …… 64

Ⅴ　白河街区跡

表１　周辺調査一覧 …… 70
表２　遺構概要表 …… 72
表３　遺物概要表 …… 78
表４　SX91 上層出土土器の構成（破片数） …… 80
表５　SX91 中層出土土器の構成（破片数） …… 84
表６　SX91 下層出土土器の構成（破片数） …… 84

Ⅵ　中臣遺跡

表１　既往の調査一覧 …… 97

表２　遺構概要表 …… 98
表３　遺物概要表 …… 98

Ⅶ　中臣遺跡・中臣十三塚
表１　既往の調査一覧 …… 109
表２　遺構概要表 …… 112
表３　遺物概要表 …… 115

ⅷ　伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡
表１　近隣調査事例一覧 …… 120
表２　遺構概要表 …… 121
表３　遺物概要表 …… 130

Ⅰ　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡

図１　調査位置図（１：2,500）

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

本件は文化庁国庫補助事業による西寺跡の範囲確認調査で，今年度は２年目にあたる（第34次）。調査地は，南区唐橋西寺町11番地内で西寺跡（平安京右京九条一坊十三町跡）・唐橋遺跡に該当する。昨年度は塔跡の確認を目的とした発掘調査を実施し，伽藍地南西に瓦葺建物が存在する可能性が高まった（第33次）。そこで本年度は，寺域西限の確定を目的に調査を実施した。

（２）調査の経緯

調査区は西寺西面築地にあたる２箇所の駐車場に設定した（図２）。第５調査区は，推定西大宮大路関連遺構の確認を目的に南北約8.5ｍ，東西約12ｍ，第６調査区は西寺西面築地の内溝の確認を目的に南北約５ｍ，東西約6.5ｍで設定した。調査面積の合計は約119㎡である。調査は平成30年10月１日から開始し，重機を用いた現代盛土等の除去後，人力による遺構検出を実施した。その結果，第５調査区では西大宮大路道路・東側溝・西寺西面築地犬行，第６調査区では西寺西面築地の内溝と鋳造関連遺構を確認した。10月23日に文化庁の指導を経て，11月８日までに埋め戻し，アスファルトの復旧を終えた。なお，10月20日に南区在住の児童を対象とした発掘調査体験，10月27日には現地説明会を開催し，多数の参加者を得た。本調査で確認した遺構は土嚢とまさ土によって保護した上で埋め戻しを行った。

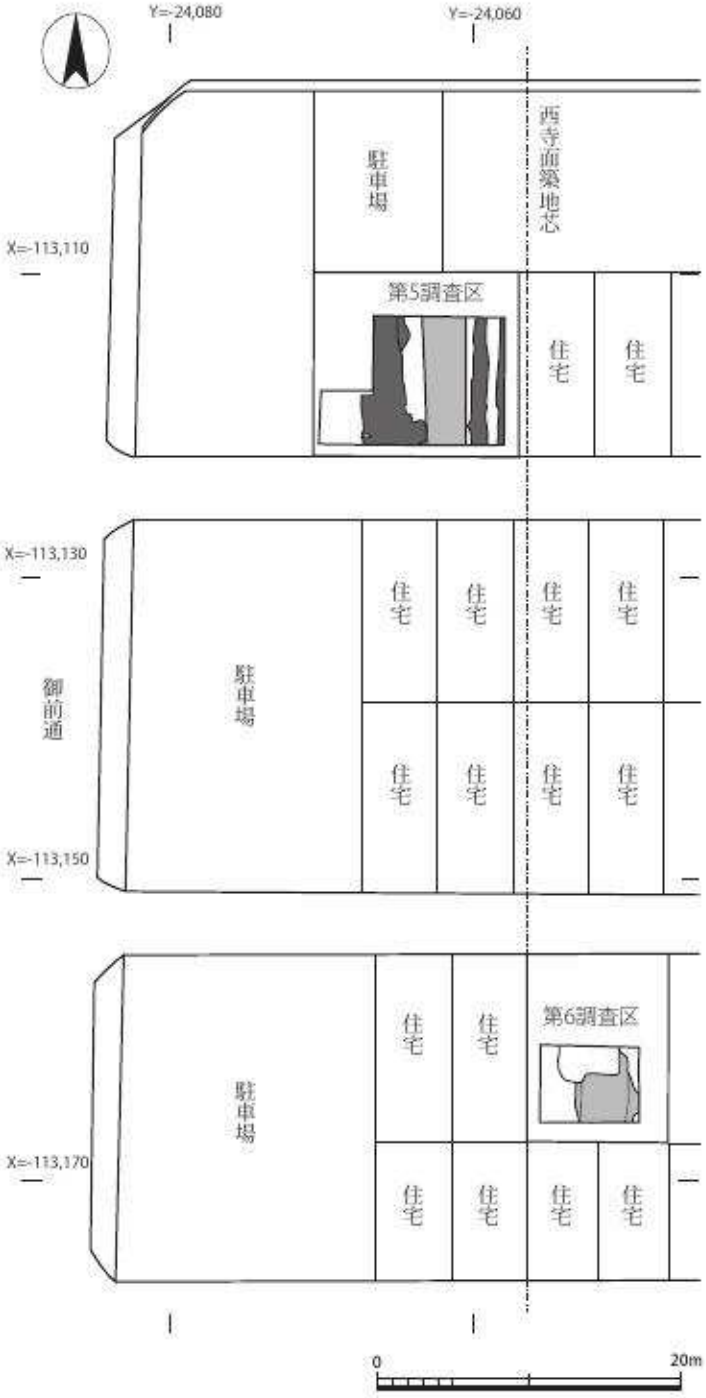


図２　調査区配置図（１：500）

２．遺　跡

（１）歴史的環境

西寺は延暦13年（794）に平安京遷都に伴って，平安京右京九条一坊九町から十六町に建立された寺院である。おおよそ南半４町に伽藍の中心堂塔が，北半４町に寺院経営を支える家政機関が置かれたとされている[1]。創建に関する史料は乏しく，造営経過は明確ではない。『類聚国史』によれば，延暦16年（797）４月４日に笠人朝臣江人が「造西寺次官」に任命され，平安京遷都から間もなくして造寺に着手したことが分かる[2]。弘仁３年（812）には，屏風一帖・障子四十六枚が施入され，東大寺の官家功徳の封二千戸が東西二寺へ移譲されており[3]，堂舎の完成と造寺の継続が窺える。翌年（813）には，諸大寺に準じる布施を得て両寺院で「坐夏」を行うことを定めている[4]。天長元年（824）には大僧都勤操が北院で死去したとの記録があり[5]，諸施設の存在が明らかとなり，天長９年（832）には講堂が完成する[6]。貞観６年（864）になると僧綱所が薬師寺から西寺へと移管されており，僧尼名籍と寺院資財の管理などが行われている[7]。正暦元年（990）に主要部分が焼失し，再建までの間，国忌が東寺へと移されている[8]。再建に関する記録はほとんど無いが，その後，国忌が再び西寺で執りおこなわれていることから，ある程度の堂舎の再建がなされたと推測されている[9]。しかし，仁平元年（1151）には，「西寺荒廃」を理由に僧綱の儀式が東寺で行われるようになる[10]。建久年間（1190～1199）に西寺の塔が修理されるが，天福元年（1233）に焼失し，以後再建されることがなかった[11]。

（2）既住の調査（図9・表1～3）

これまでに実施された西寺跡関連発掘調査成果については『平成29年度京都市内発掘調査報告』[12]の中でまとめた。そこで本節では本調査に関わる調査成果のみを述べる。これまで12・26次と試掘調査1[13]で西大宮大路関連遺構，21次で西寺西面築地関連遺構を検出している。

西大宮大路関連　試掘調査1で，西大宮大路の東側溝と犬行を確認している。側溝は幅2.2m，深さ0.3mあり，埋没土は粘土層であった。犬行は厚さ0.35mほどの積土で構築され，幅が1.6mある。また，犬行が側溝肩口に向かって緩やかな勾配がつけられている。26次では，中仕切り塀とともに東側溝などを確認している。

西寺西面築地関連　21次では西面築地基底部と内溝を確認している。基底部は検出面で幅約4

図3　第5調査区調査前風景（南から）

図4　第6調査区作業風景（北西から）

図5　第6調査区山下主任調査官現地指導（南から）

図6　第5調査区埋戻し状況（西から）

図7　南区発掘調査体験状況（西から）

図8　現地説明会状況（南東から）

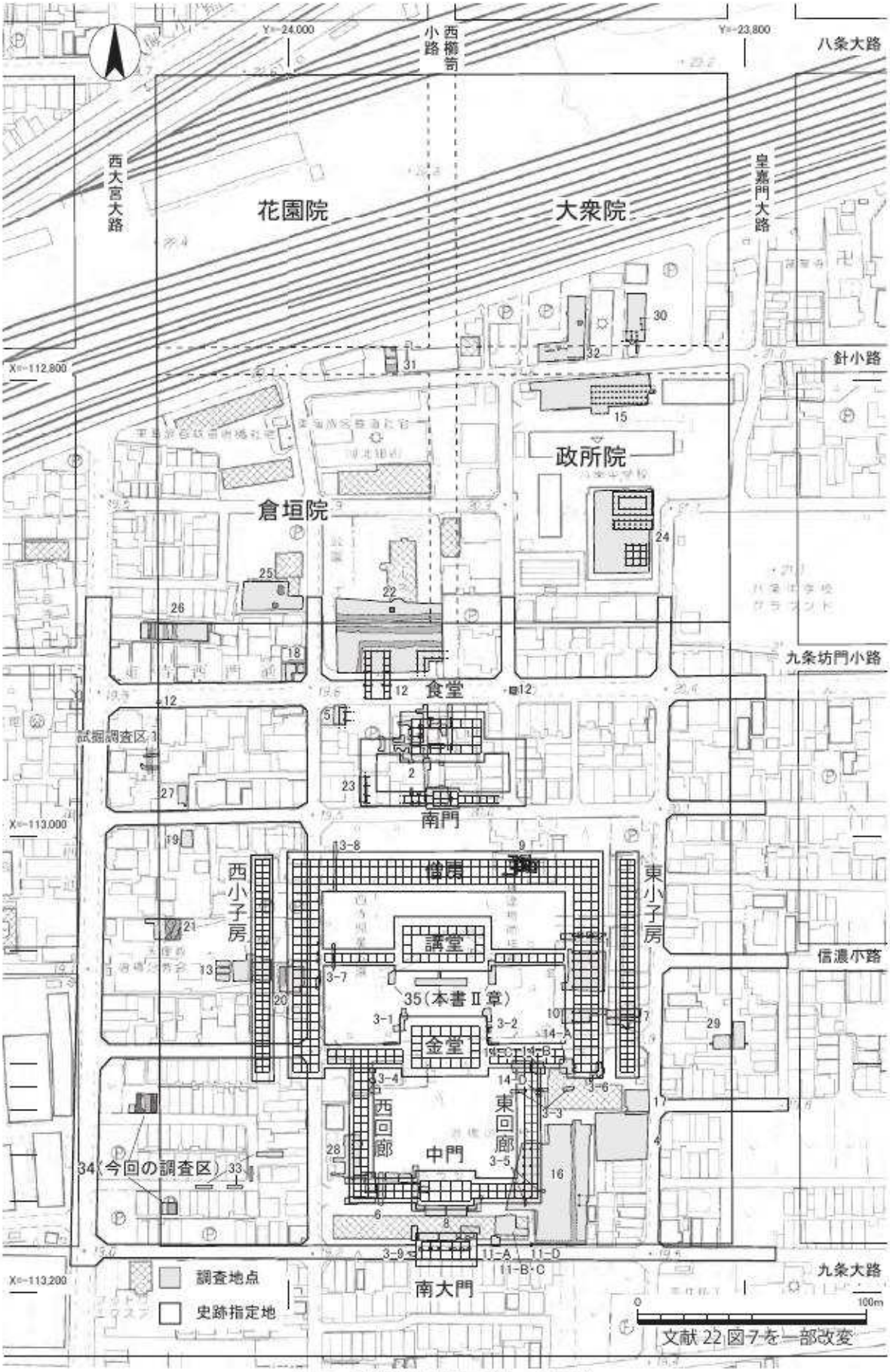


図9　周辺調査位置図（1：2,500）

表1　調査成果一覧表

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	主要遺構	文献
1	東僧坊	西寺町（唐橋西寺公園プール）	1959/6/18～26	京都府・奈文研（杉山信三）	基壇土と15箇所で礎石・礎石抜取り痕跡を確認。	1・2・3
2	食堂院	南区西寺町	1962/2/19～3/12	京都府・奈文研（杉山）	食堂・廻廊・南門を確認。食堂：基壇・基壇土上面の15箇所で礎石もしくは抜取り穴を確認。廻廊：15箇所で礎石もしくは礎石抜取り穴を確認。南門：5箇所で礎石抜取り穴を確認。	1・2・3・5
3-1	金堂・東西軒廊	西寺町（下水工事等）	1962/2/9～12月	京都府・奈文研（杉山）	金堂と東軒廊の入隅の延石を確認。工事中に西軒廊基壇北縁を確認。	1・2・4
3-2	金堂	唐橋西寺公園	同上	同上	金堂西北隅の地覆石と延石を確認（7枚分）。北東隅で雨落溝を確認。	1
3-3	東回廊	唐橋小学校（北校舎と南校舎）	同上	同上	基壇東縁凝灰岩（南北方向）。西縁据付け痕跡。	同上
3-4	西回廊	唐橋小学校北西隅	同上	同上	西回廊基壇東縁地覆石を確認。	同上
3-5	東回廊・南回廊	唐橋小学校講堂	同上	同上	東回廊：基壇東側凝灰岩を確認。 南回廊：凝灰岩を確認。	同上
3-6	東僧房	唐橋小学校（給食調理室）	同上	同上	東僧房の基壇土・東縁雨落溝。南縁雨落溝底。礎石抜取り穴を確認。	同上
3-7	西僧房	唐橋西寺公園西側	同上	同上	東より第一列の礎石抜取り穴（5～6箇所）を確認。	同上
3-8	北僧房	唐橋西寺公園	同上	同上	礫を固めた場所を4箇所で確認。（2列目の礎石の据付け位置と推測）	同上
3-9	南大門	唐橋小学校南側道路	同上	同上	南大門の中央柱通りの礎石据付け穴を確認。	同上
4	国忌堂（御霊堂）	唐橋西寺町65（唐橋小学校プール）	1970/7/14～8/8	市教委・平博（伊藤玄三）	築地基底部（幅約3mで東西方向に展開する小砂礫敷き）と築地北側に緩い凹凸のある大溝を確認。	1
5	大炊殿	唐橋西寺町40	1972/11/2～12/5	市文化財・鳥羽研（杉山・浪貝毅・峰巍）	礎石・根石を確認（1箇所）。	1・6
6	中門・西回廊・南回廊	唐橋西寺町65（唐橋小学校グラウンド）	1973/7/25～8/20	市教委・鳥羽研（杉山）	南回廊北側雨落溝，基壇南北縁凝灰岩。西回廊と南回廊の入隅部分。西回廊を横断する暗渠。中門基壇南北縁凝灰岩片を確認。	1
7	東小子房	唐橋西寺町64（ガレージ）	1973/9/20～10/10	市文化財（浪貝・玉村登志夫）	東小子房の柱掘形を5箇所で確認。このうち4箇所は根石が残る。東側で南北溝を確認。	1・7
8	中門・南回廊・南大門	唐橋西寺町65（唐橋小学校グラウンド南端）	1974/5/3～6/15	市教育・鳥羽研（杉山）	中門：基壇南東隅延石と階段部分を確認。中門・南回廊：中門南東隅と南回廊の入隅部の延石を確認。南回廊：基壇地業を確認。	1
9	北僧房	唐橋西寺町57-1（鐵達稲荷神社社務所）	1974/6/25～7月	市文化財（梶川敏夫）	北僧房の東西に並ぶ礎石抜取り穴を確認。	1・8
10	東僧房	唐橋西寺町65（公園チビッコプール）	1977/5/16～6/4	埋文研（長宗繁一・古川義彦）	東僧房の礎石据え付け穴3基，西側雨落溝（幅0.5 m，深さ0.2 m），基壇東辺を確認。	9a・10a
11-A・D	南面築地	唐橋西寺町65（唐橋小学校南校舎）	1977/8/1～23	埋文研（本弥八郎）	南面築地（九条大路北側築地）・内溝（幅1.6 m，深さ約0.3 m）を確認。	10b
11-B・C					柱穴群を確認。	
12-A	食堂北東部	唐橋西寺町86	1977/9/1～10/31	埋文研（鈴木廣司・長宗）	食堂北東部で井戸（方形木組，一辺3.5 m）を確認。	9b・10c
12-B	大炊殿				礎石据え付け穴を6箇所で確認。東西約2.7 m，南北約5.4 m。	
12-C	西面築地				東西方向の凝灰岩の石列（北側2.9 m，南側3.3 m，南北間隔約0.4 m）を確認。	
13	西小子房	唐橋西寺町27（天理教唐橋分教会）	1977/11/7～30	埋文研（鈴木廣）	西小子房基壇土（幅8.5 m，残存高0.3 m），礎石据付け穴5基（方形で一辺1.3 m，深さ0.2 m），西側雨落溝（幅0.8～1 m，深さ約0.2 m）を確認。	10d
14-A	東僧坊	唐橋西寺町65（唐橋小学校グラウンド）	1978/8/24～31	埋文研（百瀬正恒）	東僧房の礎石据付け穴2基（径1.2 m，深さ約0.1 m，根石を持つ），西側雨落溝（幅1.8 m，深さ0.3 m）を確認。	11・12b
14-C	金堂東軒廊				金堂東軒廊南縁延石（凝灰岩，幅0.35 m，厚さ0.1 m）と掘形（幅1.4 m，深さ0.2 m），礎石を確認。	
14-D	東回廊				東回廊東縁延石を確認。	

表２　調査成果一覧表

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	西寺関連主要遺構	文献
15	付属地	唐橋門脇町35（八条中学校）	1978/11/21～79/3/6	埋文研（平方幸雄）	梁間３間，桁行15間以上の総柱掘立建物（東西棟）を確認。身舎の柱穴は一辺１ｍの方形，庇（北側）は長形0.4～0.5ｍの円形に近い隅丸方形。建物北側で東西溝を確認。	12a
16	東回廊・南回廊・国忌堂	唐橋西寺町65（唐橋小学校体育館・給食室）	1979/1/27～3/31	埋文研（堀内明博）	東・南回廊の基壇土，礎石据付け穴（一辺約１ｍの隅丸方形，深さ約0.3ｍ），基壇外装（延石：幅0.3ｍ，長さ0.5～1ｍ。地覆石：幅0.3ｍ，厚さ0.16～0.2ｍ，長さ0.6～1ｍ）を確認。築地：南北方向の築地基底部を確認。築地の西側で南北溝。門跡：凝灰岩方形礎石・小礎石の据え付け穴２基を確認。	12C
17	伽藍地南東部	唐橋西寺町65（唐橋小学校）	1979/6/1～21	埋文研（磯部勝・辻純一）	炭・土師器を多量に含む土坑，瓦溜りを確認。	13
18	伽藍地北西部	唐橋門脇町２（個人住宅）	1980/5/16～5/25	埋文研（鈴木廣）	創建期の整地層と平安時代後期の整地層。井戸（南北約2.75ｍ，東西2.5ｍ以上の方形掘形）を確認。	14a・15b
19	伽藍地北西部	唐橋西寺町33-3（個人住宅）	1980/6/23～7/5	埋文研（堀内）	西小子房北西部。西寺関連の整地層を確認。	14b・15b
20	西僧坊	唐橋西寺町30（天理教会ガレージ）	1980/8/1～13	埋文研（長宗）	西僧房基壇土，柱穴２基，ピットを確認。	14C・15C
21	西面築地	唐橋西寺町30（天理教会）	1981/2/3～20	埋文研（平尾政幸）	西寺西面築地（西大宮大路東築地）基壇，築地内溝を確認。	14d・15d
22	中仕切築地塀・大炊殿	唐橋門脇町29他（共同住宅）	1986/6/2～10/6	埋文研（磯部・鈴木久男・堀内）	礎石建物：梁間２間，桁行７間の東西庇付礎石建物（南北棟）。梁間２間，桁行７間の四面庇付礎石建物（東西棟）。溝：礎石建物を取り囲む溝（幅1.5～2.3ｍ，深さ0.2ｍ）。築地南北側溝（幅2.3～2.6ｍ，深さ0.15～0.3ｍ）築地：幅約2.6ｍの東西方向の築地跡。	17a
23	食堂院	唐橋西寺町55-2（個人住宅）	1986/11/5～19	埋文研（堀内）	食堂院西回廊基壇，西側柱列礎石抜取り穴４基（径1.4ｍ前後，深さ0.4ｍ）。基壇西側に南北溝（幅2.2ｍ以上，深さ約0.3ｍ）。回廊基壇土の下層でピットと土坑を確認。	16・17b
24	付属地	唐橋門脇町35（八条中学体育館）	1988/9/8～12/28	埋文研（菅田薫）	東西５間，南北２間の四面庇掘立柱建物（一辺約0.8ｍの方形の掘形）・東西７間，南北２間掘立柱建物（径0.3ｍの掘形）。礎石建物：３間３間の総柱礎石建物（掘形0.9～1.2ｍの円形。）井戸・土坑を確認。	18a
25	付属地	唐橋門脇町6・7	1989/1/17～3/15	埋文研（菅田）	平安時代の土坑や井戸を確認。	18b
26	中仕切り築地塀西面築地	唐橋門脇町4-1	1990/11/8～12/20	関西文化（古川・鎌田博子）	中仕切り築地塀に伴う溝と整地層，西面築地に伴う溝を確認。	未報告
27	西面築地	唐橋西寺町35-12	2007/2/16～3/2	埋文研（能芝妙子）	湿地状の落込み，柱穴３，土坑３基を確認。	19
28	西回廊	唐橋西寺町69（唐橋小学校児童館）	2007/7/23～8/20	埋文研（柏田有香）	西回廊基壇整地土，柱穴４基（一辺0.65～0.7ｍ，深さ約0.22ｍの隅丸方形），溝を確認。	20
29	東面築地	唐橋花園町9-8・9・11	2013/11/8～12/10	埋文研（東洋一）	東面築地基底部（幅約2.1ｍ，），内溝（幅1.5ｍ，深さ0.35ｍ），落込みを確認。	21
30	付属地	唐橋門脇町23	2016/5/9～6/17	埋文研（李銀眞）	梁間２間，桁行２間以上の掘立柱建物。梁間1.8ｍ，桁行2.2～2.4ｍで、柱穴掘形は一辺0.3～0.4ｍの隅丸方形である。梁間２間，桁行１間以上の掘立柱建物。梁間約2.4ｍ，柱穴掘形は一辺0.5～0.9ｍ以上の隅丸方形。柱穴列（柱穴掘形一辺0.15～0.3ｍの隅丸方形）。	22
31	付属地	唐橋門脇町17	2016/10/13～21	埋文研（近藤奈央）	井戸（掘形は一辺約２ｍ，一辺0.85ｍの縦板横桟組），溝（幅0.8～1.1ｍ，深さ0.2～0.4ｍ）。造寺に関わる土取坑を確認。	23
32	付属地	唐橋門脇町21・22	2017/5/22～6/29	埋文研（鈴木康高）	井戸（掘形一辺2.2ｍ，深さ約1.6ｍ，井籠組），区画溝（幅1.15～1.5ｍ，深さ0.3ｍ，東西方向）を確認。	24
33	塔	唐橋西寺町10	2017/10/31～12/08	市文化財（鈴木久史）	瓦溜り・落込みを確認。	25
34	西面築地	唐橋西寺町10	2018/10/1～11/8	市文化財（鈴木久史）	西大宮大路と西寺西面築地内溝・鋳造関連遺構を確認。	本報告

表３　調査成果一覧表

調査次数	推定地	調査地	調査期間	調査機関（担当者）	西寺関連主要遺構	文献
35	講堂	唐橋西寺町（唐橋西寺公園）	2018/10/2～11/2	市文化財（西森）	講堂階段抜取溝，整地層などを確認。	本報告第Ⅱ章

＊１　調査機関　鳥羽研：鳥羽離宮跡研究所，奈文研：奈良文化財研究所，京都府：京都府教育委員会，市教委：京都市教育委員会，市文化財：京都市文化財保護課，埋文研：（公財）京都市埋蔵文化財研究所，関西文化：関西文化財調査会，平博：平安博物館

＊２　推定地　推定地や名称については，文献１・註２を参考にした。

文献（表１　西寺跡関係発掘調査一覧表）

1　杉山信三『史跡　西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
2　杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1964年
3　杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1962』奈良国立文化財研究所 1962年
4　杉山信三「西寺跡第３次発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1963』奈良国立文化財研究 1963年
5　杉山信三「29西寺食堂跡」『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』日本国有鉄道 1965年
6　杉山信三・井上満郎・木村捷三郎・浪貝毅「史跡西寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1972』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年
7　浪貝毅・玉村登志夫「西寺跡発掘調査概要」『史跡　西寺跡・鳥羽離宮跡　京都市埋蔵文化財年次報告 1973－Ⅱ』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
8　梶川敏夫「史跡 西寺跡－北僧房跡発掘調査概要－」『鳥羽離宮跡・史跡西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告　1974－Ⅳ』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
9 a　長宗繁一・鈴木久男「西寺東僧房跡」『平安京跡発掘調査概報 1977年』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
　b　長宗繁一・鈴木久男「西寺井戸跡」同上
10 a「平安京右京九条一坊、西寺跡１」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年
　b「平安京右京九条一坊、西寺跡２」同上
　c「平安京右京九条一坊、西寺跡３」同上
　d「平安京右京九条一坊、西寺跡４」同上
11　百瀬正恒「平安京西寺跡」『平安京跡発掘調査概要』（『京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』）京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所 1979年
12 a「平安京右京九条一坊十町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年
　b「平安京右京九条一坊・西寺跡１」同上
　c「平安京右京九条一坊、西寺跡２」同上
13　「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012年
14 a 鈴木廣司「西寺跡発掘調査　第17次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
　b 堀内明博「西寺跡発掘調査　第18次発掘調査」同上
　c 長宗繁一「西寺跡発掘調査　第19次発掘調査」同上
　d 平尾政幸「西寺跡発掘調査　第20次発掘調査」同上
15 a「平安京右京九条一坊、西寺跡１」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年
　b「平安京右京九条一坊、西寺跡２」同上
　c「平安京右京九条一坊、西寺跡３」同上
　d「平安京右京九条一坊、西寺跡４」同上
16　堀内明博「西寺跡第13次調査」『平安京跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
17 a 磯部勝・鈴木久男・堀内明博「平安京右京九条一坊１」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年
　b 堀内明博「平安京右京九条一坊２」同上
18 a 菅田薫「平安京右京九条一坊１」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
　b 菅田薫「平安京右京九条一坊２」同上
19　能芝妙子「平安京西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
20　柏田有香『平安京跡・史跡西寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-4』）（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
21　東洋一「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化

市民局 2014年
22 李銀眞『平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-4』)(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2016年
23 近藤奈央『平安京右京九条一坊十五町・十六町跡(西寺跡)・唐橋遺跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016 - 6』)(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2017年
24 鈴木 康高・木下保明『平安京右京九条一坊九町跡(西寺跡)・唐橋遺跡』(『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017 - 6』)(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2017年
25 鈴木 久史『平安京右京九条一坊九町跡・西寺跡・唐橋遺跡』(『京都市内遺跡発掘調査報告平成29年度』)京都市文化市民局 2018年

m，高さが約0.15ｍである。築地基底部の東側で幅6.5ｍ以上，深さ0.5ｍの溝状遺構を確認し，その位置から内溝と仮定しているが，調査範囲内で東肩を確認できていないこと，底に凹凸があることから断定を避けて報告している。埋土からは平安時代前期の土師器・瓦類が出土している。

3．遺　構

（1）基本層序

第５調査区　基本層序は調査区南壁を代表として述べる。現地表面から0.16～0.46ｍがアスファルト及び現代盛土で，その下が褐灰色泥砂の旧耕作土となる。旧耕作土は調査区のほぼ全域に認められる。調査区東端のみ現地表面から0.38ｍで黄褐色シルトの無遺物層（図11 - ⑳層）となるが，調査区東側は犬行礫敷きと構築土（図11 - ⑰～⑲層），中央部が西大宮大路東側溝（図11 - ⑬・⑭層），西側が西大宮大路の路面構築土（図11 - ⑮・⑯層）である。なお，無遺物層は東から西に向かって下がり，シルトから灰黄色～黒褐色砂礫（図11 - ㉑・㉒層）となる。シルトを除く大部分が，河川状の砂礫層であることから基盤層は軟弱な地盤である。遺構検出面は黄褐色シルトの直上でおこなった。遺構検出標高は，18.4ｍである。

第６調査区　基本層序は調査区南壁を代表として述べる。現地表面から0.2ｍまで現代盛土で，その下が褐灰色砂泥の旧耕作土となる（図13 - 南壁④層）。調査区のほぼ全域に認められる。この旧耕作土を除くと西寺西面築地内溝と明黄褐色砂泥の地山となる。遺構検出は地山直上でおこなった。遺構検出標高は，18.7ｍである。

本調査で確認した遺構検出標高は，寺域内に設定した第６区のほうが僅かに高い。第５区で検出した犬行礫敷はほとんど削平を受けておらず，遺構検出標高がほぼ機能面であったことが分かる。一方，寺域内の第６区の遺構検出面は鋳造関連遺構等の上部が削平されていることから，機能面がもう少し高い位置にあったと推測することができる。このようなことから，寺域が西大宮大路よりも一段高くなっていた可能性が高い。

表４　遺構概要表

時代	遺構	備考
弥生～古墳時代	落込み 26	唐橋遺跡
平安時代	道路４，溝１，内溝３，東側溝６，犬行２，鋳造関連土坑１・２，土坑４	

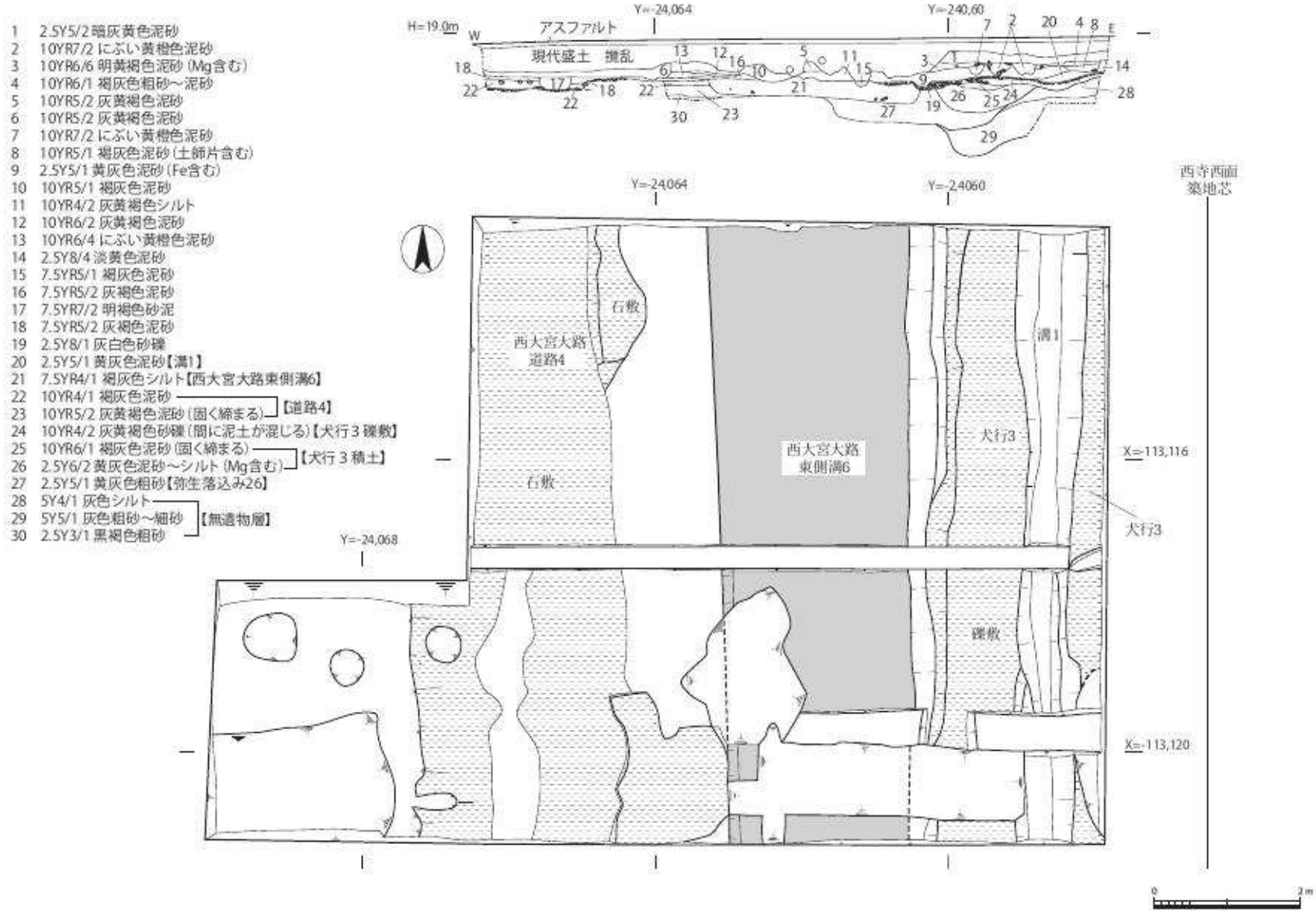


図10 第5調査区平・断面図 (1:80)

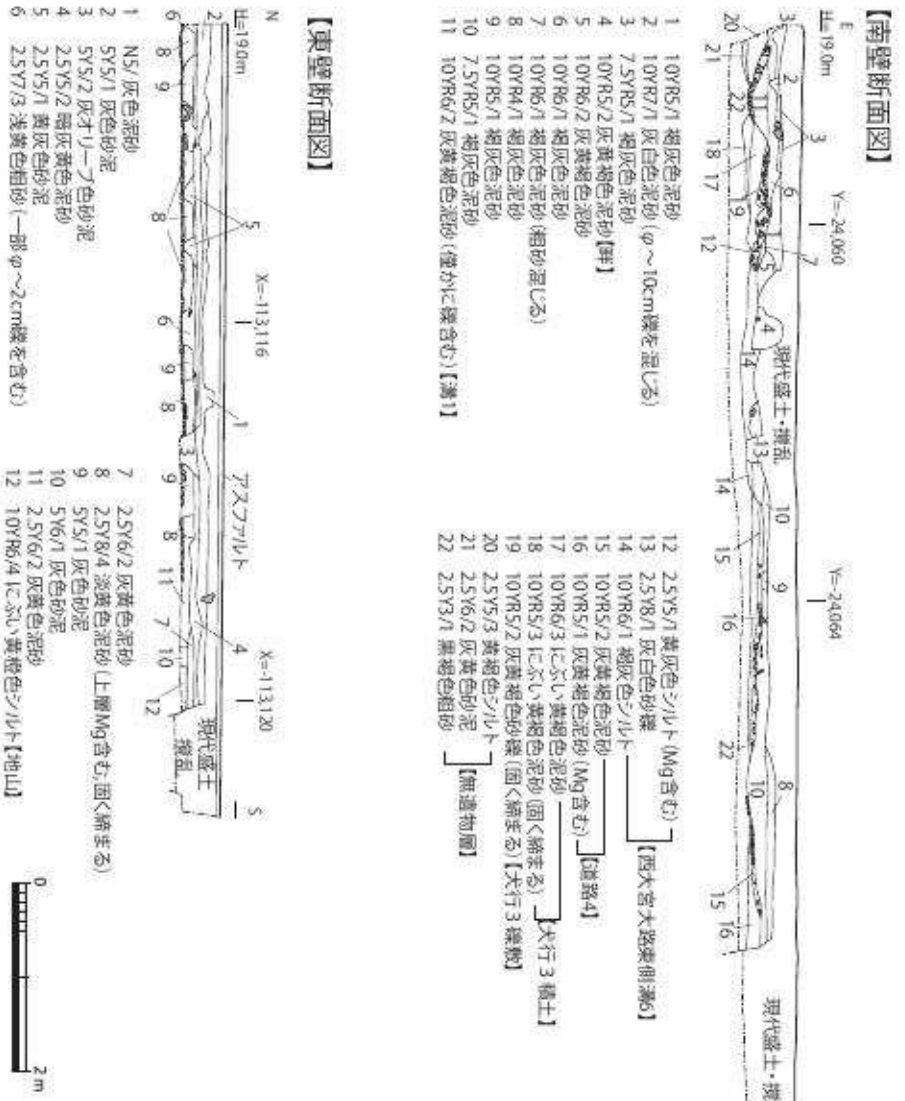


図11　第５調査区断面図（1：80）

（2）遺　構

第５・６調査区ともに，西寺に関連する遺構を確認することができたが，本調査が保存目的の範囲確認調査であることから，遺構の掘削は最小限の断割りに留めている。そのため，各遺構から出土する遺物は非常に限定的であり，遺構の年代については時期幅をもたせて報告する。

第５調査区（図10）

弥生～古墳時代の落込み26と平安時代の西大宮大路の道路４・溝１・東側溝６・犬行３を検出した。

弥生～古墳時代

落込み26　調査区北東で検出した落込みである。断割り部分のみで確認したため，平面規模等は不明である。埋土は黄灰色粗砂で，弥生～古墳時代の土師器細片が出土した。

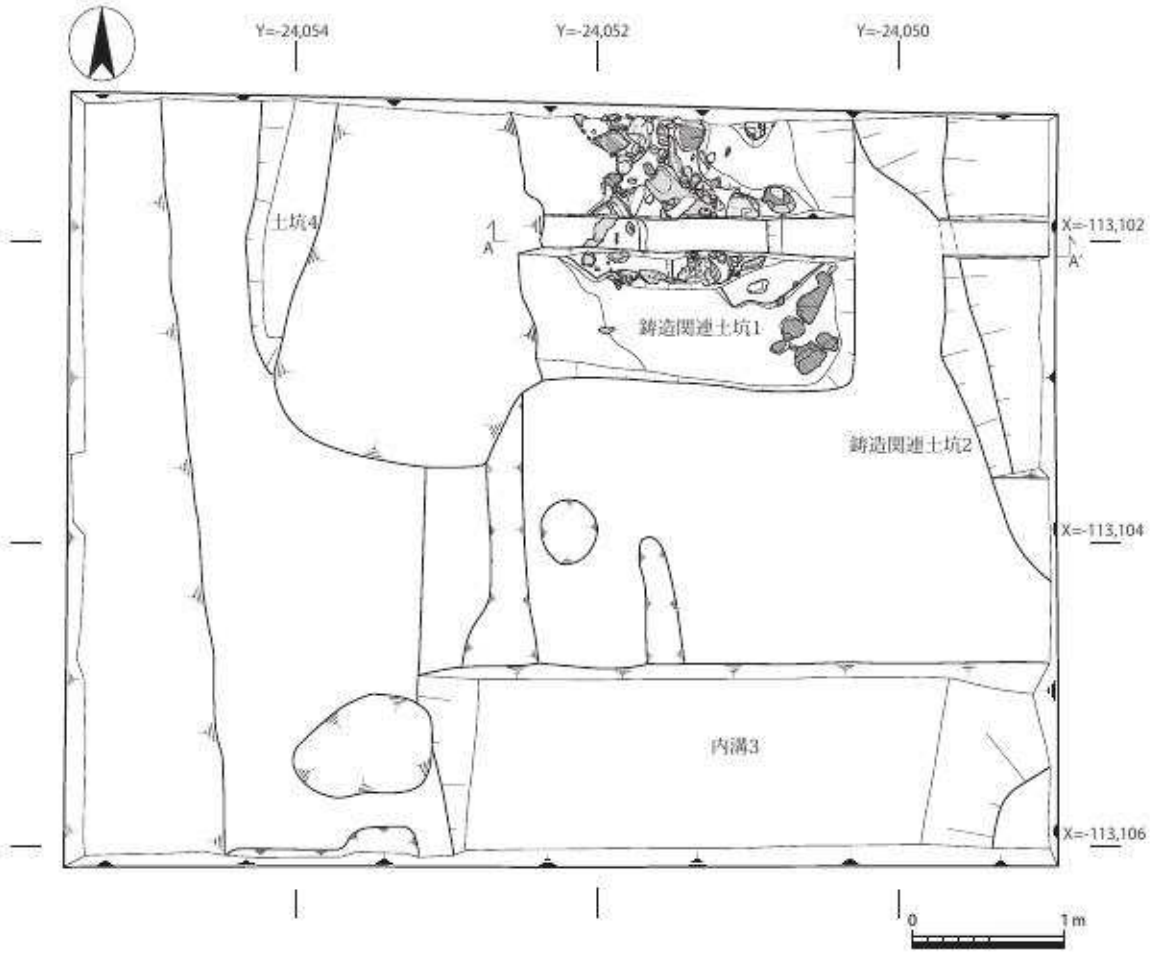


図12　第６調査区平・断面図（1：50）

平安時代

道路４　調査区中央から西側にかけて検出した道路である。東西幅約4.7ｍ以上，南北8.3ｍ以上で西端が削平されている。基盤層が河川状の粗砂であることから道路を構築する際に地盤改良を行っている。構築土（路盤）は，大きく上・下２層に分けることができる。下層は径１～10㎜程度の礫を含む灰黄褐色泥砂で，礫が敷き詰められている。（図11‐⑯層）。上層は径４～10㎝程度の石を積み上げ，石と石の間に須恵器片・灰釉陶器片・瓦片などが混在する泥砂層が堆積する（図11-⑮）。一部で石積みが段をなしているところや石が抜けている箇所が認められた。これらは部分的な補修痕と考えられる。上層の石が面をなしていないこと，道路の検出面が東側溝６の上端検出面よりも僅かに低いことから，路面部分は削平されていると判断できる。また，上層に混在する土器類の中に10世紀中頃～後半にかけての須恵器鉢（図16-２）があることから，道路は少なくとも10世紀後半までは維持され続けていたと推定できる。遺構検出レベルは18.4ｍである。

犬行３　調査区の東端で検出した西寺西面築地の犬行である。検出面で幅約2.2～2.6ｍ，南北約8.3ｍで調査区外へと展開する。検出位置から西寺西面築地の犬行と判断した。弥生～古墳時代の落込み26や砂礫の地山（図10-㉗層，図11-㉒層）を掘り込んで土を入れ替えた後に（図10-㉕・㉖層，図11-⑰・⑱層），上面に礫を敷き詰めて構築している。ただし，東側（西寺西面築地）に

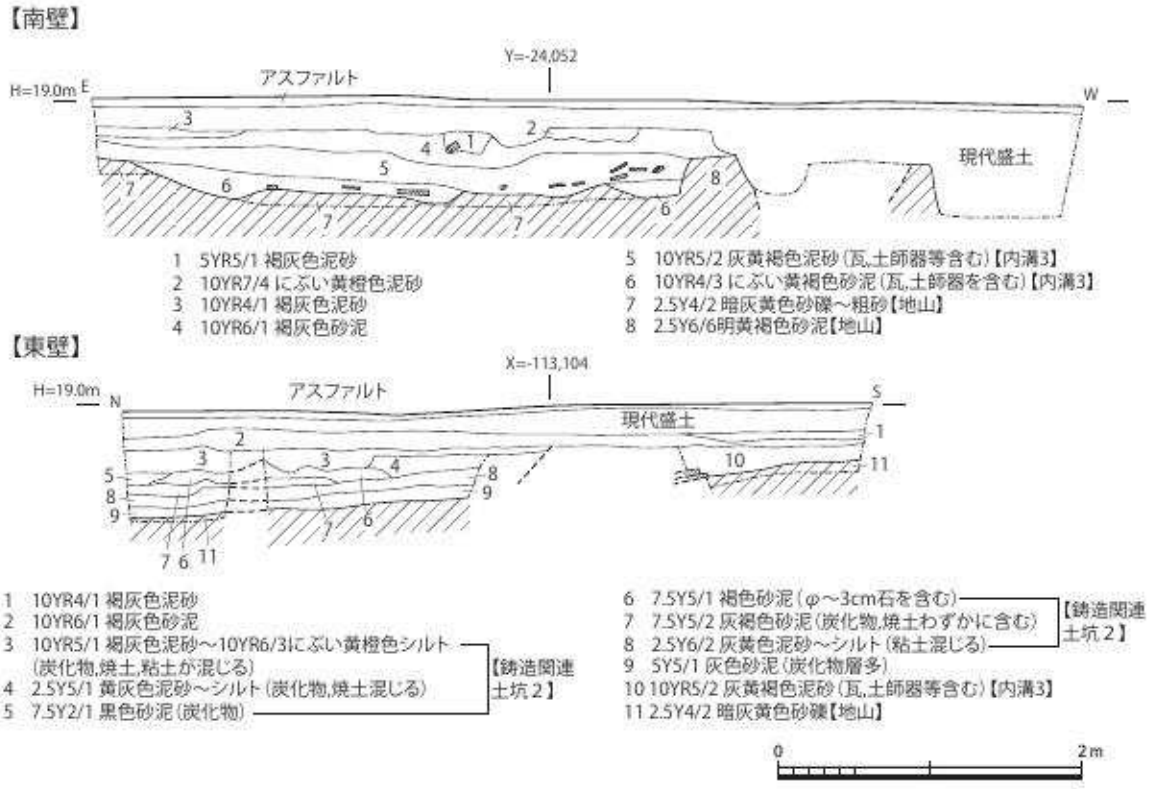


図13　第6調査区断面図（1：50）

向かってシルトの地山が高くなり，この部分についてはシルト層の直上に礫を敷き詰めている。礫は5mm程度で面を形成する。入れ替えた積土は硬く締まり，平安時代前期の瓦片などが出土した。検出面は18.50mである。

東側溝6　調査区の東側で検出した西大宮大路東側溝である。東西幅約2.5～2.9m，南北約8.3m以上，深さ約0.2～0.3mで断面形は浅い台形を呈す。調査区外へ広がる。道路4を掘り込んで成立する。埋土は単層のシルトで流水した様相は認められない。埋土から9世紀に属する土師器細片・緑釉陶器細片と平安時代前期の瓦類が出土した。

溝1　犬行の上面で検出した南北方向の溝である。部分的ではあるが溝底に犬行から連続した礫敷が認められる。幅約0.26～0.46mで深さが0.10～0.18mである。その位置から西寺西面築地の雨落ち溝と判断できる。埋土から平安時代前期の瓦類が出土した。

第6調査区（図12・13・図版2）

西寺西面築地内溝3，鋳造関連土坑1・2，土坑4を検出した。

平安時代

内溝3　調査区の東側で検出した南北方向の溝である。検出位置から，西寺西面築地の内溝と判断した。幅が約4m，深さ0.20～0.36mで，調査区外へと展開する。溝底には僅かながら凹凸が認められる。北側は鋳造関連土坑1・2によって削平される。埋土は硬く締まる黄褐色泥砂からにぶい黄褐色砂泥で，人為的に埋め戻したと考えられる。溝の肩口付近には多量の瓦が投棄されている。

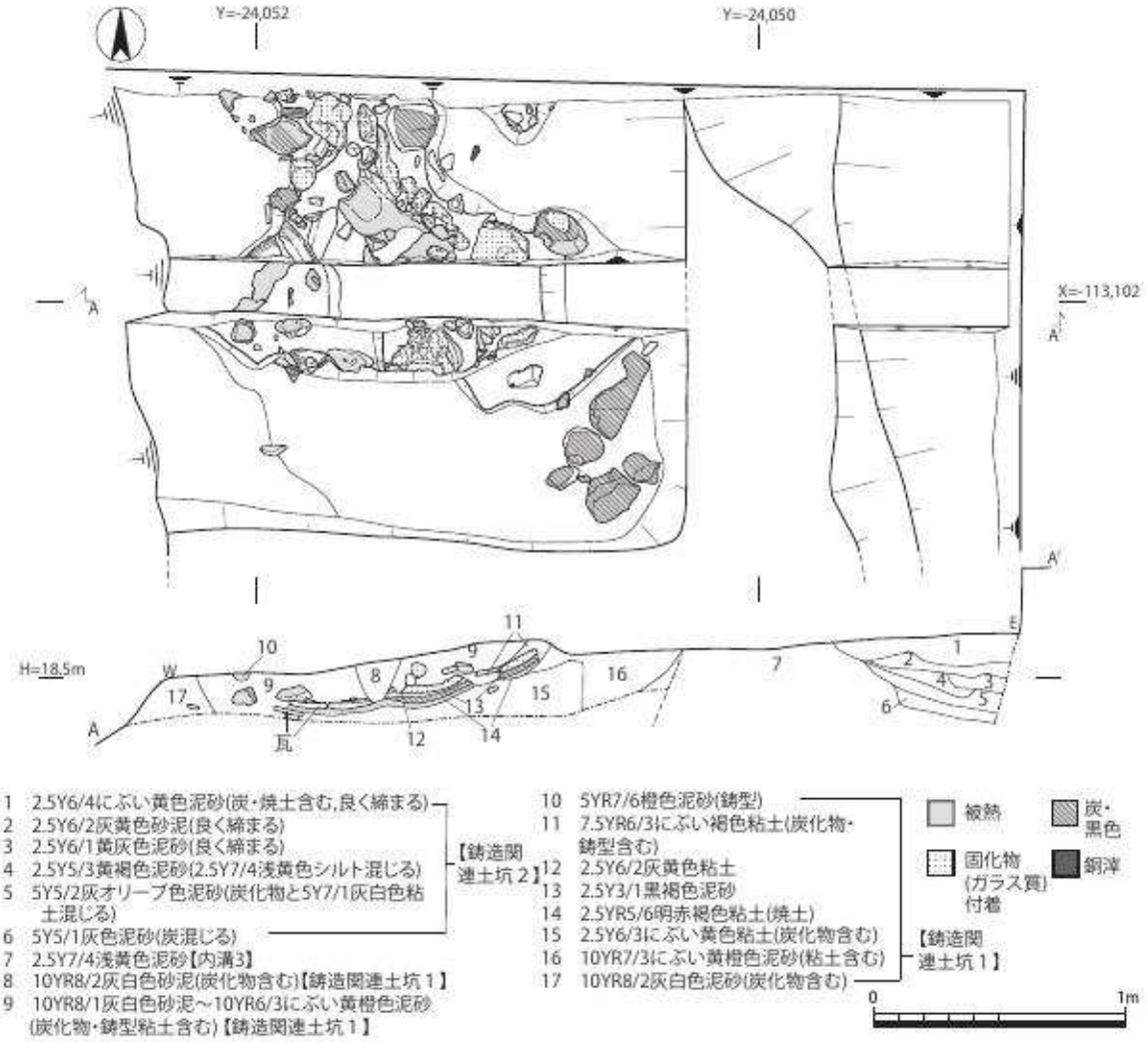


図14　鋳造関連土坑１・２実測図（1：30）

鋳造関連土坑１（図14）　調査区中央北端で検出した鋳造関連土坑である。検出面で東西2.5ｍ以上，南北1.7ｍ以上となり，西側は近世に削平される。内溝を掘り込んで成立する。遺構は現地保存のため，平面検出と一部の掘り下げに留めた。土坑は大きく上・下層に分けることができ，上層は焼土や粘土ブロックとともに表面に固化物（ガラス質）が付着した炉壁片や鋳型片などが多量に散在している。一部に羽口と推測できる部材なども認められる。下層は円形状の掘方あり，炉壁片などがほとんど混入しない粘土層が堆積する。断面で下層直上に被熱した土が帯状に堆積する。したがって，鋳造生産に直接関わる遺構であることは明らかではあるが，炉壁・鋳型・羽口などが共伴していることから，溶解炉と鋳型の区別はできない。また，１点ではあるが銅滓が出土した。しかし，携帯型成分分析計（エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置）による簡易測定によれば，炉壁に付着している成分が銅よりも鉄の値が明らかに高く，鉄製品を生産していた可能性もある。

鋳造関連土坑２　調査区北東隅で検出した鋳造関連土坑である。検出面で東西1.3ｍ以上，南北1.80ｍ以上，深さ0.35ｍ以上の不定形の土坑である。内溝を掘り込んで成立する。埋土は１～６層に分層することができ，炭化物・焼土・炉壁細片などが多量に混在し，最下層は炭層である。炭化物や炉壁細片などが出土したことから，鋳造関連土坑と推定した。埋土内からは土師器・須恵

器・瓦などが出土したが，内溝３を掘り込んで成立していることから，内溝３からの混入の可能性がある。

土坑４　調査区北東側で検出した土坑である。検出面で南北1.9ｍ以上，東西0.5ｍ以上，深さ0.23ｍ以上であり，多くが近代撹乱によって削平されている。埋土からは京都Ⅲ期に属する土師器皿が出土した。

４．遺　物

（１）遺物の概要（表４）

出土した遺物は整理箱にして23箱である。内訳は弥生～古墳時代の土師器，平安時代の土師器・須恵器・輸入陶磁器・瓦類，近代の陶磁器などであるが，８割以上が西寺所用瓦である。

（２）土器類（図15・16）

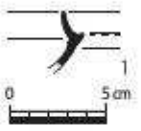


図15　道路４出土土器実測図（1：4）

第５調査区

落込み26

落込み26から弥生～古墳時代の土器が出土した。多くが細片であることから図化することができない。

道路４（図15・16）須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器などが出土した。道路の構築材として再利用されているため，比較的硬質な須恵器や灰釉陶器が多数を占める。生産・使用年代が９～10世中頃と幅が認められるが，主体は10世紀代である。２は口縁が玉縁状になる須恵器鉢である。篠窯産である。10世紀中～後半に属する。３は灰釉陶器椀の底部である。内面に僅かに釉薬が残る。底部には墨書が認められるが，判読はできない。京都Ⅱ期中に属する。４・５は灰釉陶器椀と皿の底部である。貼り付け高台で僅かに釉が残る。４は京都Ⅲ期中～新に属する。５は美濃産で

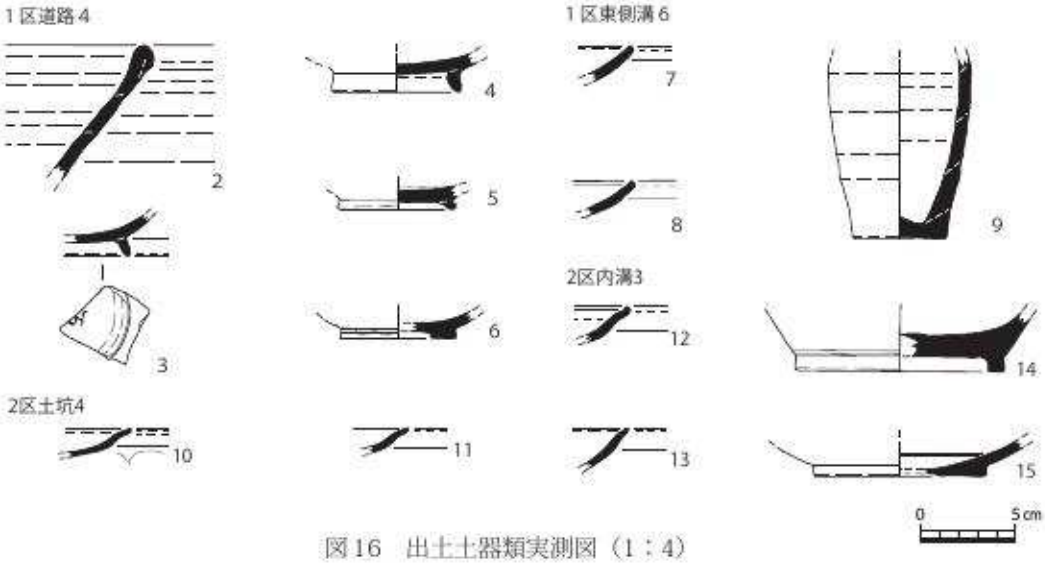


図16　出土土器類実測図（1：4）

京都Ⅲ期中～新に属する。６は白磁の底部である。なお，数点ではあるが，唐橋遺跡関連（６世紀後半頃）の須恵器１が出土した（図15）。

東側溝６（図16） 土師器・須恵器・緑釉陶器などが出土した。土師器は細片が多く図化できなかったが９世紀前半頃が主体である。７・８は，土師器皿で京都Ⅰ期新に属する。９は須恵器壺Ｇである。内外面ナデ，底部は糸切り痕が残る。京都Ⅰ期新～Ⅱ期古に属する。

第６調査区

土坑４（図16） 土師器が出土した。多くが細片である。10・11は口縁部のみではあるが，京都Ⅱ期古～中に属する。

内溝３（図16） 土師器・須恵器・緑釉陶器・黒色土器などが出土した。土師器は細片ではあるが，９世紀中頃～後半が主体である。12・13は土師器皿で京都Ⅱ期古～中に属する。14は須恵器鉢の底部である。京都Ⅱ期古～中に属する。15は緑釉陶器で，蛇目高台で山城産である。京都Ⅱ期中に属する。

（３）瓦 類（図17～19・図版３）

瓦類は，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦が出土している。最も出土量が多いのは内溝３で，残存状況も良好である。一方，道路４や犬行３積土からは構築材として再利用されているため破片が多い。

軒丸瓦は11点出土し，Ⅰ～Ⅵ類に分類できる。軒平瓦は７点出土し，Ⅶ～Ⅸ類に分類できる。

軒丸瓦

奈良時代

１類（16） 単弁蓮華文軒丸瓦である。小片のため全体の文様構成は不明であるが，平城京型式番号6133Ｂと同文の可能性が高く，旧都からの搬入瓦と考えられる。花弁は子葉が盛り上がり，輪郭線が圏線と接す。外区には圏線が２重に巡り，珠文を配す。磨耗が著しく調整技法は不明。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は硬質で色調は黒褐色を呈す。道路４から出土。

平安時代

Ⅱ類（17） 複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は大きく平坦で１＋６の蓮子を配す。花弁は子葉が

表５ 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生～古墳時代	土師器				
平安時代	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器，瓦類，鋳型・炉壁・鋼滓		土師器６点，須恵器４点，緑釉陶器１点・灰釉陶器３点・輸入陶磁器１点，瓦類16点，鋳型６点・炉壁３点・鋼滓１点		
合計		23箱	38点（３箱）	14箱	６箱

※コンテナ箱数の合計は，整理後，Ａランク遺物の抽出，詰め直しのため，出土時より６箱多くなっている。

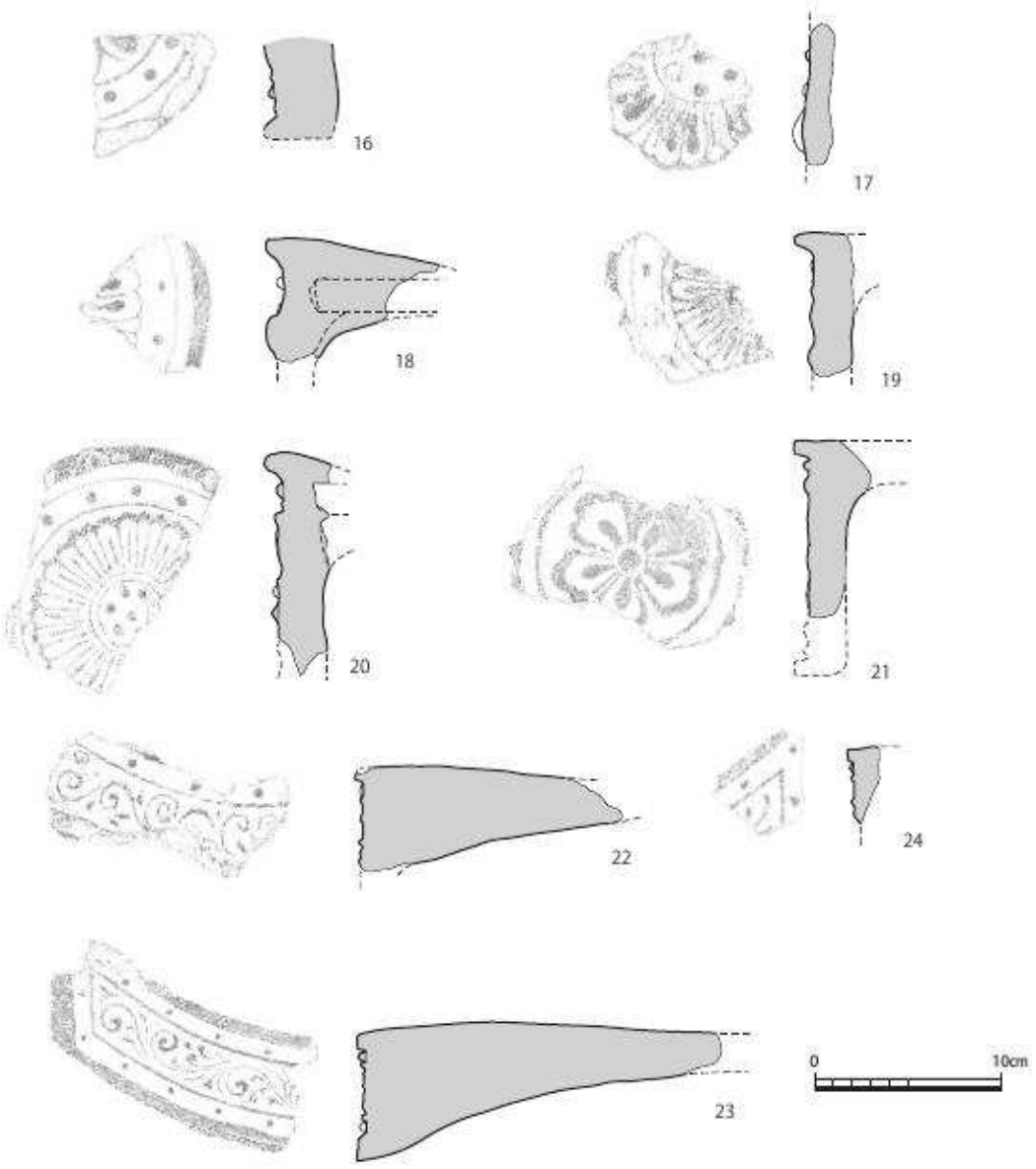


図17　出土軒瓦実測図及び拓影（１：４）

盛り上がり，輪郭線は中房圏線と間弁と接す。調整技法等は不明。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は黒色を呈す。道路４から出土した。時期は平安時代前期である。

Ⅲ類（瓦18）複弁蓮華文軒丸瓦である。Ⅱ類の可能性もあるが，小片で文瓦当の摩耗が著しく照合作業が困難なため別笵として認識する。花弁は子葉が盛り上がり，輪郭線は間弁と接す。区には珠文が巡り，周縁との境に段がある。周縁内側が傾斜する。瓦当部側縁が僅かに凹む。瓦当成形は，瓦当貼り付けで丸瓦部接合箇所に溝を設けるが，丸瓦の先端が加工されていないため，隙間が生じている。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。鋳造関連土坑２から出土。時期は平安時代前期である。

Ⅳ類（19）複弁蓮華文の軒丸瓦である。Ⅲ類の可能性もあるが，全体に磨耗が著しく瓦当文様が不明瞭であること，文様の凹凸が低いことから，別形式と認識した。中央に凸型の中房を配す。花弁はやや平坦である。外区には圏線と珠文が巡る。胎土は少量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色

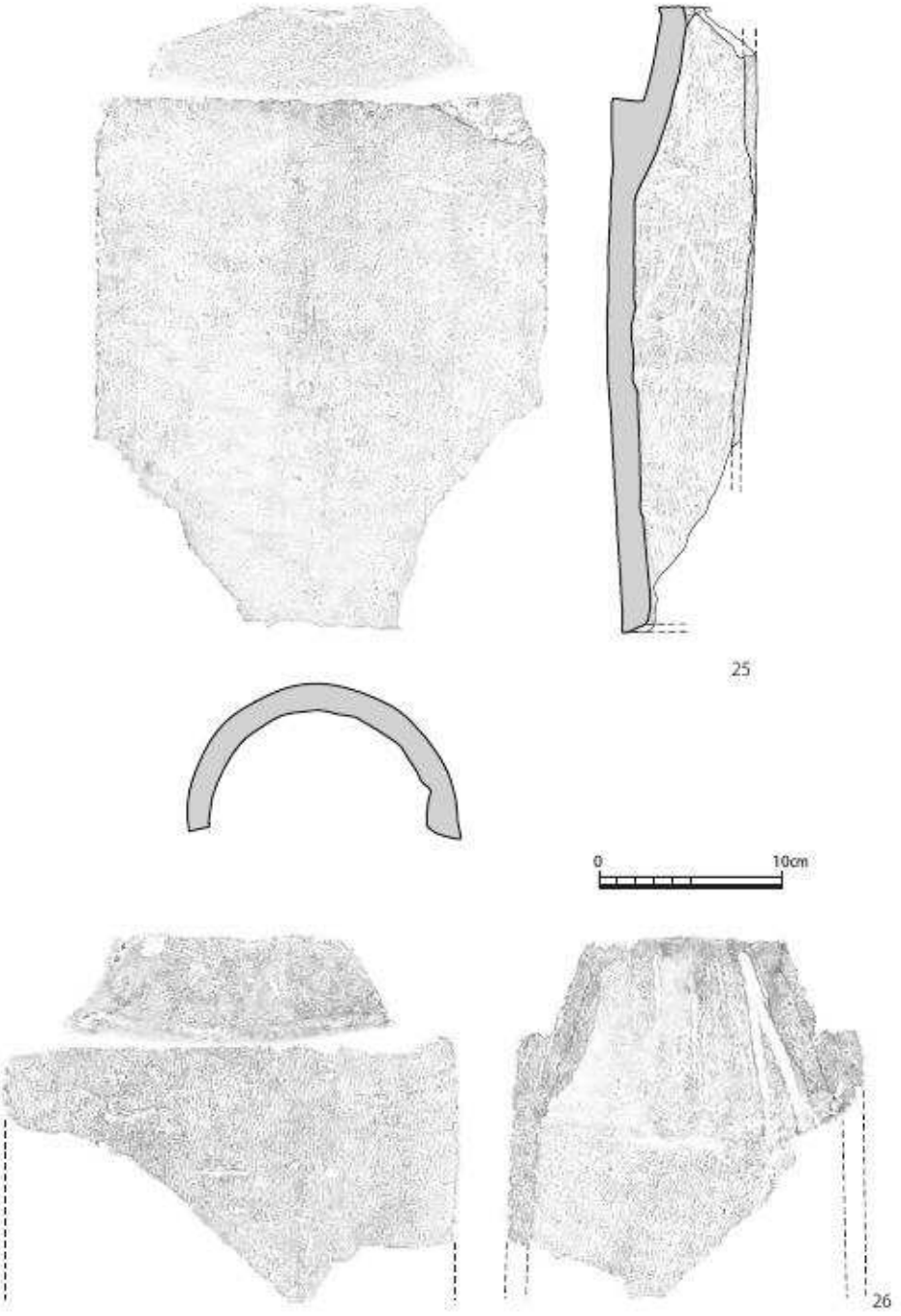


図18　出土丸瓦実測図及び拓影（１：４）

調は灰白色を呈す。第６調査区遺構検出中に出土した。時期は平安時代前期である。

Ⅴ類（20）　複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は凸型で，珠文は１＋６である。花弁は細弁で輪郭線は間弁と接する。外区には圏線と珠文を配し，周縁との境目に段がある。周縁内側が傾斜する。瓦当成形は瓦当貼り付けで，丸瓦接合部に溝を設け，補足粘土を加える。瓦当側面は周縁に沿ってナデ，瓦当裏面ナデ，瓦当部から丸瓦部にかけてナデを施す。一部，瓦当側面瓦当側に凹みがある（瓦笵当りか）。裏面胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色を呈す。最も出土点数が多く，・東側溝６，鋳造関連土坑２，内溝３から出土。

Ⅵ類（21）　単弁五葉蓮華文軒丸瓦である。小型の凸型中房を配す。花弁は平坦で先端む。外区

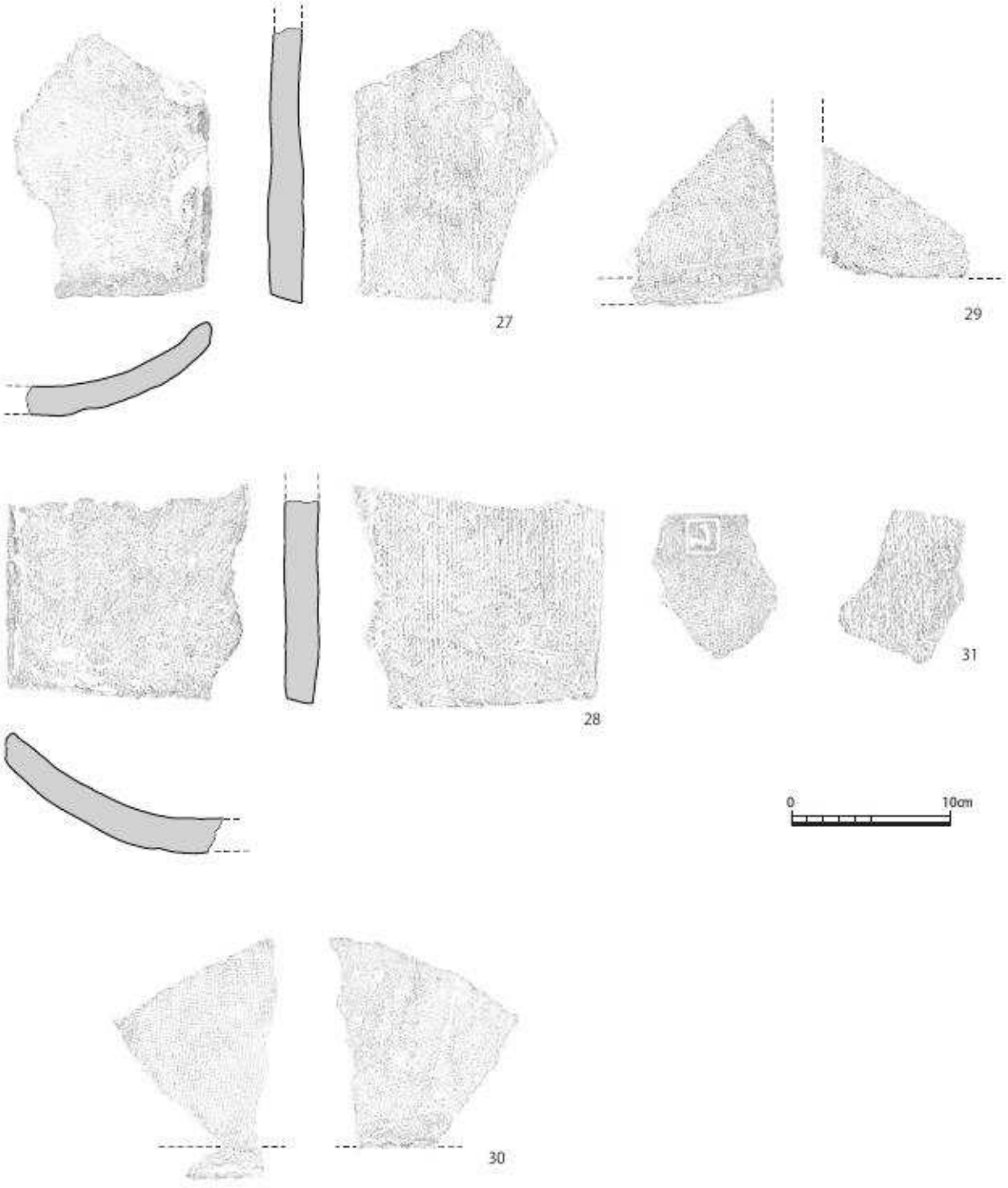


図19　出土平瓦実測図及び拓影（1：4）

には圏線が巡る。瓦当側縁はナデ，瓦当裏面は丸瓦部凹面に沿ってナデを施す。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰白色を呈す。第５調査区耕作溝から出土。

軒平瓦

Ⅶ類（22）　唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きの三葉を配し，左右から唐草が派生する。左右に展開する唐草文の各単位は離れ４回反転する。主葉は大きく巻き込み，外区には珠文が巡る。顎は曲線顎Ⅱで，顎部は横ケズリ，顎部から平瓦部凸面にかけて縦ケズリを施す。凸面に僅かに布目が残る。凹面は布目を残し，瓦当付近は横ナデを施す。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質で，

色調は灰色を呈す。出土点数も多く，第５調査区耕作土，内溝３から出土。

Ⅷ類（23） 均整唐草文軒平瓦である。唐草文の各単位は離れ，主葉は大きく巻き込み，先端は水滴状を呈す。外区には珠文が巡り圏線と接する。下端周縁内側が傾斜する。顎は曲線顎Ⅱである。凹面は布目を残し，瓦当付近はヨコナデ，側縁はケズリによる面取りが施される。凸面は瓦当部から平瓦部にかけて縦ケズリ，側面もケズリを施す。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質で，色調は灰色や黒色を呈す。出土点数が多く，第５耕作土，第５調査区東側掘下げ・西大宮大路東側溝６，内溝３から出土。

Ⅸ類（24）唐草文軒平瓦である。残存状況が悪く文様構成はほとんど不明であるが，外向唐草である。外区には珠文が巡り，笵傷も認められる。溝１から出土。

丸　瓦

25は凸面縄叩き後横ナデ，玉縁部凸面は横ナデを施す。凹面は布目，中央からやや狭端よりに圧痕が残される（成形台と布袋を固定する道具か）。側縁付近は玉縁部から縦ケズリを施す。端面はナデ。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質である。内溝３から出土。26は凸面縄叩き後一部ナデ，玉縁部凸面は横ナデを施す。凹面は布目と端に布袋の綴じ目が残る。端面はナデ。胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質である。内溝３から出土。

平　瓦

28は凸面縄叩き後狭端面付近横ナデで，凹面布目，側面はケズリと面取り，狭端面ナでを施す。多量の砂粒を含み，焼成は硬質。内溝３から出土。29は凸面縄叩き，凹面布目狭端及び側縁付近ナデ，側面ケズリと面取り，狭端面ナデを施す。多量の砂粒を含み，焼成は硬質。内溝３から出土。29・30は凹面から端面から凸面にかけて一連の布目を残す。胎土は砂粒を含み，焼成は硬質である。溝３から出土。31は凸面縄叩き，凹面布目と端面付近に方2.1㎝の印象を押印する。端面ナデ，胎土は多量の砂粒を含み，焼成は硬質である。道路４から出土。

（４）その他（図版４）

鋳造関連土坑１から鋳型・炉壁・銅滓が出土した。大半が炉壁である。

鋳型　小片であるため文様部分は確認することができなかったが，平坦な表面に僅かながら真土が付着している。厚さは細片を除くと4.8～13.5㎝で裏面は被熱している。

炉壁　炉壁は厚いスサ入り粘土を紐状にして積み上げて構築している。凸面側には指圧痕や２条の縄紐痕が認められる。一部の凹面には溶解痕が認められる。厚さは平均にして15㎝以上あり，弧がほとんど認められないことから，大型の炉壁であった可能性が高い。

銅滓　長さ５㎝，厚さ1.5㎝の銅滓である。

５．まとめ

本調査では，西大宮大路と西面築地の内溝を確認し，西寺西限を確定することができた。加えて，寺域の南西隅で銅製品もしくは鉄製品を生産していたことを明らかにした。最後に周辺調査成

果を踏まえてこれらについて整理しておく。

西大宮大路

路面構造　西大宮大路は構築面が砂礫～粗砂の軟弱地盤であることから，道路施工時に整地していることが明らかになった。道路構築過程は以下のように復元することができる。まず，①道路構築面の直上に小礫を含む土で整地面（作業面）を作り，②路面部分には石を積み上げて路盤を構築する。一部に石積みが段状となっていることから，石積みの作業工程が２回以上あったと推測できる。③本調査では削平されていたが，最上層に礫を敷き詰め路面を作り出したと推測できる。石積みの間には10世紀中頃の須恵器などが混在していたことから，西大宮大路は補修しつつ，10世紀中頃まで維持されていたと推測できる。このような石積みの路盤は，鎌倉期ではあるが平安京左京九条三坊八町に面する針小路でも確認している[14]。

東側溝　西大宮大路東側溝は整地面と路盤を掘り込んで成立している。これは，大路施工範囲の基盤層が，南西に向かって下がる軟弱地盤であることから，溝の開削前に整地する必要があったためと考える。また，検出面で幅約2.5～2.9ｍと『延喜式』に記載されている大路幅規程（４尺≒1.2ｍ）の倍以上の規模を誇り，この規模が，26次調査・試掘調査１でもほぼ同様であることこから，少なくとも伽藍域に面する西大宮大路東側溝が，『延喜式』の規程よりも大きく開削されていたことが明らかになった[15]。

犬行　犬行は路面と同様に構築面が落込み26などの軟弱地盤であることから，土壌改良のために土の入れ替えを行い，上面に礫を敷き詰めている。ただし，東側（西面築地）に向かって，シルト質の良好な地山が形成していることから，この部分については改良を行わず，地山上面に礫を敷き詰めている。礫は路面のように面を形成しており，築地基底部に向かって僅かに高くなっていく。また，犬行の上面で溝１を検出した。西寺西面築地芯（西大宮大路東築地芯）がＹ=-24,056.49であり，『延喜式』記載の築地幅が６尺≒1.8ｍであることから，築地基底部西端がおおよそＹ=-24,057.39の位置になる。ただし，29次調査で東面築地幅が７尺≒2.1ｍであることが明らかにされており，これを採用するとY=-24,057.54ｍとなる。現在，東寺東面築地塀の軒の出（出桁真から広小舞外下角まで）が0.797ｍで復元していることから[16]，この数値を参考にすると，西寺西面築地の軒の出がおおよそＹ=-24,058.19もしくはY=-24,058.34ｍの位置にあたり，溝１の東肩付近となる。したがって，溝１は西面築地の雨落溝と判断できる。また，溝底には礫が敷かれており，犬行と同様に丁寧な施工がなされている。西大宮大路からの寺観を意識している可能性が示唆される。埋土内からは平安時代前期終頃の軒平瓦の細片（図17-24）が出土したことから，平安時代前期末以降に埋没したと考えられる。なお，21次調査で西大宮大路関連遺構を確認できていないのは，調査位置が西門の推定地と想定されるため，道路側溝が西側へ屈曲していた可能性が考えられる。

廃絶年代　西大宮大路は少なくとも道路部分が10世紀中頃までは維持されていたことから，廃絶は10世紀後半以降である。また，西面築地もⅥ類以外に９世紀後半以降の軒瓦などを確認できていないことから，ほぼ同時期に維持されなくなったとも考えられる。西寺は35次発掘調査成果

や史料によれば正暦元年（990）の火災によって主要堂塔は大規模な被害を受ける。主要堂塔の焼失後に東寺へと移された国忌が再び西寺に戻されていることから，ある程度の堂舎が再建されたと考えられるが，西面築地や西大宮大路などは再建されることはなかったと考えられる。

西寺西面築地内溝　第６調査区では21次調査と同様に東肩口を検出することができなかったが，西面築地の内溝を確認した。内溝は幅が４ｍ以上もあり，21次調査も含めて規模の大きい溝が開削されたことになる。平安宮内でも幅が大きく底部に凹凸の内溝が確認されており，排水溝の開削と，築地の構築土の土取りの両方が行われていた可能性が想定されている[17]。当該地の基盤層は土取りに適した土とは言えないが，溝底に凹凸が認められることや，溝が埋め戻された後に新たな溝を開削していないこと，当該地に水を嫌う鋳造関連施設が設けられていることなどから，本調査で確認した内溝の幅が大きいのは広範囲に土取りが行われたためと推測する。なお，埋土内の遺物の出土状況から９世紀後半には埋め戻されたと考えられる。

鋳造関連遺構　伽藍地南西隅地で銅製品もしくは鉄製品を生産していたことが明らかになった。

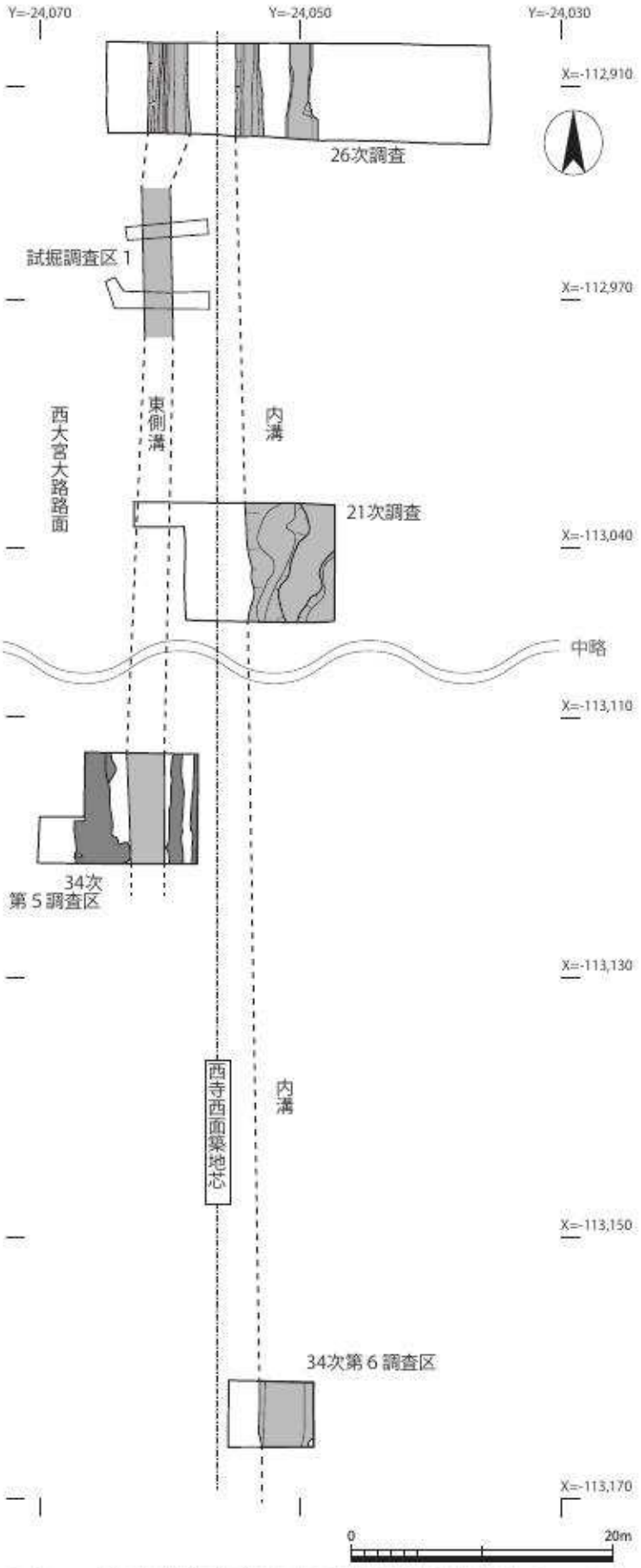


図20　西寺西面築地及び西大宮大路関連調査区位置図（１：500）

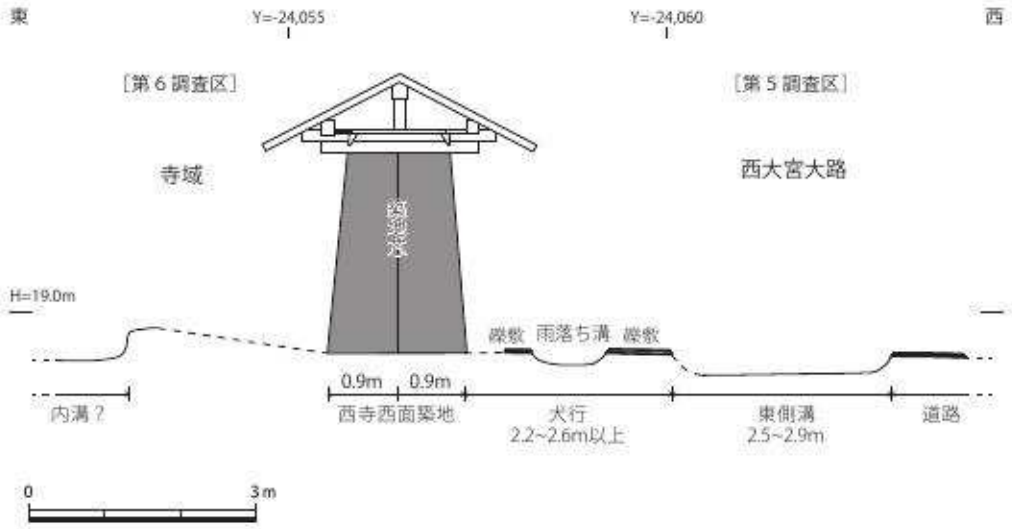


図21　西寺西面築地模式図（１：100）

鋳造関連土坑は，９世紀後半に埋没した内溝を掘り込んで成立していることから早くても９世紀後半以降に生産を開始したと考えられる。製品や文様等が残る鋳型が出土しなかったことから，生産品は明らかではない。積極的に史料を参考にするならば，元慶６年（882）に西寺塔の造営料が定められており，推定塔跡が当該地の北東側に位置することから，塔に関わる鋳造製品（伏鉢）などを生産していた可能性が高い。いずれにせよ，９世紀後半以降も造寺に関わる施設が操業していたことが分かる。

西面築地所用瓦　本調査では西面築地内溝からまとまって瓦が出土した。とくに，内溝からは，軒瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦などが出土しており，西面築地が瓦葺であった可能性が考えられる。軒瓦等の規格はこれまで主要堂塔等で確認されているものと変わりがなく，基本的には西寺の主要堂塔の所用瓦と同様の瓦を用いたことが分かる。また，東面築地を確認した29次調査では平城京・長岡京期の瓦がまとまって出土しているが，本調査では１点のみと非常に少ない。西寺西面築地がどの段階で構築されたのかは明らかではないが，西大宮大路東側溝から京都１期新相の土師器細片が出土しており，遅くとも９世紀初頭には溝が機能していた可能性が高い。したがって，出土した西寺系瓦（Ⅱ～Ⅴ・Ⅶ・Ⅸ類）の生産年代も９世紀初頭と考えることができる。

また，多くの平瓦が凸面縄叩き調整が主体であるが，僅かに凹面から凸面にかけて一連の布目が残るものがあった。これは，「凸面布目押圧技法」を用いて製作している。軒平瓦Ⅷ類が同様の技法を用いて製作されていることから，同じ生産地であった可能性が考えられる。

（鈴木　久史）

註

１）西寺には講堂北側に東西方向の築地が巡り，南側と北側の空間を区別している。杉山氏は八町すべてを指し示す用語として「寺域」を用い，南側は仏と直接それに関わる僧侶の場所（聖域）とし，北側は寺院経営するのに必要な事務管理を行う場所（俗域）であったとする。さらに南都諸寺の資財帳や発掘調査成果から，北側には大衆院・政所院・花園院・倉垣院があったとする（「東寺と西寺」『平安京提要』㈱角川書店

1994年)。一方，古代寺院では，外周の区画内を「寺院地」とし，南大門からの区画内を「伽藍地」，寺院地から伽藍地を除いた空間を「付属地」と称することがある（山路直充「寺の空間構成と国分寺－寺院地・伽藍地・付属地」『国分寺の創建思想・制度編』，吉川弘文館，2011年)。杉山氏が比定した院ついては，検討する余地があると考えるため，本報告では個別具体的な堂塔を示さない限り，中仕切り築地塀から南側を伽藍地，北側を付属地と称す。また，とくに断りのない限り，伽藍配置及び堂塔の復元は文献１，杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』，㈱角川書店，1994年に拠る。

2）『類聚国史』巻一〇七 左右京職 延暦十八年四月四日条

3）鈴木嘉吉「三．寺宝概説（建築)」『新東宝記』，真言宗総本山東寺，1995年。

4）『日本後紀』弘仁四年一月十九日条

5）『元亨釈書』巻二慧解一

6）『日本紀略』天長九年七月五日条

7）『日本三代実録』貞観六年二月十六日条

8）『日本紀略』正暦元年二月二日条，同年八月二十六日条

9）文献１と同じ

10）追塩千尋「西寺の沿革とその特質」『北海学園大学人文論集』第23・24号，北海学園大学人文学会，2003年。

11）『明恵上人行状（漢文行状)』巻中，『百錬抄』天福元年十二月四日条，『明月記』天福元年十二月二十五日条

12）鈴木久史「１平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡・唐橋遺跡」『平成29年度京都市内発掘調査報告』京都市文化市民局，2018年。

13）長谷川行孝「Ⅴ西寺跡　№52，№53」『平成９年度京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化市民局1997年。

14）（公財）京都市埋蔵文化財研究「平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017－8』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2017年。

15）『延喜式』「左右京職京程条」大路廣八丈（今案宮城以南東西畔垣基犬行溝廣間等両溝間九丈六尺)。自垣半至溝邊。各八尺（垣基三尺。犬行五尺)。溝廣各四尺両溝間五条六尺。

16）一般社団法人京都伝統建築技術協会『史跡教王護国寺史跡等登録記念物歴史の道保存整備事業報告書2015』教王護国寺，2015年。

17）西森正晃「長岡・平安京の造営の実態」『都城制研究（11）－日本古代の都城を造る－』奈良女子大学古代学学術研究センター，2017年

Ⅱ　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡

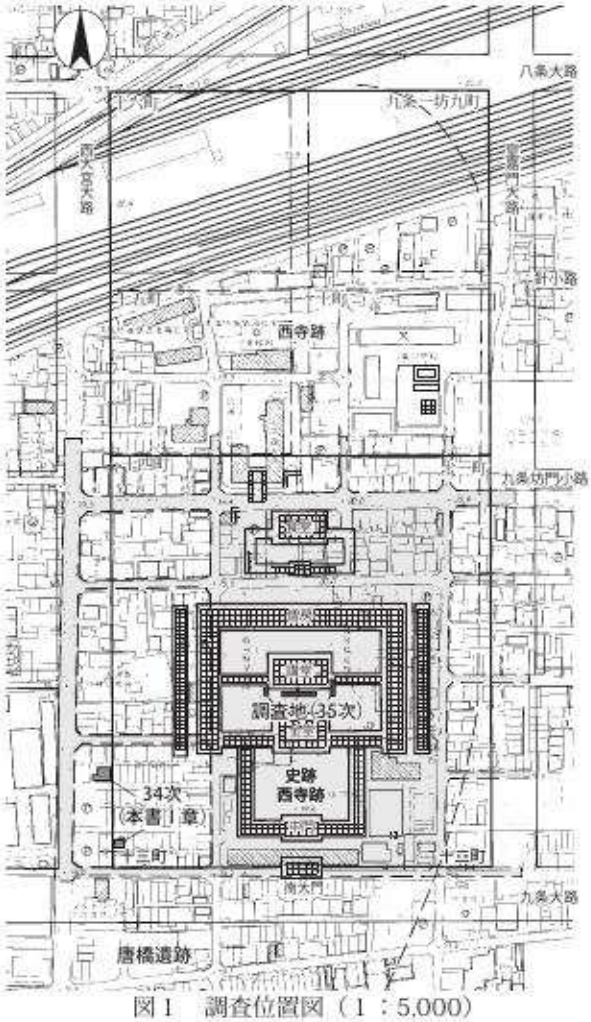


図１　調査位置図（１：5,000）

図２　調査前のコンド山（南西から）

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

本件は，史跡西寺跡における範囲確認調査である。本市調査箇所は，南区唐橋西寺町57の唐橋西寺公園中央に所在する土檀（コンド山）で，これまでの調査成果及び伽藍復元図から，講堂跡に比定されている（図１）。西寺跡では，これまで複数の発掘調査等が実施され（Ⅰ章参照），南大門，中門，金堂，僧房，小子房，食堂等の主要伽藍が確認されているものの，その多くが昭和30～40年代の国土座標系導入以前の調査であり，近年の調査成果を反映する際に支障をきたす事態が生じている。したがって本市では，３箇年の計画で，これまで発掘調査の事例が無い伽藍中軸線上にある講堂跡の調査を実施し，その位置や規模，柱間寸法を確定させ，国土座標系に基づいた伽藍中軸線を求め，正確な伽藍復元に有効な基礎的データを得るための範囲確認調査を実施することとなった。今回の調査は西寺跡35次調査に当たる。

また文化庁から，史跡西寺跡は民有地を多く含むことから，史跡の保全に万全を期すための保存活用計画策定を求められており，今回の調査では周辺住民に対して西寺跡の理解を深めるために，周知を図ることも目的の一つとした。

図３　現地説明会風景（北西から）

図４　遺構養生状況（南西から）

（２）調査の経緯（図３～５）

伽藍復元図における講堂は，３次調査にて講堂と西僧房を繋ぐ廊下跡と目される地山の高まりを確認[1]したことでその位置が求められており，ほぼ左右対称の伽藍配置とされる東寺講堂跡よりも約４ｍ南に想定されていた。今回の調査では，講堂基壇南面両隅と正面中央階段を検出し，基壇規模の確定と中軸線を求めることを目的とし，平成30年８月17日付けで史跡現状変更許可申請を提出し，９月21日付け30受庁財第４号の634号で文化庁長官の許可を得た。

調査区は，伽藍復元図に基づいて３箇所設定し（１～３区），平成30年10月２日から開始した。慎重に調査を進めたところ，復元図の基壇想定位置では関連する遺構が確認できなかった。そのため，東寺講堂基壇の測量[2]を行い，平安京条坊復元の国土座標に基づき，東寺と左右対称の位置と仮定して調査区の拡張を行った。その結果，２区拡張区にて正面中央階段の凝灰岩抜き取り痕を，３区において基壇の痕跡と考えられる凝灰岩紛（溝５）の分布を確認した。なお，遺構掘削については保存を前提として最低限の断割りに留めた。10月23日には文化庁調査官の指導を受けた後，重要遺構には土嚢で養生し，遺構面は真砂土を敷き詰めて埋め戻しを行い，11月２日に全ての調査が終了した。調査面積117㎡である。

普及啓発については，10月20日に調査地が所在する南区民を対象とした発掘調査の親子体験，27日には現地説明会を開催し，多数の参加者を見た。10月30日には，調査地に隣接する唐橋小学校３年生78名が現場の見学に訪れ，説明を行った。また，調査期間中，調査区を囲うフェンスには西寺跡の概要や復元図，古写真，調査経過を貼り出し，周知に努めた。

２．遺　構

（１）歴史的経緯

西寺の歴史及び周辺調査事例については，Ⅰ章で述べているため，ここでは講堂の概要と史跡指定の経緯について述べる。

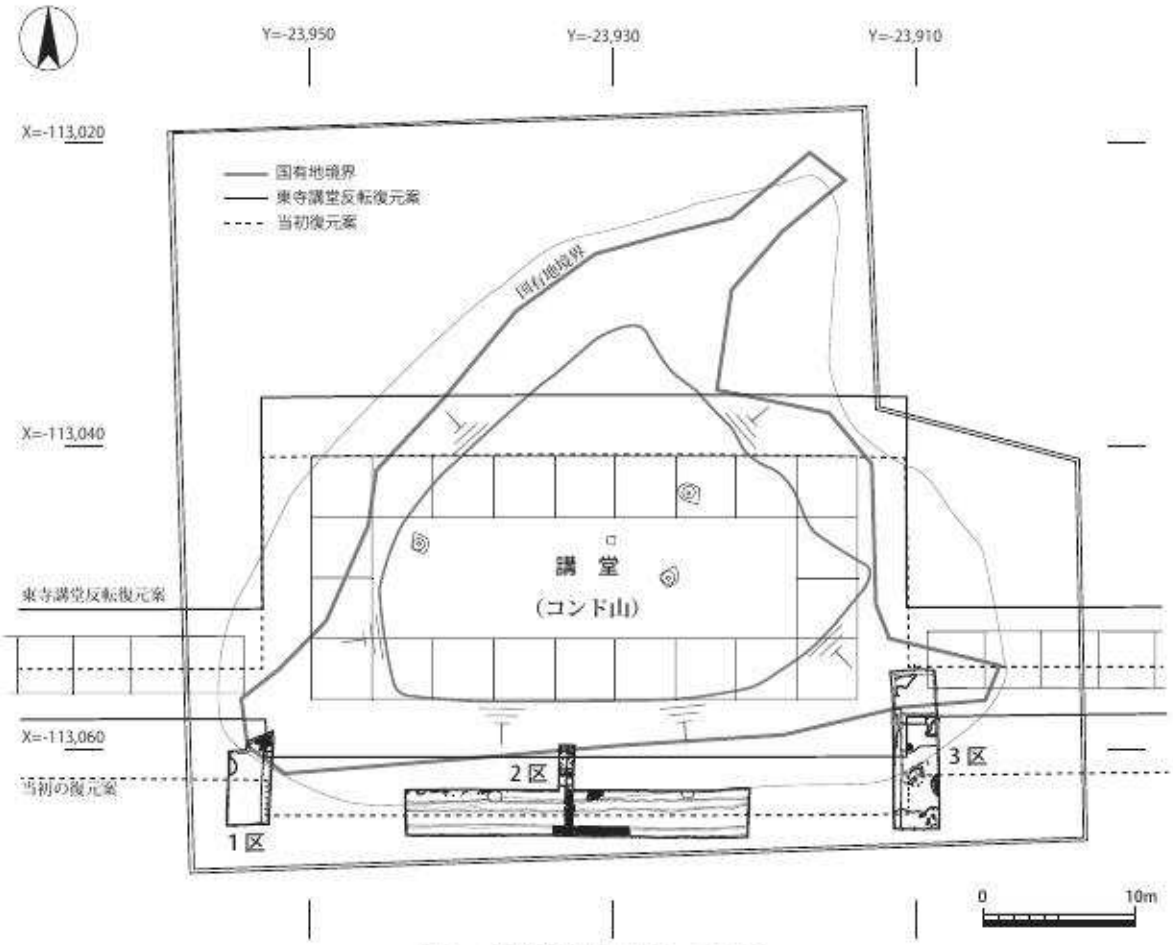


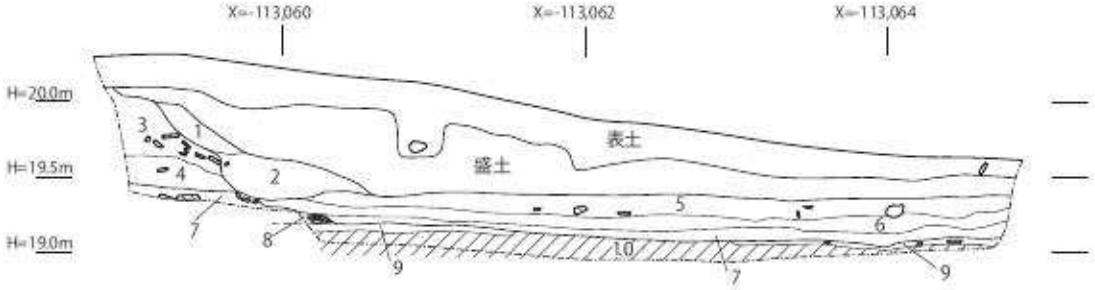
図5　調査区配置図（1：500）

講堂の規模にについては不明であるが，東寺の宝物の一覧を記した『東宝記』にある講堂の項目には指図と規模が示されており，西寺もこれに准ずるとある[3]。それによると，講堂は九間で柱間一丈三尺，妻側四間で柱間一丈三尺とあり，西寺講堂の建物規模を窺い知ることができる。また，基壇についても，昭和の東寺講堂修理の際に発掘調査が実施され，花崗岩製の現基壇化粧石のすぐ内側に凝灰岩製の基壇外装が残っていることが確認されている[4]。現在の東寺講堂基壇は，東西43.3m，南北23.9mであることから，西寺講堂基壇もほぼ同規模と想定される。

講堂については，史料が少なく，天長九年（832）に安置する御願新造仏を供養する記載のみであり[5]，この頃までには完成したことがわかる。その後，正暦元年（990）に西寺焼亡の記事があるが[6]，焼失した堂舎は記されておらず詳細は不明である。天福元年（1233）には残っていた五重塔も焼け落ち，以後西寺に関する記述は途絶え，廃絶したものと考えられる。

その後，西寺跡は田畑となり，松尾大社還幸祭にて神輿が担ぎ上げられるコンド山のみが唯一残された。大正時代に入り，京都府史蹟勝地委員会の委嘱を受けた梅原末治によって報告され[7]，大正10年（1921）にはコンド山を中心に京都府下第一号となる史跡指定を受けた。翌11年には管理団体に京都市が指定されている。昭和30年代以降は，西寺跡の発掘調査が進み，南大門，中門，金堂，僧坊，食堂が確認され，東寺とほぼ左右対称の伽藍配置であったことが明らかとなり，平安京の規模を知る上でも極めて重要であるため，昭和41年には追加指定が行われた。

1区東壁



2区拡張区東壁

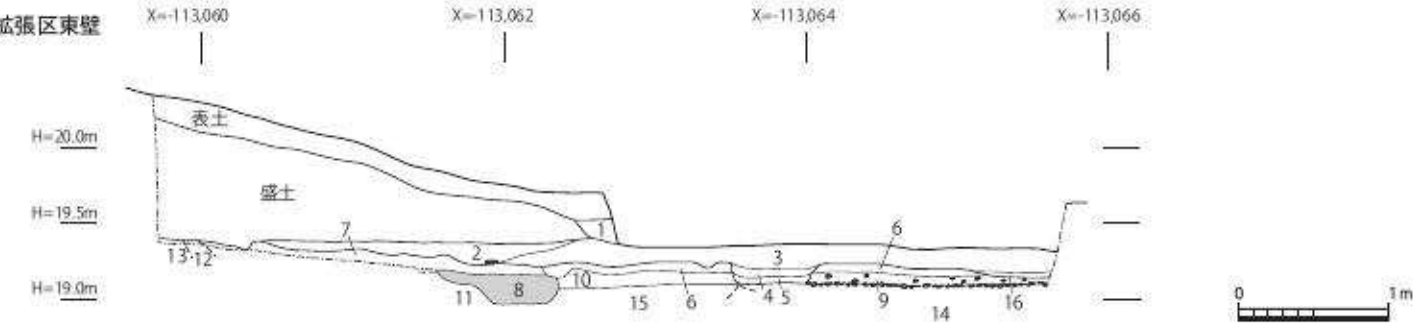


図6　1・2区断面図（1：50）

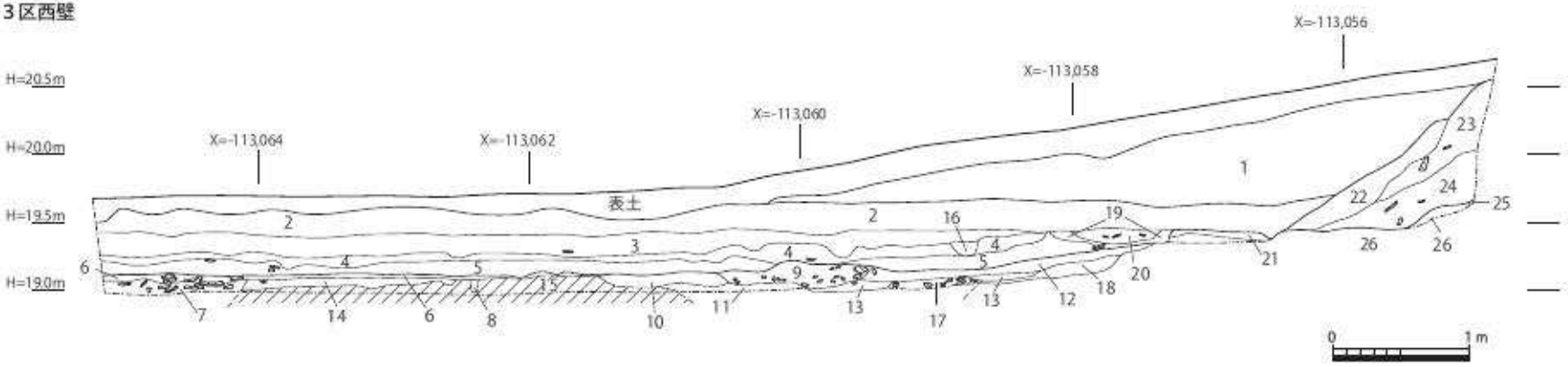
1区東壁

1　10YR5/3にぶい黄褐色泥砂【近代盛土】
2　10YR4/1褐灰色砂泥【近代盛土】
3　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(瓦片多量に含む)【近世コンド山盛土】
4　10YR6/4にぶい黄橙色砂泥(瓦片少量含む)【コンド山古盛土】
5　10YR5/2灰黄褐色砂泥【近世耕作土】
6　10YR5/1褐灰色砂泥(瓦片少量含む)【近世耕作土】
7　10YR5/6黄褐色砂泥(Mg含む)【床土】
8　10YR7/4にぶい黄褐色シルト(上面に瓦片多量に散布)【整地層】
9　10YR3/3暗褐色泥砂(凝灰岩片少量含む,固くしまる)【創建期整地層】
10　10YR3/3暗褐色砂礫【地山】

2区拡張区東壁

1　7.5YR3/1オリーブ黒色砂泥【近代盛土】
2　7.5YR5/1 褐灰色泥砂(焼土,瓦混じる)【耕作土】
3　10YR5/3にぶい黄褐色泥砂(瓦片多量に含む,小礫含む)【近世耕作土】
4　10YR5/1褐灰色泥砂(焼土混じる)【近世耕作溝】
5　10YR6/2灰黄褐色泥砂(礫混じる)【近世耕作溝】
6　5YR4/3にぶい赤褐色 泥砂(焼土多く含む,固く締まる)【整地層】
7　10YR5/6黄褐色砂泥(焼土,凝灰岩片多量,瓦少量含む)【階段石抜き取り痕】
8　10YR3/1黒褐色砂泥(焼土,凝灰岩片多量,瓦少量含む)【階段延石抜き取り溝(溝8)】
9　10YR4/2灰黄褐色泥砂(φ3~5cm小礫少量混じる)【整地層】
10　7.5YR3/2黒褐色泥砂【創建期整地層】
11　7.5YR3/1黒褐色泥砂(凝灰岩粉多く混じる)【階段裏込め】
12　10YR4/2灰黄褐色泥砂【階段裏込め】
13　10YR5/6黄褐色泥砂(礫混じる,固く締まる)【講堂基壇土】
14　10YR4/1褐灰色泥砂(表面にφ2~5cmの礫を貼り付ける)【礫敷き整地層】
15　7.5YR3/1黒褐色泥砂(凝灰岩片多量に含む)【階段延石据え付け】
16　10YR5/6黄褐色泥砂(焼土多量に含む)【近世耕作溝】

3区西壁



1 10Y3/1オリーブ黒色砂泥【近代コンド山造成土】
2 7.5Y3/1オリーブ黒色砂泥【近代耕作土】
3 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂(瓦片・小礫含む,表面にMg付着)【近世耕作土】
4 10YR7/6黄橙色泥砂【近世床土】
5 10YR5/2灰黄褐色泥砂(瓦片・小礫・凝灰岩片含む)【近世耕作土】
6 10YR6/8明黄褐色砂質シルト(固くしまる)【整地層】
7 10YR6/2灰黄褐色泥砂(瓦片多量に含む)【土坑4】
8 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂
9 10YR5/2灰黄褐色泥砂(凝灰岩片多量に含む)【基壇凝灰岩抜き取り痕】
10 10YR6/3にぶい黄橙色泥砂(凝灰岩少量含む)【凝灰岩掘え付け痕か】
11 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂(凝灰岩片僅かに含む)【凝灰岩掘付痕】
12 10YR6/2灰黄褐色泥砂粗砂混じり(凝灰岩片少量含む)【凝灰岩抜き取り痕か】
13 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂(土師器片少量含む)【凝灰岩掘付痕か】
14 10YR6/3にぶい黄橙色泥砂【建屑整地層】
15 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂(表面Mg強)【地山】
16 2.5Y5/1黄灰色砂泥
17 2.5Y3/1黒褐色砂礫粗砂混じり(φ5cmの礫多量に含む,凝灰岩片少量含む)【凝灰岩掘付痕か】
18 2.5Y3/2黒褐色粗砂礫混じり(凝灰岩片少量含む)【凝灰岩掘付痕か】
19 10YR6/8明黄褐色シルト(焼土少量含む,Mg少量含む)
20 10YR5/2灰黄褐色泥砂(瓦片少量含む)【近世耕作溝】
21 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂(Mg多量に含む)【基壇土】
22 5Y3/1オリーブ黒色砂泥【近代コンド山盛土】
23 2.5Y6/4にぶい黄色砂泥(瓦大片多量に含む,φ5～10cmの礫多量に含む)【近世コンド山盛土】
24 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥(瓦片少量含む)【コンド山古盛土】
25 2.5Y7/6明黄褐色シルト(凝灰岩片多量に含む)【基壇土】
26 2.5Y7/6明黄褐色シルト【基壇土(地山削り出し?)】

図7　3区断面図（1：50）

表1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代	溝5・8，土坑3・4・6，瓦溜り11・12，整地層	講堂基壇正面中央階段 延石抜き取り溝

（2）遺　構（図6・7）

調査区の基本的な層序は，表土以下，盛土，耕作土が続き，GL-0.6m（標高19.15m）にて西寺期の整地層，-0.65mにて地山となる。整地層上面の標高は，1・3区で19.15mである。2区では整地層が良好に残り，-0.25m（19.35m）にて焼土を多量に含むにぶい赤褐色泥砂，-0.5mにて灰黄褐色泥砂，-0.55mにて創建期の礫敷き整地層となる。地山は東西で異なり，3区はにぶい黄褐色泥砂，1区は暗褐色砂礫となり，検出面の標高は19.1mとなる。なお，遺構検出については，1・3区では創建期の整地層上面，2区ではにぶい赤褐色泥砂の整地層上面にて行い，下層は断割にて確認を行っている。

遺構は，2区にて講堂正面中央階段，基壇土のほか，1・3区で瓦溜り，3区にて基壇土，土坑，溝等を確認した（表1）。

1　区（図8，図版6）

講堂基壇南西縁附近に設定した調査区である。調査の進展に合わせ，北東部を拡張している。

瓦溜り12　調査区北東隅で確認した瓦溜りである。1m四方の範囲に広がり，南側は耕作土によって削平を受けるが，調査区外にさらに広がる。破片の大きな瓦が折り重なった状態で整地層上面に貼り付いており，凝灰岩片も混じることから，基壇南西隅縁附近に該当すると考えられる。

2　区（図7～10，図版5）

講堂正面階段の検出を目的に設定した調査区である。当初設定した調査区では基壇に関連する遺構を確認できなかったため，伽藍中軸線附近で北に拡張している。

基壇土　拡張区の北端にて小礫が混じる固く締まった黄褐色泥砂を確認した。0.15×1.0m分を検出したのみであるが，東寺講堂基壇南縁とほぼ左右対称の位置に当たること，基壇土南側に後述する階段跡を確認したことから基壇土と判断した。上面の標高は19.4mで，南側の礫敷き整地層との比高は0.3mである。遺物の出土は認められなかった。

階段　拡張区にて焼土，凝灰岩片，瓦片を含んだ黄褐色砂泥を確認した。検出面は，基壇土から南に向かって緩やかに下がる。拡張区が伽藍中軸線附近であり，講堂の柱間中央に該当することから，基壇正面中央に設けられた階段と判断できる。階段に用いられた凝灰岩は全て抜き取られているが，下層には裏込めが残る。抜き取り痕には焼土を含むことから，焼亡後に抜き取られたと考えられる。埋土からは瓦のほか，土師器皿等が出土している。階段の盛土は基壇土と異なるため，造り出しの階段である。

溝8　拡張区南端で確認した階段延石の抜き取り溝で，基壇土南縁から南に約2mの位置にある。創建期整地層を切り込んで成立する。検出面での長さは1mで，幅0.8m，深さ0.2mを測り，さらに調査区外に延びる。溝底の標高は18.95mである。埋土には多量の凝灰岩片とともに，Ⅲ期

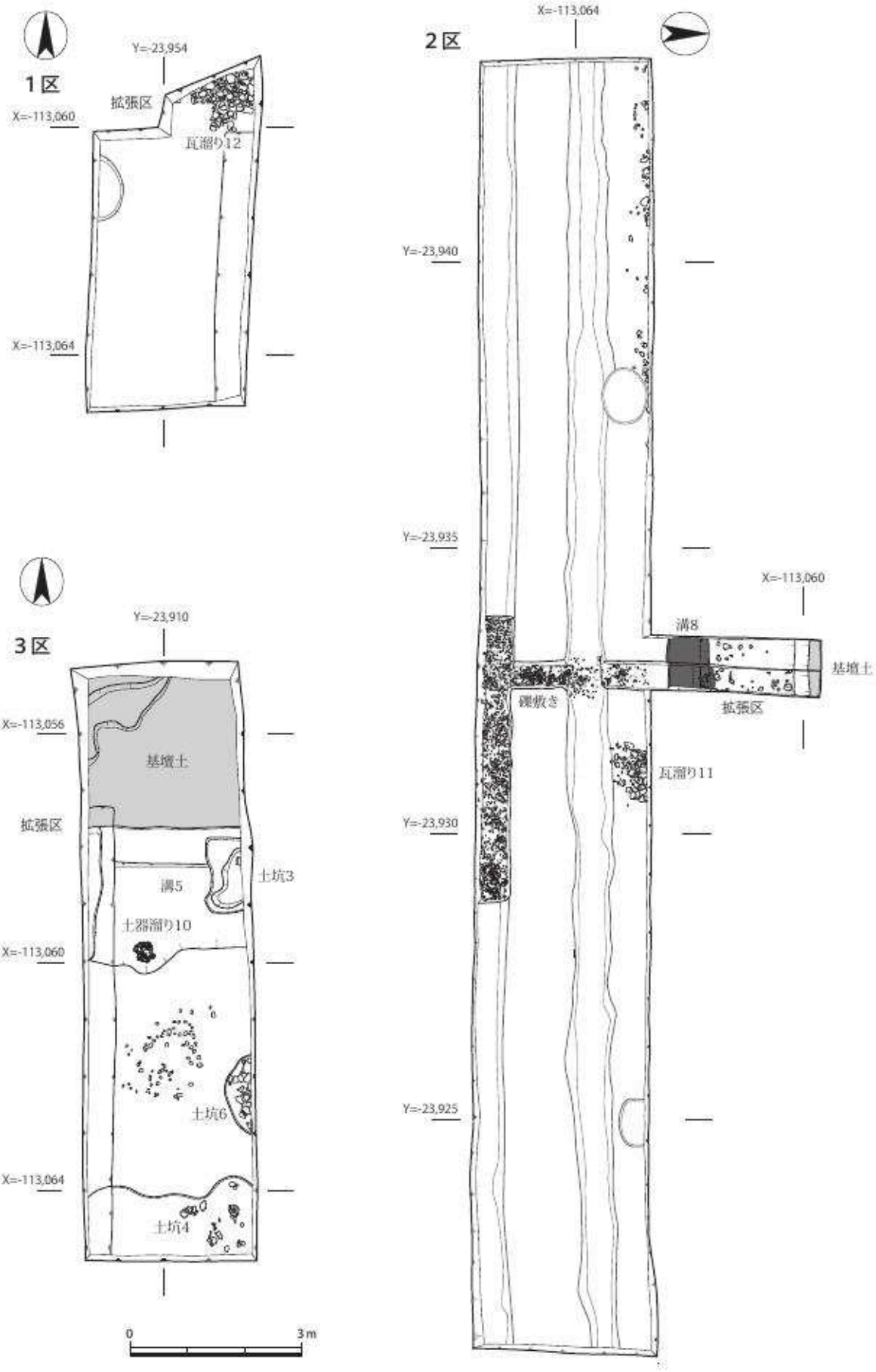


図8　調査区平面図（1：100）

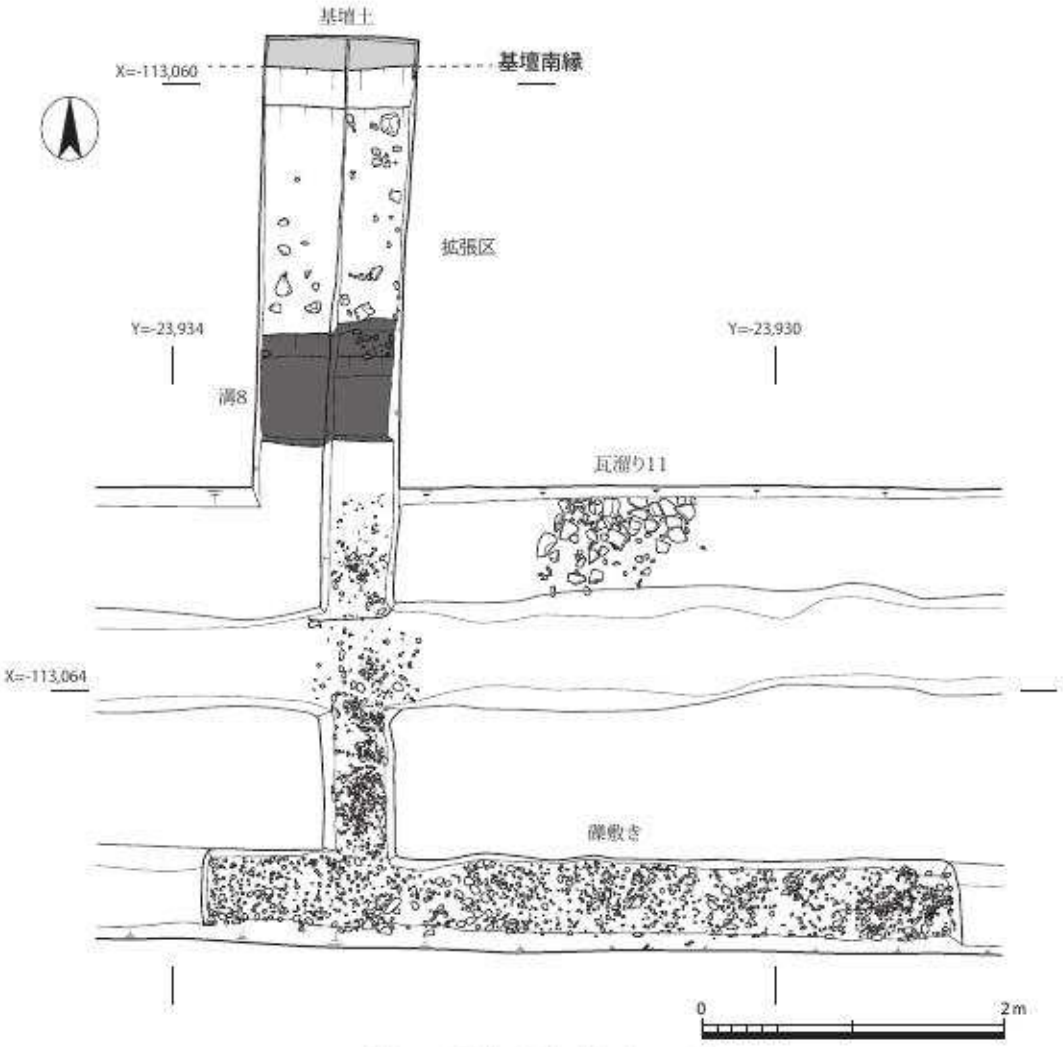


図9　2区中央平面図（1：50）

中～新段階の土師器皿が出土している。

整地層　調査区全体に広がるにぶい赤褐色泥砂である。厚さ3～10㎝あり，南に向かって下り，厚さも薄くなる。焼土や炭化物を多量に含んでおり，火災後の整地層と捉えられる。この整地層は，階段延石の抜き取り溝である溝8を覆っていることを確認している。埋土から出土した土師器皿はⅢ期中～新段階に属するものである。

礫敷き　調査区中央の断割で確認した。溝8の南側に展開する。径2～5㎝の礫を平坦面を上にして敷き詰めている。当初，講堂正面から金堂に続く参道と考えたが，東西に広がりを見せることから，講堂正面の景観を整えるための創建期整地層と判断した。

瓦溜り11　調査区中央で確認した。直径1mの範囲で瓦片が散布している。上面を焼土を多量に含む整地層で覆われることから，成立面は焼土整地層の下層の整地層と考えられる。凹面に「寺」銘がある平瓦が出土している。

3　区（図8・図版6）

講堂基壇南東縁の検出を目的に設定した調査区である。北側に拡張を行っている。

基壇土　調査区北半で確認した遺物を含まない明黄褐色シルトからなる。コンド山の頂部に近

図10　土器溜り10検出状況（東から）

い北西に向かって高くなる。最も高い場所と調査区南半の整地層上面との比高は約0.5mあり，基壇土と判断した。調査区南半の地山と類似するが，地山削り出しか盛土かの判断は出来なかった。基壇土はさらに東へ展開することから，講堂と僧房を繋ぐ東軒廊の基壇の可能性もある。

溝５　調査区中央で確認した東西溝で，幅２～2.5m，深さは0.1m以上である。埋土はにぶい黄褐色粗砂で，凝灰岩片を僅かに含む。伽藍復元では，講堂から僧房を繋ぐ東軒廊の基壇推定位置に該当するが，検出に留めたため，詳細は不明である。

土器溜り10　溝５の上に広がる直径0.4mの土器溜りである。Ⅲ期中～新段階の土師器皿が出土した。

土坑６　調査区南半東端で確認した瓦廃棄土坑である。創建期の整地層を切り込んで成立する。南北1.4ｍ，東西0.4m以上でさらに東側に展開する。

土坑４　調査区南端で確認した瓦廃棄土坑である。創建期の整地層を切り込んで成立する。南北1.2m以上，東西2.9m以上でさらに調査区外に広がる。「寺」銘が残る軒丸瓦が出土した。

９層　X=-113,060附近の調査区西壁断面のみで確認した。幅1.2ｍ，深さ0.2mを測り，凝灰岩片を多量に含む。溝底の標高は19.0mである。２区拡張区で確認した講堂基壇土南縁の延長線上に位置することから，基壇に関連する遺構と判断できるが，東側に展開しないため，断定は避けたい。

３．遺　物

今回の調査は範囲確認調査のため，遺構の掘削は検出又は断割りに留め，遺物の採取も最低限に留めている。遺物の大半が瓦であるが，耕作土に含まれていた小破片が多い。他に溝や土器溜りから土師器が出土している。なお，掘削中に出土した瓦の細片は，埋め戻しの際に各調査区内に現地保存を行っている。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代	石製品		石包丁１点		
平安時代	土師器，須恵器，緑釉陶器，瓦類		土師器18点，須恵器２点，緑釉陶器１点，瓦類21点		
江戸時代	金属製品		銭貨１点		
合　計		２箱	44点（７箱）	０箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理後，遺物を抽出したため，出土時より３箱減っている。

土師器（図11）

１～８は２区溝８から出土したものである。１～６は土師器の坏又は皿であるが，細片が多く口径が復元できるものはない。いずれも器壁が非常に薄く，１～５の口縁部は屈曲し，端部肥厚するもの（２）も認められるが，他は上方にやや突起した形状となる。６は口縁部が外反するものの，端部の突起はない。３は内面に煤が付着することから，灯明皿に用いられたものである。Ⅲ期中～新段階に属するものであり，10世紀後半から末頃に位置づけられる。７は須恵器壷の口縁部で，焼成不良により灰白色を呈す。８は緑釉陶器の椀又は皿の底部である。内外面ともに施釉されている。

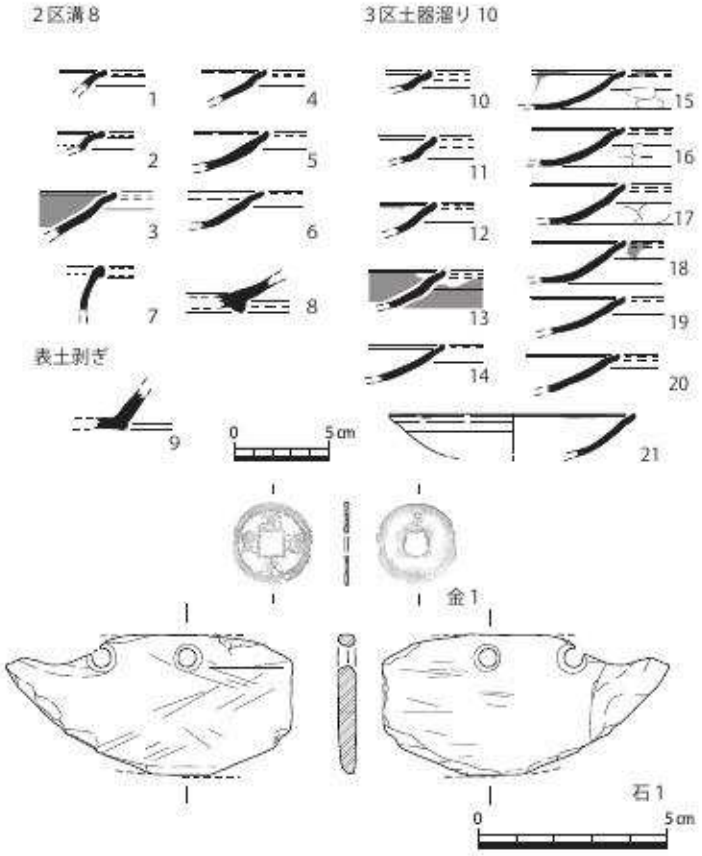


図11　出土遺物実測図（１：４，１：２）

９は表土剥ぎ中に出土した須恵器壷の底部である。底部はケズリで成形される。

10～21は３区土器溜り10の土師器の坏又は皿である。いずれも器壁は薄く，口縁部がやや外反し，端部は上方にやや突起した形状を呈す。12・13・15・18は内外面又は口縁端部に煤が付着するため，灯明皿に用いられたものである。Ⅲ期中段階に属するもので，10世紀後半に位置づけられる。

その他の出土品（図11）

金１は，コンド山の近世盛土から出土したもので，寛永通宝である。直径2.23㎝，厚さ0.09㎝を測る。背面に「足」の字が鋳出されていることから，下野国足尾銅山で産出された銅を用いて寛保元年（1741）に鋳造された「足尾銭」である。

石１は，２区の耕土から出土したもので，粘板岩製の石包丁である。片刃であるが両側を欠損している。表面，背面ともに擦り目が残る。紐穴は２箇所である。西寺跡の下層に展開する弥生時代から古墳時代の集落跡である唐橋遺跡に関連する遺物であろう。

瓦（図12・13，図版７）

瓦は出土遺物の大半を占めるが小片が多い。軒丸瓦，軒平瓦，丸・平瓦，塼が出土している。赤く変色したものも多く，講堂が火災に遭い，瓦が被熱したことを示していると考えられる。なお，緑釉瓦も出土しているが，細片が２点出土したのみである。

１～７は軒丸瓦である。１～５は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で，西寺で主体的に使用された軒丸瓦で

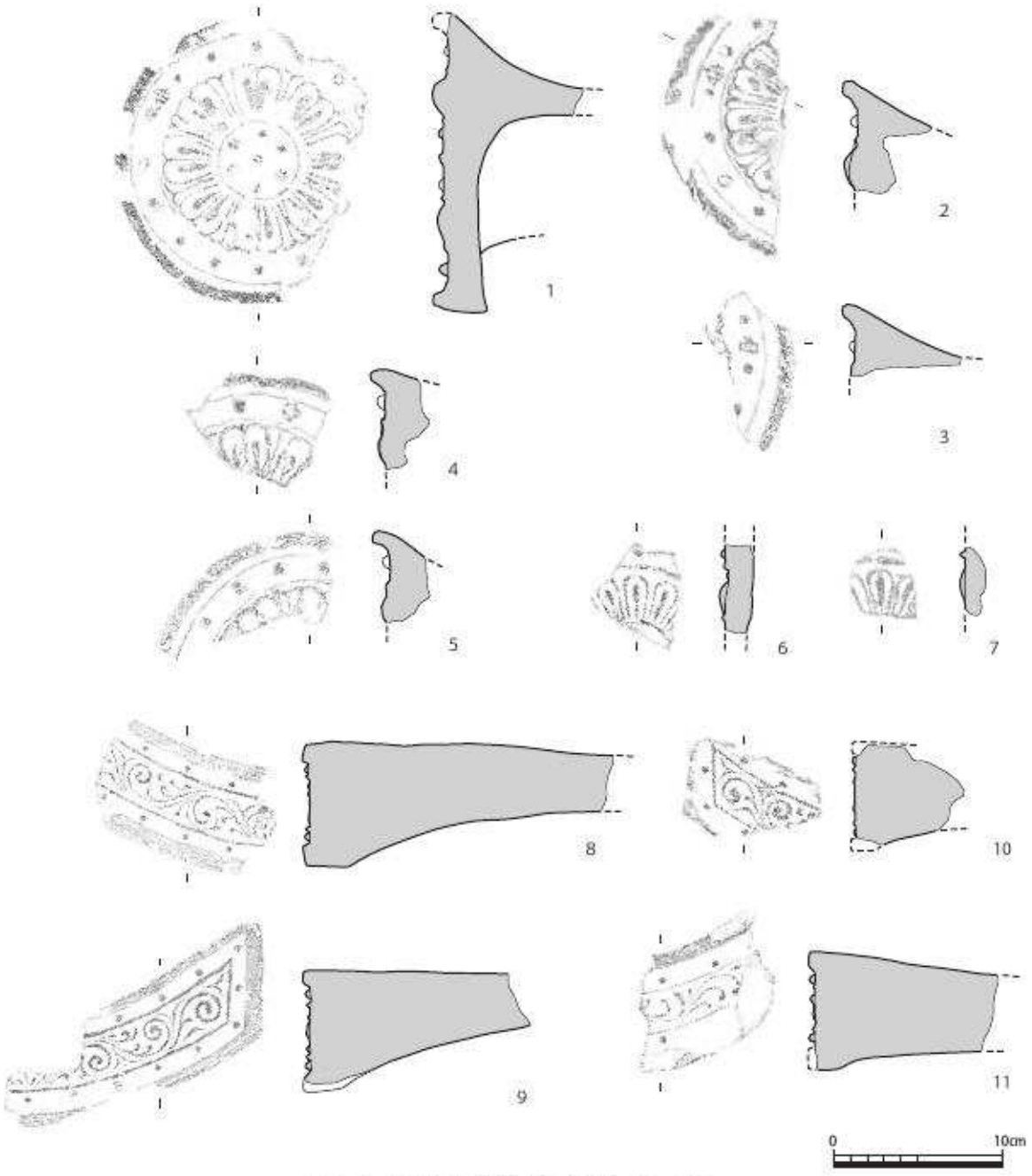


図12　出土軒瓦実測図及び拓影（1：4）

平安時代前期に属する。1～3は同笵で，外区に「寺」や「西」の銘がある。瓦当の大半が残る1は，中房が大きく，蓮子は1+6である。蓮弁は幅広く盛り上がる。周縁の内側が傾斜し，外区との境に段が生じている。瓦当裏面に丸瓦を当てて粘土を補足して接合している。4・5は同笵で，蓮弁が盛り上がり，周縁と外区の境に段を持つ。6・7は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁の幅は狭く，弁の輪郭を囲う線は弁子を一周し，中房は圏線で囲われる。瓦当の厚みは薄い。西賀茂角社窯産か。平安時代前期。

8～11は軒平瓦である。8～10は同笵の均整唐草文軒平瓦で，西寺所用瓦である。8は中心に「西」銘を追刻したもので，西の字が僅かに残る。主葉は大きく巻き込み，唐草の先端は水滴状と

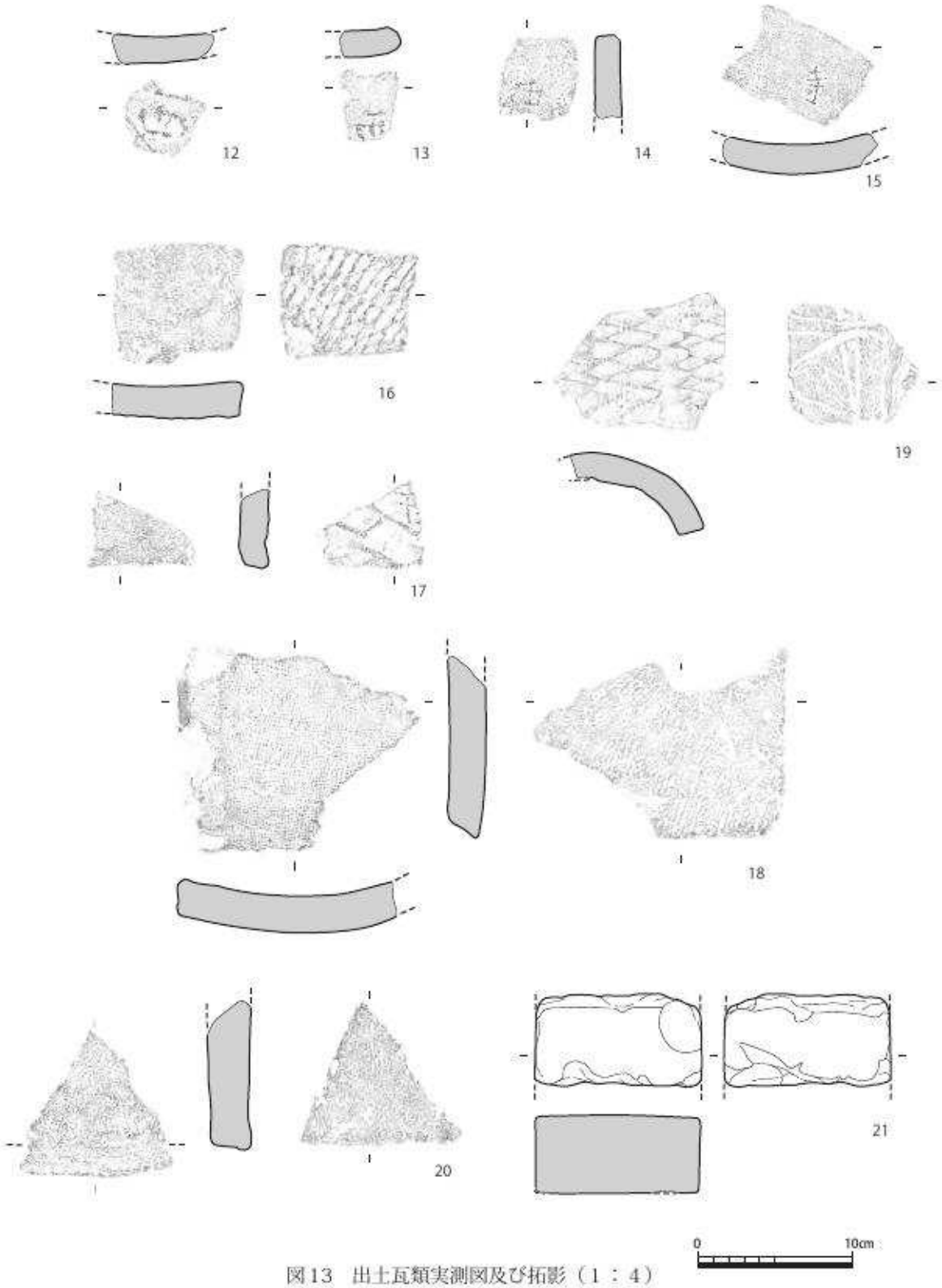


図13　出土瓦類実測図及び拓影（1：4）

なる。曲線顎。平安時代前期。なお，10は全体的に赤変化しており，被熱を受けたものと考えられる。11は唐草文軒平瓦である。唐草はあまり巻き込まず，先端は玉状に膨らむ。曲線顎。平安時代前期。

1は3区土坑4，2は1区瓦溜り12，3は3区土坑3，4は3区整地層，5は2区耕作土，6・8・11は3区コンド山近世盛土，7は2区整地層，9は3区土坑6，10は1区表土剥ぎ中に出土

したものである。

12～15は刻印を持つ平瓦である。12は凸面の格子叩きの中に「西」銘がある。13は凸面縄叩きで「西」，14は凹面に布目を残し「西」，15は凹面に布目を残し「寺」銘が残る。12は平安時代中期，13～15は平安時代前期である。16～18は平瓦で，16は凹面布目，凸面縄叩き，17は凹面布目，凸面格子叩き，18は凹面布目，凸面縄叩きである。19は丸瓦で凸面格子縄叩き，内面布目である。20は平瓦で，凸面縄叩き，凹面から側面にかけて布目が残る。17・19は平安時代中期に属するが，それ以外は平安時代前期である。21は塼で11.7×5.0㎝の大きさである。

12～14は1区耕作土，15は2区瓦溜り11，16・18・19は2区耕作土，17は3区耕作土，20・21は1区耕作土から出土している。

4．まとめ

今回の調査では，当初の目的であった講堂基壇の規模を確定することはできなかったものの，初めて基壇の一端を確認することができた。ここでは，調査成果から明らかになったことと，今後の課題を述べてまとめとしたい。

（1）講堂について

先述したように，これまでの西寺伽藍復元図では，講堂の位置は，公園内で実施された3次調査において，講堂から西僧房に延びる廊下の痕跡と目されていた地山の高まりを基に復元されており，東寺講堂よりも約4m南に配されていた[8]。しかし，基壇想定位置では関連する遺構が確認できなかったため，東寺講堂の基壇隅を測量し，左右対称の位置と想定して調査区を北に延長した。その結果，2区拡張区北端で基壇土と正面階段を確認し，講堂基壇南縁の位置を確定することができた。基壇土南縁の位置は，現東寺講堂基壇南縁よりも北側に約50㎝弱ずれる程度であり，東寺講堂が花崗岩の基壇外装の内側に凝灰岩の基壇外装が存在することを考えると，西寺と東寺の講堂の位置は，ほぼ正確に左右対称に配置されていたといえる。これは，平安京が極めて高い測量技術で造営されたことを示しているものであり，左右対称を強く意識した平安京の性格を如実に表している遺構として貴重な成果といえよう。

また，2区にて焼土が多量に含まれた整地層と，被熱を受けた瓦の存在は，講堂が火災で焼失していたことを示している。火災の時期は，溝8から出土する土師器の年代が10世紀後半～末頃に位置付けられることから，記録に残る正暦元年（990）二月二日の「西寺焼亡」の火災に比定できよう。さらに整地層が階段石を抜き取った溝8を覆うことから，火災にて焼失後，講堂は再建されなかったと判断できる。火災後に整地を行っているため，その後も寺院活動は続けられたものの，正暦元年の火災が西寺に与えた影響は非常に大きく，その後の衰退に直結したものと考えられよう。

（2）コンド山について

コンド山は，頂部の標高が22.0mであり，最も基壇土の残りが良い３区北端との比高差は2.5mにも及ぶ。今回の調査で講堂基壇土を確認し，後世に大きく盛土が行われた結果，本来の講堂基壇よりも遥かに高いものであることが明らかとなった。盛土内には，破片の大きい瓦片が多量に含まれていることから，講堂廃絶後に周辺域での耕作に伴い，瓦等を基壇上に積み上げて形成されたものと捉えられる。積み上げた時期については，盛土上層内から18世紀中頃に鋳造された寛永通宝が出土していることから，近世後半においても盛土が行われていたことがわかる。現在の国有地の境界（図⑤）は，近世末までに形成されたコンド山の範囲を示していると考えられる。そのため，国有地内は遺構が良好に残るものの，外側は耕作による削平の影響が強く，残存状況は悪いことがわかった。

また，明治期に撮影されたコンド山の古写真と比較すると，現在は斜面が緩やかになっている。今回の調査で，近世コンド山盛土の裾部に近代の盛土が厚く堆積することを確認した。これは昭和６年からの区画整理を経て，同12年の唐橋西寺公園開園に伴う盛土と考えられ，その結果，現在に残るコンド山の姿に整えられたといえよう。

（3）今後の課題

３区調査区西壁の９層は，２区拡張区で講堂基壇南縁の延長線上（X=-113,060附近）に位置するが，東側に展開せず，遺構の性格を捉えられなかった。東側に続く溝５は，北端附が僧房を繋ぐ廊下の推定南縁附近に位置することを鑑みると，９層は講堂基壇南東隅附近に位置する可能性が高い。また，コンド山の下層に基壇土が良好に遺存することが明らかになったため，礎石や根固めが残されている可能性が高く，柱位置を特定することも期待できる。したがって今後は，国有地内に位置する講堂南東附近の調査範囲を広げ，今年度解明できなかった基壇隅や柱位置を明らかにし，基壇及び建物規模を確定させることが必要である。

（西森　正晃）

註

1）杉山信三『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所，1979年。

2）測量にあたっては，宗教法人教王護国寺の協力を得た。記して感謝申し上げる。

3）『東宝記』第一　仏宝上　講堂項に「東寺新定講堂図」が記され，「西寺亦准此」とある。

4）『重要文化財教王護国寺講堂修理工事報告書』京都府教育庁文化財保護課，1954年。

5）『日本紀略』天長九年七月五日条「西寺講堂供養御願新造仏」。

6）『日本紀略』正暦元年二月二日条「西寺焼亡」。

7）『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊，京都府，1920年。

8）1）に同じ。

Ⅲ　植物園北遺跡

1．調査経過

調査地は左京区下鴨南芝町内で，北山通と下鴨本通の交差点の北西に位置する。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「植物園北遺跡」にあたり，ここで個人住宅兼共同住宅の新築工事が計画されたことから平成30年７月２日付けで文化財保護法第93条第１項に基づく届出が提出された。これを受け，京都市文化財保護課（以下，保護課）は平成30年８月９日に試掘調査を実施した。その結果，計画範囲内に古墳時代の遺構が遺存することを確認したことから，記録保存のための発掘調査を指導したものである。

発掘調査については，個人住宅部分を文化庁国庫補助事業として保護課が行い，共同住宅部分を（公財）京都市埋蔵文化財研究所（以下，研究所）が事業者負担で実施した。調査期間は平成30年11月５日～11月21日で，実働は12日間である。調査に際しては，遺構の延長部を確認するため一部拡張を行っており，最終的な調査面積は106㎡となる。

なお，本件は保護課が実施した調査成果について報告する。適宜，研究所の調査成果についても触れるが，研究所の報告書もあわせて参照願いたい[1]。

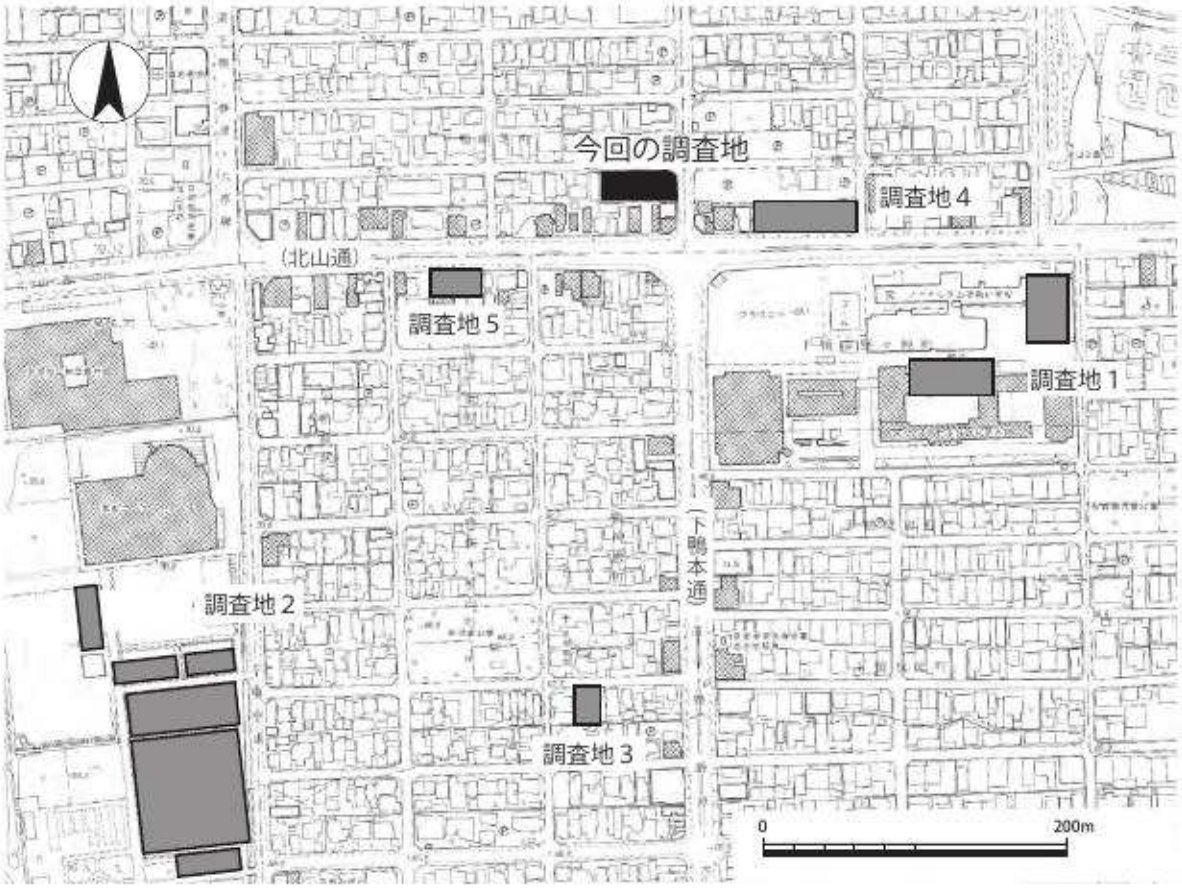


図１　調査地位置図（１：5,000）

図２　重機掘削（北西から）

図３　作業風景（北東から）

図４　植物園北遺跡と周辺遺跡（１：20,000）

２．位置と環境

植物園北遺跡は京都盆地の北端部にあたり，賀茂川と高野川の合流点の北側に広がる扇状地上に展開する集落跡である。遺跡の規模は東西が約２km，南北が約1.5kmを測り，総面積は140万㎡を超える。

周辺では，上賀茂本山遺跡や上賀茂遺跡などで縄文時代以前に遡る遺物が確認されており，古い段階から人の活動痕跡が認められる。また，北側にはケシ山古墳群・幡枝古墳群・西山古墳群といった古墳時代後期の群集墳や，深泥池瓦窯跡や芝本瓦窯跡などの奈良～平安時代にかけての生産遺跡が多数確認されており，これらはこの地域を特徴付ける。また，本遺跡の北西には上賀茂神社，南西には下鴨神社が所在しており，古代カモ氏との関連が想定される地域である。

3．周辺の調査履歴（図１）

植物園北遺跡では，昭和49年の遺跡発見以降から平成30年度までの間に発掘調査が28件，試掘調査が72件，立会・詳細分布調査が354件，あわせて454件もの調査が蓄積されてきた。縄文時代から室町時代にかけての遺構が確認されているが，中でも弥生時代後期から古墳時代にかけての活発な土地利用は特筆される。以下，近隣の主な調査成果について触れておく。

調査地１　ノートルダム女子学院内で実施された調査である[2]。多数の遺構が確認されているが，特に古墳時代の竪穴建物が多数検出されている点は注目される。遺構群は大きく４つの時期に区分される。１期（前期初頭）では，大型竪穴建物の周りに中型のものが等間隔に展開する傾向がみられる。続く２期（前期後半）では，竪穴建物の規模が均等化し，平面形も明確に角を有するものが多くみられる。３期（後期）には，１辺５m以下の竪穴建物が点在するようになり，掘立柱建物もあわせて確認される。４期（飛鳥～奈良時代）になると，全体的に遺構密度が希薄になり竪穴建物や掘立柱建物が少数確認されるにとどまる。また，この時期の土取穴と思われる遺構も確認されていることから，当該期のこの付近は集落の中心域から外れていたと推測される。この調査の結果，時期ごとの遺構の展開状況や様相が判明した。特に，各時期において建て替えはほとんど認められず，かつ各期には土器型式で１～２段階の空白期間が存在することが明らかになった点は，本遺跡を評価する上で非常に重要な成果といえる。

調査地２　古墳時代前期から江戸時代にいたるまでの多数の遺構を確認している[3]。古墳時代前期の遺構としては土坑と柱穴の２基のみ，後期のものは竪穴建物が１基程度と遺構密度は希薄である。飛鳥時代には土坑や土器棺墓などが確認されるものの，未だ遺構数は少ない。しかし，奈良時代に入ると複数の竪穴建物が確認され，集落域としての活発な土地利用が認められる。これらの建物は主軸に規則性は認められず，構造等は古墳時代のものと大きく変化していない。なお，これらの建物はいずれも奈良時代前半期に属するもので，後半期の遺構はほとんど認められない。しかし，平安時代前期には再び多くの遺構が確認されるようになる。当該期の主要な遺構としては掘立柱建物や柵列・溝があり，中でも三面廂建物の存在は特筆される。また，平安時代前期に建物の主軸を南北に揃えることが指摘されている。

調査地３　ここでは，平安時代の遺物包含層と古墳時代後期の竪穴建物を確認している[4]。調査時点において当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが，この調査により集落がさらに南方にまで展開することが明らかとなった。

調査地４　弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物群のほか，飛鳥時代の溝が確認されている[5]。特に弥生時代後期の建物群には切り合いが認められ，活発な土地利用が確認できる。

調査地５　この調査では，風倒木の痕跡と思われる土坑２基と時期不明のピット群を確認したにとどまる[6]。近世の耕作に伴い削平を受けた結果，もしくは本来的に土地利用が不活発な地点であった可能性が指摘されている。

4．遺　構

（1）基本層序（図7）

調査地の現地表面の標高は69.6ｍである。敷地全体がほぼ平坦であるが，北東から南西に向かって若干低くなっており，両端で0.1ｍ程度の比高差が認められる。

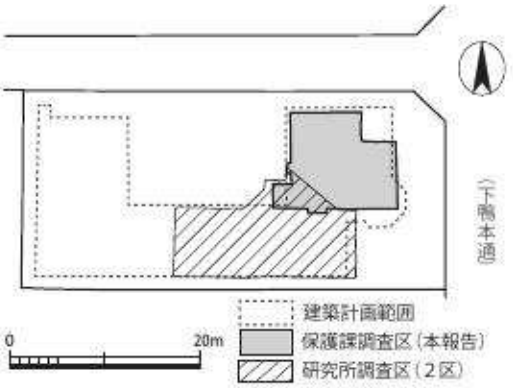


図5　調査区配置図（1：800）

層序は北壁断面を参考にすると，現代盛土以下，GL-0.1mで近代耕作土（1層），-0.2mで近代の床土(2層)，-0.3mで暗褐色砂泥(5層)，-0.4ｍで黄褐色泥砂・砂礫（6・7層）の地山となる。遺構検出は地山である黄褐色泥砂の直上で実施した。地山上面の標高は69.2mとなる。

調査の結果，調査区西半部において掘立柱建物2棟と柱穴を検出した。

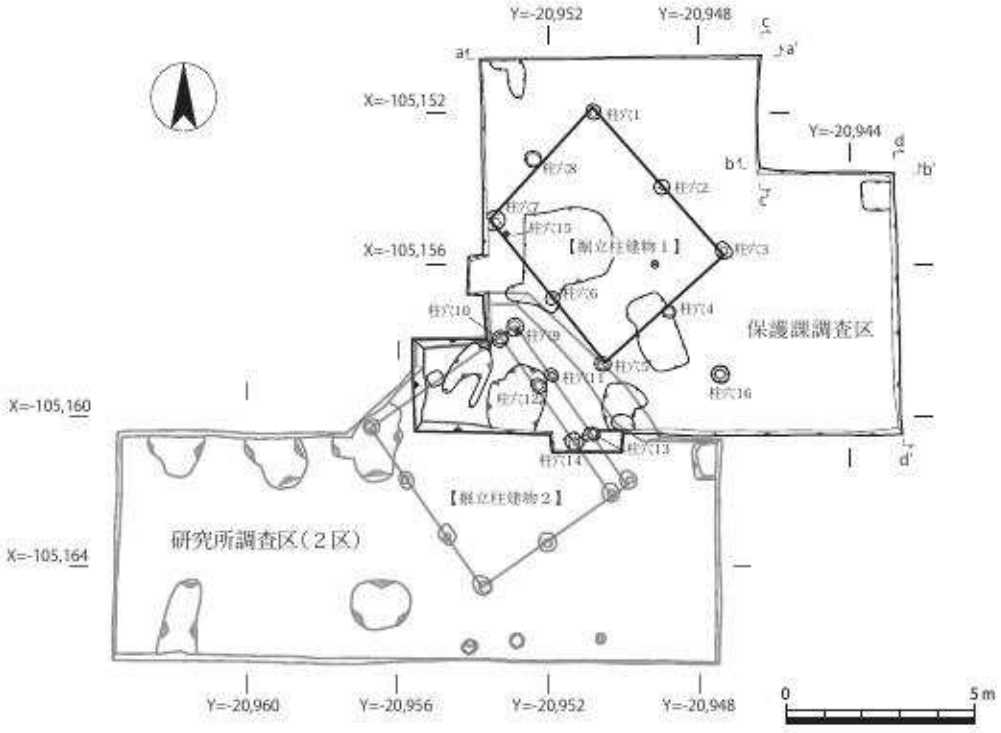


図6　調査区平面図（1：200）

表1　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
古墳時代	掘立柱建物1・2，柱穴	

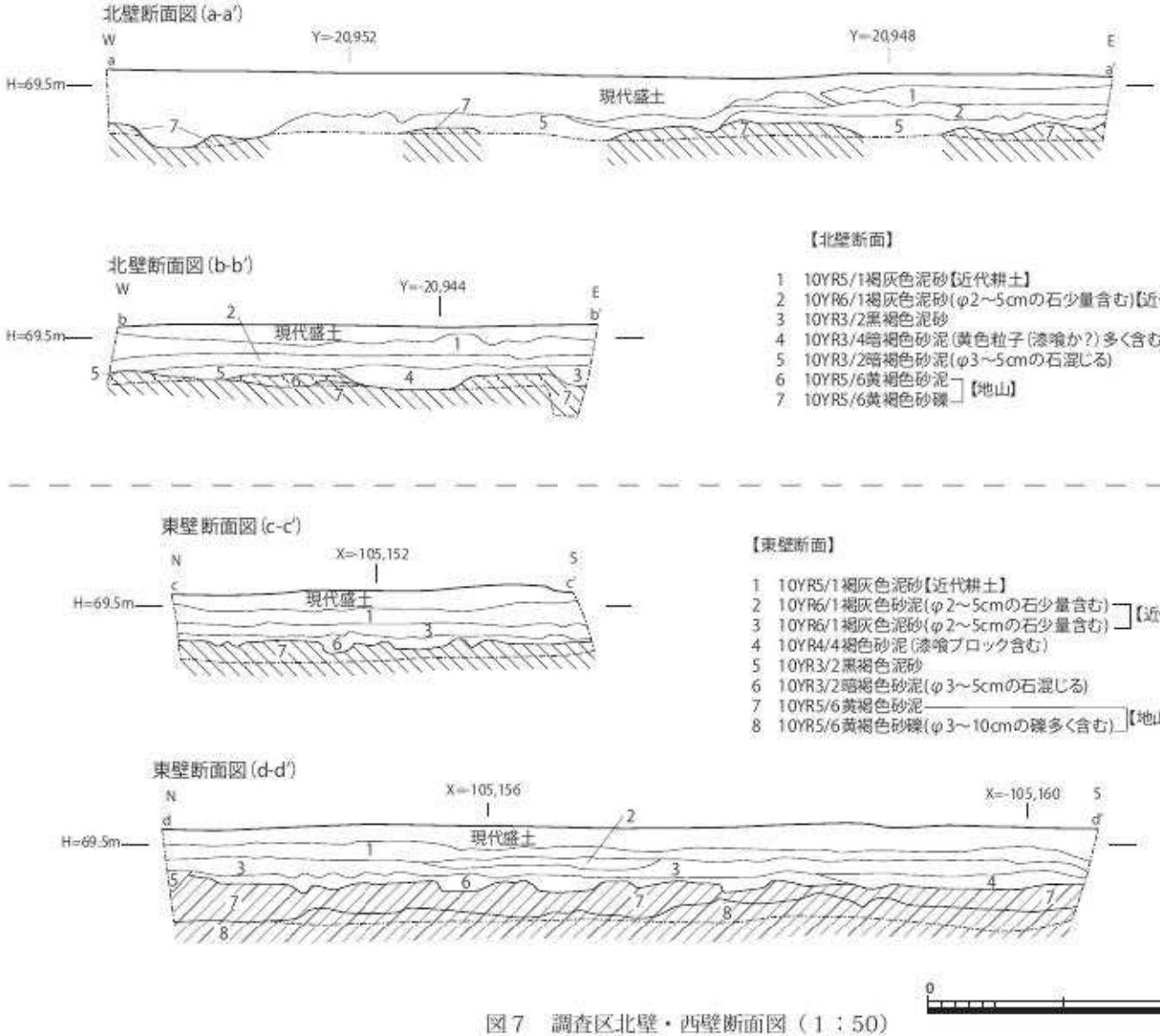


図7　調査区北壁・西壁断面図（1：50）

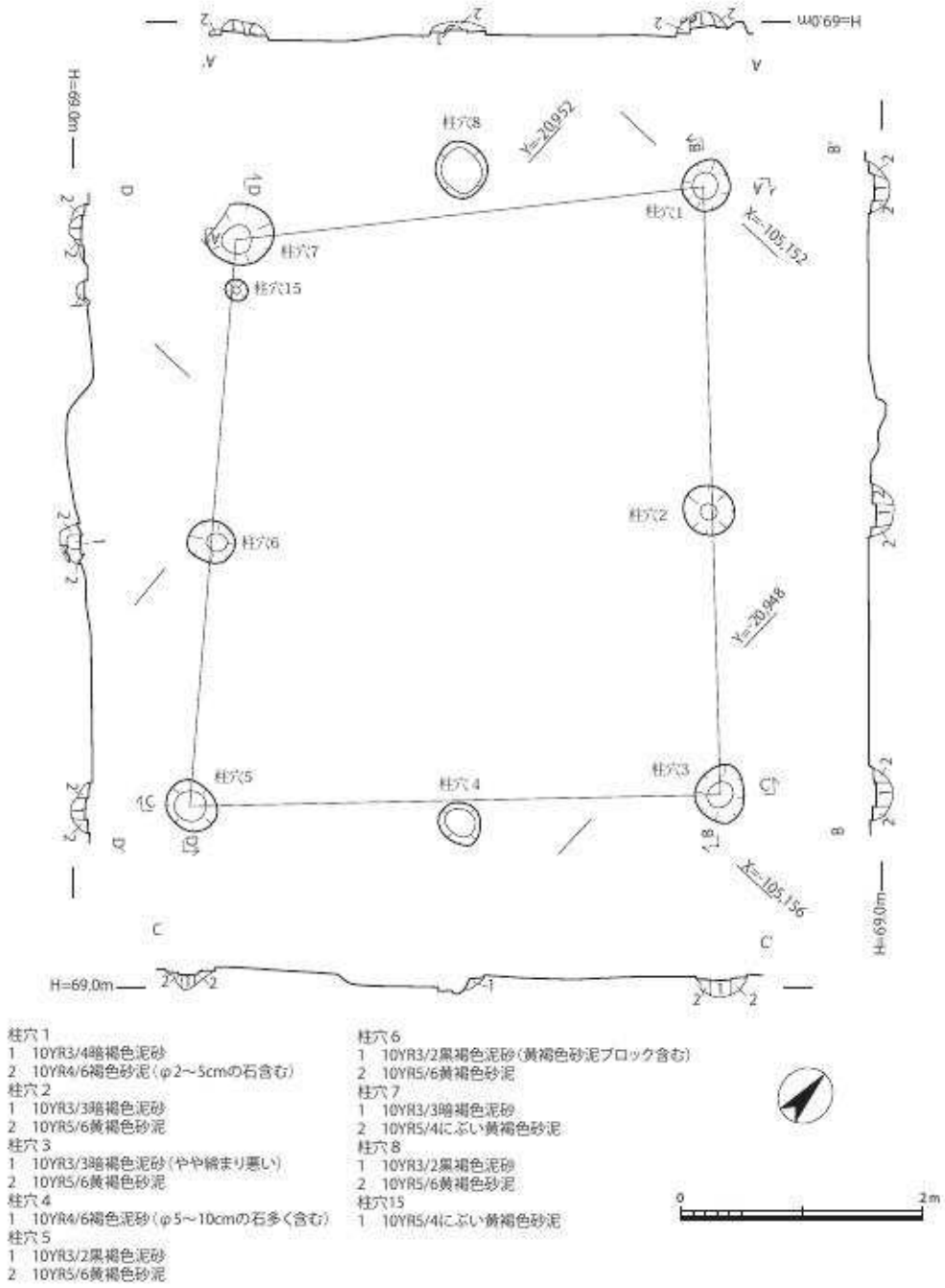
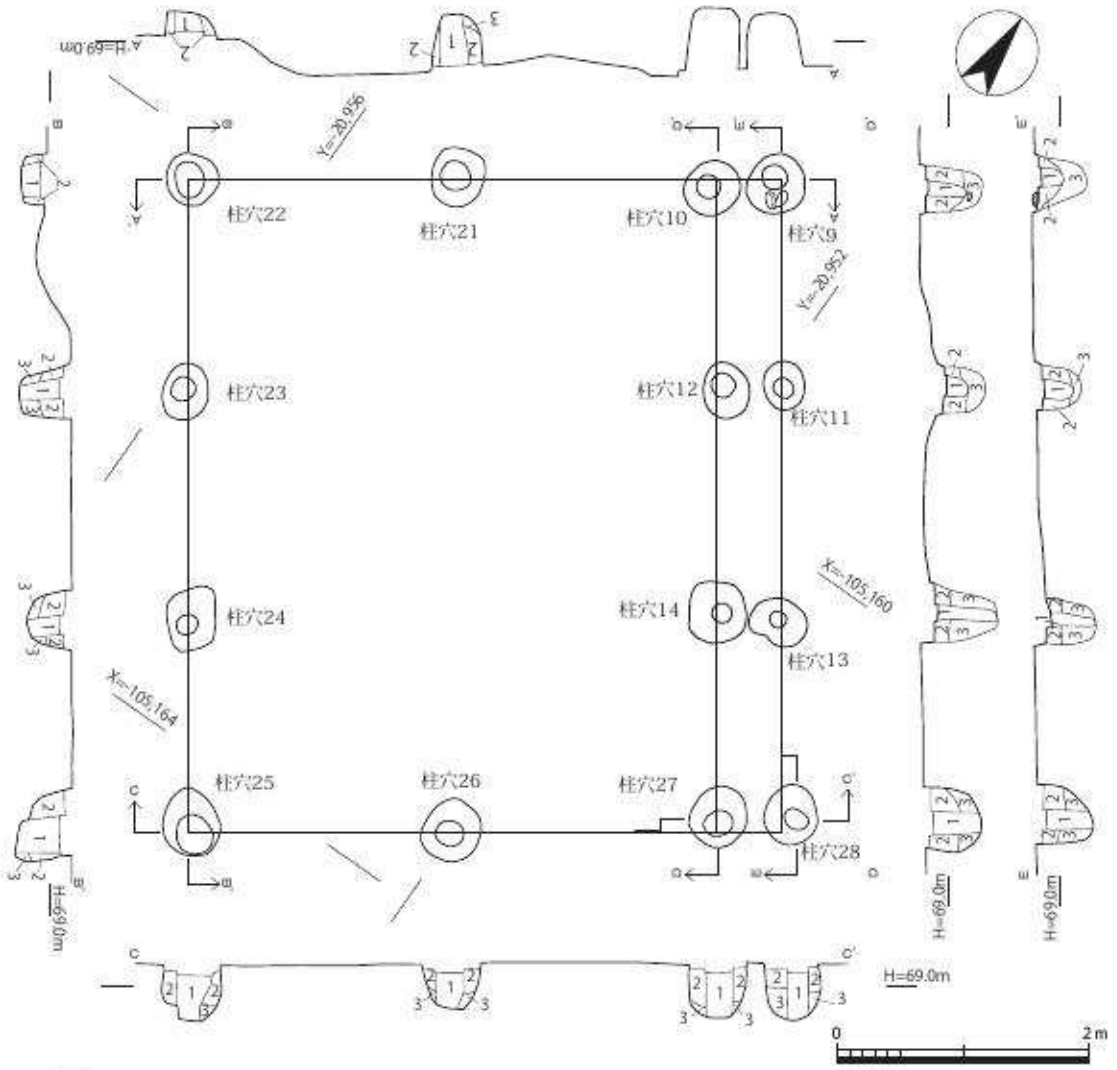


図８　掘立柱建物１　平・断面図（１：60）

（２）検出遺構（図８・９）

掘立柱建物１　調査区西半で検出した東西２間，南北２間の掘立柱建物である。平面形は南にむかって広がる逆台形を呈す。東辺と西辺は柱筋が通るものの，北辺と南辺は中央の柱穴が柱筋から外れる配置をとる。東辺を軸とした場合，北から西に約40度振る。柱間は箇所によって異なり，北辺は西から1.9ｍ，2.0ｍ，南辺はともに2.2m，東辺は北から2.7ｍ，2.3ｍ，西辺は北から2.5ｍ，2.2ｍとなる。柱穴の掘方はほぼ円形もしくは楕円形を呈し，直径は0.36m～0.52m，深さは検出面から0.1～0.2mである。柱痕跡はすべての柱穴で確認しており，その規模は直径0.1～0.2ｍで，



柱穴9
1　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂に
　10YR5/6黄褐色シルトのブロック含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂
3　10YR3/2黒褐色泥砂
柱穴10
1　10YR3/3暗褐色泥砂
2　10YR3/3暗褐色泥砂に
　10YR5/6黄褐色砂泥のブロック含む
3　10YR3/4暗褐色泥砂（φ5cmの礫多く含む）
柱穴11
1　10YR3/4暗褐色泥砂
　（φ2～5cmの礫混）
2　10YR3/4暗褐色泥砂
3　10YR3/2黒褐色泥砂に
　10YR5/6黄褐色砂泥のブロック含む
柱穴12
1　10YR3/3暗褐色泥砂
2　10YR3/3暗褐色泥砂に
　10YR5/6黄褐色砂泥のブロック含む
3　10YR3/4暗褐色泥砂
柱穴13
1　10YR3/4暗褐色泥砂に
　10YR5/6黄褐色シルトのブロック含む
2　10YR3/3暗褐色泥砂
3　10YR3/3暗褐色泥砂（φ2～5cmの小礫含む）
柱穴14
1　10YR3/4暗褐色泥砂に
　10YR5/6黄褐色シルトブロック含む
2　10YR3/3暗褐色泥砂
3　10YR3/3暗褐色泥砂（φ5～10cmの礫多く含む）

柱穴21
1　7.5YR3/2 黒褐色～10YR3/3
　暗褐色粘質土　混礫径 2cm少量
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
　混礫径1～4cm少量
3　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
　混礫径 1cm少量
柱穴22
1　10YR3/2 黒褐色粘質土
　やや砂質混土器片多量
2　10YR3/3 暗褐色粘質土
　混礫径1～3cm中量
柱穴23
1　10YR3/1 黒褐色～10YR4/2
　灰黄褐色粘質土
　混礫径2～5cm少量
2　10YR3/2 黒褐色粘質土
　混礫径2～5cm少量
3　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
　混礫径 1cm少量
柱穴24
1　10YR4/3 にぶい黄褐色～
　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
2　10YR3/3 暗褐色粘質土
　混礫径1～3cm微量
3　10YR2/3 黒褐色粘質土
　混礫径 3cm少量

柱穴25
1　10YR3/2 黒褐色～10YR3/3
　暗褐色粘質土
2　10YR3/2 黒褐色粘質土
　混礫径1～5cm多量
3　10YR2/3 黒褐色粘質土
　混礫径 2cm以下少量
柱穴26
1　7.5YR3/3 暗褐色粘質土
　～7.5YR3/2 黒褐色粘質土
2　10YR3/2 黒褐色粘質土
　混礫径1～3cm少量
3　10YR3/3 暗褐色粘質土
　混礫径 2cm少量
柱穴27
1　7.5YR3/2 黒褐色粘質土
　～7.5YR3/3 暗褐色粘質土
　混礫径12cm以下中量
2　10YR3/3 暗褐色粘質土
　混礫径1～3cm微量
3　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
　混礫径1～3cm少量
柱穴28
1　7.5YR3/3 暗褐色粘質土
　～7.5YR3/2 黒褐色粘質土
　混礫径 3cm微量
2　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土
　混礫径1～3cm中量
3　10YR3/3 暗褐色粘質土
　混礫径1～3cm少量

図９　建物２平・断面図（１：60）

深さは0.1～0.2mである。柱痕跡の埋土は暗褐色泥砂～黒褐色泥砂で，掘方の埋土は黄褐色砂泥～にぶい黄褐色砂泥である。柱を据えた後に掘削した地山を用いて埋め戻していると考えられ，埋土と地山は酷似する。なお，建物１に伴う遺物は確認できなかった。

掘立柱建物２　調査区の南西隅，建物１南西側の近接した位置で確認した。建物２を構成する柱穴のうち柱穴９～14までを本調査で，それ以外の柱穴は研究所の調査により確認した。

東西２間，南北３間の掘立柱建物で，主軸は北から西に35度振る。東辺のみ，南北方向の柱列が２列近接して存在する。これは建物２に伴う縁，もしくは部分的な建て替えに伴うものである可能性があるが，切り合い等は確認できず断定できない。

柱間は箇所によって異なるが柱穴10・12・14・27を東辺とした場合，北辺は西から2.1ｍ，2.0ｍ，南辺はともに2.1m，東辺は北から1.7ｍ，1.8ｍ，1.6ｍ，西辺は北から1.6ｍ，1.8ｍ，1.7ｍとなる。柱穴9・11・13・28を東辺とした場合，東辺の柱間は北から1.6ｍ，1.8ｍ，1.6ｍとなり，柱穴９～21までの距離が2.6ｍ，柱穴26～28までの距離が2.8ｍとなる。また，柱穴9・11・13・28を縁と考えた場合，柱穴９～10と柱穴11～12の距離は0.5ｍ，柱穴13～14の距離は0.4ｍ，柱穴27～28の距離は0.6ｍとなる。掘方は円形もしくは方形のものが確認でき，その規模は直径（もしくは一辺）が0.3～0.5m，深さは検出面から0.35～0.6mである。柱当たりはすべての柱穴で確認した。なお，本調査では建物２に伴う遺物を確認することはできなかったものの，研究所が調査した範囲では柱穴22から古墳時代中期と考えられる土師器片が出土している。

5．遺　物

本調査では，遺構検出時に数点の土師器細片と須恵器細片が出土したのみであり，詳細な時期を判別できる遺物は確認する事が出来なかった。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
古墳時代	土師器細片・須恵器細片				（5点）１箱
合　計					１箱

6．まとめ

本調査では掘立柱建物を２棟確認した。このうち，建物１は東西２間，南北２間の規模を有し，主軸は北から西に約40度振る。遺物が少なく時期を示す遺物は確認できない。建物２は東西２間，南北３間の規模を有し，主軸は北から西に35度振る。この建物２の東辺には，近接した南北方向の柱列が２列確認でき，これは縁もしくは建て替えの痕跡と考えられる。南西隅の柱穴22からは

古墳時代中期のものと考えられる土師器片が出土しており，建物２の時期の下限を示すものとして注目される。また，建物１と建物２の軸が同方向に振っていることや位置関係から，建物１も建物２と同時期の遺構である可能性が想定できる。

植物園北遺跡では，これまで多数の調査が実施されており弥生時代から古墳時代にかけての様子が明らかになりつつある。これらの調査により弥生時代後期～古墳時代前期，そして古墳時代後期の集落の様相に関する成果が蓄積される一方，古墳時代中期の遺構・遺物は非常に少なく，その様相は判然としない。しかし，平成12年に本調査地から北西約900ｍほどの地点で発掘調査が実施されており，古墳時代中期の竪穴建物を確認している[8]。このことから，少ないながらも古墳時代中期においても集落が存在していたことが明らかになっている。本調査では，古墳時代中期に遡る可能性のある掘立柱建物を検出しているが，当該期に属する遺構としては掘立柱建物跡はほとんど確認されておらず，遺跡を評価する上で興味深い成果が得られた。

また，本調査で確認した掘立柱建物群は調査区の西側で確認している。掘立柱建物群とその北東には比較的安定した黄褐色砂泥,それより西側には拳大の礫を多く含む黄褐色砂礫が広がる。調査地５や調査地１では，本調査地と同様に黄褐色砂泥の安定した地盤の上で竪穴住居群などが確認できる。このことから，集落を形成する際にはより安定した場所を選択しているものと推測される。この傾向を参考にするならば，本調査地の北東に同時期の遺構群が展開している可能性も想定される。今後の調査・研究の蓄積に期待したい。

（清水　早織・熊井　亮介）

註

1）布川豊治『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2019年刊行予定。

2）柏田有香ほか『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-24，（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2012年。

3）高野陽子ほか『植物園北遺跡・下鴨半木町遺跡』京都府遺跡調査報告集第159冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター，2014年。

4）吉本健吾『４　植物園北遺跡』京都市遺跡立会調査報告 平成18年度　京都市文化市民局　2008年。

5）平田泰ほか『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-1，2007年。

6）李銀眞『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-5，（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2016年。

7）註１と同じ。

8）近藤章子ほか「13植物園北遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』平成12年度，（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2003年。

Ⅳ　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡

1．調査経過

調査地は京都市上京区築山北半町230で，周知の埋蔵文化財包蔵地「室町殿跡（花の御所）」及び「上京遺跡」に該当する。当該地で個人住宅建設が計画され，平成29年12月12日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく届出がなされた。これに対し，文化財保護課は文献及び遺周辺調査事例より当該地が室町殿跡を復元する上で重要地点と考えられることから発掘調査を指導した。

室町殿の西を限る区画施設の確認を主目的とし，計画範囲の西側に調査区を設けた。調査面積は54㎡である。現地では平成30年4月9日に機材搬入と設営を行い，10日から重機掘削を行い本格的に調査を開始した。現地での記録作業等は，5月16日までに終了し，その後に埋め戻しと撤収を行って18日に現地での作業を完全に終了した。現地での実働期間は28日である。遺存状況が比較的良好であった5面の遺構面で調査を実施した。この内，4面目以下は想定していたよりも掘削深度が深くなったことから，壁面の崩落防止のため，犬走りを設けて調査区の中央部のみを掘り下げて調査を行った。

なお，本件については安全管理上の理由から現地説明会を実施することができなかったが，周辺の大学の要請に基づき，授業の一環として小人数での現場見学会を行った。

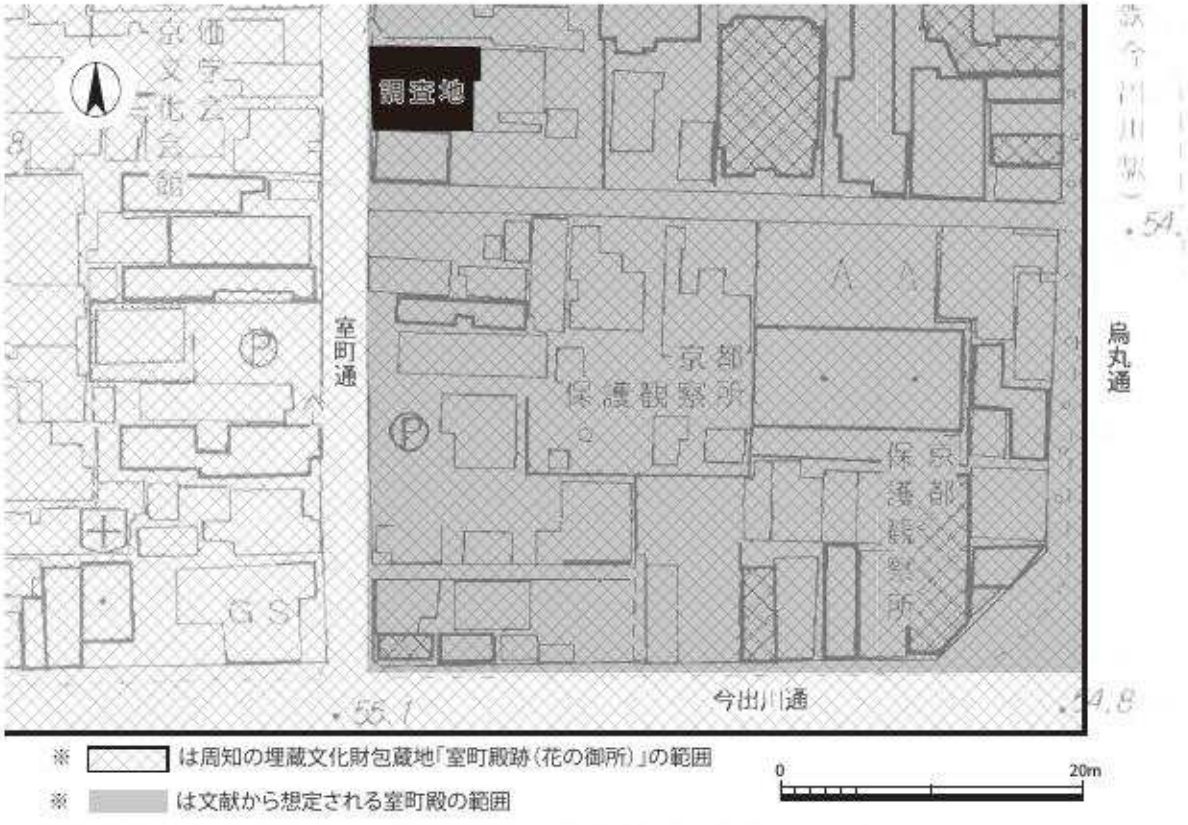


図1　調査位置図（1：500）

図２　調査前風景（北西から）

図３　機材搬入風景（東から）

図４　調査風景（南東から）

図５　埋戻し風景（北東から）

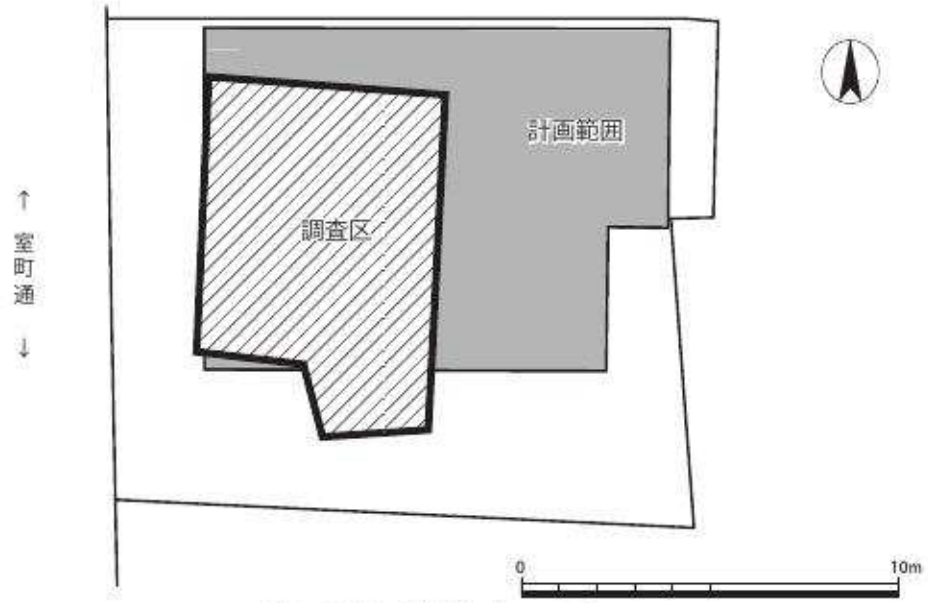


図６　調査区配置図（１：200）

２．遺　跡

（１）歴史的環境

室町殿跡は「室町亭」や「花御所」とも呼ばれており，足利家の邸宅として知られる。当該地と足利家との関係は，室町幕府２代将軍足利義詮が公家の室町季顕より花亭と呼ばれていた室町家の邸宅を譲り受け，そこに別業（上山荘）を造営したことに端を発する。義詮の死後，上山荘は崇光上皇に進上され院御所となったが，永和３年（1377）の火災により周辺の菊亭・柳原日野邸など

と共に焼失した。火災の後，院御所の再建はなく跡地は放置されていたが，それに目をつけた３代将軍足利義満が永和４年（1378）に院御所の跡地だけでなく隣接する菊亭跡地をも含みこんだ範囲に足利家の邸宅の造営を開始した。この邸宅は室町通に面して正門が設けられたことから室町殿と呼称され，後に将軍本人を室町殿と呼ぶほど象徴的な存在となった。

室町殿の位置については文献史料から，その四方が室町以東，烏丸以西，北小路以北，柳原以南であり，かつ室町通に面していた事がわかる。規模については判然とせず，『大乗院寺社雑事記』文明11年３月６日条には「東西行四十丈，南北行六十丈」であった敷地が，応仁の乱後の再建の際には東西と南北ともに40丈になったことが記されている程度である。ただし，高橋康夫は「柳原」を上立売通であると指摘するが，その場合は室町殿が南北２町以上の規模を有した可能性もあり，本来的な規模やその各時期ごとの変動については今後も検討を要する[1]。現在の室町通と烏丸通の間はほぼ120ｍであり，東西の位置はおおよそ確定できる。しかし，南北については今出川通から上立売通まで約310ｍあり，何を基点として室町殿の位置を復原するかにより様相が異なる。仮に室町殿を２町規模として考えた場合，今出川通北端を南限とすると現在の大聖寺の北隣地境界付近が北限となる。また，上立売通南端を北限とすると，本調査地と今出川通の間に存在する東西方向の通りが南限となる。

文献によると，義満は永和４年（1378）と康暦元年（1379）に室町殿に移徙している。川上貢は，この２度の移徙について別々のものと捉え，永和４年に菊亭跡地，康暦元年に花亭跡地に移徙したと考える[2]。つまり，室町殿は大きく二つの区画からなるとする。文献史料では，室町殿について「花亭」・「北御所」，そして「南御所」・「下宿所」・「下亭」という表現が見られるが，前者が花亭跡地，後者が菊亭跡地を指していると考える。この「北御所」と「南御所」を含めてその建物に関する詳細な情報を知り得る文献史料はほとんど無いが，永徳元年（1381）の室町殿への行幸を記録した『さかゆく花』等によれば，寝殿・中門・透渡殿・対屋・釣殿・東向小御所・勝音閣・泉殿などが確認できる。しかし，続く４代将軍足利義持と５代将軍足利義量は室町殿を使用することはほとんど無く，三条坊門第を御所としたため，義満の室町殿は造営から約30年でその幕を下ろした。

そのような中，６代将軍の足利義教は再び室町殿に御所を設ける。義教の夫人と息女の他界が契機になり，永享３年（1431）７月28日に管領以下諸大名の評定が行われ，同12月11日に移徙した。文献からは，寝殿・車宿・随身所・出仕在所・御雑掌所・小御所・新造御所・北向会所・南向会所・新会所・観音殿・持仏堂・厩・月次壇所・対屋・台所・四足門・唐門・上土門・小門・塀中門などの施設が確認できる。庭園について一条兼良が賞賛しており，また会所は『満済准后日記』の中で「悉御座敷拝見驚目了。尽善尽美。言詞難覃。」とされるほど華美なものであったことがわかる。義教は嘉吉元年（1441）に暗殺されるが，室町殿は子である７代将軍足利勝義に引き継がれた。しかし，義勝も就任まもなく死去する。その後，室町殿は義勝の弟で８代将軍となった足利義政に相続されたが，義政が就任当時８歳であったことから，養育されていた日野資任の烏丸殿を御所とし，そこに室町殿にあった施設の移築を命じた。これにより，義教の室町殿は解体される事

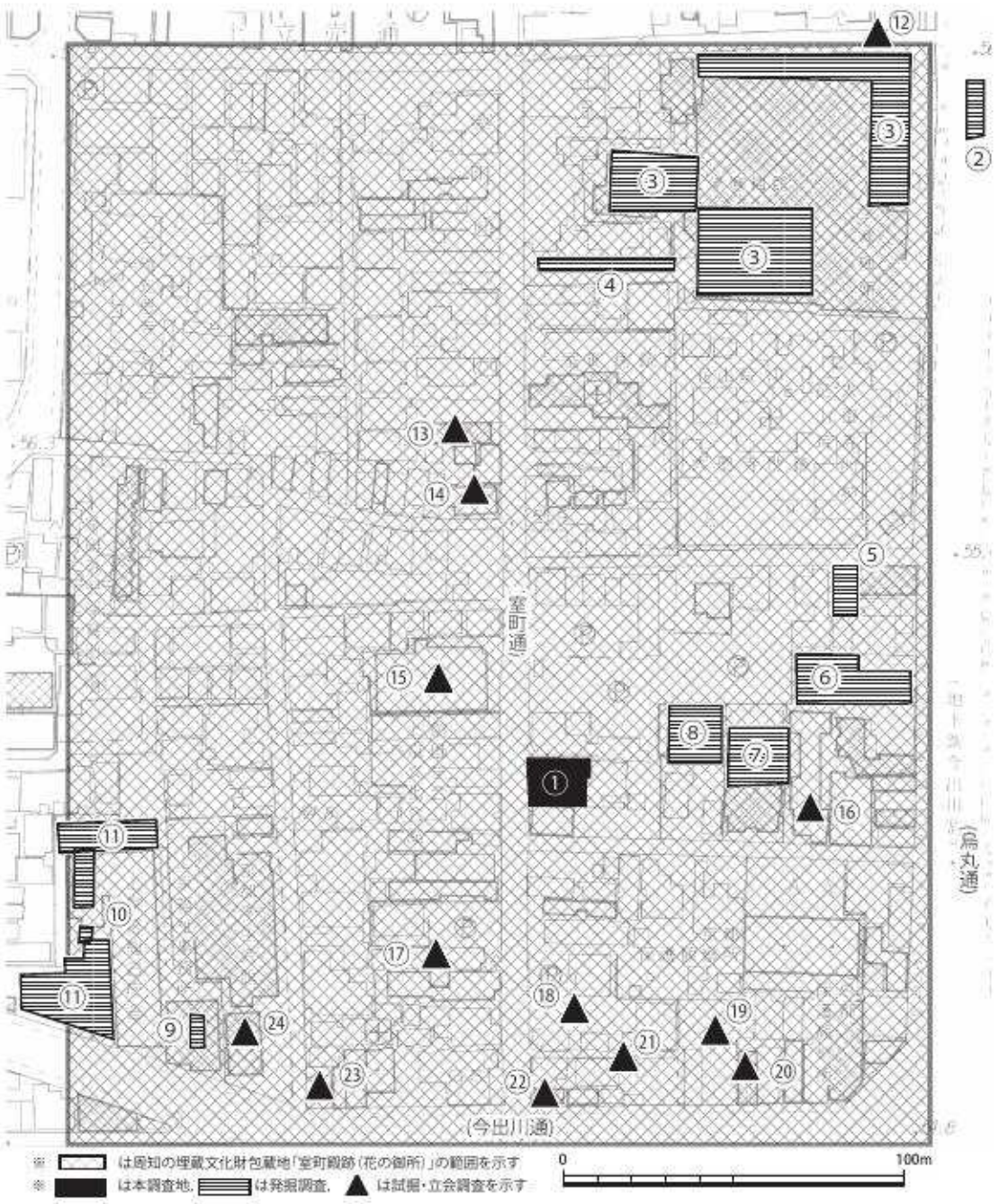


図7　周辺の調査事例（1：2,000）

となり，その存続期間は10年余りの短命なものとなった。なお，義教の死後，義教の御台は自ら瑞春院を造営し，嘉吉元年にこれに移っている。この瑞春院は「北小路以北，今出川以西」にあったとされ，当初の室町殿の近辺に所在した事が知られるものの，これがその敷地内に設けられたのか，それとも別敷地に建てられたのかは現状では不明である[3]。

義政は烏丸殿に約16年間居住したが，長禄3年（1459）にかつて室町殿があった北小路室町の地に新御所を造立し，これに移徙している。義政の室町殿は造営から焼失まで約17年の間用いられた。文献からは，観音殿・会所・小持仏堂・仏護堂・泉殿・泉殿西殿などが確認できる。この室町殿の様相については『碧山日録』に描写があり，「土木之功此焉」と評されるほど豪華なものであった。応仁元年（1467）の乱勃発に際しては，この室町殿に後花園上皇と後土御門天皇が移住

表1　周辺調査事例一覧

No.	種類	調査年	概　要	文　献
1	発掘	2018	本報告	本書
2	発掘	1980	室町時代の遺物包含層・溝・土坑を確認。	京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ
3	発掘	2002	16世紀中ごろの遺物を含む石敷き遺構，16世紀前半のL字形の柱列を確認。	同志社大学学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書
4	発掘	2003	江戸時代後期の遺構群を確認。	同志社大学構内遺跡発掘調査報告書2003・2005年度
5	発掘	1986	室町時代の園池遺構（景石・汀線・礫敷き）や火災痕跡を確認。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度
6	発掘	1979	室町時代前期から後期にかけての池状遺構・土坑・ピット・溝状遺構を確認。	京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ
7	発掘	1989	15世紀後半～16世紀前にかけての園池遺構（築山・景石）や方形石組み遺構，東西方向の濠2条を確認。	京都市埋蔵文化財調査概要平成元年度
8	発掘	1985	室町時代後期の園池遺構（池の汀線，景石）を確認。	京都市埋蔵文化財調査概要昭和53年度
9	発掘	1978	江戸時代の井戸・土坑などを検出。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度
10	発掘	1979	室町時代の柱穴・土坑・溝を確認。	京都市埋蔵文化財調査概要昭和54年度
11	発掘	2013	鎌倉～江戸時代にかけての遺構群を確認。室町時代の遺構群としては土坑・柱列・布掘柱列を確認。	上京遺跡・室町殿跡 2013-8
12	立会	2008	GL-0.6mで室町時代の溝を確認。	京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度
13	立会	2001	BM-1.46mで室町時代後期の遺物包含層，-1.63mで室町時代中期の遺物包含層を確認。	京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度
14	立会	1988	GL-1.3mで室町時代の遺物包含層を確認。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和58年度
15	試掘	1989	室町時代の整地層を確認。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度
16	立会	1983	室町時代の包含層を確認。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度
17	試掘	2009	GL-2.0mで室町時代後半の遺物包含層，-2.2mで室町時代の整地層，-2.3mで基盤層を確認。	京都市内遺跡試掘調査報告平成21年度
18	試掘	2004	GL-2.44mまで近世後半の遺物包含層。これより下層は未確認。	京都市内遺跡試掘調査報告平成17年度
19	試掘	2004	GL-1.6mで中世遺物包含層，-1.8mで中世整地層（16世紀初頭）および地山を確認。	京都市内遺跡試掘調査報告平成17年度
20	立会	1980	室町時代の包含層を確認。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和55年度
21	試掘	2012	GL-1mで安土桃山～室町時代にかけての遺構面，-2.5mで地山を確認しており，その間に室町時代の整地層や鎌倉時代の池状堆積を確認。	京都市内遺跡試掘調査報告平成21年度
22	立会	1985	室町時代の包含層を確認。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度
23	立会	2009	室町時代の包含層を確認。	京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成22年度
24	立会	1989	平安時代の前期および後期末から鎌倉時代にかけての土坑，室町時代の土坑や東西溝を確認。	京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度

しており，室町殿には天皇・上皇と義政・義尚が同一敷地内に居住することとなった。しかし，義政の室町殿は文明8年（1476）に焼失する。

焼失した後，室町殿は文明11年（1479）と同13年（1481）に再建が試みられており，「御事始」との記事が認められるものの，その後の様相はよく分かっていない。しかし，『蔭涼軒日録』には義政が長享元年（1487）と延徳元年（1489）に室町殿にあった庭石や大松を東山殿へ運ばせたとの記事が見られ，これと併せて考えるならば室町殿の再建計画は中止され実際に移徙されるま

でには至っていない可能性が高い。また，文明11年以降の記事に見られる「花御所跡」（文明11・17年）や「花御所旧跡」（長享元年）という表現は，再建がなされなかったことの傍証となろう。

『晴富宿禰記』文明11年3月6日条には「室町殿ハ東西行四十丈，南北行六十丈之御地也，而南北四十丈ニツイチ被仰付之南方二十丈ニハ小屋共在之故云々」と記されており，文明11年の再建計画に伴う築地の設置工事の時点において，すでに室町殿跡地の南側60m程の範囲には町衆の小屋が存在していた事が分かる。また，『蜷川家文書』には，「室町御敷地内，艮角丈数」について公方同朋衆の菊阿弥が野洲井宗賀に売却した旨が記されている。このような状況の中で室町殿跡地は町屋へと次第に変貌を遂げたと考えられ，16世紀前葉の様相を表すと考えられる国立歴史民俗博物館蔵「洛中洛外図屏風」甲本には，室町殿跡の周辺には町屋が広がる風景が描写される。

室町殿跡地付近は町屋化が進むにつれ，付近における商業の中心地として発展していく。特に上立売室町は「立売の辻」とも呼ばれ幕府の制札掲示場であったことから，上京の中心地であったと言える。文献史料や発掘調査成果からは，これを裏付ける町衆の活発な活動が認められるが，それと共に数多くの火災の記録も確認される。規模の大きなものでは，天文5年（1536）の法華の乱，元亀4年（1573）には織田信長による上京焼討ち，元和6年（1620）と寛文13年（1673）の大火などがあり，それぞれ1万～数千軒もの家屋が焼失している。このような度重なる火災の中でも町衆は力強く再建を繰り返し現在に至っている。

中世から現在に至るまで土地利用が活発であった室町殿跡付近では，現在では大聖寺と付近の地名程度しか名残を留めるものはない。大聖寺は開基が無相定円（日野宣子・義満正室の叔母）で，義満が室町殿の岡松殿に住まわせたことがその始めとされる。ただし，現在の大聖寺は岩倉等への移転後の元禄10年（1697）に現在の場所に移ったもので，所在地の南へ100m程の場所に岡松町という地名が存在することから当初の位置とは異なる可能性が高い。なお，関連する地名としては，裏築地町・御所八幡町・築山北半町・築山南半町・岡松町などの地名が周辺で確認できる。

（2）周辺調査事例

これまで室町殿跡内では比較的多くの調査が実施されている。本調査地周辺の主要な調査事例を示すと図7のようになる。本調査地は室町殿の南西部に位置するが，近隣調査事例としては調査⑤～⑧が挙げられ，これらの調査では室町殿に伴うと考えられる園池遺構が確認された。また，調査⑦では東西方向の2条の濠も確認されており，これはある時期の室町殿の南限を示すものと考えられ特筆される。これに対して北側では同志社大学の構内で発掘調査が実施され，石敷き遺構やL字形の柱列などの建物やその区画の伴うと想定される遺構が確認されており，北側が居住空，で南側が園池という，「洛中洛外図屏風」上杉本の風景を髣髴とさせる調査成果が上がっている。しかしながら，文献などから分かるように室町殿は幾度もの興廃があり複雑な変遷をたどっているが，各調査で確認した遺構の対応関係や各時期の全体的な様相などは必ずしも明らかではなく，室町殿の範囲ついても部分的な確認に留まっており，室町殿の実態を解明する上での課題は多い。

3．遺　構

（1）基本層序

本調査地の現地表面は標高55.5ｍ前後であり，敷地全体はほぼ平坦である。調査区は，部分的に近世の火災処理土坑や攪乱等があるものの，室町時代から江戸時代前期にかけての遺構面が比較的良好に遺存していた。調査は第１～３面までは設定した調査区の形に沿って実施したが，第４～５面は想定よりも掘削深度が深くなったことから，土質等を考慮し50cm～１ｍほど犬走りを設けて中央部のみ掘り下げて調査を行った。ここでは，第１～３面までの上半部については南壁，４面目以下の下半部については東壁を参考にして層序を述べる。

上半部については地表下40cmまで現代盛土があり，その下に15cmほど厚さで褐灰色粘質土（１層）が存在する。この褐灰色粘質土の直下が第１面となる。地表下95cmで焼土と灰を多量に含む黒褐色砂質土（15層）が薄く堆積しており，その直下にある整地層とみられる暗褐色シルト・黒褐色泥砂層（17・23層）の上面を第２面とした。更に掘り下げると，地表下1.15mで整地層とみられる黒褐色シルト（26層）を検出し，この上面を第３面とした。

下半部については，第３面を構成する整地層（１～４層）を除去した面を第４面とした。第４面は土取穴と思われる巨大な土坑122の埋土が調査区全面に広がっており，この上面の最高所の標高は54.15ｍとなる。第５面は地山上面（21層）であり，標高は53.45ｍとなる。

（2）遺構の概要

本調査では江戸時代から室町時代にかけての５面の遺構面で調査を実施した。第１～３面までは，各面の調査終了後に重機を用いて掘り下げを行い，第４面以下は人力で掘削を進めた。検出した遺構は大小あわせて全部で126基であり，遺構の種類としては土坑・ピット・井戸・溝・礎石・柱穴・濠がある。

第１～３面目の遺構については，柱穴・礎石・ピット・井戸など生活空間としての土地利用が認められる。しかし，第４面では土取りに伴うと考えられる巨大な土坑，第５面では室町殿の西を区切る濠を確認しており，各時期によって土地利用のあり方が大きく変容している。

表２　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
江戸時代～室町時代末	(第1面)井戸1, 溝2, 土坑3･7, 礎石14～17･柱穴19～21	
室町時代	(第2面)ピット22～25, 土坑27･55･58, 柱穴31･32･43･59, 礎石60～72 (第3面)土坑79･81, 柱穴90, ピット92･96･溝113 (第4面)土坑120･121･122 (第5面)土坑123, 濠124	※濠124は室町殿の西限と考えられる。

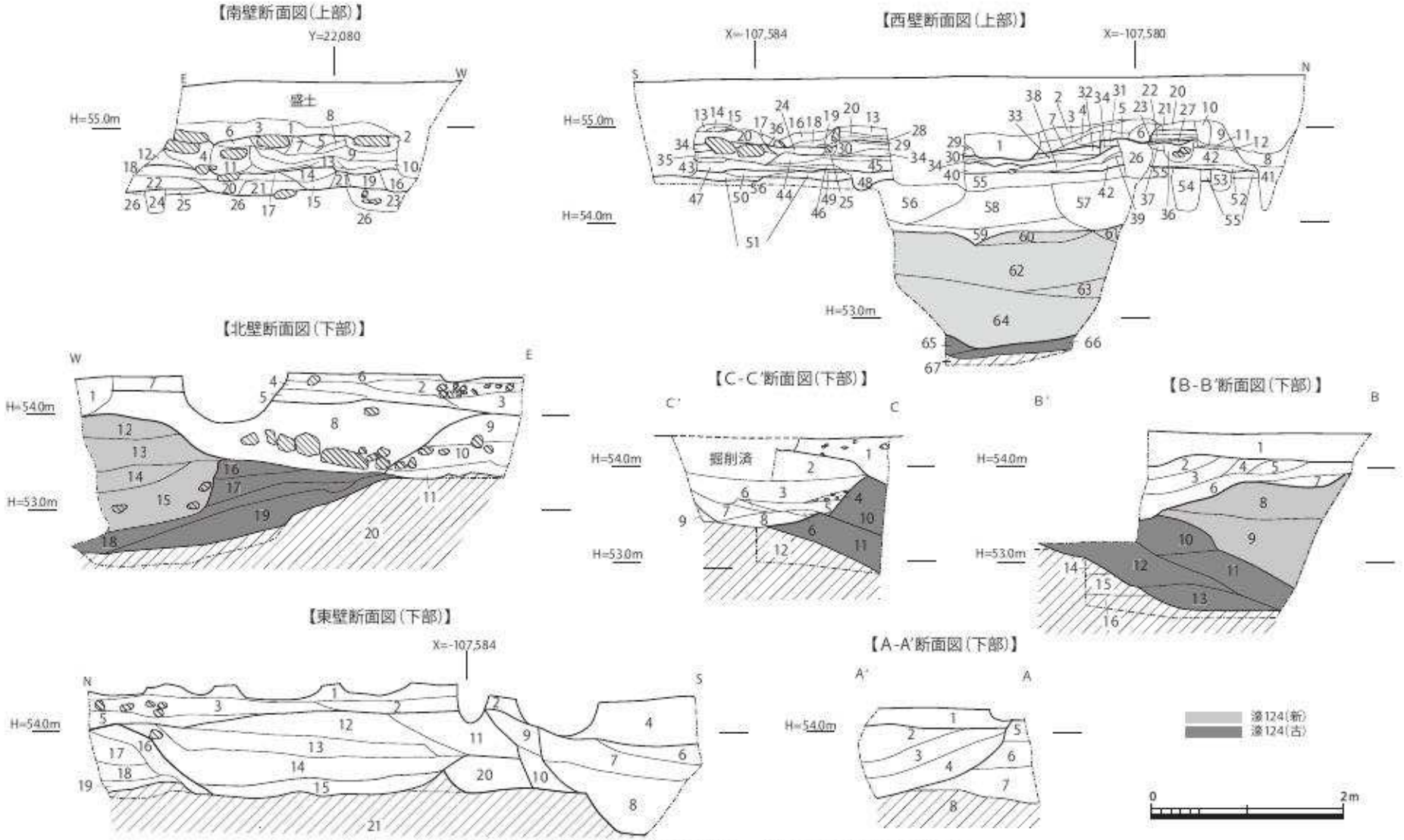


図8　調査区断面図（1：60）※A～Cについては図18と対応

＜西壁断面図（上部）＞

1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（焼土,炭多く含む）
2 10YR3/2 炭黄褐色砂質土（焼土,炭多く含む）
3 10YR3/2 炭黄褐色砂質土（明黄褐色シルトブロック,焼土,炭多く含む）
4 2.5Y7/3 浅黄褐色砂礫
5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（焼土,炭含む）
7 10YR4/4 褐色シルト（焼土少量含む）
6 10YR3/2 黒褐色砂質土(焼土多量に含む）
9 2.5Y2/1 黒色泥砂(焼土少量含む）
8 7.5Y4/2 灰褐色砂質土(炭,焼土,土師器片多量に含む）
10 2.5Y2/1 黒色砂質土
11 2.5YR7/1 黒色炭
12 2.5Y2/1 黒色砂質土（2.5Y6/4にぶい黄色シルトブロック少量含む）
13 7.5Y4/1 褐色シルト（炭,焼土多く含む）
14 2.5Y7/4 浅黄色シルト
15 2.5Y4/1 黄灰色粘土
16 7.5Y4/2 褐灰色泥砂（炭,焼土含む）
17 7.5YR3/1 黒褐色シルト
18 2.5Y4/1 黄灰色シルト(炭含む）
19 2.5YR4/7 赤褐色砂質土
【溝1（新）】
20 2.5YR4/8 赤褐色砂質土(焼土層）
21 2.5YR3/1 黒褐色シルト
22 2.5Y6/6 明黄褐色シルト（焼土,炭多く含む）

＜南壁断面図（上部）＞

1 10YR4/1 褐灰色粘質土（焼土少量含む）
2 2.5Y5/4 黄褐色粘質土（焼土中量含む）
3 10YR4/4 褐色砂質土（焼土少量含む,締まりあり）
4 10YR2/1 黒色シルト（焼土中量含む）
【柱列B】
5 2.5Y4/2 黄灰色泥砂（焼土少量含む）
6 10YR4/2 炭黄褐色泥砂（焼土,礫中量含む）
7 2.5Y3/1 黒褐色砂泥（焼土少量含む）
8 10YR3/1 黒褐色泥砂（焼土少量含む）
9 10YR3/2 黒褐色砂質土（焼土含む,褐色砂質土ブロック含む）
10 10YR4/2 灰黄褐色泥砂（焼土ごく少量含む,小礫含む）
11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（締まりあり,焼土含む）
12 10YR4/2 灰黄褐色泥砂（炭,焼土多量に含む）
13 7.5YR3/3 暗褐色砂質土（焼土,炭多量に含む,下層に炭層あり）
14 5Y3/1 黒褐色砂質土（焼土,炭,粗砂多く含む）
15 2.5Y3/1 黒褐色砂質土（粗砂含む）
16 10YR4/2 灰黄褐色砂質土（焼土,炭多く含む）【柱穴43】
17 10YR3/4 暗褐色シルト（炭,焼土ごく少量含む）
18 10YR4/1 褐灰色泥砂（炭多量に含む,焼土少量含む）
19 10YR4/1 褐灰色泥砂（拳大の礫少量含む）
20 10YR3/3 暗褐色砂泥
21 10YR4/1 褐灰色砂泥（焼土ほぼ含まず）
22 10YR4/1 褐灰色砂質土（炭,土師器片多く含む）
23 10YR3/2 黒褐色砂泥
24 10YR3/2 黒褐色砂質土
25 2.5Y5/4 黄褐色シルト
26 10YR2/2 黒褐色シルト（10YR5/6黄褐色シルトブロック含む）

23 2.5Y3/2 黒褐色砂質土
24 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
25 10YR4/1 褐灰色粘土（炭多く含む）
【溝1（古）】
26 7.5YR4/4 褐色砂質土（焼土,炭多量に含む）【ピット22】
27 5YR5/6 明赤褐色焼土
28 7.5YR4/1 褐灰色シルト（焼土含む
29 2.5Y6/9 にぶい黄色砂質土
30 2.5Y4/1 黄灰色泥砂（焼土,炭含む）
31 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト（焼土,炭含む）
32 7.5YR3/4 黒褐色砂質土
33 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（細砂混じる,焼土少量含む）
34 7.5YR3/2 黒褐色砂質土（焼土,炭多く含む）
35 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
36 2.5Y3/2 黒褐色砂質土（拳大の礫含む）
37 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト（焼土,炭含む）
38 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
39 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（土師器片,小礫,黄褐色シルトブロック多く含む）
40 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土（土師器片,炭, ～5mmの小礫多量に含む）
41 2.5Y3/2 黒褐色泥砂
42 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土（土師器片,炭含む, φ～5mmの小礫多
43 7.5YR4/1 褐灰色泥砂(拳大の礫を多量に含む）

＜東壁断面図（下部）＞

1 10YR5/6 黄褐色砂質土（固く締まる）
2 10YR3/3 暗褐色砂質土（固く締まる,礫少量,土師器片,炭微量含む）
3 10YR3/4 暗褐色砂質土（固く締まる,礫,土師器片微量含む）
4 10YR3/4 暗褐色砂質土（礫,土師器片,炭微量含む）
5 7.5YR2/3 極暗褐色砂質土（粗砂含む, 土師器片,炭微量含む）
【整地層】
6 7.5YR2/3 極暗褐色（土師器片少量含む）
7 7.5YR3/3 暗褐色（礫中量,土師器片少量含む）
8 10YR3/3 暗褐色粘質土（の礫少量,炭,土師器片微量含む）
【土坑120】
9 10YR3/4 暗褐色泥砂（礫,炭,土師器片少量含む）
【土坑121】
10 7.5Y2/3 極暗褐色粘質土（粗砂混じり）（土師器片,炭,少量含む）
11 10YR3/3 暗褐色泥砂（礫,土師器片少量含む）
12 10YR2/3 黒褐色シルト（礫少量,土師器片微量含む）
13 10YR2/2 黒褐色泥砂（粗砂,礫多量に含む）
14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（粗砂多量,の礫含む,土師器細片含む）
15 10YR2/2 黒褐色シルト（土師器細片,礫,地山ブロック含む）
16 7.5YR3/3 暗褐色砂泥（固く締まる,礫少量,土師器片微量含む）
17 7.5Y3/3 暗褐色砂泥（礫少量含む）
18 10YR3/4 黒褐色砂泥（礫中量含む）
19 7.5YR2/3 極暗褐色砂泥（礫,土師器片少量,地山ブロック微量含む）
【土坑122】
20 10YR2/3 黒褐色シルト（炭少量,土師器多量に含む）【土坑123】
21 7.5YR4/4 褐色シルト【地山】

44 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂(小礫多く含む）
45 2.5Y3/2 黒褐色泥砂
46 7.5YR7/1 黒色粗砂(炭,焼土多く含む）
47 7.5YR3/2 黒褐色泥砂（焼土少量含む）
48 7.5YR2/1 黒色砂質土（炭,焼土多く含む）
49 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
50 10YR4/1 褐灰色砂質土（焼土,炭多く含む）
51 10YR3/1 黒褐色砂質土（土師器片少量含む）
52 2.5Y4/1 黄灰色微砂
53 10YR3/1 黒褐色泥砂（土師器片少量含む）
54 10YR2/1 黒褐色泥砂
55 10YR2/3 黒褐色砂質土（土師器片,φ～5mm程度の小礫多く含む）
56 10YR3/1 黒褐色砂質土（土師器片少量含む）
57 10YR2/3 黒褐色砂泥（φ3cm以下の礫,土師器微量含む）
58 2.5Y3/1 黒褐色粗砂層
59 10YR2/2 黒褐色泥砂（粗砂,小礫多く含む）
【整地層】
60 10YR2/2 黒褐色泥砂（粗砂,小礫多く含む）
61 10YR2/3 黒褐色砂泥（礫,土師器片,炭微量含む）
62 7.5Y2/3 極暗褐色泥砂（砂礫多く含む）
63 7.5Y3/3 暗褐色粗砂（礫中量含む）
64 7.5Y3/4 褐色粗砂（礫少量含む）
【溝124（新）】
65 7.5Y3/1 黒褐色粗砂（礫を含む）
66 7.5Y3/3 暗褐色粗砂～細砂（固く締まる,礫微量含む）
【溝124（古）】
67 10YR4/6 褐色砂礫 【地山】

＜北壁断面図（下部）＞

1 10YR2/3 黒褐色砂泥（の礫,土師器片微量含む）
2 10YR5/6 黄褐色砂質土（固く締まる）
3 7.5YR3/2 黒褐色砂泥（礫中量,土師器片微量含む）
4 10YR3/4 暗褐色砂質土（固く締まっている,礫,土師器片微量含む）
5 7.5YR2/3 極暗褐色砂質土（粗砂含む, 土師器片,炭微量含む）
6 7.5YR4/2 灰褐色砂質土（固く締まる,土師器片微量含む）
7 10YR3/4 黒褐色砂泥（礫,土師器片少量含む）
【整地層】
8 7.5Y3/3 暗褐色砂泥（50cmほどの石材, 礫,土師器片,炭含む）
9 7.5Y3/3 暗褐色砂泥（の礫少量含む）
10 10YR3/4 暗褐色砂泥（礫中量含む）
11 7.5YR2/3 極暗褐色砂泥（礫,土師器片,地山ブロック微量含む）
【土坑122】
12 10YR2/3 黒褐色砂泥（礫,土師器片,炭微量含む）
13 7.5YR2/3 極暗褐色泥砂（礫微量含む）
14 7.5Y3/3 暗褐色粗砂（礫中量含む）
15 7.5Y3/4 褐色粗砂（礫少量含む）
【溝124（新）】
16 10YR2/3 黒褐色泥砂（砂礫混じり,固く締まっている）
17 10YR3/3 暗褐色粗砂（砂礫少量混じる,固く締まっている）
18 7.5YR3/3 暗褐色粗砂～細砂（固く締まる,礫を微量含む）
【溝124（古）】
19 7.5YR4/4 褐色褐色シルト
20 7.5YR4/3 褐色砂礫 【地山】

図9　調壁区断面 土色

＜A-A'断面図（下部）＞

1 10YR2/1 黒色砂質土（拳大の礫少量含む） 【整地層】
2 10YR3/4 暗褐色砂質土（礫,土師器片,炭微量含む）
3 10YR3/4 暗褐色砂質土（礫,焼土,炭微量含む,固く締まる） 【土坑120】
4 7.5YR2/3 極暗褐色泥砂（礫,土師器片少量含む）
5 10YR4/1 褐灰色泥砂
6 10YR3/3 暗褐色砂質土（土師器大量に含む） 【土坑121】
7 7.5YR3/3 暗褐色泥砂（礫,土師器片,炭微量含む）
8 7.5YR4/4 褐色シルト 【地山】

＜C-C'断面図（下部）＞

1 7.5YR2/1 黒色シルト（拳大の礫含む） 【整地土】
2 10YR2/1 黒色砂質土（拳大の礫少量含む）
3 10YR4/1 褐灰色泥砂）
4 10YR1.7/1 黒色砂礫
5 10YR3/1 黒褐色砂泥 【土坑122】
6 10YR3/2 黒褐色泥砂
7 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂～微砂
8 10YR1.7/1 黒色シルト
9 10YR3/3 暗褐色砂質土（土師器大量に含む） 【土坑123】
10 10YR3/1 黒褐色砂礫
11 7.5Y2/3 極暗褐色砂礫 【溝124（古）】
12 10YR6/8 明黄褐色シルト 【地山】

＜B-B'断面図（下部）＞

1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土（礫,土師器片含む,非常に固く締まる）【整地土】
2 10YR2/1 黒色砂質土（粗砂含む,人頭大の礫を少量含む）
3 10YR3/2 黒褐色粗砂（礫混じり）
4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫
5 2.5Y5/4 黄褐色細砂 【土坑122】
6 10YR2/2 黒褐色泥砂（粗砂,小礫多く含む）
7 10YR2/3 黒褐色砂礫
8 10YR1.7/1 黒色砂礫
9 2.5Y3/1 黒褐色粗砂（拳大の礫を含む） 【溝124（新）】
10 7.5YR2/3 極暗褐色粗砂（礫混じり）
11 7.5YR3/1 黒褐色粗砂（礫を含む） 【溝124（古）】
12 7.5YR2/3 極暗褐色砂礫
13 10YR4/4 褐色粗砂
14 2.5Y4/2 灰黄褐色粗砂
15 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫（人頭大の礫を多く含む） 【地山】
16 10YR4/6 褐色砂礫

図10 調査区断面 土色

（3）第1面の遺構

遺構群は，整地層と考えられる褐灰色・黒褐色シルトの上面で検出したもので，上面は焼土層に覆われていた。これらの遺構群は，江戸時代前期から室町時代末に属するものと考えられる。

井戸1 調査区の南半中央で検出した。平面が円形を呈する石組みの井戸である。掘方の規模は直径1.65mほどだが，東側のみ若干外側に膨らむ形となる。安全管理上の理由から底面まで掘削を行っていないが，深さは1.95m以上，石積みの内法は直径0.7～0.9mとなり，上方にむかって徐々に狭まる。最上段に40cmほどの大型の石材を配する構造となる。

溝2 調査区の南東隅付近で検出した，東西方向の溝である。溝の西側は調査区外へと続き，東側は井戸1にぶつかり，それ以東では確認できない。部分的に肩口に石材が遺存していたことから石組溝と考えられる。規模は長さ2.5m，幅は掘方で0.85m，内法が0.5mとなる。断面では，焼土層（6層）を挟んでその上下で肩口に石

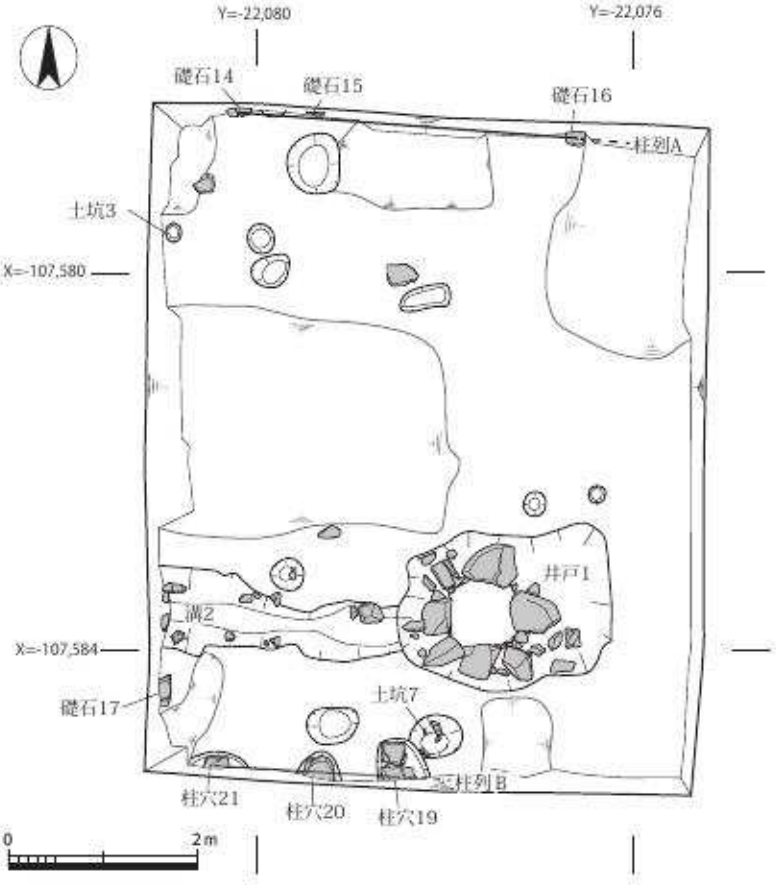


図11 第1面平面図（1：80）

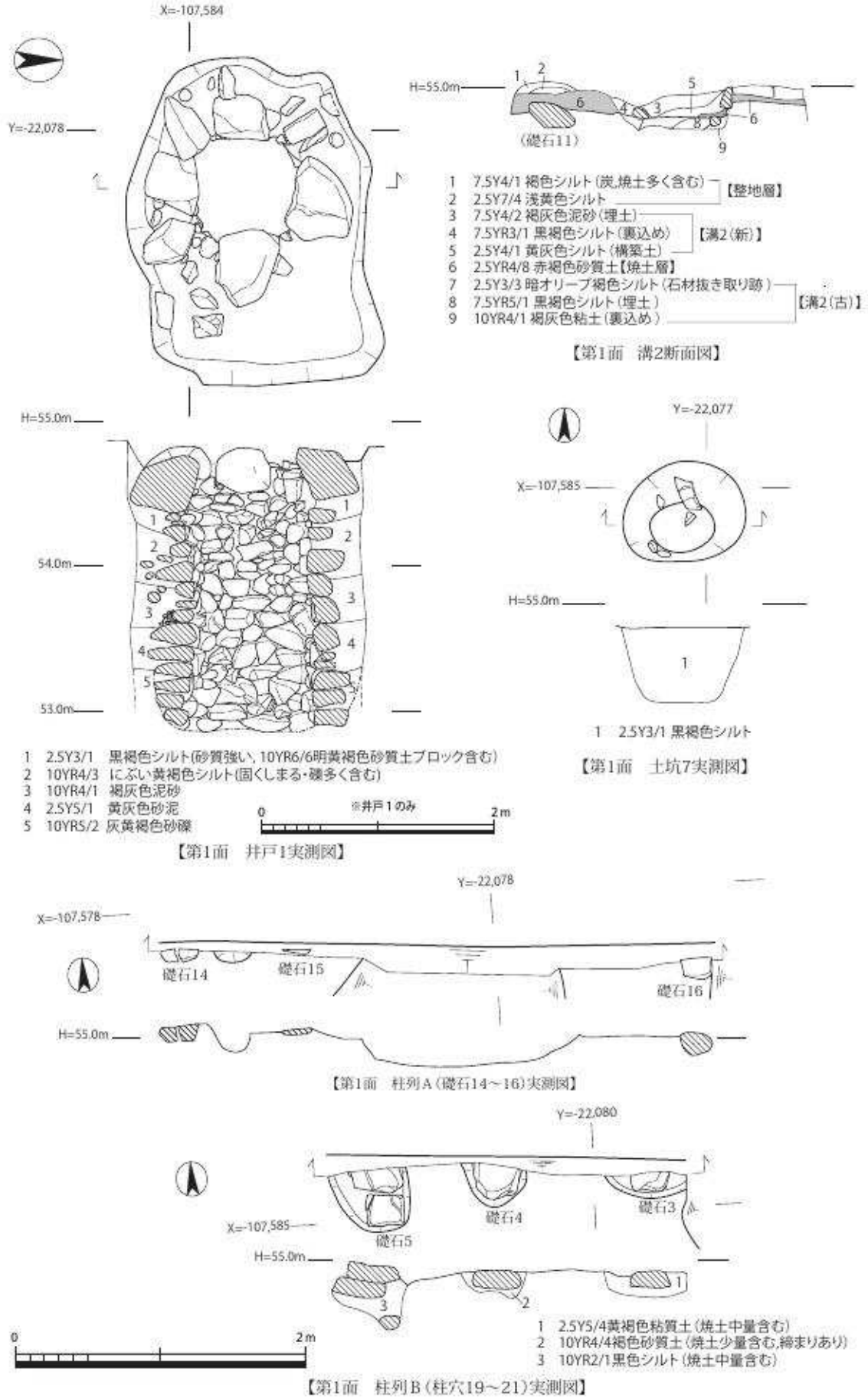


図12 第1面 遺構平・断面図(1:50, 1:40)

材が確認できることから，新旧２時期あると考えられる。全体的に遺存状況が悪く，これが部分的な補修もしくは全体的なやり替えに伴うものかは不明であるが，溝２（新）は焼土層直上の整地層（１・２層）と対応する可能性がある。

土坑３　調査区の北西隅付近で検出した，直径20cmで深さ10cmほどの土坑である。埋土は単一層であり，完形の土師器皿が伏せられた状態で出土した。

土坑7　調査区の南辺中央で検出した，直径80cmで深さ50cmほどの土坑である。埋土は単一層であり，完形の土師器皿が正位置で２枚重ねられた状態で出土した。

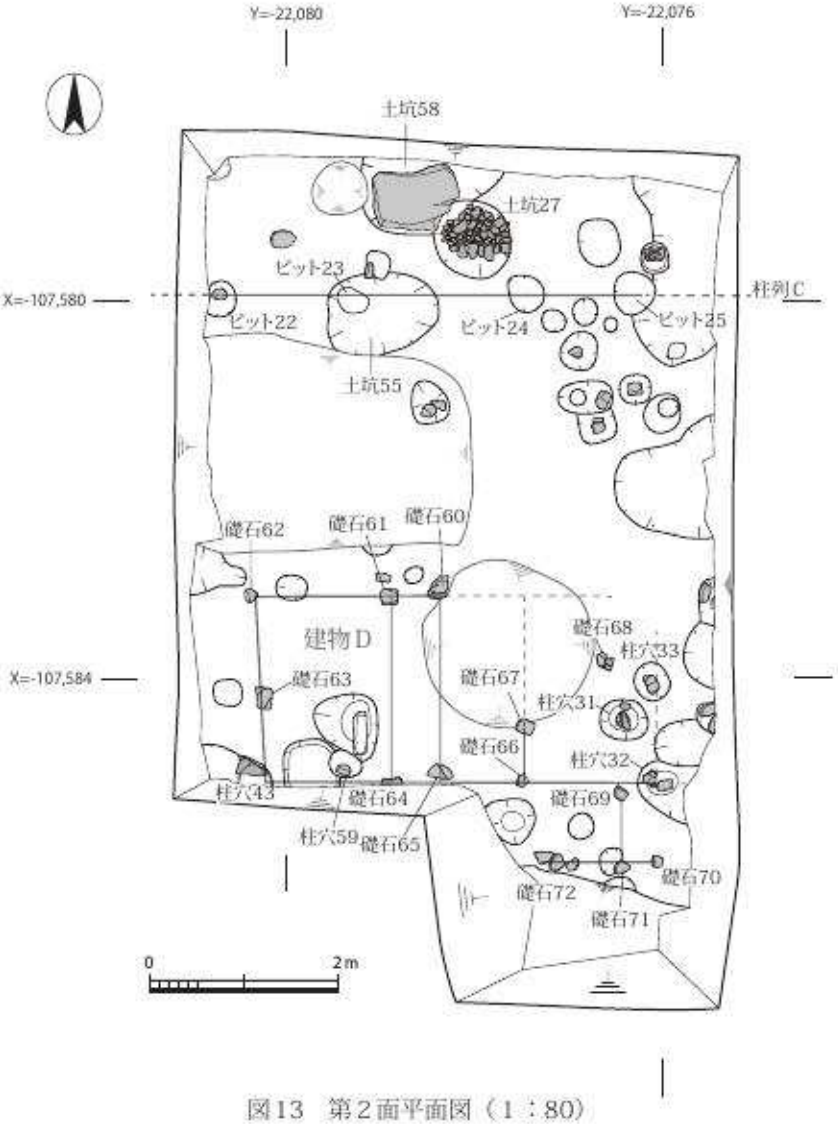


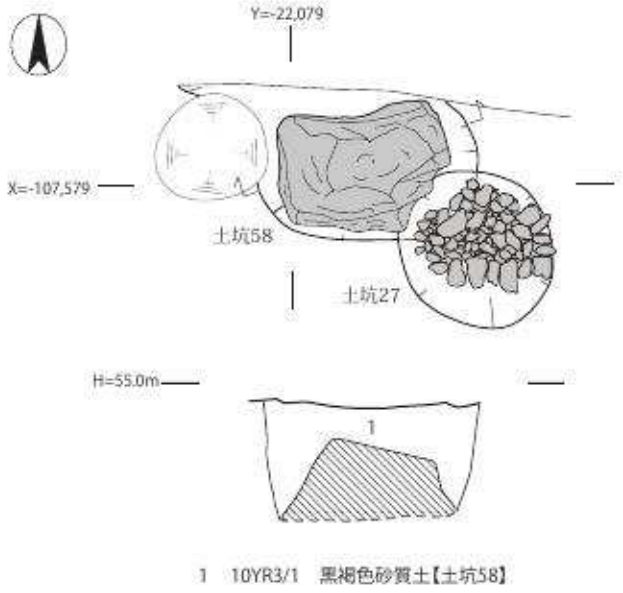
図13　第２面平面図（１：80）

柱列A（礎石14～16）　調査区の北辺で検出した。東西方向に並ぶ礎石３基からなる。これより南側では礎石は確認できないことから，北側に向かって展開する可能性が高い。掘方は確認できず，整地土とともに石材が据えられたものと考えられる。柱間は礎石14と礎石15で80cm，礎石15と礎石16で2.8ｍとなる。ただし，礎石15と礎石16の間には攪乱により遺構面が削平されており，この間に礎石が存在した場合はその間隔は1.4ｍとなる。

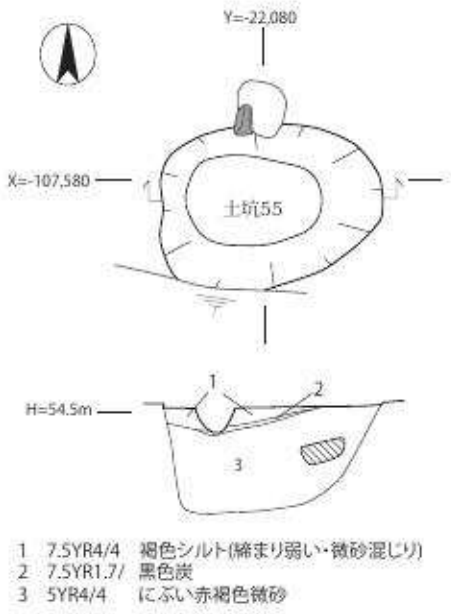
柱列B（礎石19～21）　調査区の南辺で検出した，東西方向に並ぶ柱穴３基からなる。南側にむかって展開するものと考えられる。いずれも掘方を有しており，その規模は70cm～１ｍ，深さは30cmほどとなる。ただし，柱穴19のみ掘方が深く，石材が二重に据えられている。使用されている石材は長さ50cmで厚さが20㎝ほどの大ぶりな石材を使用する。

（４）第２面の遺構（図13～15）

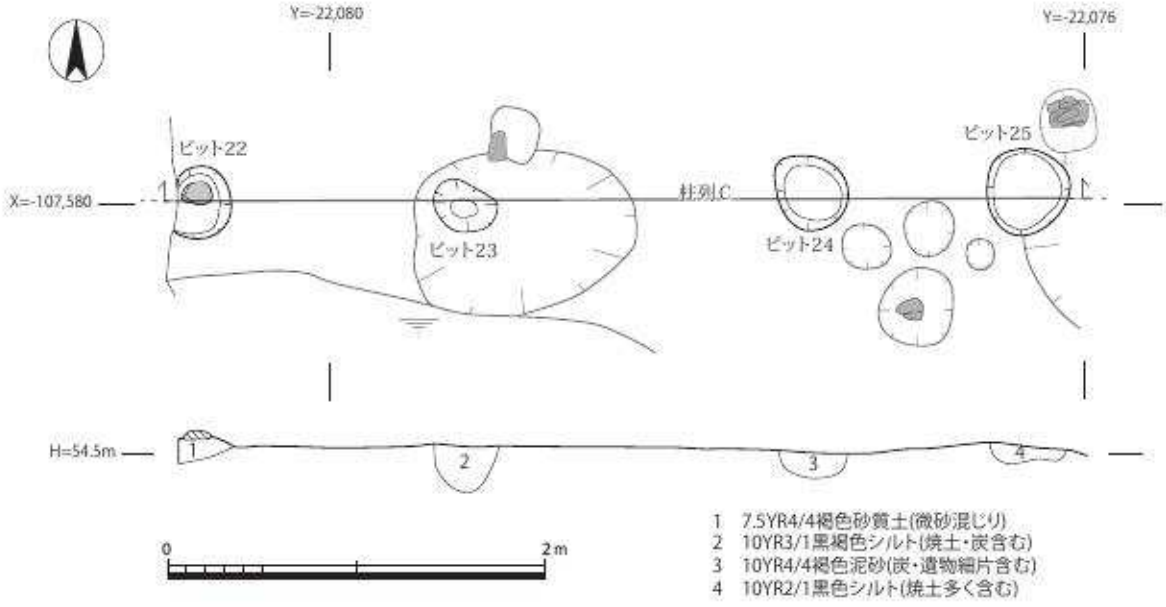
遺構群は，オリーブ褐色砂質土や黒褐色泥砂の上面で検出したもので，これらは室町時代末に属する遺構群と考えられる。



【第2面　土坑27・58実測図】



【第2面　土坑55実測図】



【第2面　柱列C(ピット22～25)実測図】

図14　第２面　遺構平・断面図（１：40）

柱列C(ピット22～25)　調査区北辺で検出した。ピット４基が東西方向に並ぶ。掘方の規模は30～40cmで，深さは10～20cmほどとなる。遺存状況の良いピット22でのみ根石が確認できる。間隔は，ピット22から23の間とピット24～25までの間が1.35ｍ，ピット23から24までの間が1.8ｍとなる。柵等の区画施設の可能性がある。

土坑27　調査区の北側中央で検出した。直径80cm，深さ60cmほどの土坑で，中には５cm程度の礫が多量に詰め込まれていた。最上面の南辺のみ石材を東西方向に並べているものの，それ以外では石材を意図的に配した様子は確認できない。埋土からは，土師器皿片が少量出土した。

土坑55　調査区の北西部で検出した土坑である。長軸1.15ｍ，短軸が90cmの楕円形の土坑であ

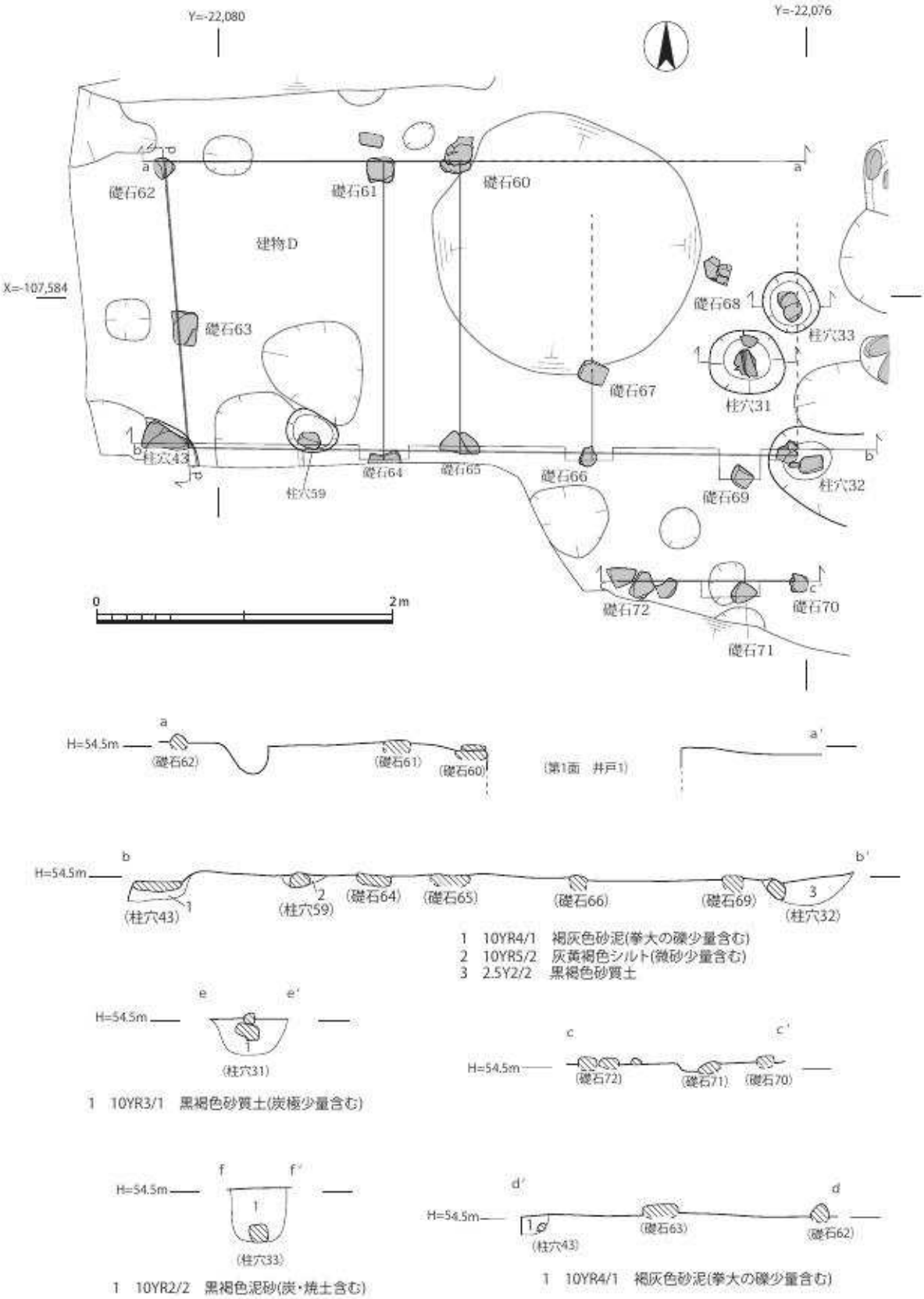


図15 第2面 建物D実測図（1：40）

る。ピット23と重複する。埋土は３層からなり，中間に薄い炭層を挟んでその上に褐色シルト，下ににぶい赤褐色微砂が確認できる。調査時点では火葬墓である可能性を想定していたものの，被熱痕跡や骨片などは確認できず，出土遺物に意図的な配置が認められないことから断定できない。埋土からは土師器皿や青磁碗・銭貨・鉄釘などが出土した。

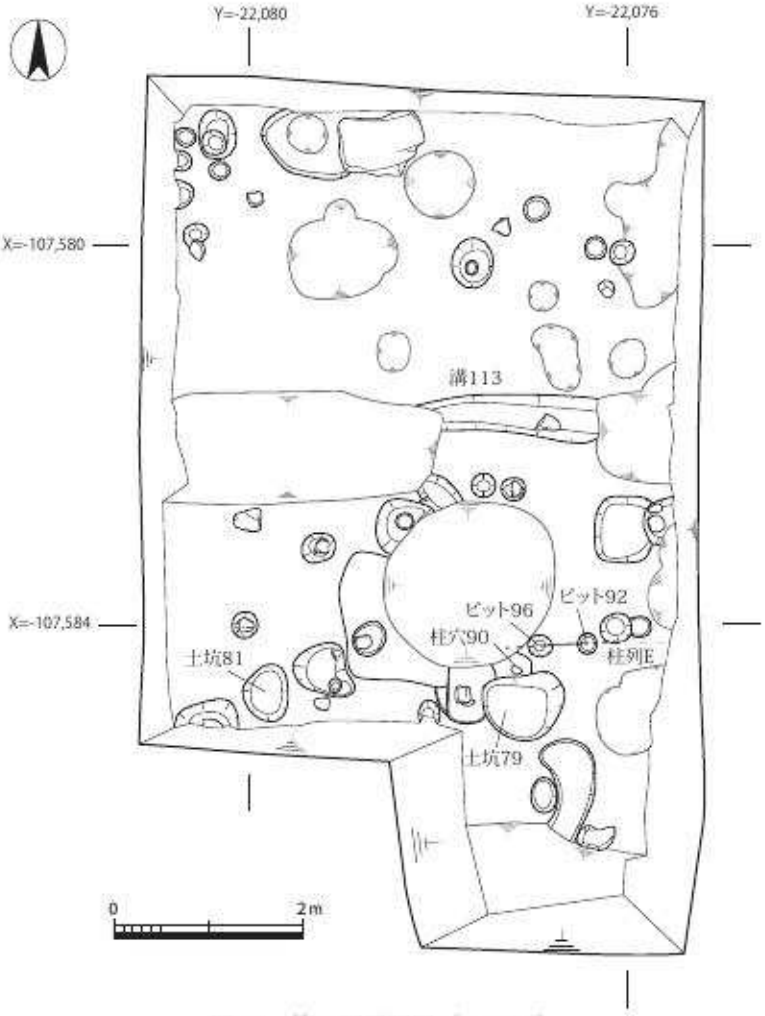


図16　第３面平面図（１：80）

土坑58　調査区の北辺中央で検出した。東西1.5ｍで南北は40cm以上の規模を有する。土坑内からは長軸90cm，短軸70cmの規模を有する大型の石材が出土した。大きさから景石である可能性が高いものの，周辺には関連する庭園関連の遺構が確認できず，遺構の性格は不明である。

建物D(礎石60～68)　調査区の南半で検出した。礎石はいずれも掘方は確認できず，整地土層と共に据えられたものと考えられる。規模は，調査区内で確認できる範囲で東西は３間以上，南北１間となる。１間はおおよそ東西が1.5ｍ，南北が２ｍとなる。部分的に不規則な位置に存在する礎石（60・63・65・67・69）が存在するが，これらは構造強化を目的に設けられたものと考えたい。また，建物Ｄに重複する形で存在する柱穴が複数あるが，その中には柱穴32・33など位置的に柱筋にのるものがあることから，補強ややり直しに伴うものが想定される。

なお，礎石70～72については建物Ｄの柱筋から外れ，かつ礎石間の距離も異なることから，同一の建物を構成する礎石かどうかは不明である。

（５）第３面の遺構（図16）

遺構群は，黒褐色砂質や黒色砂質土の上面で検出したもので，これらは室町時代後期に属するものと考えられる。検出した遺構は，土坑・ピット・柱穴溝を確認した。この面の遺構は遺物が少なく時期を判別できるものが少ないため，遺物が出土した遺構を中心に報告する。

土坑81　調査区南西隅で検出した土坑で，直径が50～60cmほどの楕円形の土坑である。深さは10cm程度と浅い。

柱穴90　調査区の南東部で検出した。北側は１面目の井戸１に，南側は土坑79によって切られている。掘方の直径は40cmほどで，中央に直径10cmほどの根石が据えられている。この埋土からは土師器皿と取鍋が出土した。

柱列E(ピット92・96)　南東部で検出した。東西方向に並ぶピット２基からなる。埋土の様相と掘方の規模等が類似することから同一の柱列を構成するものと判断した。西は１面目の井戸１によって削平さている。掘方の規模はともに20cmで，深さは10cmとなる。南北には展開しないことから，柵などの区画施設に伴う遺構と考えられる。埋土から時期を判別できる資料は出土しなかった。

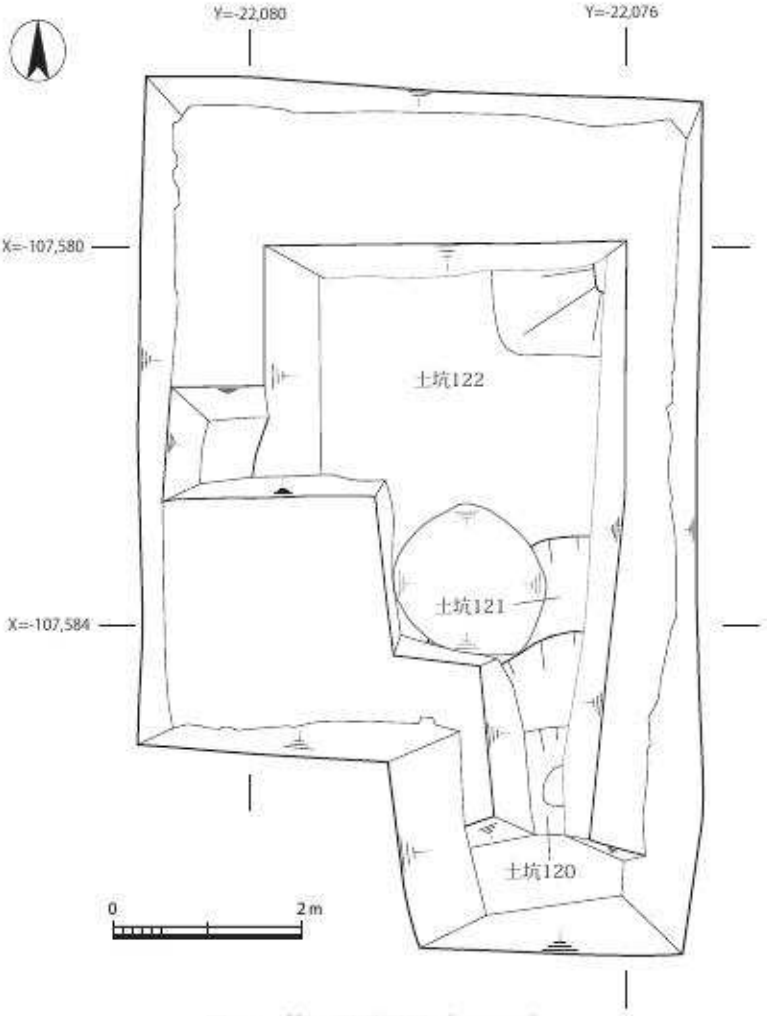


図17　第４面平面図（１：80）

溝113　調査区の中央で検出した。東西方向の溝であるが，西は攪乱，東は２面目の遺構により削平されている。現存する長さは1.95ｍ，幅が40cm，深さは５cmほどの浅い溝である。埋土は水分を多く含んだ黒褐色シルトであり，その中からは小型の不明鉄製品片や土師器皿の小片が出土している。図化していないが，埋土からはⅨ期新段階からＸ期古段階の遺物が出土している。

（６）第４面の遺構（図17）

この遺構群は，第３面を形成する整地層を除去した段階で確認したもので，室町時代後期に属する。ほぼ全面で土坑122の埋土である黒褐色シルトが広がり，この上面が遺構面となる。この面で検出した遺構は３基のみであり，いずれも重複関係にある。なお，第４面以降の調査については想定よりも掘削深度が深くなったことから，土質等を加味して50cmから１ｍほどの犬走を設け，中央部のみを掘り下げて調査を実施した。

土坑120　調査区の南東隅で検出した土坑である。土坑121を切り込んで成立している。南側は近世の火災処理土坑により削平を受け，また部分的な検出に留まっており正確な規模・形態は不明であるが，南北で1.7ｍ以上，深さは0.9ｍほどとなる。土坑の底面の標高は西壁で53.3ｍ，東

壁で52.9ｍとなり，東側に向かってすり鉢状に深くなる。土坑120は，本調査地から東に50ｍほどの場所で平成元年に実施された発掘調査で確認されている東西方向の濠のうち南側のものの延長線上に当たる。この濠は幅2.7ｍで深さが1.7ｍのＶ字形のものと報告されているが，土坑120は底面の形状や規模の面からこの濠と同一の遺構とは考えにくい。

土坑121　調査区南東隅で検出した土坑である。土坑122を切り込んでおり，南側は土坑120に切られる。安全管理上の制約を受けて部分的な検出に止まっており，全体の形態および規模は不明であるが，現状で東西1.9ｍで深さが80cmほどの土坑と考えられる。

土坑122　調査区ほぼ全面に広がる大型の土坑である。南側は土坑120・121に切られており，北および東側は調査区外へと続くため，正確な規模は不明であるが，深さは0.7ｍほどで東西と南北それぞれ３ｍ以上の規模を有する。第５面の調査では，この土層を除去した段階で地山および濠を検出しているが，地山は褐色シルト，濠埋土は粗砂層を主体とした土層で構成されている。この土坑は地山のシルト層が遺存する範囲を中心に存在しており，シルト上面には凹凸が認められる。

平成元年に実施された発掘調査で確認している２条の濠については未だ概報のみ報告されているに過ぎないが，検出面の高さは標高53.9ｍほどとなる。土坑122の上面の標高は54.0ｍで，今回確認した濠の埋土と考えられる土層の最高所の標高も54.0ｍとなり，おおよそこの高さが本調査地付近における濠の検出高と考えられる。調査段階においては，土坑122が非常に大型のものであり埋土も締まっていた事から，築地等の区画施設や整地土である可能性も考慮した。しかし，この土坑122の埋土上面では築地などの区画施設に伴う遺構は確認できなかった。また，平成元年に実施された発掘調査で確認している２条の濠のうち北側のものの延長線上に土坑122は位置するが，平・断面ともに濠と思しき遺構等は確認できなかった。これに加え，調査区の北壁断面でこの土坑122の埋土が濠埋土の上に堆積しているのを確認した。以上の周辺事例や本調査地での調査所見から，現段階では土坑122を土取りに伴うものと考えておきたい。なお，調査区北東隅で検出した肩口は，本来的な肩口ではなく巨大な土坑の一単位を見ている可能性が高い。

（７）第５面の遺構（図１８）

この遺構群は，地山の褐色シルト上面で検出した。この面で検出した遺構は２基のみで，室町時代後期に属する。

土坑123　調査区南西部で検出した土坑である。調査当初は土坑122の埋土の一単位と考えたものの，この土層のみ多量の土師器片を含んでおり様相が著しく異なることや，土坑122の埋土がこの土坑123の埋土上面を覆うように堆積していたことから別の遺構と判断した。南と西側は土坑121によって削平されおり，現状では東西90cm，深さは40cmほどの大きさとなる。

濠124　調査区西側で東肩口のみ検出した。南北方向の濠で，幅は3.4m以上で深さは1.4mの規模を有する。肩口からおおよそ15°の傾斜をもって西に下がる。前述のように，肩口となる地山の褐色シルトについては土坑122によって削られているため，本来の肩口はさらに東側に存在したものと推測される。また，西肩口については確認できていないものの，現在の室町通り路面下に

存在する可能性が高い。濠の埋土は，西下がりの粗砂層が主体となる。北壁断面では，肩口から２m西の地点で土層の堆積状況が変化しており，これは濠の掘り直しを示している可能性が高い。なお，本調査では想定よりも掘削深度が深くなったことから，濠の埋土の部分については東西2.5m×南北1.5mの範囲でしか調査を実施できておらず，全体の様相については不明な点も残されている。本調査では，濠の埋土から遺物を確認することはできなかった。

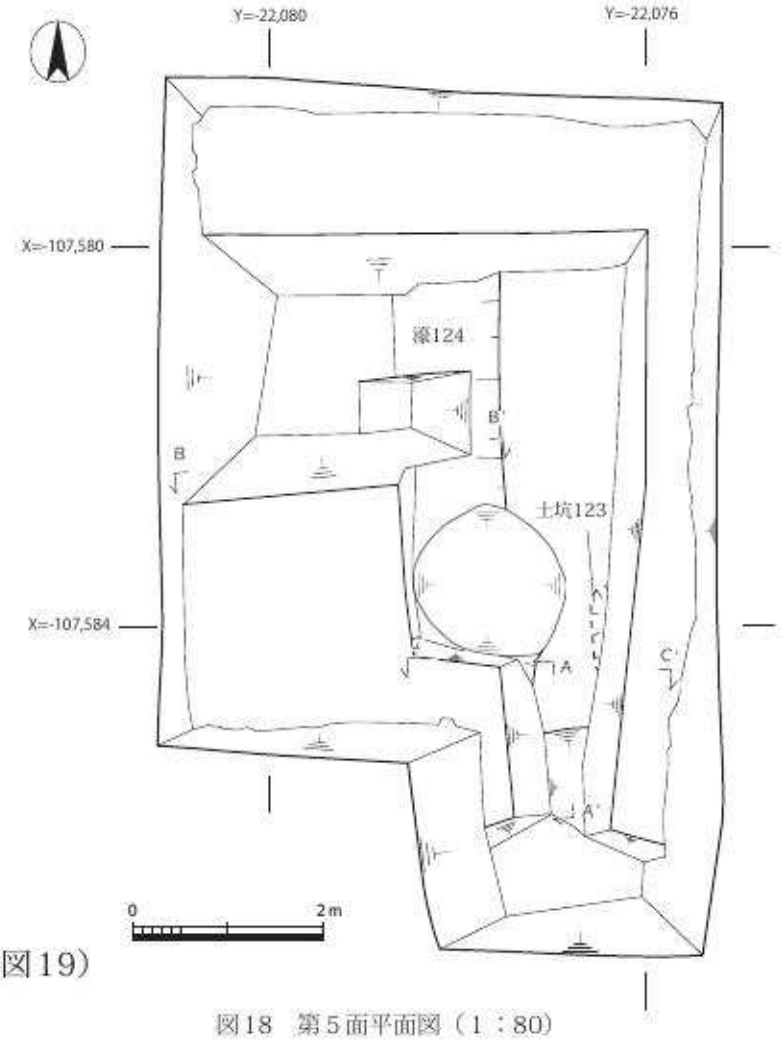


図18　第５面平面図（１：80）

４．遺　物

（１）第１面の出土遺物（図19）

溝２　出土した遺物は少ない。土師器皿（１～２）と信楽焼擂鉢（３）が出土した。１は土師器皿Nr，２は土師器皿Sである。江戸時代前期（XI期中～新段階）の遺物と考えられる。

土坑３　この土坑からは，ほぼ完形の土師器皿が伏せられた状態で出土した。土師器皿Sで，口径は４と５ともに10.8㎝となる。江戸時代前期（XI期中～新段階）の遺物と考えられる。

土坑７　完形の土師器皿が２枚，正位置で重ねられた状態で出土した（７・８）。出土した遺物はいずれも土師器皿Sで，口径は６が10.4cm，７が口径12.8cm，８が口径13.0cmとなる。室町時代末（X期新段階）の遺物と考えられる。

表３　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代	土師器・焼締め陶器・陶磁器		8点		
室町時代	土師器・瓦器・陶磁器・瓦・磚 金属製品・銭貨		103点		
合　計		10箱	111点(2箱)	5箱	3箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランク遺物の抽出，詰め直しのため，出土時より2箱少なくなっている。

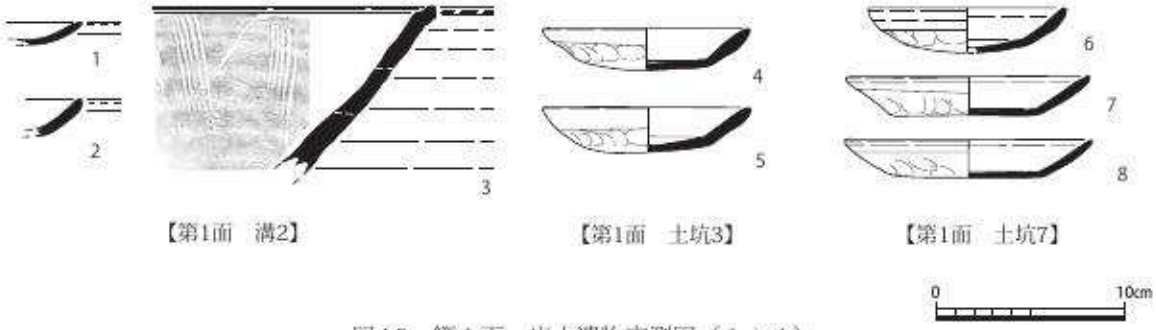


図19　第1面　出土遺物実測図（1：4）

（2）第2面の出土遺物（図20）

土坑27　この土坑は排水を目的とした遺構と考えられ，埋土は5㎝以下の礫が多量に詰め込まれていた。遺物はこの礫の中から出土した。全体的に遺物の量は少なく，土師器皿が少量出土したに過ぎない。9は土師器皿Nr，10が同皿Sh，11と12は同皿Sである。口径は9が5.9cm，10が6.2cmとなる。X期中段階の遺物と考えられる。

柱穴31　土師器小片が少量出土した。13・14はいずれも土師器皿Sである。X期古段階と考えられる。

土坑55　この土坑からは，比較的多くの遺物が出土した。出土した遺物は土師器・青磁・染付・鉄製品などがある。15～21は土師器皿Nrで，口径は63が5.8cmで最も小さく，20が7.6cmと最も大きい。22～27は同皿Sで，口径は22が8.6cmで最も小さく，25･26が12.2cmと最も大きい。これらはX期中段階と考えられる。29と30は青磁碗である。29は内底には漢字が二文字押印されている。30は完形で出土したもので，口径は10.5cm，底径は4.3cm，器高は6.8cmで器壁は全体的に厚い。外面には陰刻で蓮弁文が施される。31と32は染付である。29～31は輸入陶磁器とみられる。33～35は鉄製の釘である。出土した釘は大きく大中小の三つに分けられる。33は小型のもので長さが4.1cm，34が中型のもので長さが5.4cm，35は大型のもので7.0cmある。

36～43は銅銭である。42のみ判読不能である。36が皇宋通宝（北宋，初鋳1038年），37が元豊通宝（北宋，初鋳1078年），38が至道元宝（北宋，初鋳995年），39が天禧通宝（北宋，初鋳1017年），40が嘉祐元宝（北宋，初鋳1056年），41が治平元宝（北宋，初鋳1064年），43が開元通宝（南唐，初鋳621年）である。

（3）第3面の出土遺物（図21）

土坑81　44と45は土師器皿Sで，44の口径は10.6cmとなる。X期の古段階と考えられる。

土坑98　46は土師器皿Shで口径は6.7cmである。47は取鍋とみられ，器壁が非常に厚く全体的に被熱痕跡が認められる。

（4）第4面の出土遺物（図21）

土坑121　土坑122を切り込んで成立する土坑である。出土遺物は土師皿が主を占める。48～55は土師器皿Sである。口径は48が8.4cm，49が11.8cm，50が13.0cm，51が13.8cm，52が

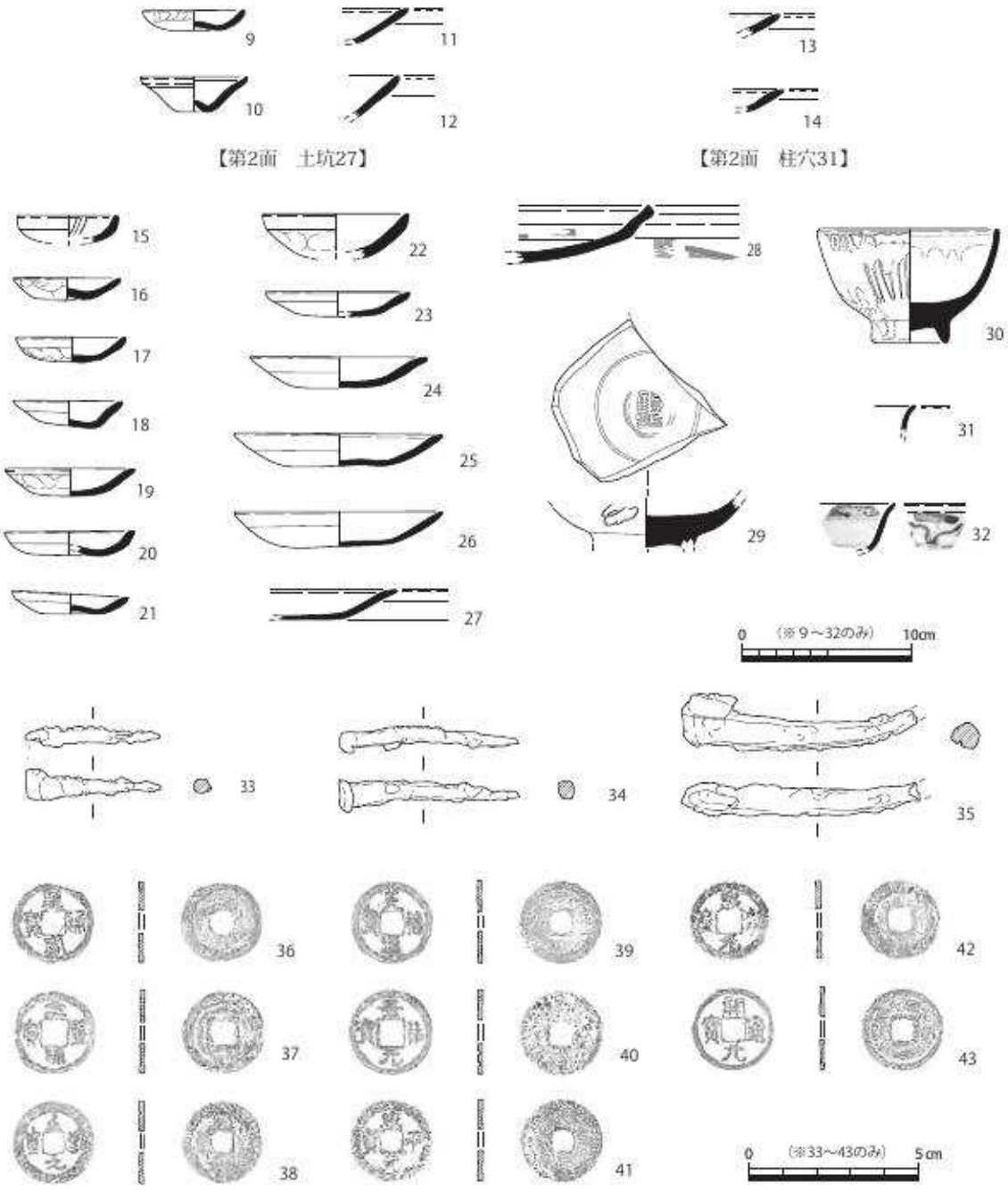


図20　第２面　出土遺物実測図（１：４，１：２）

14.2cm，53が18.2cmとなる。Ⅸ期新段階の遺物と考えられる。

土坑122　第４面目のほぼ全面を占める土取りに伴う土坑と考えられる。56～69は，土坑122の肩口となっている土層（図８ 東壁断面（下部）16～19層）から出土したものである。この肩口部分の土層も，巨大な土坑の一単位となる可能性が高いことからここでは土坑122出土遺物として報告する。56～58は土師器皿Sh，59～67は同皿Sである。口径は56が6.4cm，57が6.8cm，59が8.3cm，60が8.4cm，61と63が8.0cm，62が8.2cm，64が12.8cmとなる。土師器皿はⅨ期新段階のものと考えられる。68は土師器の風炉，69は瓦質土器浅鉢の口縁である。

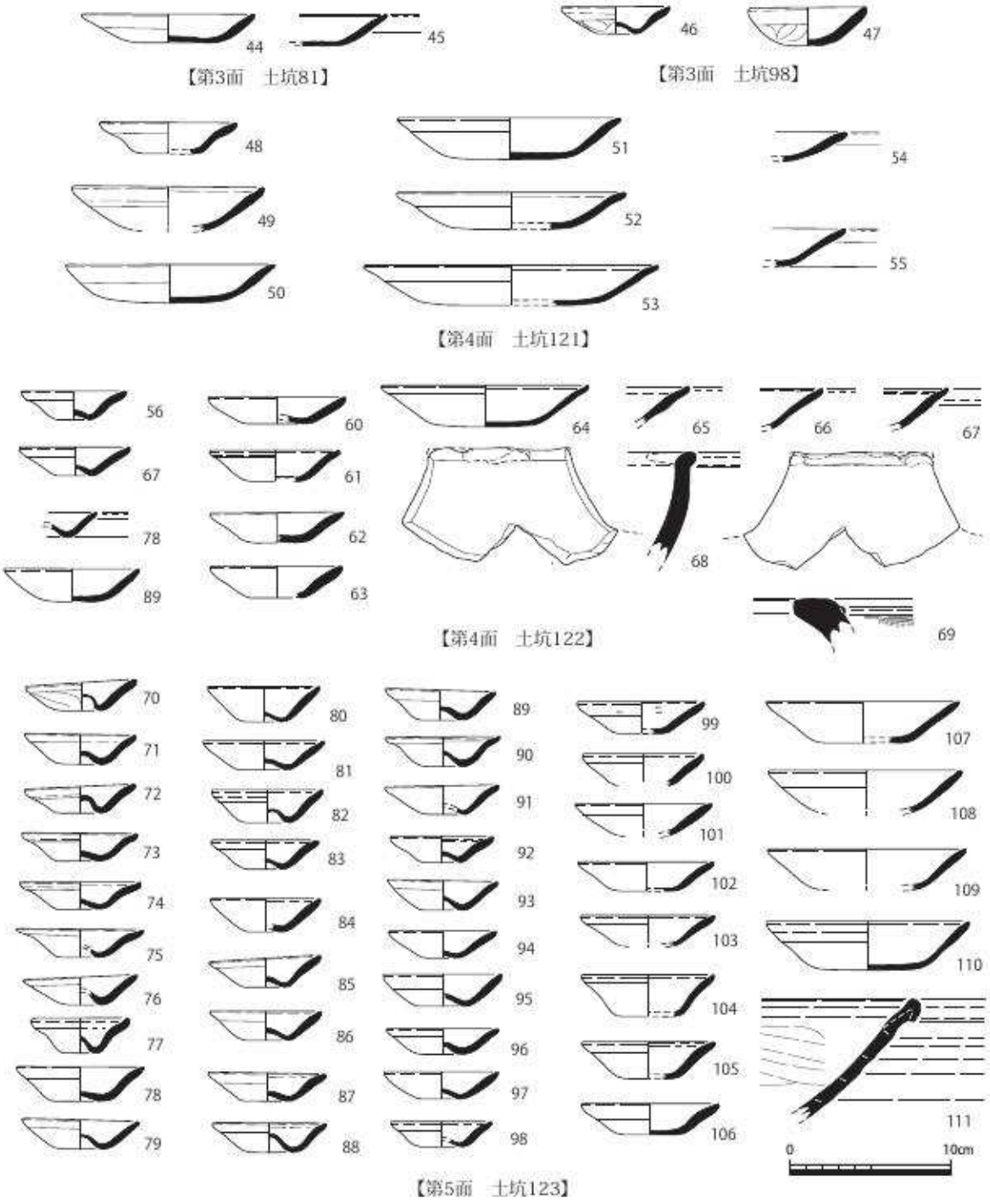


図21　第３～５面　出土遺物実測図（１：４）

（５）第５面の出土遺物（図21）

土坑123　土坑122や121によって削平を受け部分的にしか遺存していなかったものの，その埋土からはコンテナ２箱以上の多量の遺物が出土した。これらの遺物のほぼすべてを土師器が占めており，ほかにはごく少量の須恵器片が出土した程度である。70～98は土師器皿Sh，99～110は同皿Sである。同皿Shの口径は77が6.0cmで最も小さく，78が7.4cmで最も大きい。同皿Sの口径は100が7.4cmで最も小さく，110が12.6cmと最も大きい。111は東播系須恵器の鉢である。土師器皿はⅨ期中段階の遺物群と考えられる。

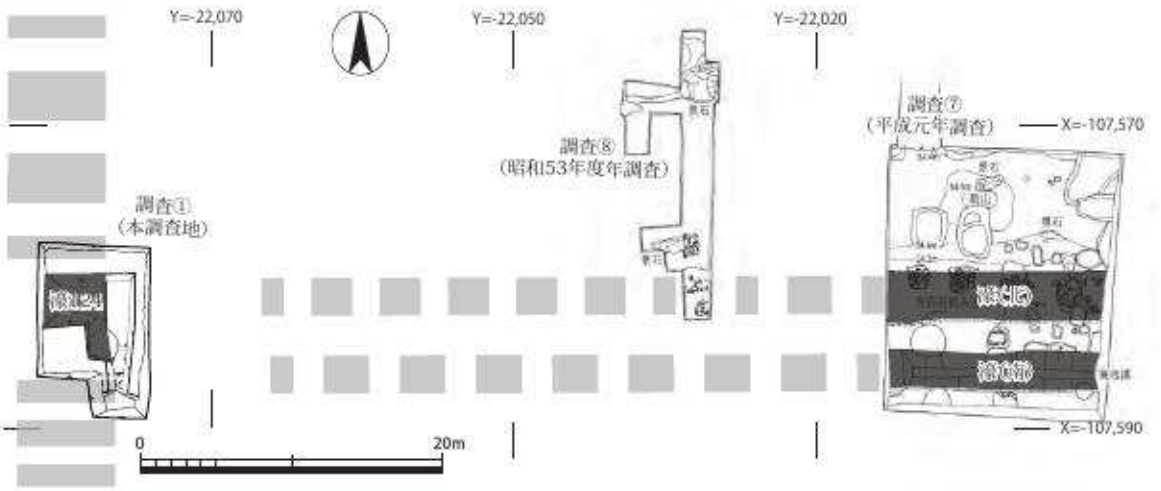


図22　遺構の位置関係（1：500）

5．まとめ（図21）

本調査では，室町時代後期～江戸時代前期にかけての土地利用の変遷を明らかにする事ができた。当該地では，15世紀後葉（第4面）を境に土地利用の様相が異なる。これ以前の遺構としては土師器を多量に含む土坑123や濠124が確認でき，室町殿の一角であったと推測される。これに対して，第4面では土取りに伴うと考えられる土坑122があり，それ以降の第1～3面では整地を繰り返して宅地として利用している。15世紀後葉の本調査地付近の様相を記した文献としては『大乗院寺社雑事記』があり，文明11年（1479）3月6日条に応仁の乱で焼失した室町殿の再建に関する記事がみえる。この中では，元は南北60丈あった室町殿の敷地について，「南方二〇丈」にはすでに民家があったため「四十丈ニツイチ被仰付」と記す。この事から，本調査地付近は応仁の乱による焼失以降は室町殿の範囲から外れて次第に民家が立ち並んでいったものと考えられるが，この動向は本調査成果と矛盾しない。

また，部分的にではあるが室町殿と考えられる濠124を確認した点も特筆される。これまで室町殿に四至については発掘調査によって北限と南限が確認されていたものの，西限と東限は未確認であり，本調査で初めて室町殿の西限を確認したことになる。室町通に面して正門を設けたことから「室町殿」と呼称されているが，本調査ではその顔と言うべき室町通沿いの様相についての情報の一端を明らかにできたことは非常に重要な成果といえる。調査⑦で確認されている濠と比較すると深さは同程度だが幅が広く，場所によって濠の様相が異なっていた可能性もあり興味深い。

しかし，本調査は部分的なものであり，濠124の全形や存続時期，それが恒常的な施設か否かという問題，調査⑦で確認されている南限の濠との関係など今回は明らかにし得なかった点も多く残されている。今後の継続的な調査と研究に期待したい。　（熊井　亮介）

註

1）高橋康夫「室町期京都の都市空間-室町殿と相国寺と土御門内裏-」『政権都市』中世都市研究会，1967。

2）川上貢『日本中世住宅の研究』墨水書房，1967。

3）この中の「北小路」は現在の今出川通，「今出川」は現在の烏丸通りを指すものと考えられる。

V　白河街区跡

1．調査経過

調査地は，左京区聖護院中町に所在し，周知の埋蔵文化財包蔵地「白河街区跡」に該当する。当地において住宅兼店舗の建設が計画され，平成29年８月25日付けで文化財保護法93条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

届出を受け，平成29年12月５日に当課が試掘調査を実施したところ，対象地北半を中心に平安時代後期の遺構面を良好な状態で検出した。届出の内容では，遺構面に影響が及ぶことから，当課と事業者との協議の結果，記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査区は，対象地の北半に南北８ｍ，東西12ｍで設定した。調査期間は平成30年１月22日から同年２月28日で，実働日数は26日間である。調査区の一部を拡張した結果，最終的な調査面積は109㎡となった。

2．遺　跡

（1）立地と歴史的環境

今回の調査地点は，鴨川の東側，いわゆる鴨東地域の一画に所在する。吉田神社や金戒光明寺が所在する吉田山（神楽岡）が東に位置し，東から西へと低くなる地形である。鴨東地域は平安時代中期には藤原氏などの貴族の別業の地として知られるが，本格的な発展は平安時代後期に調査地の南，岡崎地域で承暦元年（1077），白河天皇によって法勝寺が造営されたことを契機とし，その周囲に複数の天皇家御願寺が造営されていく。六勝寺と総称されるこの寺院群を核に，平安京の条坊に類似した方格街区が形成され，街区内には白河上皇の院御所である白河北殿，白河南殿も置かれた。この街区の推定範囲を，埋蔵文化財包蔵地「白河街区跡」として周知している。

調査地の南西に所在する聖護院は，寛治４年（1090）に園城寺僧の増誉が開基したと伝わる本山修験宗寺院で，もと天台宗寺門派三門跡のひとつである。後白河天皇の皇子である静恵法親王の入室によって，宮門跡となり発展をみた。創建当時の所在地は判然としないものの，仁安２年

図１　調査前全景（南西から）

図２　作業風景（北西から）

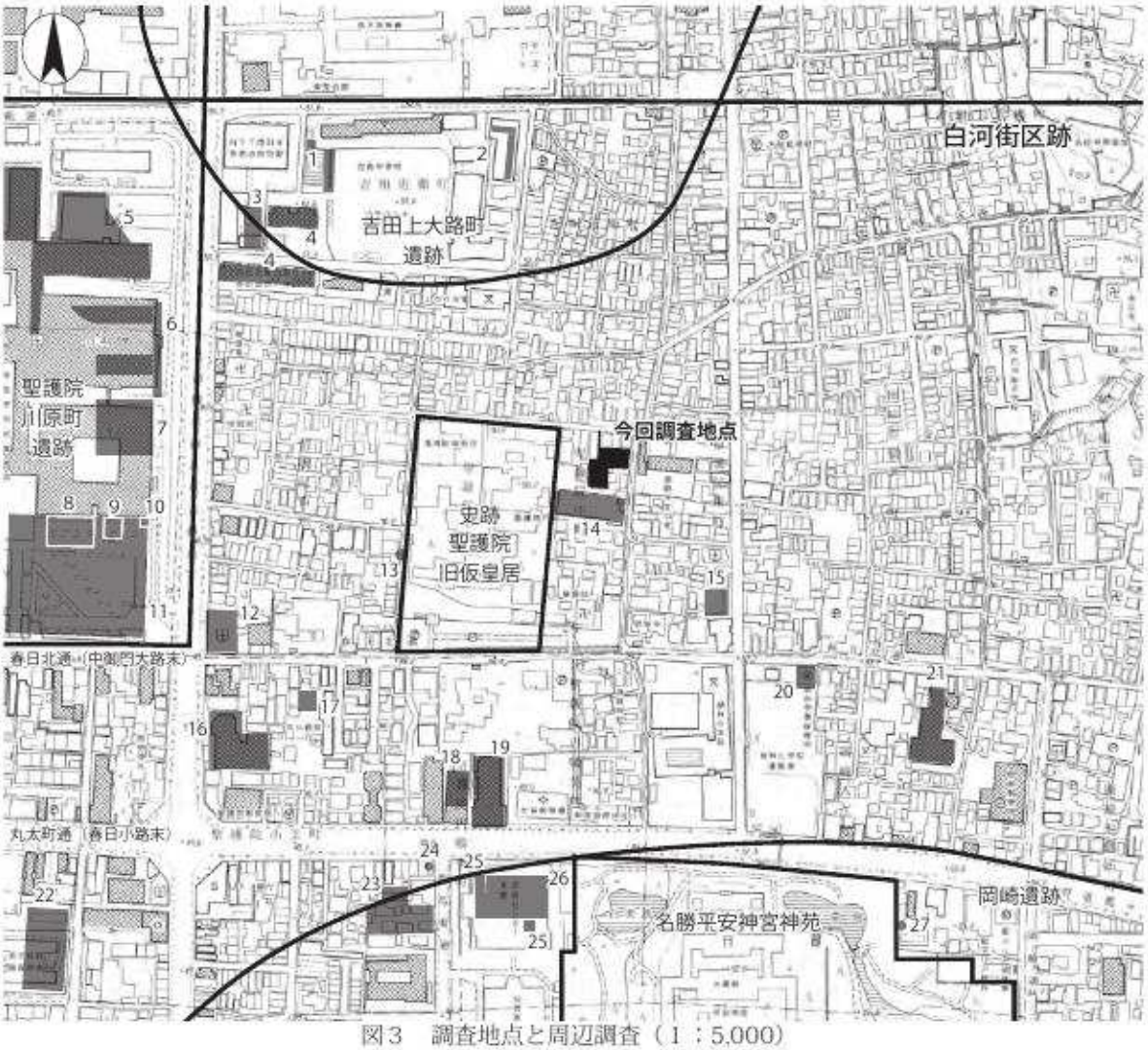


図3　調査地点と周辺調査（1：5,000）

表1　周辺調査一覧

番号	調査機関	年次	区分	調査内容	文献
1	埋文研	2011	発掘	鎌倉～室町時代の遺構を多数検出。	1
2	府教委	1977	発掘	13～14世紀の遺構・遺物を検出。	2
3	埋文研	2016	発掘	鎌倉時代の土坑墓を検出。	3
4	文博	1988	発掘	13世紀の掘立柱建物や14世紀の墓坑などを検出。	4
5	京大セ	1985	発掘	近世の土取穴，中世の井戸多数検出。	5
6	京大セ	1988	発掘	奈良時代の土坑・遺物包含層，12世紀代の遺構・遺物多数検出。	6
7	京大セ	1995	発掘	縄文後期の土器，中世の遺構・遺物，蓮月焼等を検出。	7
8	京大セ	1984	発掘	縄文後期の土器，幕末の蓮月焼が出土。	8
9	京大セ	1995	発掘	近世の池，坩堝などを検出。	9
10	京大セ	1999	発掘	中世の井戸・土坑などを検出。	10
11	京大セ	2000	発掘	流路から縄文後期の土器多数出土。中世の遺構・遺物，2代目乾山の製品も検出。	11
12	市埋文セ	1991	試掘	平安時代後期の井戸を検出。	12
13	埋文研	1985	立会	縄文時代後期の土坑を検出し，多量の石器・土器・植物種子・木炭が出土。	13
14	埋文研	1985	試掘	GL-0.5m以下で，室町・平安の包含層を検出。	14
15	市保護課	2015	試掘	時期不明土坑を数基検出。	15
16	市埋文セ	1995	試掘	鎌倉時代の土坑を検出。	16
17	イビソク	2017	発掘	平安後期から鎌倉時代の区画溝と塀・柱穴列を検出。	17
18	埋文研	1994	発掘	弥生の方形周溝墓，平安後期の大規模地業を検出。	18
19	市埋文セ	1993	試掘	平安時代中期の落ち込み状遺構を検出。	19
20	市保護課	2009	試掘	時期不明遺物包含層を検出。	20
21	市埋文セ	1999	試掘	平安時代後期の井戸，鎌倉時代後期の土坑を検出。	21
22	京大セ	2015	発掘	幕末阿波藩邸関連遺構。	※22
23	イビソク	2012	発掘	弥生の方形周溝墓，平安時代末期の整地および建物跡を検出。	23
24	京都市	1996	立会	平安後期から鎌倉時代の東西溝を検出。	24
25	埋文研	1979	発掘	墓坑3基を検出。五鈷杵が出土。	25
26	埋文研	1982	発掘	弥生の方形周溝墓，平安中期以前の瓦，平安後期～鎌倉の遺構・遺物を検出。	26
27	市保護課	2014	詳細	平安時代後期の東西溝を検出。	27

※報告書作成中

（1167）の『兵範記』の記事には「中御門末，聖護院也」とある。現在の聖護院の南側の道路，春日北通が「中御門末」を踏襲しているものと推定され，少なくとも12世紀半ばには現在と近い地にあったことが分かる。その後，火災による焼亡や戦乱などで岩倉や洛中などに移転を繰り返すも，江戸時代前期，延宝４年（1676）に現在の寺地で再興した。江戸時代後期，天明の大火（天明８年（1788））で御所が消失した際，光格天皇の仮御所として用いられ，安政元年（1854）の内裏焼亡時にも孝明天皇の仮御所となった。これにより，昭和10年には「聖護院旧仮皇居」として史跡指定されている。

また，幕末には鴨東一帯に藩邸が築かれており，聖護院付近には近江彦根藩，豊後佐伯藩などの藩邸が所在したことが複数の絵図から確認できる。今回の調査地東側の道路は江戸時代の絵図との対比から，かつて聖護院寺地の東を限ったものと考えられる。したがって，現在の街区の形成が江戸時代の聖護院移転に伴うものか，あるいは平安時代後期の白河街区形成にまで遡るものかを明らかにすることを念頭に調査を進めた。

（２）周辺の調査（図３・表１）

白河街区跡では，これまで多数の発掘および試掘，立会，詳細分布調査を実施している。しかし，調査地点は東大路通沿いおよび丸太町通沿いに多く，聖護院周辺に限るとそれほど多くはない。ここでは，聖護院周辺の調査成果を取り上げることとし，他の周辺調査については表１を参照されたい。本文中および表１の調査番号は図３の番号と対応する。

調査13　聖護院の西側で，昭和60年にガス管埋設に伴って実施した立会調査である。縄文時代後期の土坑から，多量の石器・土器・植物種子・木炭が出土した。北白川に展開していることが知られる縄文時代遺跡の広がりを捉える重要な成果である。

調査14　今回調査地点の南隣で昭和60年に実施した試掘調査である。室町時代と平安時代の遺物包含層を検出している。

調査15　今回調査地点の南東で平成27年に実施した試掘調査である。土坑を数基検出したものの，時期不明で密度も希薄である。

調査17　聖護院の南西で，平成29年に実施した発掘調査である。平安時代後期から鎌倉時代の南北方向の溝と並行する礎石列などを検出している。白河街区の区画に関連する遺構であろう。

調査18　聖護院の南側で，平成６年に実施した発掘調査である。平安時代後期の大規模な掘込地業を検出し，寺院の存在が推定される。

調査19　聖護院の南側で，平成５年に実施した試掘調査である。平安時代中期の落ち込み状遺構を検出した。

以上のように，白河街区が形成された平安時代後期から鎌倉時代を中心とした遺跡群が展開し，縄文時代から弥生時代の遺跡も確認されている。また，表１のように平安時代後期から鎌倉時代の遺跡は岡崎地域から吉田地域（京都大学構内）にかけて広範囲で確認しており，この時期の開発が非常に大規模なものであったことが分かる。

3．遺　構

（1）基本層序

調査地点の現地表面は東から西へ緩やかに低くなっており，調査区の東端は西端よりも0.15m程度高い。現地表面下0.6～1.2mまでは近代の陶磁器や窯業廃棄物を含む近現代盛土であり，相対的に東で厚く，西で薄い堆積であった。その下層は旧耕土であり，厚さ0.3～0.5mで調査区の東西で検出レベルにはほとんど差がなく，東で高くなる地形は近代以降に形成されたことが分かる。この旧耕土以下，中世遺物包含層が0.5～0.6mの間に堆積し，この間は3層程度に分層が可能である。この包含層からは13世紀ごろの遺物が出土している。さらにGL-1.7～1.8m程度で浅黄色～明黄褐色粗砂の地山にいたる。遺構検出は旧耕土下面

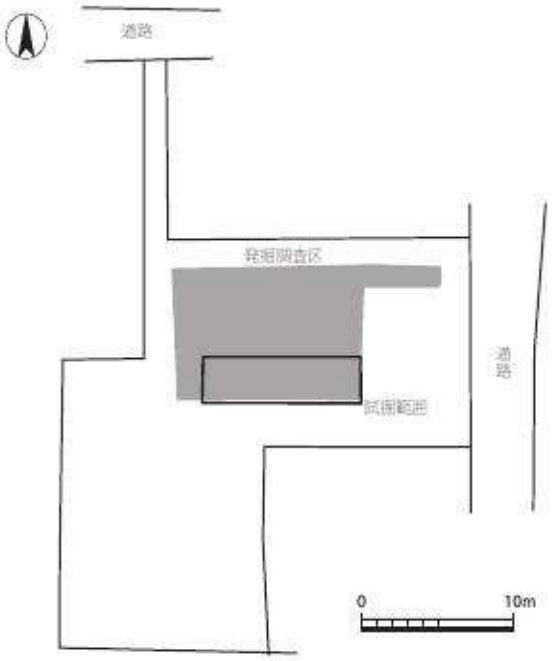


図4　調査区配置図（1：500）

表2　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代後期 ～ 鎌倉時代	Pit64, SK73･74, SE80, SX91, SD97, SD99, Pit100	
江戸時代か	SD1, SK57, SD95, ピット群	

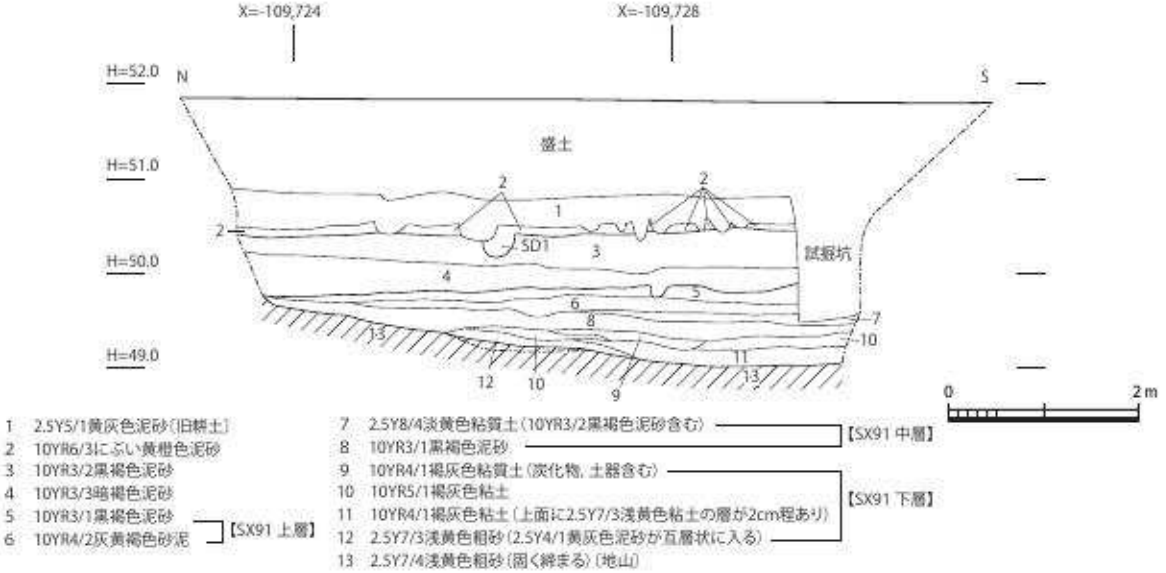


図5　東壁断面図（1：80）

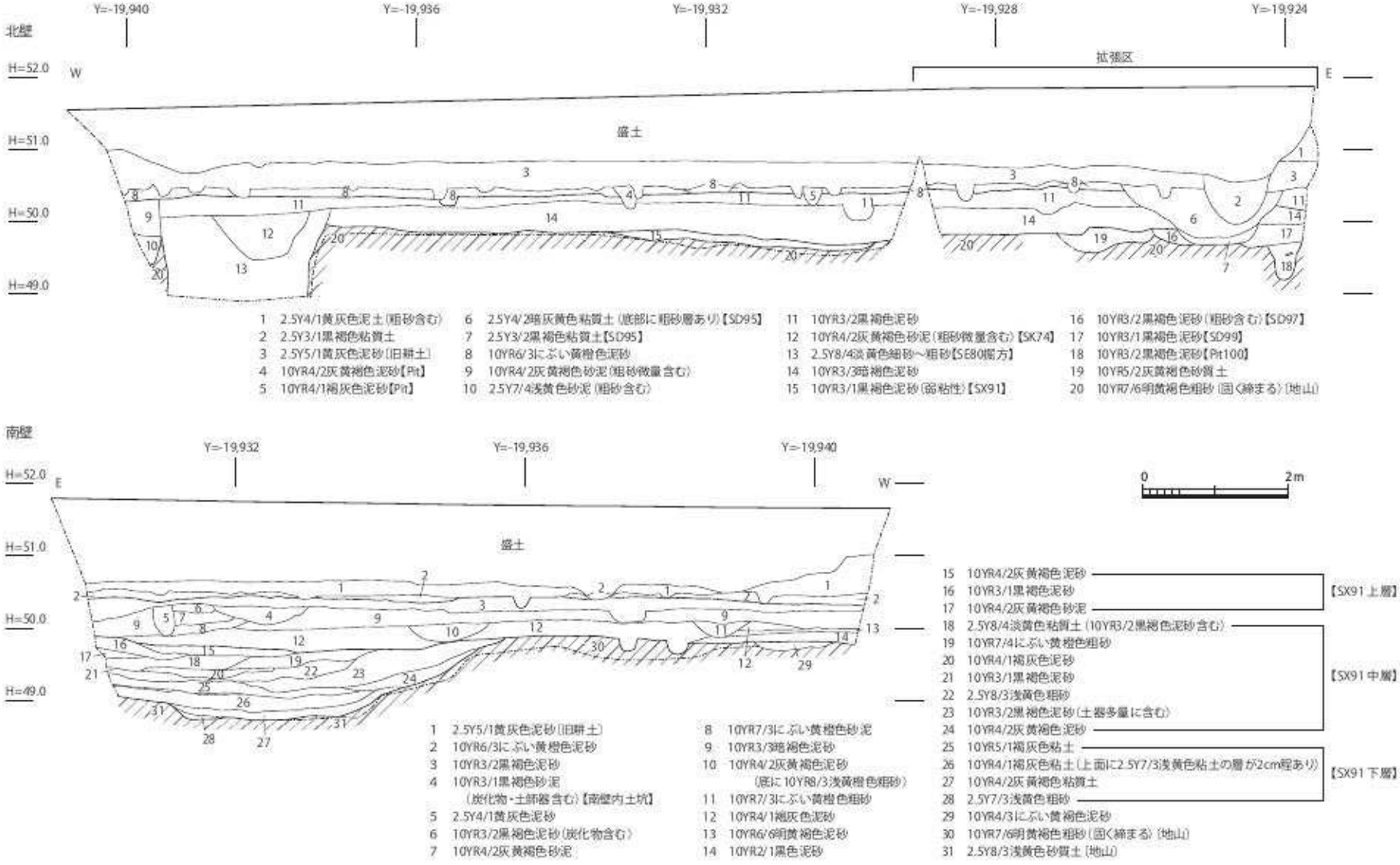


図6　北壁・南壁断面図（1：80）

を第１面，地山上面を第２面として各面で実施し，検出遺構の掘削および記録作業をおこなった。

（２）遺　構

調査の結果，落ち込みや土坑，井戸，溝など，平安時代後期から鎌倉時代のものを中心に総計100基の遺構を検出した。以下にその概略を報告する。

第１面（図８）

SD1　東西方向の溝であり，西で北に約９°振っている。埋土からの出土遺物は鎌倉時代ごろのも

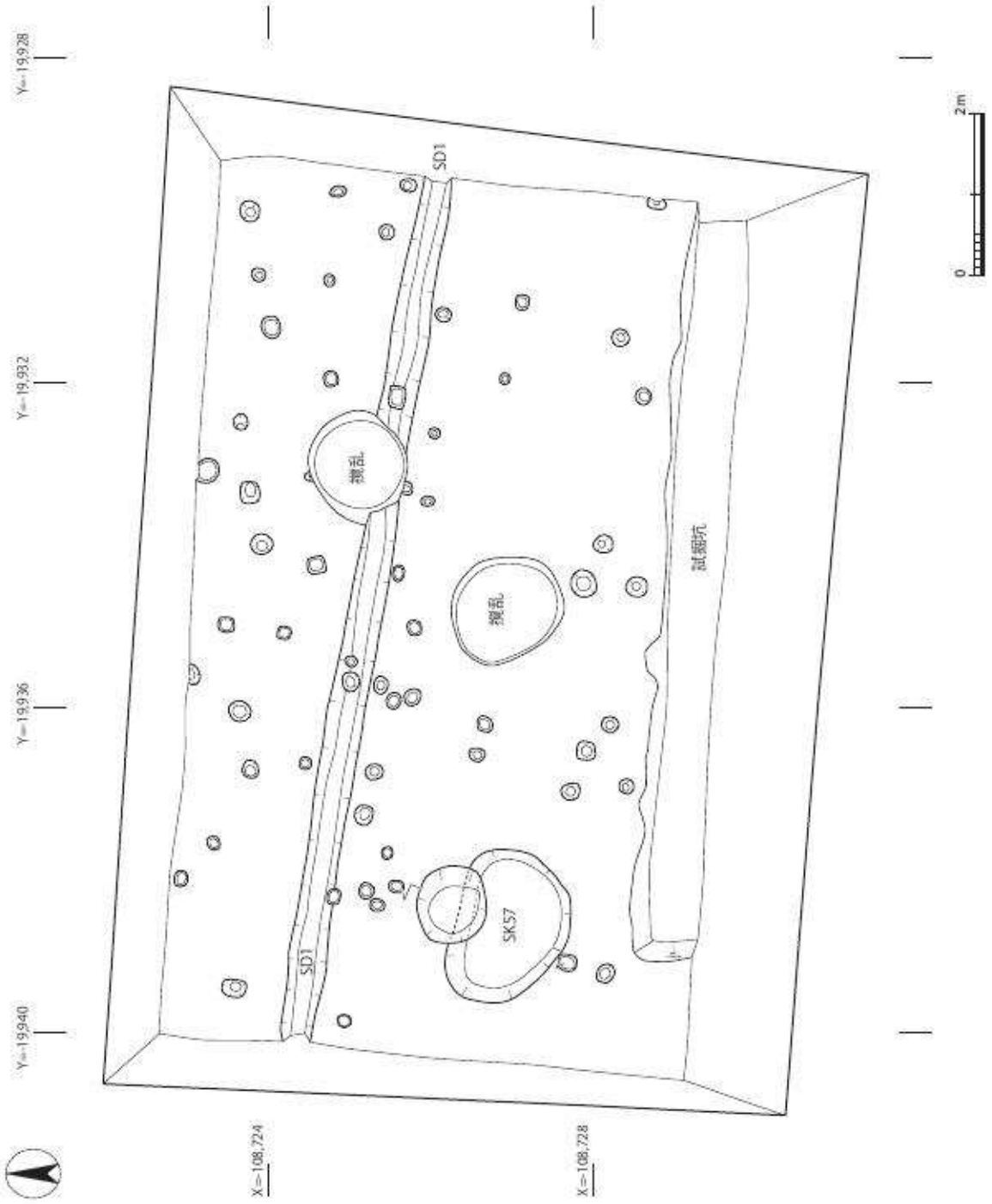
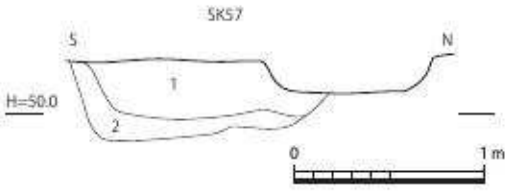


図７　第１面平面図（１：80）

のが大多数を占めているが，わずかながら近世陶磁器が出土しており，近世に掘削，埋没した遺構である。調査地北側の道路も西で北に振っていることから，この近辺の地割りに制約されたもので，区画に伴うものと考えている。遺物は下層の遺物包含層に由来するものであろう。



1　10YR3/2黒褐色泥砂（微砂微量含む）
2　10YR3/1黒褐色泥砂（固く締まる）

図８　SK57断面図（１：40）

ピット群　総計59基のピットを検出した。調査区全体に遍く分布するが，SD1の北側では南側よりも密度が高い。深さは様々であり，円形のものと方形のものが存在するが，全て柱当たりはないことから，杭の痕跡であると推定している。

ピット群はいずれも耕作に伴うものと推定しており，SD1は耕地内の区画を反映するものであろう。

SK57　調査区西側で検出した土坑である。深さは0.4m程度で黒褐色泥砂を埋土とする。緑釉陶器片を含め，平安時代から鎌倉時代の遺物が出土しているが，同一遺構面で検出した遺構群との関係から，近世の遺構と考えている。遺物は本来的には下層の遺物包含層に由来するものであろう。

第２面（図10）

南壁内土坑　南壁で確認した土坑で，図４南壁の４層に当たる。土坑北半は試掘坑内となり，平面的には確認できていない。壁面でみる深さは約0.25mである。鎌倉時代の土器がまとまって出土しており，内容に大きな時代差を認めないことから，一括して廃棄されたとものと考えている。

SX91　調査区東半で検出した大規模な落ち込みで，多量の遺物が出土した。東西5.5m以上，南北5m以上の規模で，北辺，南辺，西辺は調査区外となったため，全体は不明である。ただし検出範囲の北端ではほぼ遺構が収束に向かっており，検出面からの深さは0.1mもない。埋土は南壁で14層に分層している。遺物の取り上げの便宜上，上層，中層，下層の３層に大別している。中層は部分的に粗砂層を含んでいるものであり，下層は粘性の強い堆積土である。下層の下には，南壁には現れていないものの，部分的に遺物を含む砂層があり，遺物の取り上げは「砂層下砂層」としている。出土遺物はコンテナ11箱ほどに及び，完形に復元できる土師器皿も多い。出土遺物はおおむね平安時代後期，12世紀中頃に比定でき，緑釉陶器片などの古手の遺物を含むが，極めて少量である。周辺の開発に伴い，自然地形の落ち込みを埋めたものか。

Pit64　調査区北西で検出したピットである。検出面からの深さは約0.15mである。中央に柱当たりの可能性のある黒褐色砂泥土が堆積している。

SE80　調査区北西隅で検出した方形の井戸である。北壁断面から，第１面と第２面の間で成立している遺構であることが分かる。北で東に15°程度傾いている。掘方は東西約2.3m,北辺は調査区外のため，南北長は不明である。井戸枠は遺存しておらず，東西約1.2m，南北約1.1m，深さは検出面から約1.8mで，木枠であったと考えられる。井戸枠内の四隅は，角材が腐ってなくなり，柱状に空洞ができていた。北辺，西辺は平面的に，掘方の土が井戸枠を圧迫するようにせり出しており，木製の井戸枠が土圧によって押し出されたものと考えられる。掘方，井戸枠内とも埋土は砂質

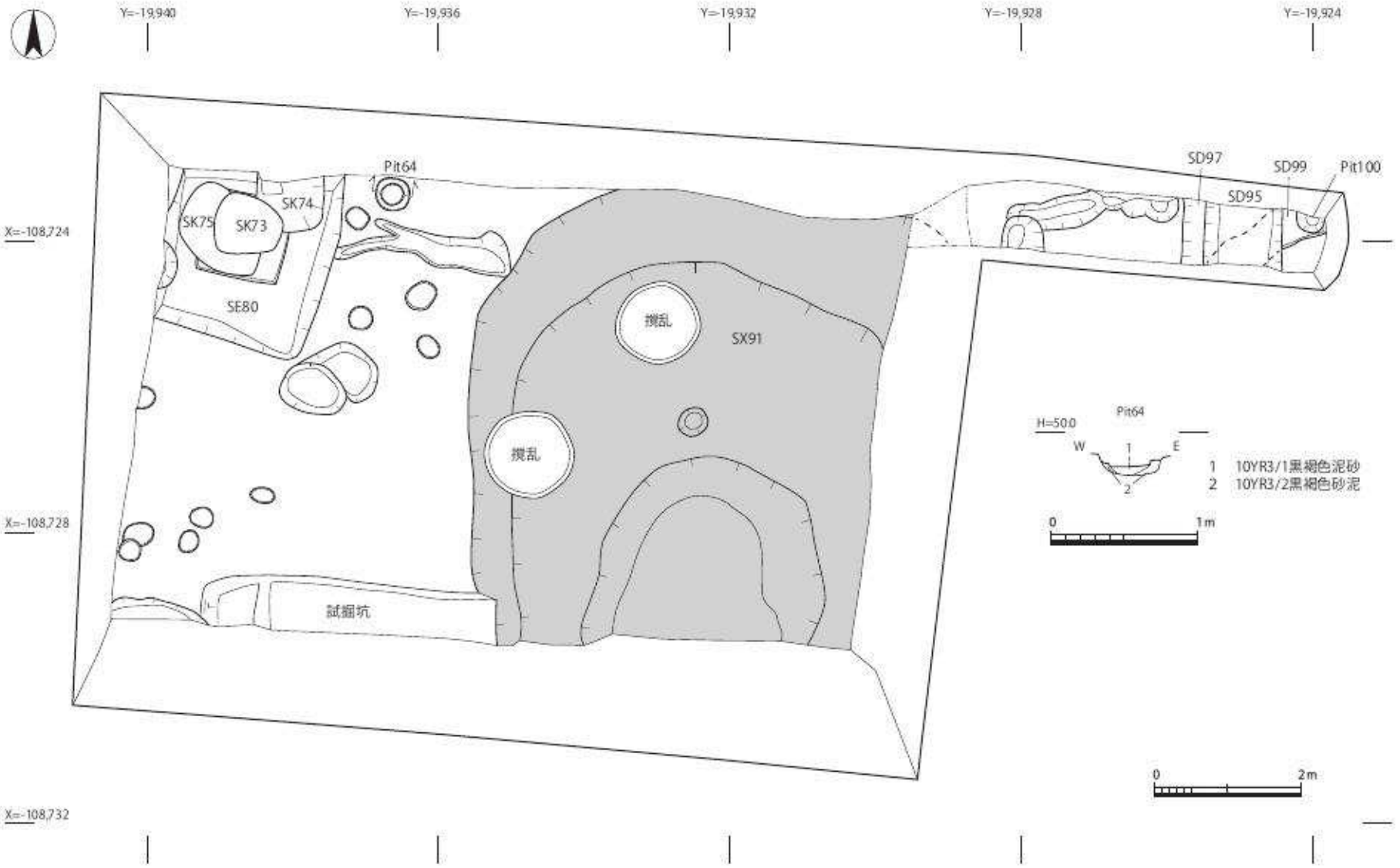


図9 第2面平面図（1：80）・Pit64断面図（1：40）

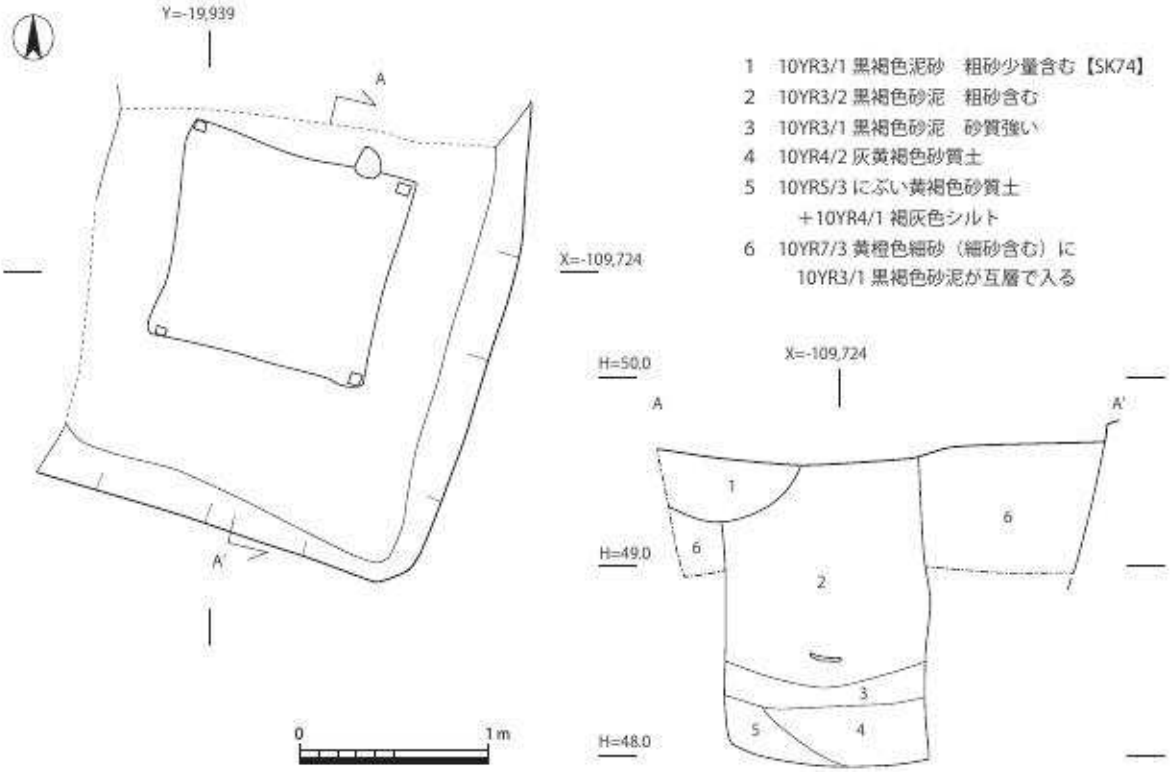


図10　SE80平・断面図（1：40）

が強く，井戸枠内の上半（2層）は単層となることから一度に埋められたと考える。13世紀代の遺物が出土している。

SK73・74・75　SE80の上面で検出した土坑群である。SK73が他の2者を切っており，SK74とSK75の間には切り合い関係はない。SK74は深さ0.7m程度で埋土は単層であり，SK73・75はいずれも浅く，0.2m程度である。SK75からは遺物が出土していないが，SK73・74からは13世紀の遺物が出土した。遺物から見る限りは，SE80との時期差はごくわずかである。

拡張区（図10）

SD95　南北方向の溝と推定している遺構である。壁面を確認すると，旧耕土直下から掘り込まれており，わずかながら近世後期ごろの遺物が出土している。近世の遺構である可能性が高い。東側道路と対応する区画溝か。

SD97　SD95に並行し，かつ切られる溝である。地山上面から掘り込まれており，第2面に帰属するものである。細片ながら，平安時代末から鎌倉時代ごろの遺物が出土している。SD95と同じく東側の道路に対応する溝であれば，この地域一帯の区割りは平安時代末頃には施工されていた可能性がある。

SD99　拡張区東端で検出した北東－南西の斜方向の溝であり，SD95に切られる。SD97と同じく平安時代末から鎌倉時代ごろの遺物が出土したが，両者に切り合い関係がないため，機能した時期差の有無は不明である。

Pit100　拡張区東端で検出したピットで，SD99の下面で検出した。検出面からの深さは約0.5mであり，単層で柱当たりは確認できなかった。

4．遺　物

平安時代後期から鎌倉時代の遺物を中心に，コンテナで25箱の遺物が出土した（表３）。３節で記述した遺構の順に，概略を記す。

（１）土器・陶磁器・石製品

第１面遺構検出中（図12）　１は白磁の皿である。口縁端部が外反するもので，底部のみ露胎である。図化できない大きさの土師器が多いものの，第１面の遺構から出土した遺物の大半は鎌倉時代ごろのものであり，遺物包含層に由来するものが，溝やピットの埋土中に入ったものであろう。

第１面～第２面掘り下げ（図12）　２から28は第１面から第２面までの遺物包含層から出土した遺物である。２は土師器皿Scで復元径6.0cmである。３から13は土師器皿Ｎである。３から９は口径8.5～8.9cmの小皿で，９には内外面ともにタール状の煤が付着する。10から13は径12.2～14.2cmの大皿であるが，いずれも反転復元している。14・15は皿Sで復元口径はそれぞれ11.5cmと12.4cmである。16・17は瓦器の鍋で，17は復元径15.8cmと小型である。いずれも内面調整はハケメだが，摩耗しており，調整単位は判然としない。18は灰釉系陶器椀の高台部，19は緑釉陶器椀の高台部で，いずれも貼り付け高台である。19は平安時代の遺物の混入であろう。これを含め，緑釉陶器片は調査区全体で数点出土している。20は灰釉系陶器，21・22は東播系須恵器で，いずれも鉢である。23は東播系須恵器の甕だが，表面は黒褐色を呈し，瓦質に近い質感を呈する。24は青白磁合子の蓋，25は白磁の椀である。26は黄釉褐彩陶器盤で，中国福建地域の所産である。27は焼締陶器の壺で，赤褐色を呈し，耳が付く。中国産か。28も陶器の壺で，外面は

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代中期	緑釉陶器，軒丸瓦，軒平瓦		緑釉陶器１点，軒丸瓦１点，軒平瓦１点		
平安時代後期	土師器，瓦器，白色土器，須恵器，灰釉系陶器，焼締陶器，輸入陶磁器，瓦類，石製品		土師器130点，瓦器12点，白色土器９点，須恵器４点，灰釉系陶器20点，焼締陶器１点，輸入陶磁器25点，瓦13点，石製品３点		
鎌倉時代	土師器，瓦器，須恵器，焼締陶器，灰釉系陶器，施釉陶器，輸入陶磁器，瓦類，石製品		土師器45点，瓦器４点，須恵器5点，焼締陶器１点，灰釉系陶器２点，輸入陶磁器９点，軒丸瓦２点		
江戸時代以降	土師器，施釉陶器，磁器				
合　計		25箱	288点（５箱）	１箱	19箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理後，Ａ・Ｂランク遺物の抽出，詰め直しのため，出土時より３箱多くなっている。

黄釉がかかり，胎土は灰色を呈する。5mm程度の高台を有する。中国産であろう。271は白磁の椀で，実測できなかったため，写真で提示する（図11）。黄色味を帯びた釉調である。これらは遺物包含層出土であるため，時期幅を持つ資料群だが，土師器皿にはある程度のまとまりがあり，おおむねⅥ期を前後する時期，鎌倉時代前半の時期幅に収まると見ている。

図11　白磁椀（第１面～第２面掘り下げ中出土）

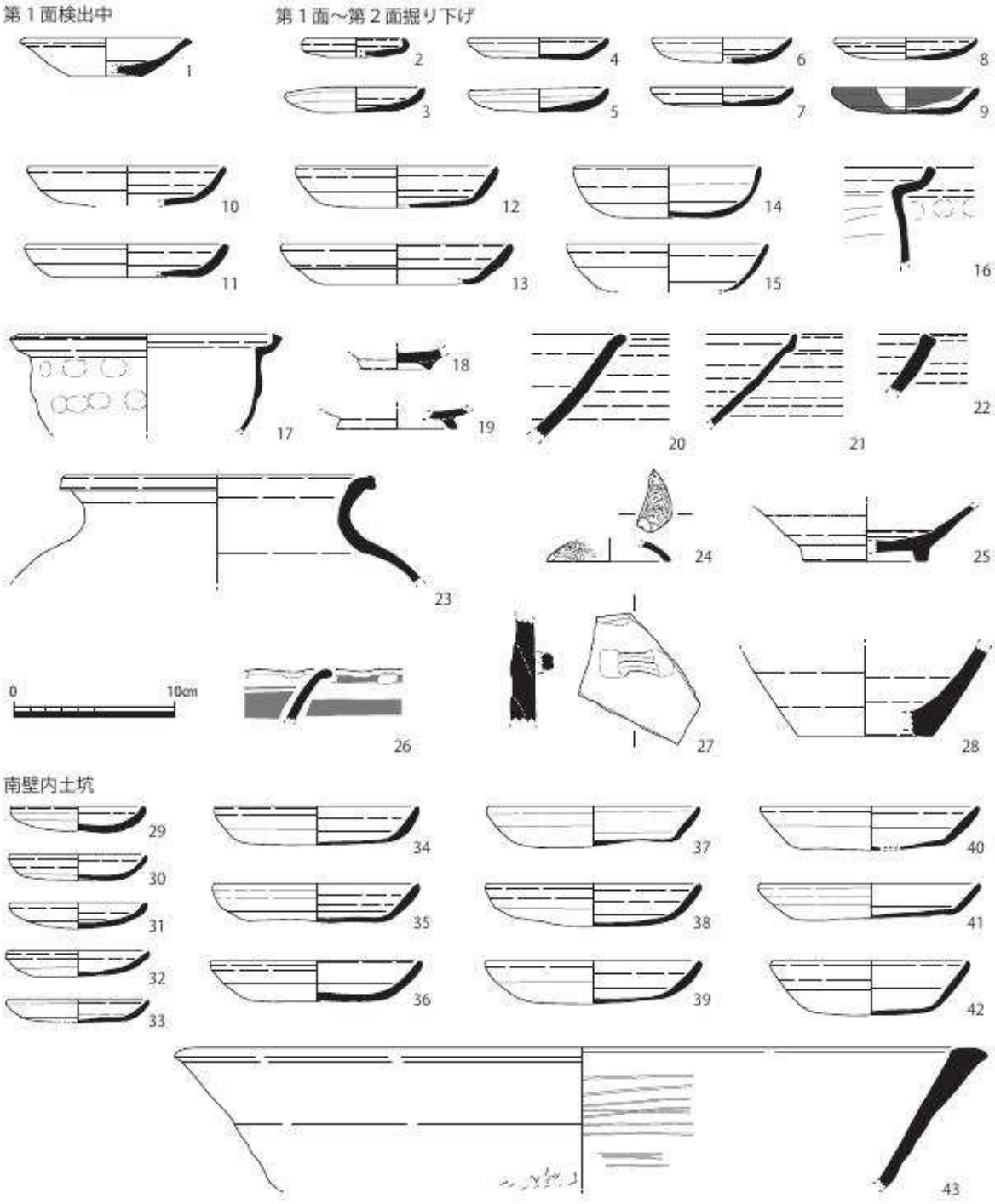


図12　出土遺物実測図（１：４）

南壁土坑（図12） 29から42は土師器皿である。29から33は皿Nで口径8.2～8.7cmの小皿，34から41は同じく皿Nで口径12.6～13.7cmの大皿である。42は皿Sで，口径は復元値で12.1cmとなる。43は瓦器盤で，内面および口縁端面を粗く磨いている。外面の底部付近には籾殻圧痕が残る。この遺構は平面的な検出ができていないものの，出土した土器群にはまとまりが見えることから，一括廃棄されたものと考えており，Ⅵ期中段階，13世紀前葉ごろの年代観を与えたい。

表4 SX91上層出土土器の構成（破片数）

器種	器形	破片数	比率	破片数	比率
土師器	椀・皿	2484	93.84%	2489	94.03%
	鉢・盤	3	0.11%		
	甕・鍋・釜	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	2	0.08%		
瓦器	椀・皿	26	0.98%	45	1.70%
	鍋・釜	0	0.00%		
	壺・瓶	0	0.00%		
	火舎・火鉢	19	0.72%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
須恵器・灰釉系陶器	杯・椀・皿	18	0.68%	55	2.08%
	壺・瓶	1	0.04%		
	鉢	24	0.91%		
	甕	11	0.42%		
	その他	0	0.00%		
	不明	1	0.04%		
白色土器	杯・椀・皿	10	0.38%	12	0.45%
	高杯	2	0.08%		
	盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
施釉国産陶器	椀・皿	0	0.00%	0	0.00%
	壺・瓶	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
焼締陶器	壺	1	0.04%	1	0.04%
	甕	0	0.00%		
	鉢・盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
輸入陶磁器	椀・皿	38	1.44%	45	1.70%
	壺・瓶	3	0.11%		
	甕	0	0.00%		
	盤	2	0.08%		
	その他	2	0.08%		
合計				2647	100.00%

SX91上層（図13） 44から46は土師器皿Acである。口径は9.0～10.0cmである。47から60は土師器皿Nで口径8.9～10.7cmの小皿である。47や56は口縁部に煤が付着する。61から65は土師器皿Nで口径14.2～14.8cmの大皿である。66は土師器で高台付の皿と考えている。胎土は赤みが強く，他の土師器皿とは少し質感を異にする。67は土師器の椀である。内面，外面ともにミガキ調整で，高台を貼り付ける。底部は糸切痕跡が見え，色調は灰褐色を呈する。産地不明であるが，西日本産か。68から70は白色土器の皿で，いずれも底部に回転糸切痕が確認できる。71・72は白色土器の高杯で71は杯部と脚部の接続部で，杯部が剥離した状態である。72は脚部であり，側面はケズリ調整で面を形成する。73から75は瓦器で，73は皿，74は小椀，75は椀である。73・75は楠葉型，74は大和型か。74，75は連結輪状暗文，外面にもミガキを加える。76は東播系須恵器鉢の口縁部で，端部を方形に成形する。77から82は灰釉系陶器である。77・78は皿で，77は底部に「上」状の墨書がある。赤外線画像の撮影を試みたが，判然としなかったため，図版には写真図版の色調を補正して掲載している（図版15）。78は高台が付く。79は椀で，高台部に籾殻痕が残る。80から82は鉢である。東播系須恵器にしばしば見るような，内面の摩耗は確認できない。83から88は白磁である。83から85はいずれも椀で，86から88は皿である。89・90は黄釉褐彩陶器の盤である。89は外反する口縁部である。91・92は青白磁の椀である。

SX91上層出土土器は破片数にして94%が土師器であり，そのほぼ全てが皿である。

SX91中層（図14・15） 93から98は土師器皿Acである。口径は7.7～8.8cmである。99から140は土師器皿Nである。99から128は口径9.0～10.0cmの間に集中する。129は口径10.5cmとやや大きく，底部にかけての器壁が厚いことから，他の皿Nと比較すると違和感を覚える。130から140は口径13.6～15.2cmの大皿である。132を除いて反転復元している。141は土師器の椀で，いわゆる吉備系土師器椀である。山陽地域で生産された土器が搬入されたものである。内外面ともにミガキ調整だが，内面はその単位を視認できない。142は白色土器の高杯である。棒状の工具を

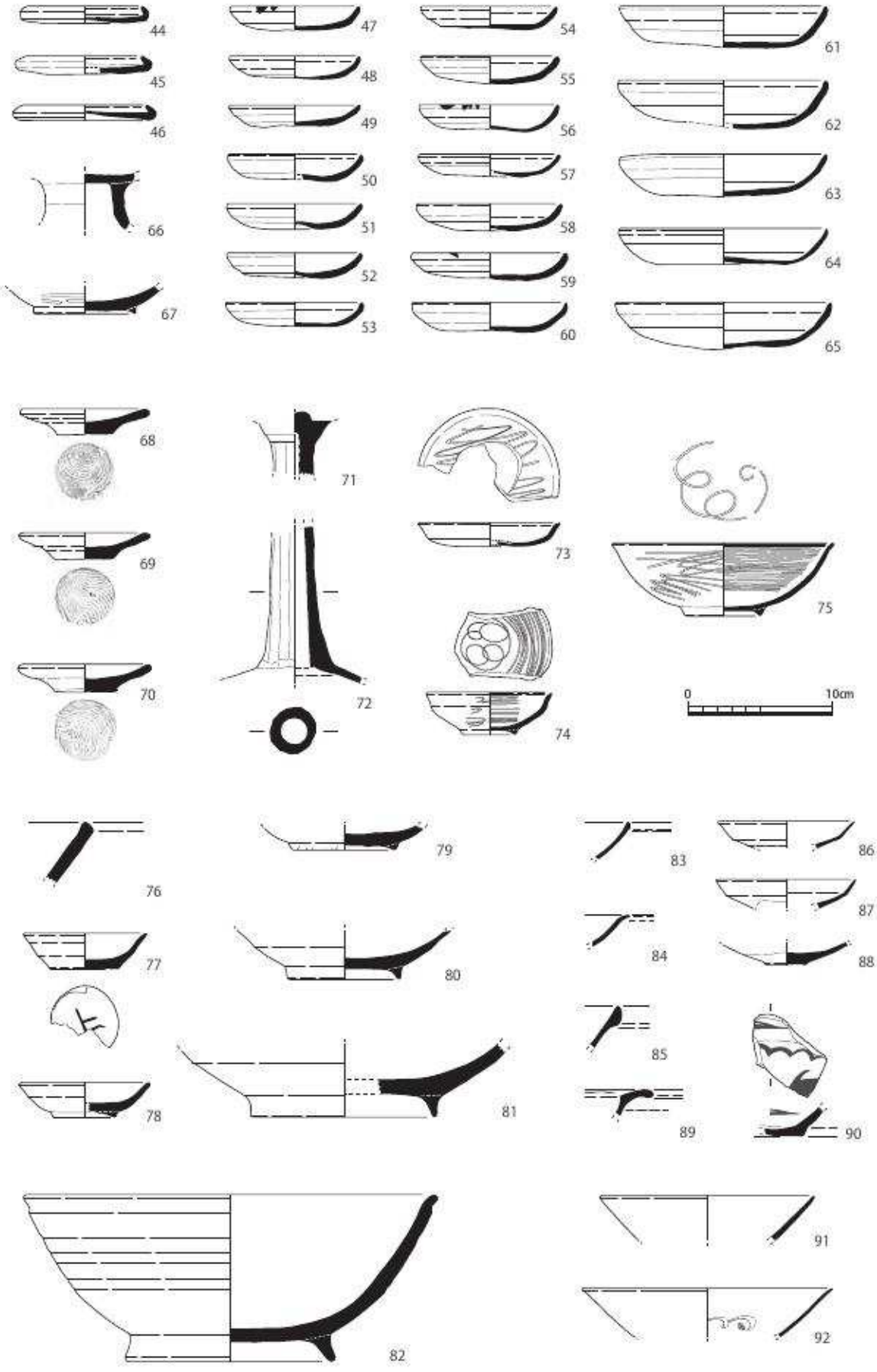


図13　SX91上層出土遺物実測図（1：4）

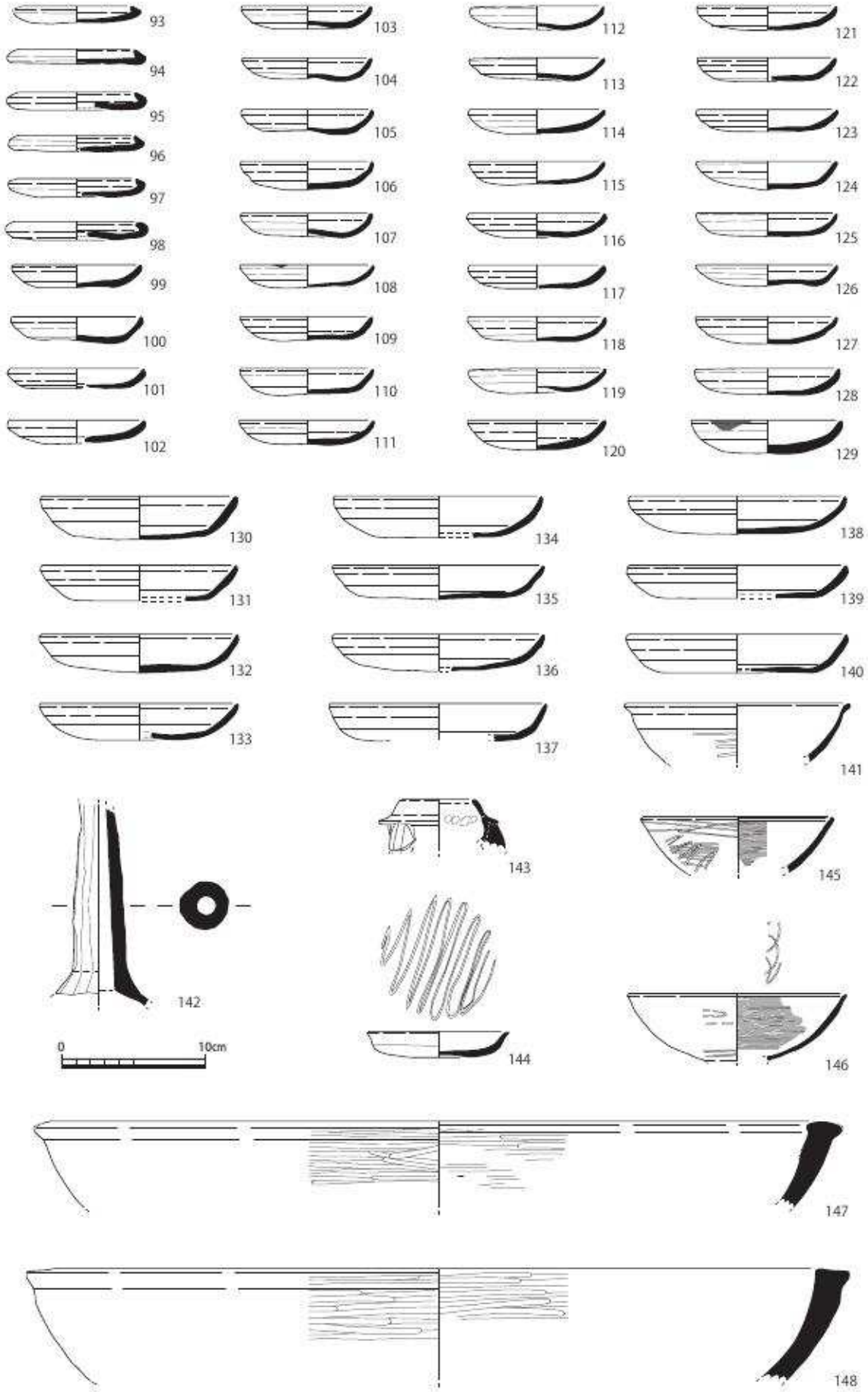


図14　SX91中層出土遺物実測図1（1：4）

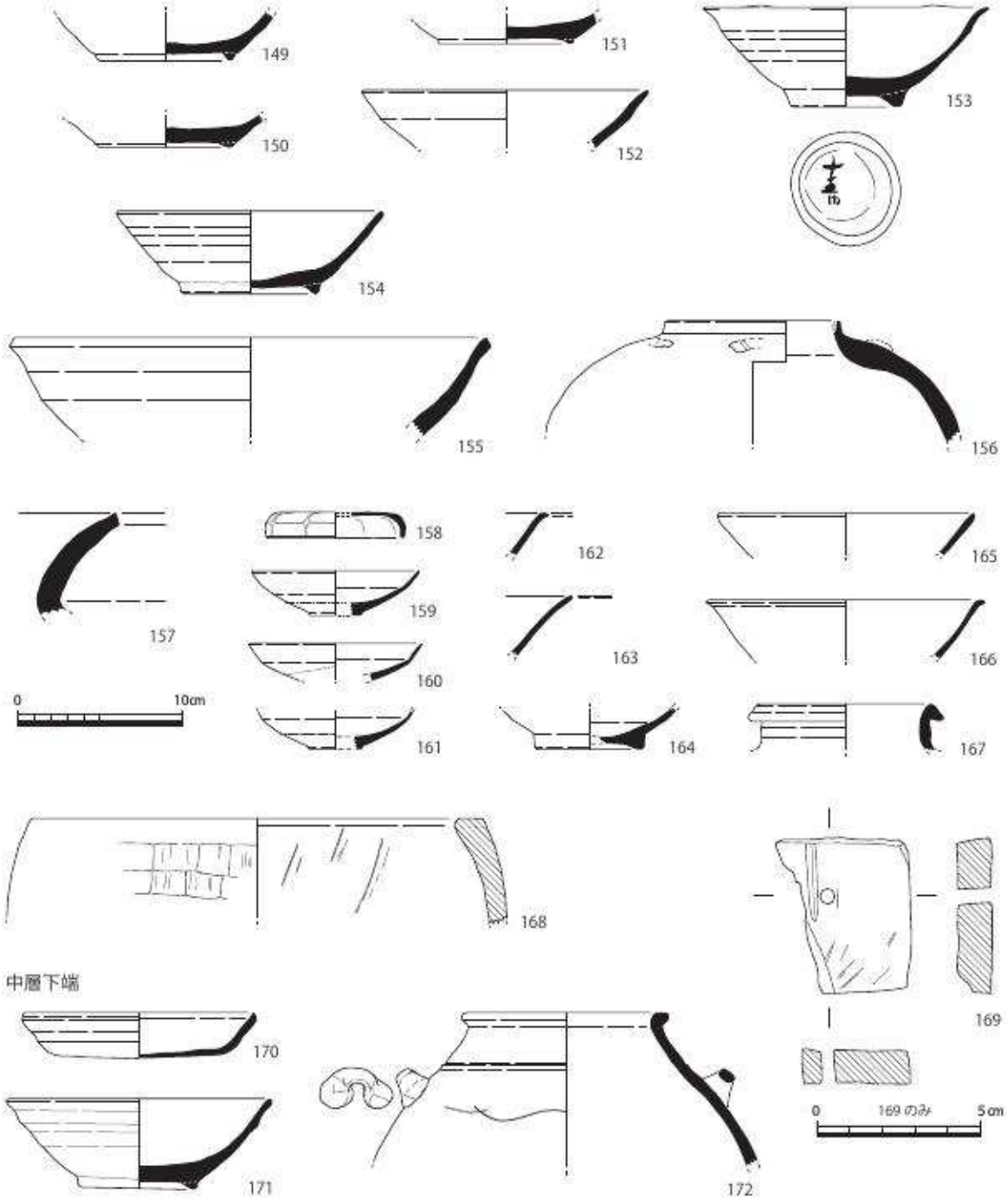


図15　SX91中層出土遺物実測図2（1：4，1：2）

用いて，高台部を形成し，外面はヘラケズリで面を作り出す。143は土師器のミニチュア三足羽釜である。鍔部分から下には煤が付着しており，実際に使用したものであろう。13世紀には瓦器のミニチュア三足羽釜が広く出土するが，その初現的なものか。144は瓦器の皿である。見込みにジグザグ状の暗文を施す。145・146は瓦器の椀である。いずれも楠葉型で，内面は密なミガキで，外面もミガキ調整しており，146は一部分だが連結輪状暗文が確認できる。145は反転復元だが，復元値は口縁部の歪みのゆえに，実際の口径よりもやや小さい可能性が高い。147・148は瓦器盤である。147は器面の剥離が目立ち，特に内面に顕著である。ともに内外面ともにミガキ調整で，

口縁端部が肥厚する。

149から155は灰釉系陶器である。149から154はいずれも椀で，153は口縁部を輪花状に成形し，高台内には「十五■」と見える墨書が残る。77と同じく，赤外線画像でも判然としなかったため，写真を色調補正して掲載した（図版15）。155は鉢であり，口縁部がやや外反する。156も灰釉系陶器で，短頸壺か。耳が付いているが，大部分は剥落しており，その形状は不明である。渥美窯の製品の可能性がある。157は焼締陶器甕の口縁部である。158から167は輸入磁器で，158は青白磁合子の蓋である。159から161は白磁の皿であり，162・164・166は同じく白磁の椀である。163・165は青白磁系の椀だが，発色は白磁とあまり変わらない。167は白磁壺の口縁部である。168は滑石製石鍋で口縁部が内湾しながら，やや肥厚する。把手や鍔は遺存している範囲内では確認できない。169は滑石製の温石で，穿孔があるほか，表面に一条の溝がある。石鍋などの転用か。

170から172はSX91の中層最下端でまとまって出土した遺物群である。170は土師器皿Nで復元径14.0cmである。171は灰釉系陶器の椀，172は褐釉系の陶器壺である。1箇所に耳が遺存しており，図上では2箇所で復元した。耳の少し下方には線刻が確認できる。

SX91中層出土遺物も上層と同じく，破片数において圧倒的多数を土師器皿が占めている。あえて相違をあげるならば，比率上わずかながらではあるが灰釉系陶器椀が多い組成である。

SX91下層（図16・17） 173から194は土師器皿Nである。口径は8.9～10.0cmの小皿であり，反転復元は190のみである。195から214は同じく土師器皿Nで，口径13.8～15.2cmの大皿である。195は体部の立ち上がりが長く，深手となる。上層，中層と比べ，大皿がやや多く，反転復元したものが約半分である。215は吉備系土師器椀である。内面はミガキ調整だが，調整単位は認識できない。高台は丁寧にナデ調整され，高台内に三本の刻線がある。216は土師器の鉢である。外面は輪積み痕跡が

表5　SX91中層出土土器の構成（破片数）

器種	器形	破片数	比率	破片数	比率
土師器	椀・皿	2019	91.48%	2022	91.62%
	鉢・盤	1	0.05%		
	甕・鍋・釜	2	0.09%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
瓦器	椀・皿	20	0.91%	58	2.63%
	鍋・釜	0	0.00%		
	壺・瓶	0	0.00%		
	火舎・火鉢	38	1.72%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
灰釉系陶器須恵器・	杯・椀・皿	34	1.54%	79	3.58%
	壺・瓶	3	0.14%		
	鉢	19	0.86%		
	甕	21	0.95%		
	その他	0	0.00%		
	不明	2	0.09%		
白色土器	杯・椀・皿	4	0.18%	5	0.23%
	高杯	1	0.05%		
	盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
施釉国産陶器	椀・皿	0	0.00%	0	0.00%
	壺・瓶	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
焼締陶器	壺	1	0.05%	5	0.23%
	甕	4	0.18%		
	鉢・盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
輸入陶磁器	椀・皿	32	1.45%	38	1.72%
	壺・瓶	4	0.18%		
	甕	0	0.00%		
	盤	0	0.00%		
	その他	2	0.09%		
合計				2207	100.00%

表6　SX91下層出土土器の構成（破片数）

器種	器形	破片数	比率	破片数	比率
土師器	椀・皿	1474	95.28%	1484	95.93%
	鉢・盤	3	0.19%		
	甕・鍋・釜	5	0.32%		
	その他	0	0.00%		
	不明	2	0.13%		
瓦器	椀・皿	5	0.32%	23	1.49%
	鍋・釜	0	0.00%		
	壺・瓶	0	0.00%		
	火舎・火鉢	18	1.16%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
灰釉系陶器須恵器・	杯・椀・皿	7	0.45%	30	1.94%
	壺・瓶	2	0.13%		
	鉢	11	0.71%		
	甕	8	0.52%		
	その他	1	0.06%		
	不明	1	0.06%		
白色土器	杯・椀・皿	2	0.13%	3	0.19%
	高杯	1	0.06%		
	盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
施釉国産陶器	椀・皿	0	0.00%	0	0.00%
	壺・瓶	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
焼締陶器	壺	0	0.00%	1	0.06%
	甕	1	0.06%		
	鉢・盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
輸入陶磁器	椀・皿	4	0.26%	6	0.39%
	壺・瓶	1	0.06%		
	甕	0	0.00%		
	盤	1	0.06%		
	その他	0	0.00%		
合計				1547	100.00%

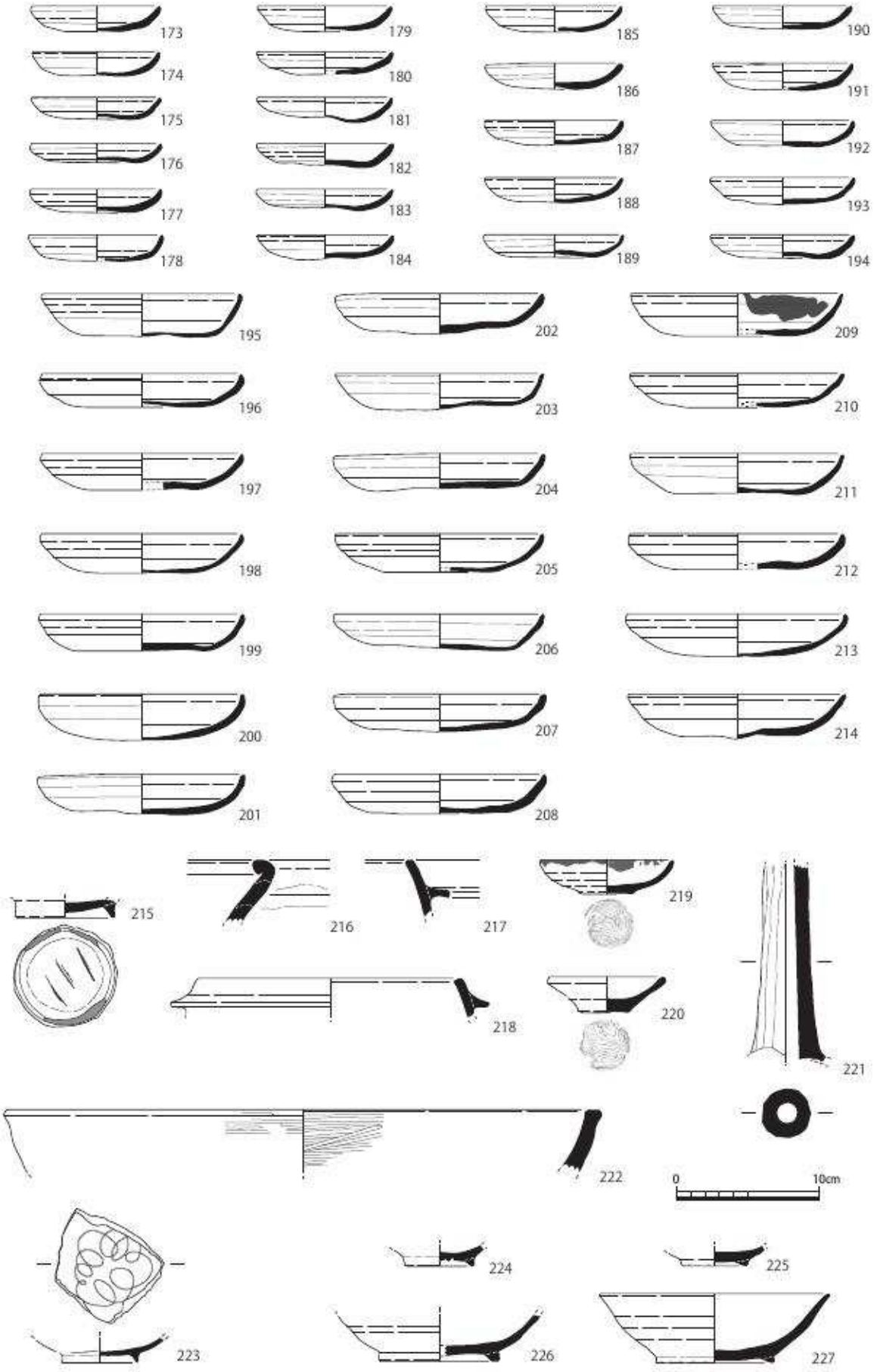


図16　SX91下層出土遺物実測図1（1：4）

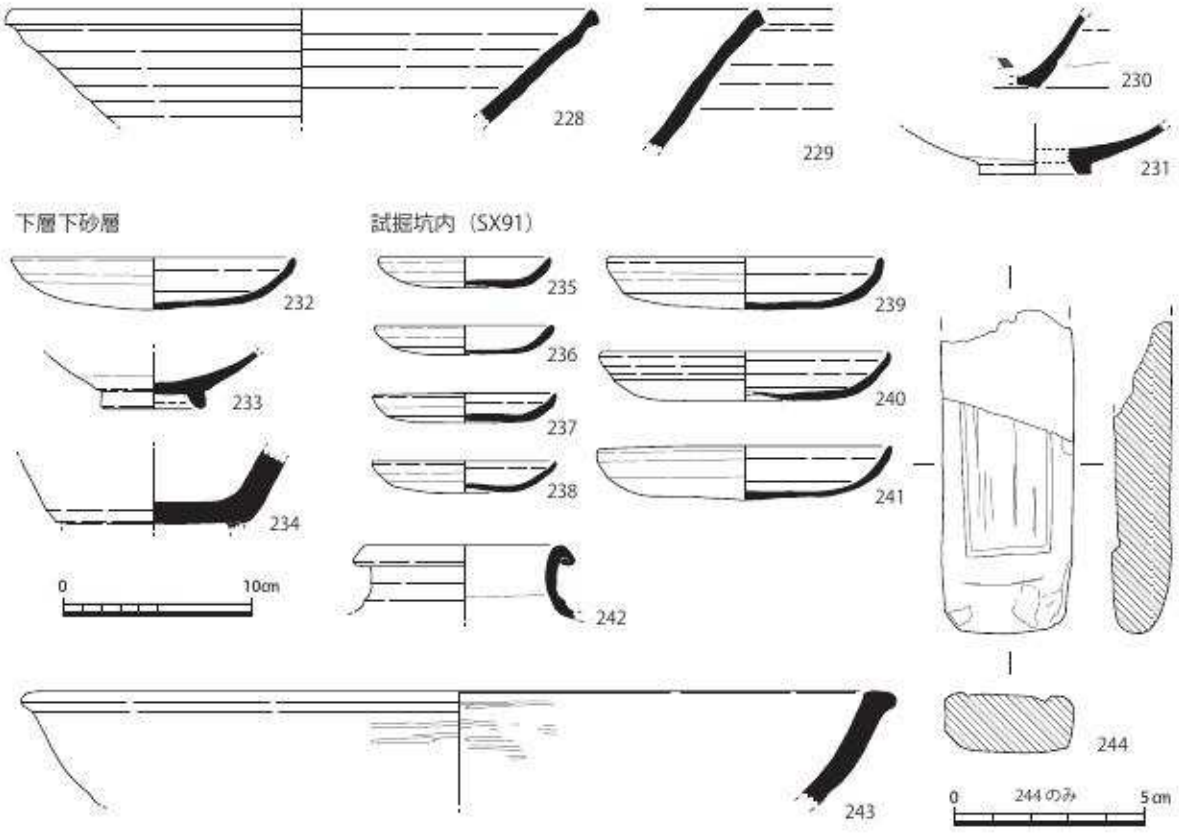


図17　SX91下層出土遺物2・試掘坑内出土遺物実測図（1：4，1：2）

残るが，内面は丁寧になでているもので，平安時代後期から鎌倉時代の京都でしばしば出土するが，用途は不明である。217・218は土師器の羽釜である。口縁部は内傾し，鍔を貼り付ける。外面に煤が付着しており，実際に用いたものであろう。219・220は白色土器の皿である。いずれも底部には回転糸切痕が残る。219は口縁部付近に煤が付着しており，灯明皿として用いた可能性がある。白色土器を灯明皿に用いる例は少ない。221は白色土器の高杯の脚部である。222は瓦器盤である。内外面ともに密なミガキ調整で，体部は内湾しながら立ち上がる。223は瓦器椀である。楠葉型で，見込みは連結輪状暗文である。224から227は灰釉系陶器の椀である。224・225は小椀，226・227は大振りで高台はしっかりと成形する。228・229は東播系須恵器の鉢である。230は黄釉褐彩陶器の盤だが，破片は小さい。231は白磁の椀で，体部の立ち上がりは緩やかである。

SX91下層出土資料は破片数にして96%近くが土師器であり，上層，中層と同じ傾向であるが，輸入陶磁器の比率は前二者と比べても低い。

SX91下層下砂層（図17）　232は土師器皿Nである。口径は14.9cmである。233は白磁の椀，234は須恵器で，袋物の類か。

SX91は上層・中層・下層に大きな時期差はなく，全体として12世紀第3四半期ごろに位置づけたい。SX91の遺物群の評価については，次章で再度触れたい。

SX91試掘坑内（図17）　試掘時に掘削の及ばなかった，試掘坑下層からの出資料で，SX91の範囲にあたる。235から238は土師器皿Nで口径9.0～9.7cmの小皿である。239から241は同じく土

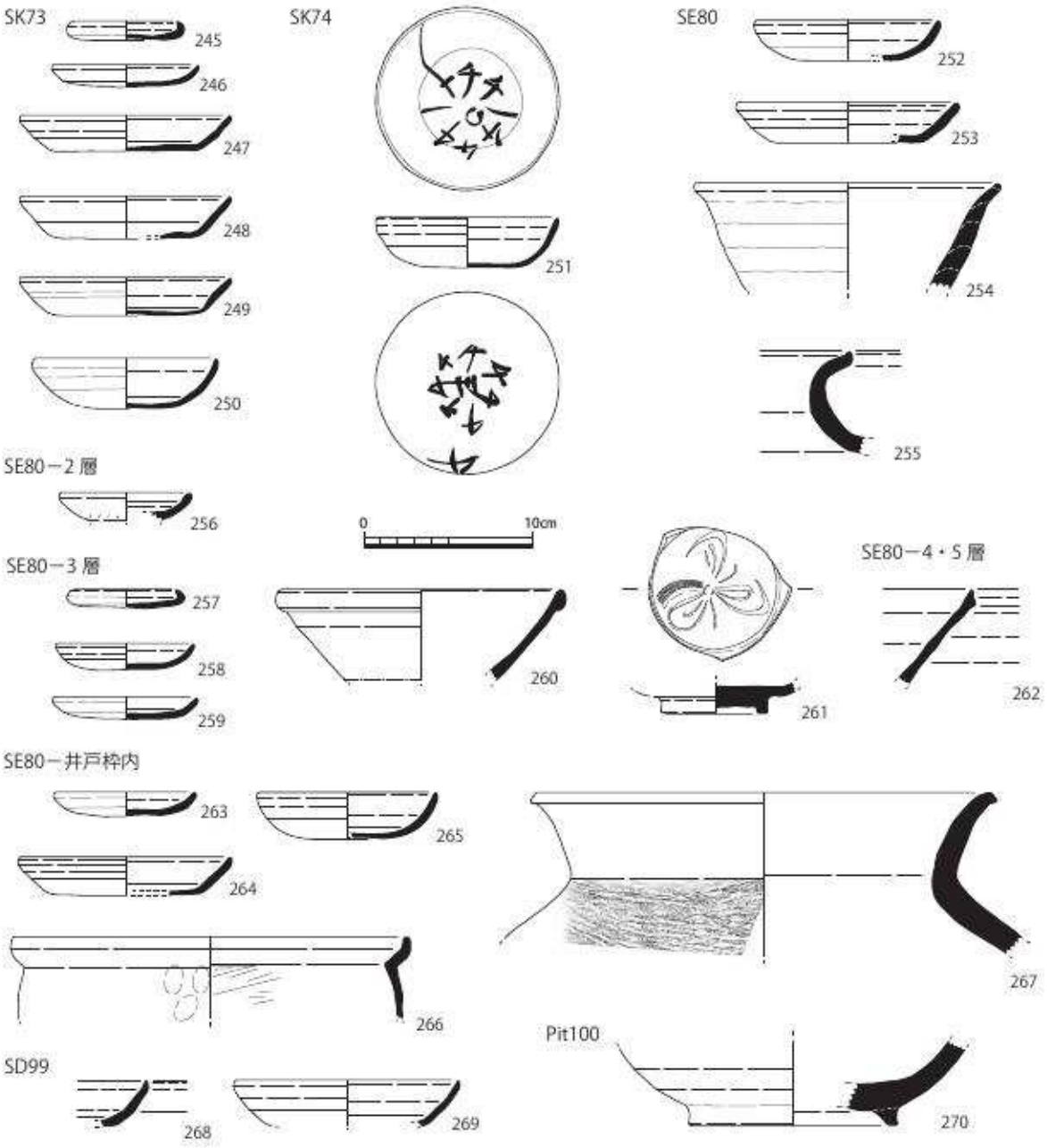


図18　第２面遺構出土遺物実測図（１：４）

師器皿Ｎで口径14.5～15.2cmの大皿である。反転復元した資料はない。242は白磁の壺の口縁部である。243は瓦器の盤で，内外面ともにミガキ調整だが，剥離が多く，調整の残りは悪い。244は石製の硯である。陸部には擦痕が確認できる。墨池にあたるようなくぼみは確認できない。

その他第２面遺構出土遺物（図18）

SK73　245は土師器皿Scで，口径6.1cmである。246は土師器皿Ｎで復元径8.5cm，247から249も土師器皿Ｎで口径12.4～12.5cmである。248・249は反転復元した。250は土師器皿Ｓで口径10.8cmである。SK73出土資料はⅥ期新段階，13世紀中ごろに帰属するものと考えている。

SK74　251は土師器皿Ｓで口径10.7cmである。内外面に墨書が残る。赤外線写真の撮影も試みたが，墨書は明瞭にはならなかった。「４」状の記号を輪宝のように放射状に書いているが，意図や

意味は不明と言わざるを得ない。写真を色調補正し，図版に掲載した（図版15）。SK74は出土遺物に乏しく，年代決定の根拠に欠けるが，SK73と大きな年代的隔たりはないと見ている。

SE80　井戸枠を検出するまでの掘り下げ時に出土した遺物である。252・253は土師器皿Nである。いずれも反転復元で，口径10.8cmおよび13.0cmである。254は土師器の鉢で，216同様に外面は輪積み痕が残り，内面はナデで調整する。255は焼締陶器の甕の口縁部で，常滑産である。

SE80－2層　井戸枠内上層の出土遺物である。土師器だが，器形は不明で，胎土は白色土器に近い。高杯の脚部（接地部分）の可能性もあろう。剥離部分には接合のためと思われる刻み目が入る。

SE80－3層　井戸枠内下層の出土遺物である。257は土師器皿Scで，口径6.0cmである。258・259は土師器皿Nで口径はそれぞれ，8.1cm，8.5cmである。260は白磁の椀で玉縁状口縁，261は龍泉窯系青磁の底部で，見込みに片彫の花文を有する。

SE80－4・5層　井戸枠内の最下層出土遺物である。262は東播系須恵器である。器壁は薄手で，口縁端部は三角形状に形成する。

SE80－井戸枠内　井戸枠内の西半を掘削する過程で出土した遺物である。263は土師器皿Nで口径8.2cmの小皿，264は復元径12.5cmの大皿である。265は土師器皿Sで，復元径10.6cm，266は瓦器鍋で内面ハケメ調整，外面はユビオサエ痕が確認できる。267は須恵器の甕である。中国・四国地方で生産された製品であろう。

SE80から出土した遺物群は，土師器皿Scが矮小化しきっておらず，皿N小の口径が8cm強，皿N大の口径が12cm後半台に集中し，皿Sが丸みをもった器形であることなどから，Ⅵ期新段階，13世紀の中ごろの年代を与えることができよう。

SD99　拡張区で検出した斜方向の溝である。268・269ともに土師器皿Nである。復元できた269は口径13.2cmとなる。遺物が少なく，年代を絞り込むまでには至らないが，12世紀末から13世紀前半ごろに帰属する可能性が高いと見ている。

Pit100　270は灰釉系陶器の鉢である。SX91出土のものと比べると高台が低い印象を受ける。切り合い関係のあるSD99の年代観から見て，12世紀後半ごろか。

（2）瓦　類（図19・20）

瓦1～6はSX91出土の軒丸瓦で，瓦1は上層，瓦2～5は中層，瓦6は下層である。瓦1は単弁蓮華文で，山城産である。瓦2・3は軒丸瓦で，播磨産である。瓦4・5は巴文で，4は堅緻な焼成で播磨産，5は山城産である。いずれも平安時代後期，12世紀の所産である。瓦6は蓮華文で，山城産である。珠文帯の外側に唐草が巡る。軒丸瓦で唯一生産時期が平安時代中期にさかのぼる。

瓦7～11はSX91中層から出土した軒平瓦である。瓦7・8は唐草文で，包み込み技法による瓦当部成形である。瓦7は平瓦部と瓦当部の剥離部分に刻目がある。瓦8は平瓦部と瓦当面の剥離部分に砂が付着していることが確認できる。ともに播磨産である。瓦9は唐草文で山城産である。瓦10は半折り曲げ技法ないし折り曲げ技法による瓦当部成形で，山城産である。瓦当面と文様がや

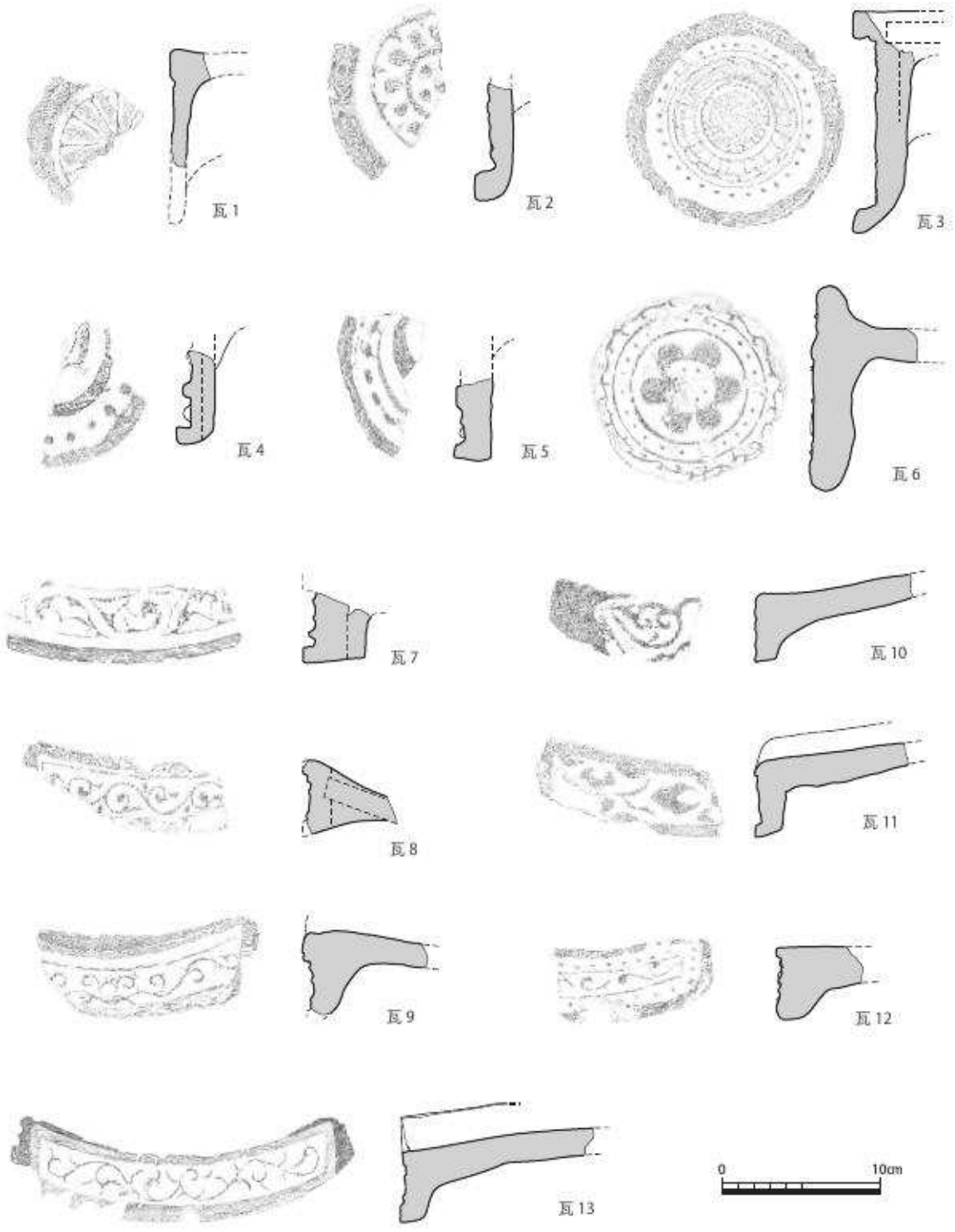


図19　SX91出土瓦実測図及び拓影（1：4）

やずれる。瓦11は布目が瓦当部上部から一部文様にまで回り込む折り曲げ技法で，半截花文の山城産である。いずれも平安時代後期の所産である。

瓦12・13はSX91下層から出土した軒平瓦である。瓦12は偏向唐草文で，外区に珠文帯を有する。山城産である。瓦13は中心飾りのない唐草文で，山城産である。凹面は布目が確認でき，均質にいぶしがかかる。瓦12は生産が平安時代中期にさかのぼるもので，瓦13は平安時代後期の所

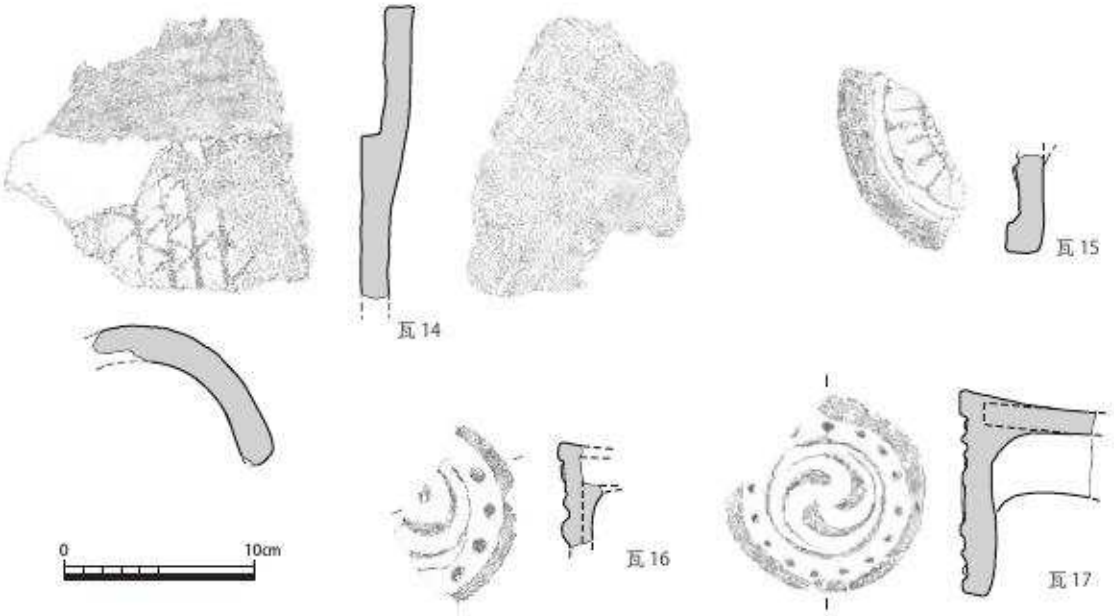


図20　出土瓦実測図及び拓影（1：4）

産である。

瓦14・15は第1面から第2面への掘り下げ中に出土した瓦である。瓦14は丸瓦で，凸面には格子状のタタキ痕が残る。山陰地方を産地とし，平安時代後期のものである。瓦15は蓮華文の軒丸瓦で，播磨産である。

瓦16・17はSE80から出土した。いずれも巴文で，山城産である。鎌倉時代のものであり，SX91出土資料と比較すると瓦当部が小振りである。

5．まとめ

今回の調査では，平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構群の展開が確認できた。とりわけSX91は多量の遺物が出土している。SX91出土遺物の年代について考えてみたい。

出土した遺物群のうち，90%以上を占めているのは土師器皿である（表6）。形態としては，コースター状の皿Ac，皿Nの2種が存在し，皿Nは大小2法量に大別できる。Ⅵ期中段階ごろに出現する皿Sは，全破片中に1点も含まれない。口縁部の調整技法は，上下2段のナデが確認できる資料が大半であり，口縁端部が上方に出ることで，断面が三角形になる資料が半数弱程度存在している。口径は上層で皿Acが9.0～10.0cm，皿N小が8.9～10.7cm，皿N大が14.2～14.8cmで，皿Acは3点中2点が復元径だが，皿Nは反転復元した資料はわずかである。中層では，皿Acが7.7～8.8cm，皿N小が9.0～10.5cm，皿N大が13.6～15.2cmであり，N小は1点を除いて9.0～10.0cmに集中し，N大は半数程度が復元径である。下層では，皿N小が8.9～10.0cm，皿N大が13.8～15.2cmで，N大は半数程度が復元径である。口縁部の形態面でも，口径分布でも，3層の間に顕著な差はなく，ほぼ同時に埋没したと考えている。平安時代後期から鎌倉時代初めの土師器皿編年の指標としうるのは，Ⅴ期古から中段階に位置付けられる平安京左京四条一坊二町（藤原為隆邸）

の池跡出土資料群[1]，Ⅵ期古段階，1180年代に位置付けられる平安京左京八条一坊十四町（平家の西八条第跡）SK50（SX6）出土資料[2]が存在する。前者は調査時の所見から，池が複数回に及んで造り替えられていることが分かっているが，その最新段階である入江820ではⅢAcの口径が9.5～10.5cm，ⅢN小の口径が9.5～10.3cm，ⅢN大が14.5～17.0cm（大半は～15.8cm）で，SX91よりも大きめに分布する。後者では，ⅢN小が9.3～9.7cm，N大が14.4～15.1cmで，14cm台半ばの資料が多い。口縁端部が上方に突出し，断面三角形に見える資料が大半となる。SX91出土資料は，資料数が多く，数値の幅も大きいものの，ⅢNの口径がおおむね9cm台半ばおよび14cm台半ばがピークとなる（図22）。従って，口径分布においては西八条第により近い。口縁部調整のあり方も含めて判断するに，Ⅴ期新段階，12世紀第3四半期ごろの資料群であると理解したい。

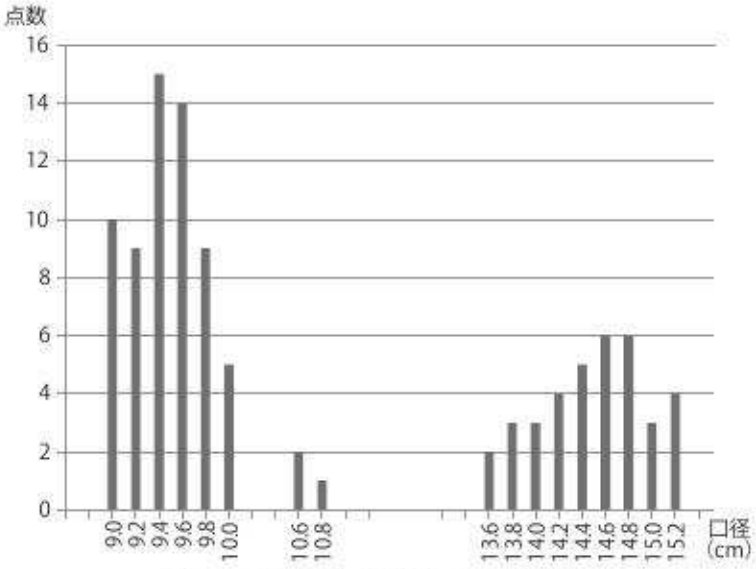


図21　SX91出土土師器ⅢNの口径分布

表6　SX91下層出土土器の構成（破片数）

器種	器形	破片数	比率	破片数	比率
土師器	椀・皿	5977	93.38%	5995	93.66%
	鉢・盤	7	0.11%		
	甕・鍋・釜	7	0.11%		
	その他	0	0.00%		
	不明	4	0.06%		
瓦器	椀・皿	51	0.80%	126	1.97%
	鍋・釜	0	0.00%		
	壺・瓶	0	0.00%		
	火舎・火鉢	75	1.17%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
灰釉系陶器・須恵器	杯・椀・皿	59	0.92%	164	2.56%
	壺・瓶	6	0.09%		
	鉢	54	0.84%		
	甕	40	0.62%		
	その他	1	0.02%		
	不明	4	0.06%		
白色土器	杯・椀・皿	16	0.25%	20	0.31%
	高杯	4	0.06%		
	盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
施釉国産陶器	椀・皿	0	0.00%	0	0.00%
	壺・瓶	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
焼締陶器	壺	2	0.03%	7	0.11%
	甕	5	0.08%		
	鉢・盤	0	0.00%		
	その他	0	0.00%		
	不明	0	0.00%		
輸入陶磁器	椀・皿	74	1.16%	89	1.39%
	壺・瓶	8	0.12%		
	甕	0	0.00%		
	盤	3	0.05%		
	その他	4	0.06%		
合計				6401	100.00%

共伴する資料は，Ⅱ-1～Ⅱ-2期の楠葉型瓦器椀，小椀が高台を残した灰釉系陶器，ミガキを施す吉備系土師器椀など，上記の比定に整合し，青磁が出土せず，白磁のみの構成であることも矛盾しない。上記した吉備系土師器椀のほか，産地不明の土師器椀や，須恵器，東海地方からの灰釉系陶器，輸入陶磁器と，多様な産地の遺物が出土している。

Ⅵ期の遺構，遺物の存在から，SX91の埋没以降に土地利用が活発化していることは明らかで，SX91は，開発に先立ち，自然地形の落ち込みを多量の土器を含んだ土で埋め立てたものという可能性をあげたい。出土遺物は聖護院が『兵範記』の記事に現れる仁安2年（1167）を前後する時期の年代観だが，今回の成果のみでは聖護院造営と関係するか否かは不明である。ただし，周辺一帯がこの時期に大きく開発が進んでいくことは間違いない。11世紀末に岡崎地域，法勝寺造営を嚆矢に始まった開発の波が，徐々に北に及び，聖護院地域には12世紀半ば過ぎに到達したと言えよう。これよりも北

の吉田地域（図３－調査１・３など）では，13世紀中頃以降の遺物が目立っており，12世紀代の遺物は希薄であることから，さらに一段階遅れて，開発が及んだことが分かる。主都京都には古代から近代まで多くの物資が集積されてきたが，上記のような遺物の多様性は平安時代後期（院政期）における鴨東地域の大規模開発に伴い，それまで以上に多くの人・物が集まってきたことを示しているのかもしれない。

拡張区で検出したSD97は東側道路と並行する溝であり，成立は平安時代後期にさかのぼる可能性がある。検出範囲が狭く，確証を得るには至らないが，調査地周辺の地割が平安時代後期にさかのぼって施工されていた可能性を示唆するものとして，今後の周辺調査を注視したい。

（新田　和央）

註

1）丸山真史・南孝雄『平安京左京四条一坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-10，公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2015年。

2）家崎孝治『梅小路公園埋蔵文化財確認調査報告書』古代文化調査会，1992年。

周辺調査関係文献（番号は図３および表１と対応）

1　近藤奈央『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-3，（財）京都市埋蔵文化財研究所，2012年。

2　平良泰久ほか「吉田近衛町遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1978）』京都府教育委員会，1978年。

3　中谷正和『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-12，（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2017年。

4　南博史ほか『吉田近衛町遺跡』京都文化博物館調査研究報告第４集，（財）京都文化財団

5　五十川伸矢ほか「京都大学病院構内AJ18・AJ19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1986年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，1989年。

6　浜崎一志ほか「京都大学病院構内AH19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1989～1991年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，1993年。

7　千葉豊「京都大学病院構内AG20・AF20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1996年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，2000年。

8　浜崎一志・宮本一夫「京都大学病院構内AF19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，1987年。

9　文献７に同じ。

10　阪口英毅「京都大学病院構内AF20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』1999年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，2003年。

11　千葉豊ほか「京都大学病院構内AE19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』2002年度，京都大学埋蔵文化財研究センター，2007年。

12 梶川敏夫「白河街区跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成３年度』京都市文化観光局，1992年。
13 百瀬正恒「白川街区１」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1985年。
14 （財）京都市埋蔵文化財研究所「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』京都市文化観光局，1986.
15 京都市文化財保護課「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』京都市文化市民局，2016年。
16 京都市埋蔵文化財調査センター「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成７年度』京都市文化市民局，1996年。
17 石井明日香・小池智美『白河街区跡』イビソク京都市内遺跡調査報告第18輯，2018年。
18 吉村正親「白河街区」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1996年。
19 京都市埋蔵文化財調査センター「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成５年度』京都市文化観光局，1994年。
20 京都市文化財保護課「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成21年度』京都市文化市民局，2010年。
21 長谷川行孝「白河街区跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』京都市文化市民局，2000年。
23 持田透・小池智美『白河街区跡・岡崎遺跡』イビソク京都市内遺跡調査報告第５輯，2013年。
24 尾藤徳行・竜子正彦「歓喜光院（96KS111・130）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成８年度』京都市文化市民局，1997年。
25 上村和直「尊勝寺跡」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2012年。
26 辻裕司・丸川義広「尊勝寺跡」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1984年。
27 馬瀬智光「白河街区跡・岡崎遺跡（14S001）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成26年度』京都市文化市民局，2015年。

Ⅵ　中臣遺跡

1．調査に至る経緯と経過

（1）調査に至る経緯

本件は，個人住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は，京都市山科区栗栖野打越町33-1で，京都市立勧修小学校より北西へ200ｍ程度隔てた地点に位置する。

平成29年12月，この区画において住宅の建替工事が計画され，平成30年３月に埋蔵文化財発掘の届出が提出された。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下，保護課）は，当該地域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「中臣遺跡」に含まれていること，また周辺における既往の調査成果より，遺構の残存が見込まれることから発掘調査が必要であると判断した。これを受けて，平成30年４月に発掘調査を計画し，国庫補助事業として実施した。本稿はこれに係る調査報告である。

（2）調査の経過と調査方法

調査期間は，平成30年４月９日～18日の８日間である。調査対象は，住宅建設予定範囲のうちの105㎡である。住宅地の形状にあわせて，第１調査区と第２調査区を設定した。規模は，第１調査区が10.0ｍ×6.0ｍを測る60㎡，第２調査区が10.0ｍ×4.5ｍを測る45㎡である。当初は反転

図１　調査位置図（１：2,500）

掘削を計画したが，重機掘削に着手したところ，排出土量が少なく場内仮置きが可能であると判断されたため，全面掘削に切り替えた（但し，本報告では便宜上，第１調査区，第２調査区の名称を用いている）。

現地調査では，バックホウを用いた表土，盛土，近現代の撹乱土の除去を終えた後，人力掘削に着手した。掘削作業にはショベルやジョレン，ツルハシ等を用いた。また，層相の変化ごとに遺構面の検出に努め，遺構を検出した際には個別に掘削を行った。遺物の出土に際しては，ヘラや小型ショベル等を用いて慎重に取り上げ作業を行った。検出した遺構面では，全景写真の撮影や検出遺構の個別写真撮影，平面図の作成，標高値の計測，遺構実測等，一連の記録作業を行った。なお今回の工事計画では，地表面以下50㎝までの掘削にとどまるため，これ以下の掘削は必要最小限にとどめた。これらの工程をすべて終了した段階で埋め戻しを行い，現地における調査を終了した。

続く整理作業では，出土遺物の洗浄，選別（抽出），遺構図の精査，版組，トレースを行い，報告書としての体裁を整えた。一連の作業は，本報告の刊行をもって終了した。

図２　調査区配置図（１：500）

図３　人力掘削作業状況（北から）

図４　遺構面検出状況（北東から）

2．位置と環境

（1）遺跡の立地と地理的環境

中臣遺跡は，山科区東野，栗栖野，西野山，勧修寺地区にまたがる周知の遺跡である。旧安祥寺川と山科川の合流地点北方の独立丘陵（栗栖野丘陵もしくは栗栖野台地）一帯が遺跡範囲に相当する。現在の勧修寺第一市営住宅付近（栗栖野中臣町）が丘陵の最頂部にあたり，今回の調査区はその南西側斜面にあたる。このため今回の調査地は，北東に高く，南西に向かい緩やかに下がる。

調査地周辺は閑静な住宅街であるが，古道である「川田道」に接するため，早くから街道沿いに開けた土地であった事が想像される。川田道は，平安時代末期～鎌倉時代初頭の当地の様相を記した絵図「山城国山科郷古図（彰考館所蔵）」に記載があり，勧修寺から現東山区今熊野へ抜ける主要な街道として機能していた。このため，今回の調査においても関連する遺構の残存が予測された。

（2）周辺の既往の調査成果（図５・表１）

調査地周辺では，これまでに発掘調査が多数行われており，その成果も枚挙に暇がない（表１参照）。中臣遺跡は縄文時代から中世まで続く複合遺跡であるが，特に弥生時代後期～古墳時代前期，古墳時代後期～飛鳥時代を主とする遺構群の報告が顕著である。調査地より東の丘陵頂部付近は後世の削平により遺構面が損なわれる範囲もあるが，川田道沿いの調査地では平安時代～近世の遺構及び遺物の出土が報告されている（図5-1，2①・②，25，27）。このうち，試掘調査の延長を行った15Ｎ112調査（図5-27）では，川田道付近に土坑と柱穴が集中する様相が確認された。

なお遺物のみの出土であるが，調査地より東へ150ｍ隔てた地点における翼状剥片（旧石器）の不時発見（図５▲）は，中臣遺跡のその後の調査の契機となる成果として特筆される。

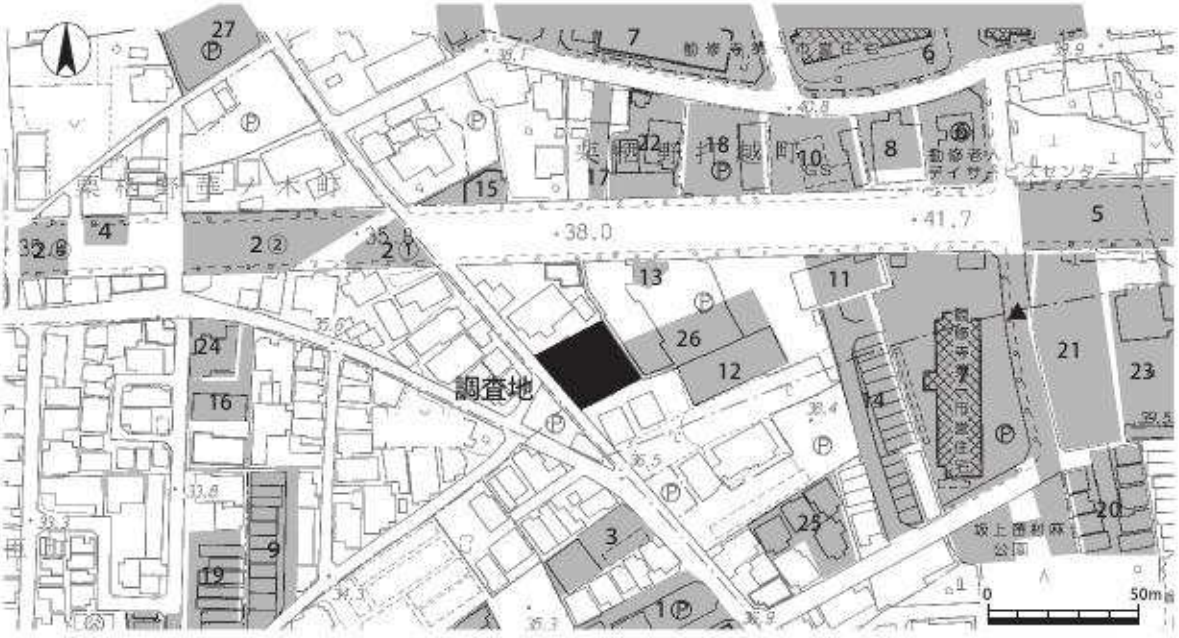


図５　既往の調査位置図（１：2,500）

表1　既往の調査一覧

No.	調査番号（調査次数）	調査区	調査期間	種類	調査事由	面積㎡	調査遺構・出土遺物	文献
1	（11次）		19771011 ～ 19771112	発掘	共同住宅建設	345	近世／溝 遺物／土師器，陶器，磁器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和52年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
2	（70-1次）	①区	19880718 ～ 19880909	発掘	道路建設	1,723	遺構／確認できず　遺物／近世陶磁器，土師器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』1992
		②区					時期不明／土坑，溝　遺物／近世陶磁器，土師器	
		④区					時期不明／柱穴，溝	
		⑤区					鎌倉～室町／土坑，柱穴，溝	
		⑥区					平安中期／掘立柱建物	
3	90N379		19900814	試掘	住宅建設	—	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度，1992
4	（70-4次）	Ⅲ区	19911122 ～ 19920228	発掘	道路建設	785	遺構／確認できず	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995
5	（71次）	Ⅰ区	19930621 ～ 19930929	発掘	道路建設	1,003	時期不明／ピット 遺物／石鏃，土師器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』1996
		Ⅱ区		立会			古墳後期／竪穴建物？ 遺物／土師器，須恵器	
6	（73次）	1区 2区 3区 4区 5区	19940209 ～ 19940415	試掘	市営住宅団地建替	1,304	縄文晩期／土器棺墓，掘立柱建物，立柱（環状？），土坑 古墳後期～飛鳥／竪穴建物，掘立柱建物，柱穴，土坑 平安中期／土器埋納遺構 鎌倉／庇付掘立柱建物， 室町／火葬墓，溝 遺物／縄文土器（早・晩），弥生土器（前），太型蛤刃石斧，石鏃，土師器，須恵器，鉄製刀子？，鉄滓，瓦器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』1996
			19940416 ～ 19941017	発掘	市営住宅団地建替	7,802		
7	（74次）	N区 S区	19950612 ～ 19960229	発掘	市営住宅団地建替	7,288	旧石器／石器集中部，礫群 縄文晩期／土坑 飛鳥／竪穴建物，掘立柱建物，柱穴，土坑墓，溝，土坑 平安末～鎌倉／木棺墓 室町／土坑 遺物／ナイフ形石器，石錐，石刀，剥片，縄文土器（早・後・晩），弥生土器（前），石鏃，土師器，須恵器，砥石，鉄製刀子，鉄鏃，馬具，馬歯？陶磁器，染付	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』1997
8	（75次）		19960125 ～ 19960307	発掘	デイサービス建設	362	奈良以後／土坑群 遺物／旧石器剥片，縄文土器（晩），弥生土器（前），土師器，須恵器，染付	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』1997
9	95N362		19951121	試掘		—	時期不明／不定形土坑	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成7年度，1996
10	95N552		19960117	試掘		—	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成8年度，1997
11	96N208		19960724	試掘		—	遺構／確認できず	
12	96N209		19960724	試掘		—	遺構／確認できず	
13	96N210		19960724	試掘		—	遺構／確認できず	
14	97N135		19970724	試掘	宅地造成	—	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成9年度，1998
15	97N403		19980413	試掘	店舗建設	—	近世／溝，土坑	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成10年度，1999
16	98N508		19990308	試掘	共同住宅	11	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成11年度，2000
17	99N404		19991115	試掘	店舗建設	18	時期不明／東西溝	
18	00N149		20000828	試掘	店舗建設	47	時期不明の土壙3基，柱穴1基を検出。	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査概報』平成12年度，2001
19	00N291		20001011	試掘	宅地造成	44	遺構／確認できず	
20	00N292		20001025	試掘	宅地造成	34	古代？／柱穴	
21	04N491		20050126	試掘	店舗建設	30	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成17年度，2006
22	06N593		20070221	試掘	共同住宅建設	28	遺構／確認できず 遺物／土師器	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成19年度，2008
23	08N214		20081008	試掘	宅地造成	42	遺構／確認できず 遺物／土師器	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成20年度，2009
24	09N321		20091109	試掘	住宅建設	12	時期不明／柱穴，ピット	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成21年度，2010
25	14N096		20140804	試掘	共同住宅建設	30	遺構／確認できず 遺物／近世陶器	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成26年度，2015
26	14N132		20140901	試掘	店舗建設	20	遺構／確認できず	
27	15N112		20150703 20150721 ～ 20150807	試掘 試掘（延長）	デイサービス建設	187	近世／土坑，柱穴，ピット 平安／南北大溝 遺物／須恵器，土師器，陶磁器，瓦器，瓦，銭貨，煙管，鉄釘，砥石，馬骨	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成27年度，2016

3．調査成果

（1）基本層序

調査地の現地表面の標高は，T.P.+36.6ｍ程度を測る。旧地形は，前述のとおり北東に高く，南西へ向かって徐々に下がる。このため，敷地内の中央付近で0.2ｍ程度下がる段が設けられ，平坦地が作り出されている。但し，北東側の隣接地とは1.4ｍを測る比高差があるため，過去にさらに大規模な造成が行われたことが想像される。

敷地の段上にあたる第１調査区では，GL-0.2ｍまで盛土があり，その直下において地山上面を確認した。段下にあたる第２調査区では，GL-0.3ｍまで盛土，-0.35ｍまで近世～近代堆積層，以下，純い黄褐色微砂混じりシルトを主体とする地山を確認した。検出遺構面は，地山上面である。

第１調査区の北東半部では明確な遺構の残存は確認できなかった。旧住宅の建設時に大規模な造成（削平）が行われたものと見られる。また，第２調査区には旧住宅解体時の撹乱が多く，地山上面を大きく損なう箇所も少なくない。僅かに遺構面及びこれを覆う近世～近代堆積層を確認できるのは，段造成付近にあたる第１調査区西端から第２調査区東端にかけての限定的な範囲である。近世～近代堆積層の大部分は整地土で，小粒礫を多量に含む固く締まったシルトを主体とする。

（2）遺構と遺物（図７・８）

今回検出した遺構は，土坑，ピット，井戸，溝，落込である。このうち第２調査区において検出したピットは３基が並び柱列となる。遺構の時期はすべて近世末期～近代である。

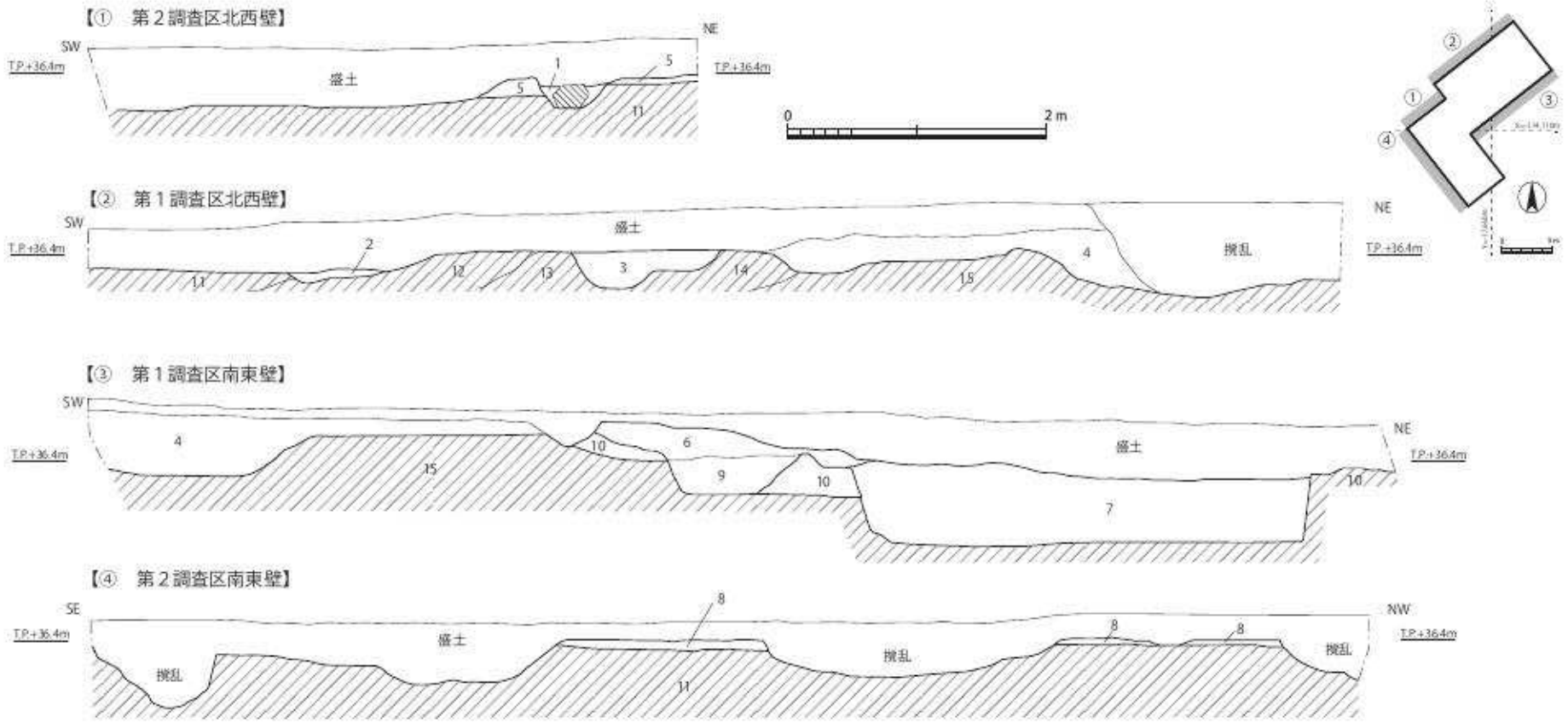
土坑２　第１調査区北東辺において検出した遺構である。平面形状は最大径0.9ｍの円形に復原で

表２　遺構概要表

時代	遺構	備考
近世末期～近代	落込・溝	落込４（下層は溝状に落ち込む）
	柱穴（柱列）	Ｐ６，Ｐ７，Ｐ８，Ｐ９，Ｐ11
	溝	溝５，
	井戸	井戸13，井戸14
	土坑	土坑２，土坑３，土坑10，土坑12，土坑15，土坑16
	置石・整地跡	

表３　遺物概要表

時代	内容	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数	コンテナ合計
近世末期～近代	土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付・土製品・銭・瓦				
合計		０点（０箱）	０箱	１箱	１箱



1）10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルトに
10YR5/4 鈍い黄褐色微砂混じり粘土質シルト40%程度入る　径3cm未満の礫少量入る　しまり悪い（ピット６）
2）10YR3/2 黒褐色細砂混じり粘土質シルトに　10YR5/4　鈍い黄褐色微砂混じり粘土質シルトブロック5%程度入る
径2cm未満の礫多量入る　炭化物・土器片入る（土坑２）
3）2.5Y4/2　暗灰黄色粗砂混じりシルトに
2.5Y5/3　黄褐色礫混じりシルトブロック20%程度入る　径2cm未満の礫多量入る　しまり悪い（土坑16）
4）10YR4/6 褐色砂礫～砂質シルト　径4cm未満の礫多量入る　堅くしまる（整地層）
5）10YR3/2 黒褐色微砂混じりシルトに　10YR5/4　鈍い黄褐色微砂混じり粘土質シルト10%程度入る
径2cm未満の礫少量入る　炭化物入る　しまり悪い（近世堆積層）
6）10YR2/3 黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR5/6　黄褐色シルトブロック10%程度入る　しまり悪い
7）10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルト　径5cm未満の礫多量入る　ややしまり良い（井戸13）
8）10YR4/4 褐色微砂混じりシルトと　10YR3/2　黒褐色シルトの互層　炭化物・植物遺体入る　しまり良い（整地層）
9）10YR2/3 黒褐色粗砂混じりシルトに　10YR5/6　黄褐色シルトブロック10%程度入る　しまり悪い（土坑12）
10）10YR3/3 暗褐色微砂混じりシルトに　10YR5/4　鈍い黄褐色微砂混じり粘土質シルト5%程度入る
径2cm未満の礫筋状に入る　ややしまり悪い（落込４下層）
11）10YR5/4 鈍い黄褐色微砂混じり粘土質シルト　径3cm未満の礫少量入る　しまり良い（地山）
12）2.5Y5/3　黄褐色礫混じり粘土質シルト　径2cm未満の礫多量入る　しまり良い（地山）
13）2.5Y5/4　黄褐色微砂～微砂混じりシルト　細砂の流入あり　ラミナを形成　植物遺体入る　ややしまり良い（地山）
14）2.5Y5/3　黄褐色礫混じり粘土質シルト　径2cm未満の礫多量入る　しまり良い（地山）
15）2.5Y5/4　黄褐色微砂～微砂混じりシルト　細砂～粗砂の流入あり　ラミナを形成　植物遺体入る　ややしまり良い（地山）

図６　調査区壁断面図（１：50）

きる。最大深度は0.12ｍ，断面形状は不定形である。埋土は黒褐色細砂混じり粘土質シルトを主体とし，炭化物を一定量含む。溝５とは切りあう関係にあり，土坑２のほうが新しい。遺構の性格は不明である。埋土からは平瓦が２点出土した。

土坑３　第１調査区東半部において検出した遺構である。便槽もしくは貯蔵施設と考えられる遺構で，平面隅丸方形の竪孔とこれより一回り大きい掘り方が認められる。竪孔は平面一辺1.5ｍ，最大深度は0.46ｍを測る。壁面及び底面には漆喰を塗布した痕跡が残る。掘り方の最大径は2.0ｍで，その下面にはこれに先行する掘り方が一部に認められる。埋土は黒褐色～灰黄色シルトを主体とする。竪孔内からは，土師器炮烙，施釉陶器土瓶，白磁皿，染付皿，鎌刃，ホーロー鍋等が出土した。

落込４　第１調査区中央から南西に向かって下がる遺構である。当初は一辺３ｍ程度の規模を測る落込みとして検出したが，掘削を進めたところ弧を描いてのびる溝状遺構であることが判明した。溝の検出長は2.5ｍ程度，最大幅は1.3ｍを測る。調査区外へ続くため全体形状は不明である。埋土は黒褐色シルトを主体とし，一部には流水痕跡が残る。しまりが悪く，植物遺体や炭化物を一

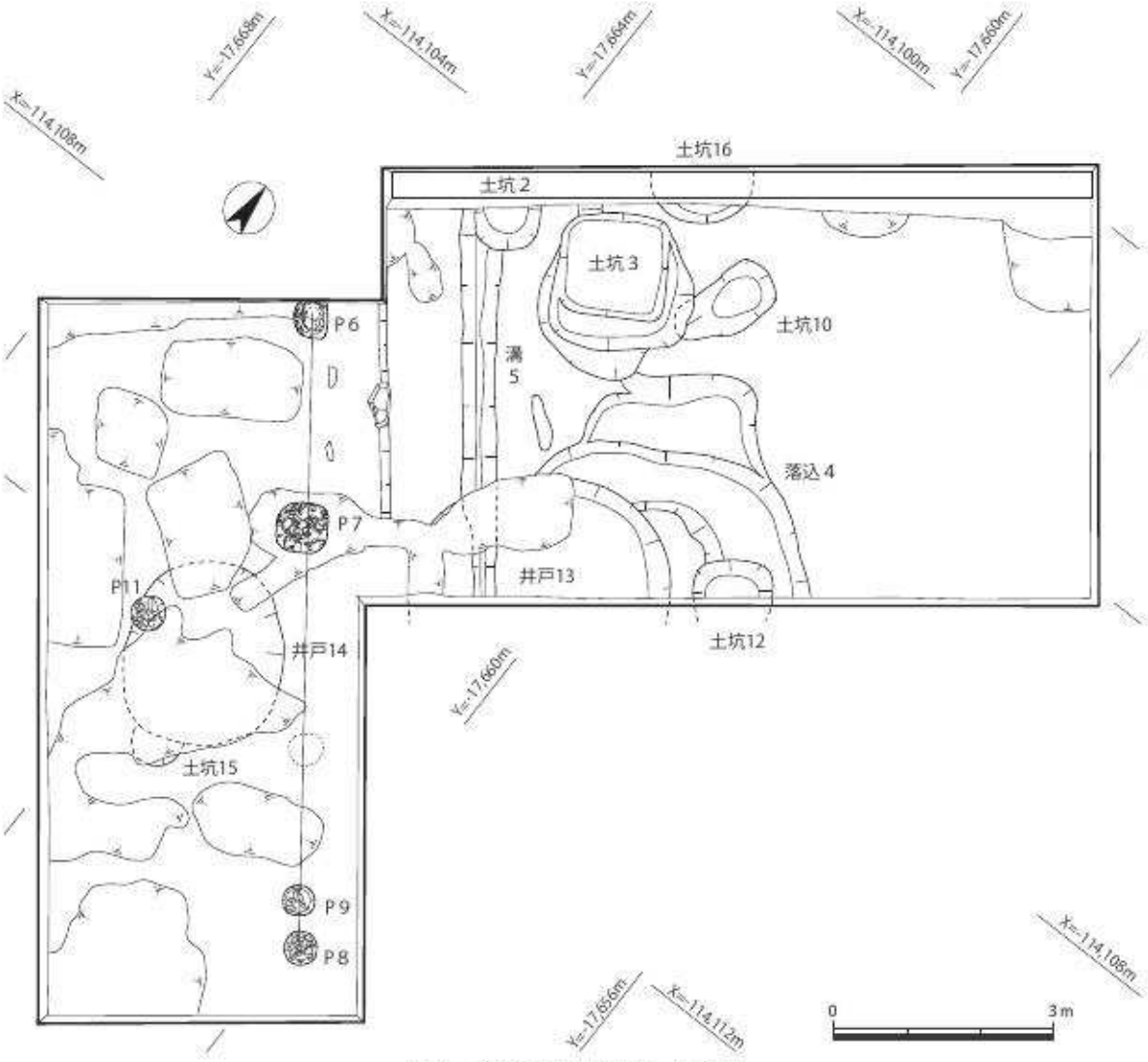


図７　遺構面全体図（１：100）

定量含む。断面形状が不定形であることから，上方からの出水により埋没した遺構である可能性が高い。遺構の切り合い関係および出土遺物の時期より，今回検出した近世の遺構では最も早く成立したと推測される。埋土からは染付碗，平瓦，施釉陶器鉢，磁器碗等が出土した。

溝５　第１調査区の南西端において検出した直線溝である。検出長5.3ｍ，最大幅0.6ｍを測る。旧住宅の方向軸に沿って延び，調査区外（旧住宅の裏手）へ続く。底面の傾斜は南東から北東へ向かって下がる。断面形状は浅い椀形，最大深度は0.1ｍを測る。遺構内から遺物の出土は確認できていない。南東端で井戸13と切り合う関係にあり，溝５のほうが新しい。

この溝の南西肩（道路側）には溝と並行する方向に低い盛土があり，その周辺に堅く叩き締められた礫混じりシルトの薄層（整地土）が認められる。この盛土と整地土の境界付近には，上面を平坦に加工した花崗岩が据えられており，その南西に足跡を２点確認した。これらの状況から，整地土は旧住宅の三和土（たたき）であり，盛土部分には上がり框（かまち）が設けられていたものと推測される。置石は式台（履物を脱ぐ台石）であろう。溝５は上がり框より住宅側へ入り込んだ雨水などの排水溝として機能したと推測される。なお整地層からは肥前系陶器甕，染付碗の小片等が出土したが，江戸時代末期を大きく遡るものではない。

柱穴（ピット６・７・８）　第２調査区の北東辺において検出した遺構群である。調査区を北西－南東方向に縦断する主軸をもち，川田道の方向軸に合致する。ピット７とピット８の間にはピットがもう１基の存在した可能性が高いが，検出することはできなかった。柱間は概ね2.8ｍである。ピット６には大型の花崗岩を，ピット７とピット８には拳大の角礫を複数据えて礎石とする。上述した上がり框の存在から，建物の軒柱に伴う柱穴であったと推測される。

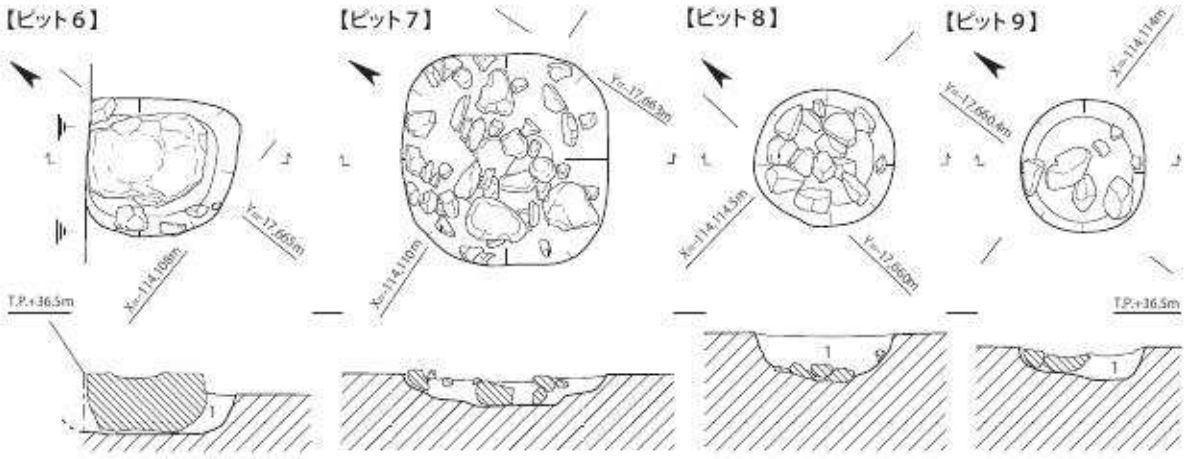
ピット６　第２調査区の北東隅において検出した柱穴である。南東に存在するピット７，ピット８と連続して柱列を構成する。平面形状は楕円形，北西辺の一部が調査区の壁に接する位置にある。遺構の最大長は0.5ｍ，最大幅は0.45ｍを測る。遺構の断面形状は椀形で，埋土は暗褐色粗砂混じりシルトを主体とする。埋土から遺物の出土は確認できていない。

遺構の中央には，最大長0.45ｍを測る根石が据えられていた。削平により，遺構検出時には既に露出する状態であった。石の上面はほぼ水平を保ち，中央に僅かな窪みが設けられている。石の側面，底面には特に加工は認められなかった。

ピット７　ピット６の南東に位置する柱穴である。平面は隅丸方形で，一辺0.7ｍを測る。残存深度は0.08～0.1ｍ，上位は大きく削平を受ける。

埋土は暗褐色粗砂混じりシルトを主体とし，拳大の角礫を多く含んでいる。中央よりやや南西寄りには大型の石を配しており，この石の上面レベルとピット６の根石上面のレベルはほぼ同値を示す。埋土から遺物の出土は確認できなかった。

ピット８　第２調査区の南東隅において検出した遺構である。平面形状は円形で，直径0.45ｍを測る。断面形状は浅い椀形で，最大深度は0.15ｍを測る。遺構底面には拳大の角礫が複数据えられており，ピット６，ピット７の根石上面とほぼ同値のレベルを保つ。遺物の出土は確認できていない。

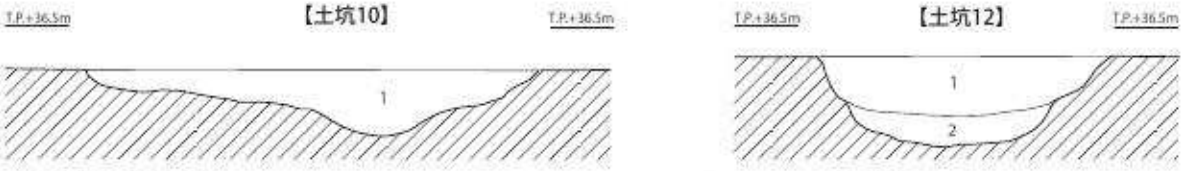


【ピット6】
1）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルトに
10YR5/4　鈍い黄褐色微砂混じり
粘土質シルトブロック40%程度入る
径3cm未満の礫少量入る　しまり悪い

【ピット7】
1）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト
径2cm未満の礫少量入る
ややしまり悪い
径15cm未満の根石入る

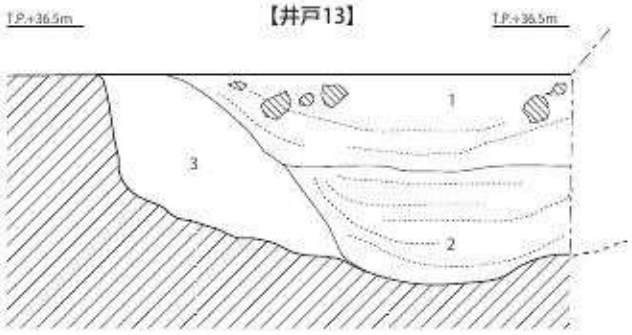
【ピット8】
1）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト
径2cm未満の礫少量入る
ややしまり悪い
中央に径8cm未満の根石入る

【ピット9】
1）10YR4/3
鈍い黄褐色シルト
径2cm未満の礫少量入
ややしまり悪い
径8cm未満の根石入る

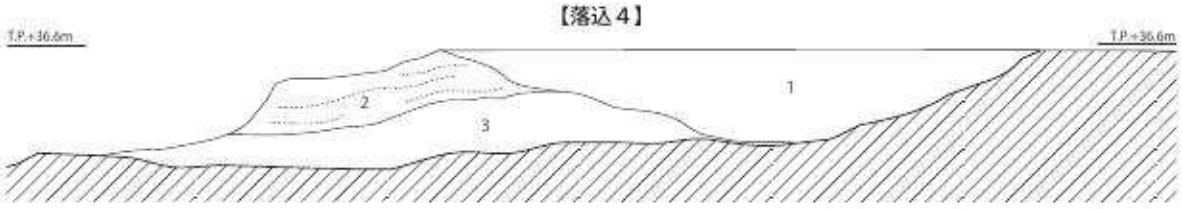


【土坑10】
1）10YR3/3　黒褐色シルトに
10YR4/4　褐色シルトブロック10%程度入る　径5cm未満の礫少量入る
しまりやや悪い

【土坑12】
1）10YR2/3　黒褐色粗砂混じりシルトに
10YR5/6　黄褐色シルトブロック10%程度入るしまり悪い
2）10YR3/2　黒褐色礫混じりシルト
径1cm未満の礫多量入る　食物残滓（貝殻）入る　しまり悪い



【井戸13】
1）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト
径5cm未満の礫多量入る　ややしまり悪い
2）10YR4/2　灰黄褐色粗砂混じりシルトと
10YR3/1　黒褐色微砂混じりシルトの互層
10YR5/3　鈍い黄褐色粗砂～シルトブロックの流入あり
径1cm未満の礫少量入る
3）10YR3/2　黒褐色シルトに
10YR5/6　黄褐色シルトブロック30%程度入る　しまり悪い
径1cm未満尾の礫少量入る



【落込4】
1）10YR3/2　黒褐色微砂混じりシルトに
10YR5/4　鈍い黄褐色シルトブロック10%程度入る　径1cm未満の礫少量入る　しまり悪い
2）10YR3/1　黒褐色シルトと　10YR4/4　褐色シルトの互層　径2cm未満の礫・瓦・陶器片入る　しまり悪い
3）10YR3/3　暗褐色粗砂混じりシルト　径2cm未満の礫少量入る　しまり悪い

0　1m

図8　遺構平・断面図（1：25）

なお，このピットは近世包含層に覆われており，それを除去した段階で検出した。遺構の上面は撹乱を受けておらず，その検出レベルは廃絶時のものである。上面を削平されたピット６，７も本来はこのレベルにおいて成立していたものと推測される。

ピット９　ピット８の北西において検出した遺構である。平面形状は径0.4ｍを測る円形で，断面形状は不定形，最大深度は0.12ｍを測る。ピット８と同様，埋土中に角礫を据える事から柱穴である可能性が考えられるが，対応する遺構を確認できていない。埋土から遺物の出土は確認できなかった。

土坑10　第１調査区において検出した土坑である。平面形状は不定形，長軸は1.5ｍを測る。底面には凹凸があり，部分的に深く下がる。埋土は黒褐色シルトに褐色シルト（地山）ブロックが少量入る。風倒木の痕跡である可能性が考えられる。埋土から遺物の出土はなく，埋没時期は不明である。

ピット11　第２調査区において検出した遺構である。平面形状は径0.45ｍを測る円形で，埋土に角礫を多く含む。下層の井戸と切り合う関係にある。対応するピットは確認できていない。埋土から遺物の出土はなかった。

土坑12　第１調査区南東辺において検出した遺構である。平面形状は隅丸方形に復原できる。断面形状は甘い逆凸形で，最大深度は0.3ｍを測る。埋土は上下２層に大別でき，上層は黒褐色粗砂混じりシルト，下層は黒褐色礫混じりシルトを主体とする。埋没時期は新しく，近代を遡らない。下層からは，染付碗，施釉陶器蓋，伏見人形（形状は不明），貝殻（二枚貝）が出土した。廃棄土坑であると推測される。

井戸13　第１調査区において検出した遺構である。平面形状は，径４ｍを測る円形に復原できる。断面形状は逆台形に近く，底面には凹凸を持つ。中央よりやや東よりに井戸枠の痕跡を残すが枠そのものは残存していない。井戸枠内に相当する部位にはラミナを伴う水平堆積が確認できる。掘り方の埋土は黒褐色シルトを主体とし，黄褐色シルト（地山）ブロックを一定量含む。この遺構の東側に現存する石組みの井戸が存在することから，その先代として機能した遺構である。埋土からは，染付碗，肥前系陶器甕の破片が出土した。

井戸14　第２調査区中央において検出した遺構である。長径2.5ｍ，短径2.2ｍを測る楕円形を呈する。埋土は灰黄褐色礫混じりシルトを主体とする。この遺構は上層を大きく撹乱で損なわれており，この段階ですでに掘削限界に達していため，完掘せず，撹乱による断面観察にとどめた。遺物の出土は確認できておらず，その廃絶時期は不明である。平面形状から，井戸であると判断した。地山に近い埋土の状況から，井戸13に先行するものと推測される。

土坑15　井戸14の下層に存在する遺構である。平面形状は径0.7ｍを測る円形に復原できる。井戸14と同じく掘削は行っていない。埋土は灰黄褐色礫混じりシルトを主体とし，井戸14と類似する。遺物の出土は確認できていない。

土坑16　第１調査区北西辺において確認した遺構である。南半部のみの検出であるが，径1.3ｍ程度を測る平面円形に復原できる。断面形状は椀形，最大深度は0.3ｍを測る。埋土は炭化物を含む

暗灰黄色シルトを主体とする。埋土から染付碗の破片が出土した。

4．まとめ（図９）

以上，中臣遺跡の調査成果を報告した。今回の調査では，近世末期～近代の井戸や柱列を有する遺構面を確認した。このうち近接する井戸２基は，１基（井戸14）が廃絶した後にもう１基（井戸13）が開削されたとみられるが，その東にはさらに現存する石組み井戸が存在する。このことから，付近に豊富な地下水流が存在すること，その水量を利用して当該地に民家が営まれたことが類推できる。

また，柱列は建物の軒柱として復原できるが，その主軸が古道である川田道に沿うことから，民家は街道に面して建てられていたことを確認した。川田道は平安時代後期～鎌倉時代には既に存在したと推測されているが，今回の調査によりその沿道における集落の展開が近世に遡ることが明らかとなった。

なお今回の調査では，当初，予想された平安時代以前に遡る遺構を確認することはできなかった。

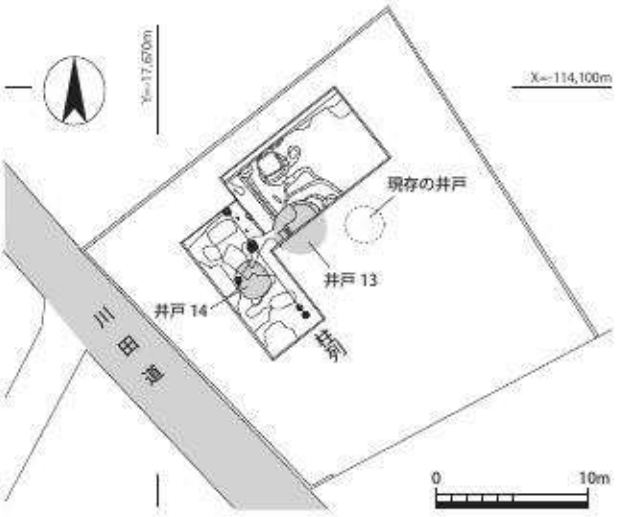


図９　遺構の配置と川田道（１：500）

（黒須　亜希子）

参考文献

音羽中学校育友会『山科誌　歴史編』1970。

京都市文化市民局文化部文化財保護課『京都市文化財ブックス第16集　遺跡から見た京都の歴史』2002

金田章裕「平安時代の山科―条里と古道―」『掘る・読む・あるく　本願寺と山科二千年』法蔵館，2003

Ⅶ　中臣遺跡・中臣十三塚

1．調査に至る経緯と経過

（1）調査に至る経緯

本件は，個人住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は，京都市山科区西野山中臣町71-29で，新十条通の南に広がる住宅地内に位置する。

平成30年３月にこの区画において個人住宅の建設工事が計画され，同年５月に埋蔵文化財発掘の届出が提出された。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下，保護課）は，当該地域が周知の埋蔵文化財包蔵地である「中臣遺跡」及び「中臣十三塚」に含まれていること，また工事内容により遺構の損失が見込まれることから発掘調査による記録保存が必要であると判断した。これを受けて発掘調査を計画し，国庫補助事業として実施した。本稿はこれに係る調査報告である。

（2）調査の経過と調査方法

調査期間は，平成30年６月18日～26日のうち５日間である。調査対象面積は59.5㎡を測る。当初，反転掘削を計画したが，想定よりも掘削深度が深くなり，多くの土量の排出が見込まれたため，調査区を３分割することとした。規模は，第１調査区が3.0ｍ×5.5ｍ＝16.5㎡，第２調査区

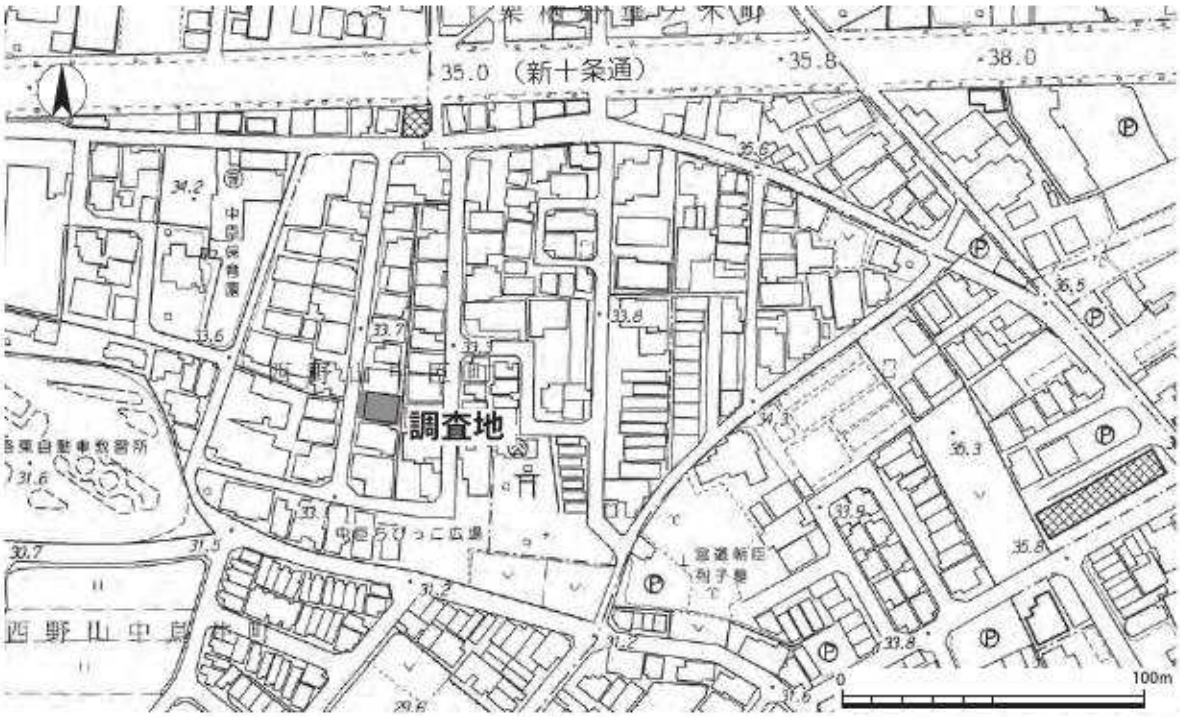


図１　調査位置図（１：2,500）

が7.0m×2.5m＝17.5㎡，第３調査区が8.5m×3.0m＝25.5㎡である。調査は，第１調査区，第２調査区，第３調査区の順に実施した。

掘削は，はじめにバックホウを用いて表土，盛土，旧耕作土（近現代）及び大規模な撹乱土を除去を行い，その後，人力掘削を行った。人力掘削にはショベルやジョレン，ツルハシ等を用いた。また，層相の変化ごとに遺構面の検出に努め，遺構を検出した際には個別に掘削を行った。遺物の出土に際しては，ヘラや小型ショベル等を用いて慎重に取り上げ作業を行った。各遺構面では，全景写真の撮影や平面図の作成，標高値の計測，遺構実測等，一連の記録作業を行った。

なお今回の工事では地盤改良（柱状改良）を行うため，遺構面の地中保存は困難であると判断されることから，地山面までの掘削のほか，すべての遺構についても完掘を行った。また一部の撹乱を深掘し，地中の状況を確認した。これらの工程をすべて終了した段階で埋め戻しを行い，現地における調査を終了した。

図２　調査区配置図（１：200）

図３　人力掘削作業状況（北から）

図４　第３調査区西壁断面（東から）

2．位置と環境

（1）遺跡の立地と地理的環境

中臣遺跡は，山科区東野，栗栖野，西野山，勧修寺地区に広がる集落遺跡である。旧安祥寺川と山科川の合流地点北方の独立丘陵（栗栖野丘陵もしくは栗栖野台地）を取り巻く一帯が遺跡範囲に相当し，今回の調査区はその西側斜面にあたる。

調査地付近の区画割は不規則で，必ずしも方位に則していない。現地表面の標高を見ると，基本的に栗栖野丘陵の傾斜に即して北から南へ，東から西へ緩やかに下がる。ただし，この地形の大勢とは別に，調査地の東側区画では部分的に低い値が認められることから，ここに小規模な谷筋が入り込んでいることが窺える。南へ向かい扇形に開く周辺の不規則な地区割は，その名残である可能性が高い。

中臣十三塚は，飛鳥時代～平安時代初頭に形成されたと推定される古墓群で，調査地を含む東西約250ｍ，南北約350ｍの範囲にわたり周知されている。現時点では宮道古墳（伝宮道列子墓）や稲荷塚古墳のほか，既往の調査において発見された消滅古墳を含む計６基が認識されている。消滅古墳の築造時期は６世紀後葉～７世紀前葉，一方，宮道列子の薨去は延喜七年（907）であるため，

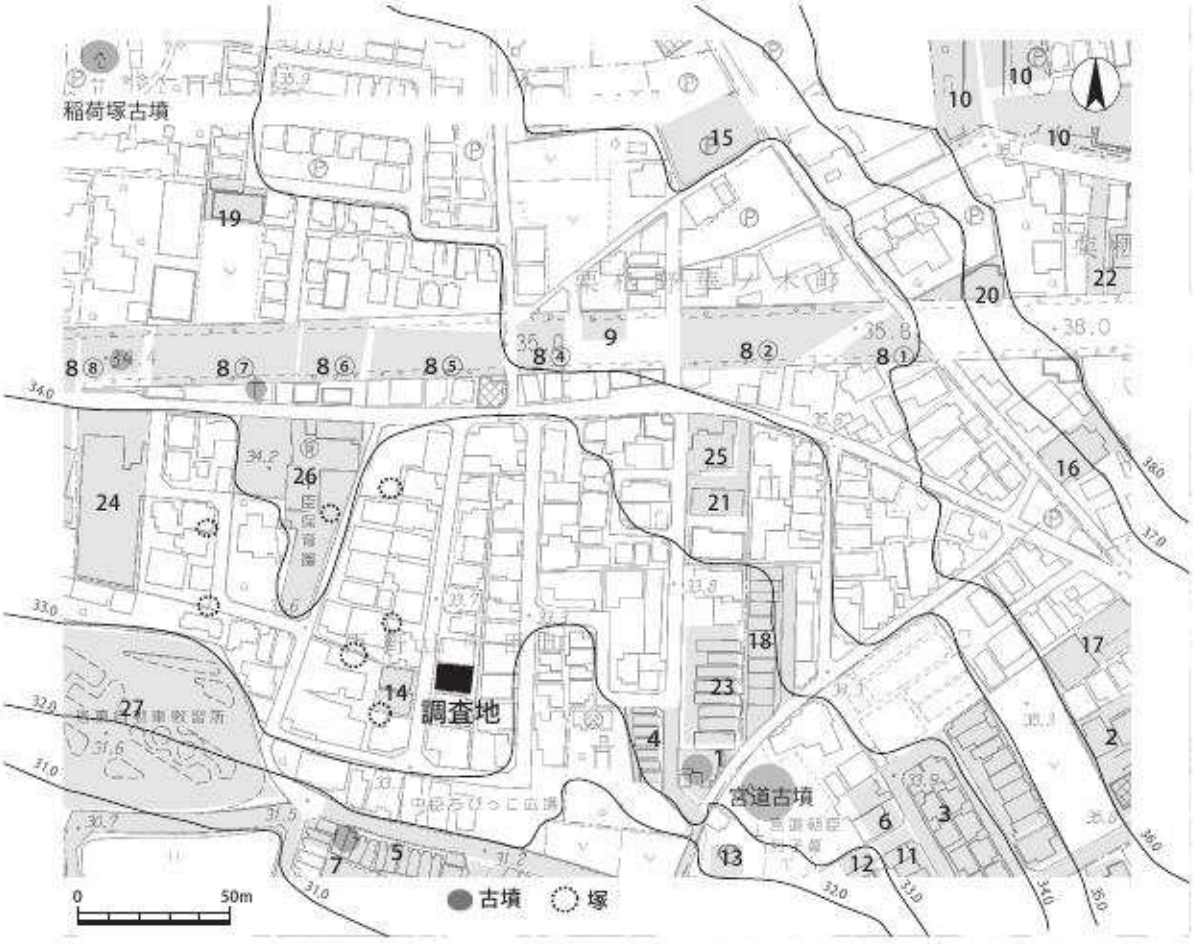


図5　既往の調査位置図（1：2,500）

ここまでを墓域の存続期間に含めると非常に長期となり，些か不自然である。宮道古墳が未調査であるため断定はできないが，宮道氏が宇治郡大領としてこの地域に代々続く勢力であったことを考慮すると，列子を遡る宮道氏のいずれかの墓である可能性がある。

なお調査地周辺には，上記の古墳のほかに昭和30年代に作成された地籍図に「塚」と記された地点がいくつか存在する。今回の調査区至近にはその「塚」とされた盛土状の高まりが３箇所あり，昭和45年に高橋美久二氏が行った踏査や，昭和54年の橘女子大学考古学研究会の踏査によると，その時点で盛土や石材の露出等の存在が認められている。採取遺物には須恵器も含まれていることから，調査地周辺に古墳や当該時期の集落が存在した可能性は極めて高いと考えられる。

（２）周辺の既往の調査成果（図５・表１）

調査地周辺では，これまでに発掘調査が多数行われている（図５・表１）。ここでは主に中臣十三塚が築かれたと推定される古墳時代後期～古代の遺構について概観したい。

調査地より南西へ70ｍ程度隔てた区画では，第59次調査（図５-５）において横穴式石室をもつ円墳が１基検出されている。

なお，その南の区画において行われた第66次調査（図５-7）では，古墳時代後期の溝と柱穴が検出されており，同時期の遺構面がさらに南へ広がることが予測されている。

また，調査地より東へ100ｍ隔てた地点には前述の宮道古墳が存在するが，市道を隔てた西側で行われた第４次調査（図５-1）においても，円墳が１基確認されている。さらにその西側隣接地において行われた第44次調査（図５-４）では，古墳時代後期の掘立柱建物が検出されていることから，古墳を配する墓域のごく近くに建物が設けられていた状況を知る事ができる。この建物の性格は明らかではないが，墓の築造や葬送儀礼に関連するものである可能性も考えられる。

さらに，調査地より北西へ150ｍ程度隔てた新十条通では，道路建設に伴う第70-2次調査（図５-8）において，円墳が２基確認されている。このうち⑧区では，横穴式石室の残存が確認された。古墳の墳丘盛土は失われ，石室の石材は大半が抜き取られた状態での出土ではあるが，墳丘が破壊される前に石室床面にある程度土砂が堆積していたため，ほぼ埋葬当時の状況が保たれていた。石室は片袖式で，玄室とこれに接する羨道が確認でき，一部に閉塞石と思われる人頭大の礫が残されている。石室内から鉄製刀子，馬具，金環，銀環等，玄門付近から須恵器杯身，杯蓋，はそう，短頸壷，高杯，器台等が出土しており６世紀末～７世紀前半に築造された古墳であると考えられる。

このほか，北東へ250ｍ程度隔てた勧修第一市営住宅地内の第74次調査（図５-10）では，地山上面において古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物と，掘立柱建物，柱穴，土坑墓等が検出されている。同地点では弥生時代と古墳時代前期の遺構が確認されていないことから，縄文時代の集落が廃絶した後，古墳時代後期になってから再び集落が営まれたと考えられる。なお，土坑墓からは土師器・須恵器のほか，馬具，鉄製刀子が出土した。このため，この地点でも墓域と建物が近接する状況が追認される。

表1　既往の調査一覧

No	調査番号（調査次数）	調査区	調査期間	種類	調査事由	面積㎡	調査遺構・出土遺物	参考・引用文献
1	（4次）		1971	発掘	住宅建設		弥生中期／方形周溝墓 古墳後期／円墳（横穴式石室） 遺物／弥生土器，須恵器，石鏃，石斧，石包丁，砥石	京都府立洛東高等学校郷土研究クラブ『中臣遺跡発掘調査報告』1971
2	（11次）		19771011 ～ 19771112	発掘	共同住宅建設	345	近世／溝 遺物／土師器，陶器，磁器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和52年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
3	（27次）		19790917 ～ 19791109	発掘	宅地造成	1,795	弥生中期初頭／方形周溝墓 遺物／弥生土器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』2012
4	（44次）		19810202 ～ 19811205	発掘	住宅建設	150	弥生中期前葉／東西溝，土坑墓 古墳後期／掘立柱建物 奈良／掘立柱建物	京都市埋蔵文化財調査センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所『中臣遺跡発掘調査概要』昭和55年度，1981
5	（59次）		19840416 ～ 19840602	発掘	宅地造成	682	古墳後期／円墳（横穴式石室，周溝） 平安前期／竪穴建物，掘立柱建物 遺物／弥生土器，土師器，須恵器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987
6	（64次）		19851101 ～ 19851115	発掘	宅地造成	180	弥生～古墳／土坑 遺物／弥生土器，土師器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』1988
7	（66次）		19860401 ～ 19860526	発掘	宅地造成	326	古墳後期～溝，柱穴 遺物／土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，陶磁器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』1989
8	（70-1次）	①区	19880718 ～ 19880909	発掘	道路建設	1,723	遺構／確認できず　遺物／近世陶磁器，土師器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』1992
		②区					時期不明／土坑，溝　遺物／近世陶磁器，土師器	
		④区					時期不明／柱穴，溝	
		⑤区					鎌倉～室町／土坑，柱穴，溝	
		⑥区					平安中期／掘立柱建物	
	（70-2次）	⑦区					縄文／土坑群	
		⑧区					古墳後期／円墳（横穴式石室，羨道）	
9	（70-4次）	③区	19911122 ～ 19920228	発掘	道路建設	785	遺構／確認できず	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995
10	（74次）	N区 S区	19950612 ～ 19960229	発掘	市営住宅団地立替	7,288	旧石器／石器集中遺構，礫群 縄文晩期／土坑 飛鳥／竪穴建物，掘立柱建物，土溝墓，溝，土坑 平安末～鎌倉／木棺墓 室町／土坑 遺物／ナイフ形石器，石錐，石刀，剥片，縄文土器（早・後・晩），弥生土器（前），石鏃，土師器，須恵器，砥石，鉄製刀子，鉄鏃，馬具，馬歯？，陶磁器，染付，	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』1997
11	（76次）		19970526 ～ 19970612	発掘	宅地造成	230	弥生中期前葉／方形周溝墓，ピット 遺物／縄文土器，弥生土器，土師器，陶器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』1999
12	（78次）		19981021 ～ 19981127	発掘	住宅建設	177	弥生中期／方形周溝墓 古墳後期？／周溝？ 飛鳥／竪穴建物 遺物／弥生土器，土師器，須恵器	（財）京都市埋蔵文化財研究所『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』2000
13	（86次）		20120507 ～ 20120515	発掘	共同住宅建設	153	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査報告』平成24年度，2013
14	（87次）		20131001 ～ 20131010	発掘	住宅建設	30	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡発掘調査報告』平成25年度，2014
15	（90次）		20150721 ～ 20150807	試掘の延長	デイサービス建設	187	近世／土坑，柱穴，ピット 平安／南北大溝 遺物／須恵器，土師器，陶磁器，瓦器，瓦，銭貨，煙管，鉄釘，砥石，馬骨	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成27年度，2016
16	（91次）		20180409 ～ 20180418	発掘	住宅建設	105	近世～近代／落込，溝，井戸，土坑，柱列，整地痕跡 遺物／土師器，陶磁器，染付，土製品，銭，瓦	本書
17	90N379		19900814	試掘	住宅建設	—	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成3年度，1992
18	95N362		19951121	試掘	住宅建設	—	時期不明／不定形土坑	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成7年度，1996
19	89N666		19891212	試掘	倉庫兼住宅建設	—	平安後期／包含層	京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘立会調査概要』1989
20	97N403		19980413	試掘	店舗建設	—	近世／溝，土坑	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成10年度，1999
21	98N508		19990308	試掘	共同住宅	11	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成11年度，2000
22	99N404		19991115	試掘	店舗建設	18	時期不明／東西溝	
23	00N291		20001011	試掘	宅地造成	44	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成12年度，2001
24	05N061		20050506	試掘	宅地造成	18	遺構／確認できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成17年度，2006
25	09N321		20091109	試掘	住宅建設	12	時期不明／柱穴，ピット	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成21年度，2010
26	13N194		20131007	試掘	保育所建設	29	遺構／検出できず	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成25年度，2014
27	16N458		20170117	試掘	店舗建設	165	平安／溝，土坑 近世／湿地状堆積	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成29年度，2018

3．調査成果

（1）基本層序

調査地の現地表面の標高は，T.P.+33.4ｍ程度を測る。前述のとおり，旧地形は北から南へ傾斜するとともに，小谷の入り込みにより東へ下がる。このため，調査区内には東に厚く盛土することで，現地表面が水平となるよう造成されている。基本層序は，盛土，旧耕作土，近世包含層，暗色シルト層，地山である。このうち近世包含層除去面において遺構群を検出した。

調査対象地の東辺部にあたる第１調査区では，GL-0.5ｍまで盛土，-0.7ｍまで旧耕作土，-1.1ｍまで暗色シルト層（黒褐色細砂混じりシルトを主体とする）があり，その下に鈍い黄褐色細砂混じり粘土質シルトの地山が存在する。近世包含層の堆積は削平されて遺存しない。暗色シルト層はきわめて静かな堆積で，撹拌痕跡は認められず，下層付近に巻き上げられた地山ブロックが僅かに混じる程度である。このため土石流や氾濫等のインパクトにより形成されたとは考えにくい。上層の方がより暗色化が顕著であることから，植物等の繁茂があり，かつ人的関与が少ない条件化で形成された土壌と推測される。暗色シルト層の形成時期は不明であるが，その上面において検出した遺構（土坑３）から須恵器甕の小片が出土した。

北西部にあたる第２調査区では，GL-0.4ｍまで盛土，-0.5ｍまで近世包含層，-0.8ｍまで暗色シルト層，その直下において地山を確認した。中央に存在する大規模な撹乱により第１調査区の壁断面とは断絶するが，基本層序はほぼ連続して捉えることができる。第２調査区において初めて確認した近世包含層は，北端部の限られた範囲のみの残存である。

南西部に設定した第３調査区では，GL-1.4ｍまで盛土，-0.4ｍまで近世包含層，-0.8ｍまで黄褐色シルト層(自然堆積）があり，その下層において地山を確認した。ここで確認した黄褐色シルト層は，調査区西端部にのみ残存する土壌で，第１調査区・第２調査区において確認した暗色シルト層の下位構成層にあたる。第３調査区では，暗色シルト層の上面において古代の遺構（溝９）を検出した。

なお東西に位置する既往の調査事例をみると，今回確認した暗色シルト層は，第44次調査において確認されている弥生時代中期前半の包含層に対応する可能性が考えられる。

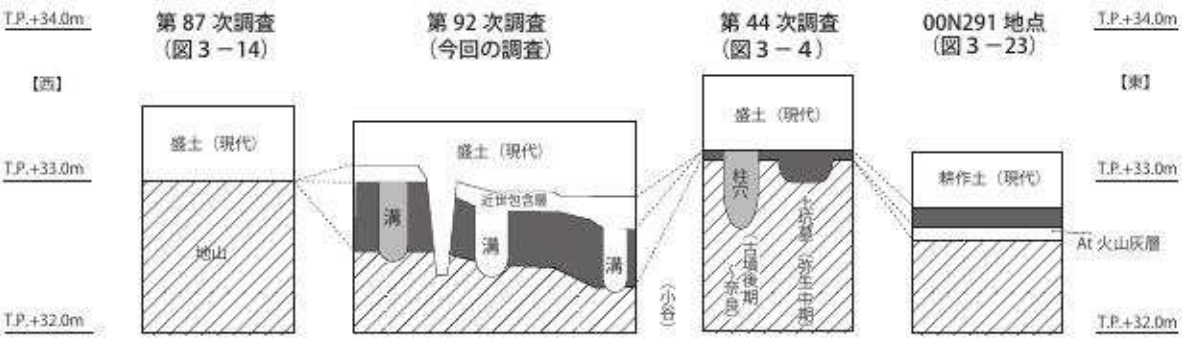
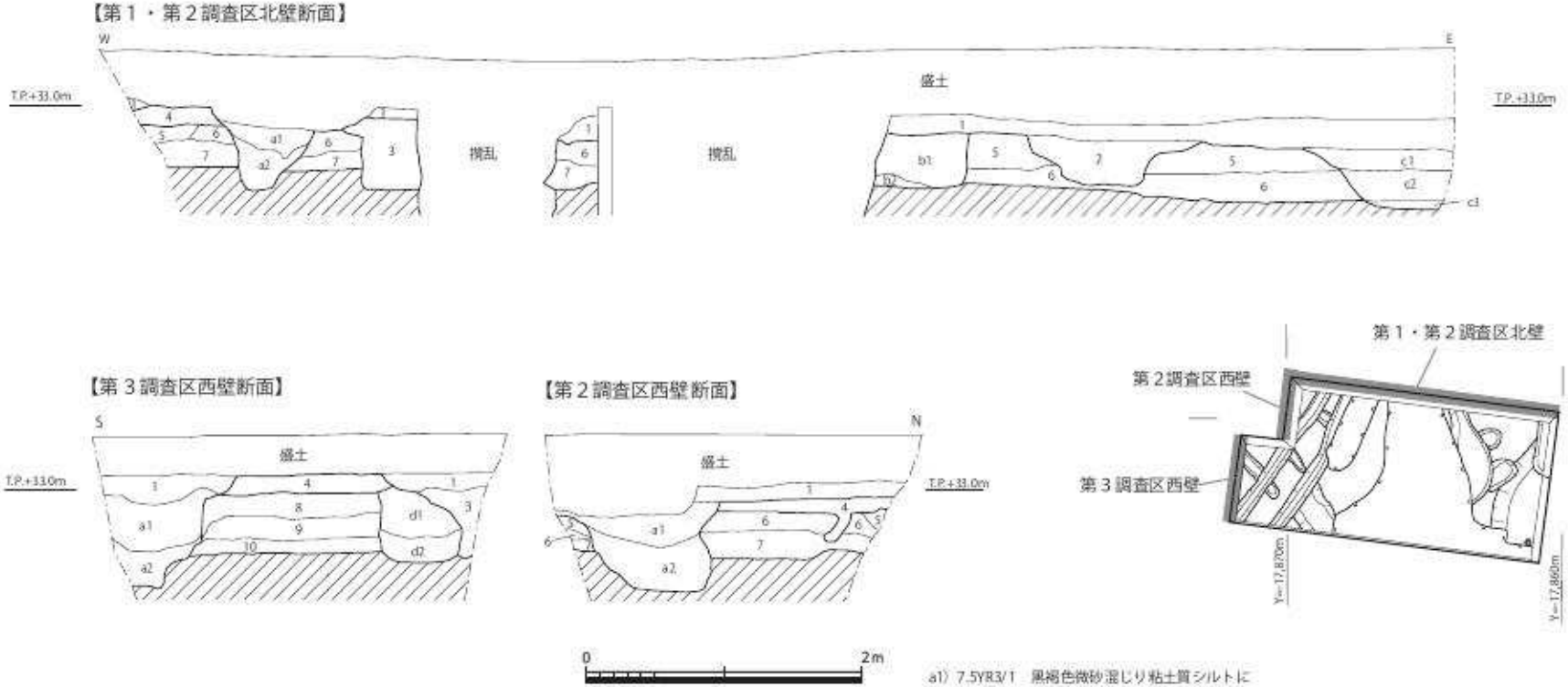


図６　基本層序模式図



1）7.5YR2/2　黒褐色細砂混じり粘土シルトに
　7.5YR4/2　灰褐色シルトブロック 5% 程度入る
　径 2cm未満の礫少量入る　植物遺体入る　やや軟質　ややしまり良い
2）10YR2/1　黒褐色細砂混じりシルト　径 0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い（土坑７）
3）7.5YR2/1　黒色細砂混じりシルト　径 1cm未満の礫微量入る　地山ブロック 1%程度入る　しまり悪い（溝６）
4）10YR2/2　黒褐色微砂混じり粘土質シルトに
　10YR2/1　黒色シルトブロック 20%程度入る　炭化物入る　やや軟質　やや締まり悪い（第１層・近世）
5）10YR2/2　黒褐色細砂混じりシルト　径 1cm未満の礫微量入る　しまり悪い
6）10YR2/3　黒褐色微砂混じりシルト　地山ブロック 1%程度入る　しまり悪い
7）10YR3/3　暗褐色微砂混じりシルト　地山ブロック 2%程度入る　しまり悪い
8）10YR4/4　褐色シルトに
　10YR3/2　黒褐色細砂混じりシルトブロック 10%程度入る　径 2cm未満の礫微量入る　ややしまり良い
9）10YR4/4　褐色シルト～砂質シルト　径 1cm未満の礫微量入る　下位に向かって淡色化　ややしまり良い
10）10YR4/4　褐色シルトに
　10YR4/3　にぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトブロック 10%程度入る　ややしまり良い
地山）10YR4/3　にぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルト　上位暗色化　しまり良い

a1）7.5YR3/1　黒褐色微砂混じり粘土質シルトに
　10YR5/6　黄褐色シルトブロック 1%程度入る　炭化物・陶磁器片・ガラス片入る
　径 1cm未満の礫微量入る　やや軟質　やや締まり悪い（溝７）
a2）10YR2/2　黒褐色微砂混じり粘土質シルト　径 1cm未満の礫少量入る　ガラス片入る　しまり悪い（溝７）
b1）10YR2/1　黒色微砂混じり粘土質シルトに
　2.5Y5/3　黄褐色細砂混じり粘土質シルトブロック 10% 程度入る
　径 2cm未満の礫少量入る　炭化物多量入る　しまり悪い（溝１）
b2）7.5YR5/2　黒褐色細砂混じりシルト　径 2cm未満の礫少量入る　やや軟質　しまり悪い（溝１）
c1）10YR2/1　黒褐色細砂混じりシルト　径 0.5cm未満の礫少量入る　しまり悪い（溝２）
c2）2.5Y4/2　暗灰黄色微砂混じり粘土質シルト　径 0.2cm未満の礫微量入る　軟質　しまり悪い（溝２）
c3）7.5YR5/2　黒褐色細砂混じりシルト　径 2cm未満の礫少量入る　やや軟質　しまり悪い（溝２）
d1）10YR3/2　黒褐色細砂混じりシルトブロック 40% と
　10YR4/4　褐色シルトブロック 40% と
　10YR2/1　黒色粘土質シルトブロック 20%の混合層　径 2cm未満の礫微量入る　ややしまり悪い（溝６）
d2）10YR3/2　黒褐色細砂混じりシルトブロック 20% と
　10YR4/4　褐色シルトブロック 20% と
　10YR2/1　黒色粘土質シルトブロック 60%の混合層　径 2cm未満の礫微量入る　しまり悪い（溝６）

図７　調査区壁断面図（１：50）

（2）遺　構（図8・9）

今回検出した遺構は，溝，土坑，ピット，落込である。遺構はすべて近世包含層除去面において検出した。

土坑1　調査区北西部において検出した大型の土坑である。平面形状は，西半部を撹乱で失うものの，最大径3.0ｍ程度の円形に復原できる。最大深度は0.45ｍ，断面形状は椀形である。埋土は黒色微砂混じりシルトを主体とし，炭化物を一定量含む。土坑3，土坑4とは切りあう関係にある。遺構の性格は不明であるが，近隣の調査例から大型の井戸掘方の一部ではないかと推測される。遺物の出土は確認できていない。

溝2　調査区北東隅において検出した南北に長い遺構である。検出長は南北方向に1.9ｍを測る。断面形状は浅い椀形，最大深度は0.18ｍである。埋土は暗灰黄色粘土質シルトを主体とする。流水痕跡等が認められないことから，土坑状の遺構であると判断した。遺物の出土は確認できていない。

表2　遺構概要表

時代	遺構	備考
近世～近代	溝・落込	溝2，溝6，溝7，落込11
	土坑	土坑1
	ピット	P5
古墳時代後期～古代	溝	溝8，溝9，溝10，溝12
	土坑	土坑3，土坑4

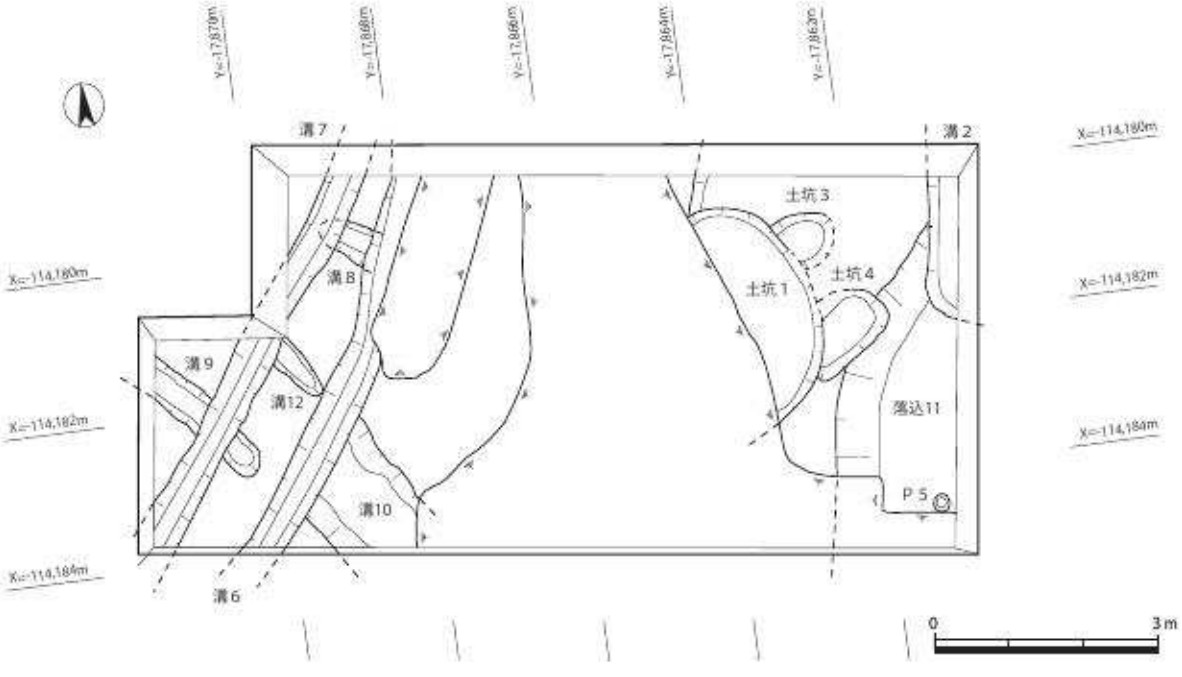


図8　遺構面全体図（1：100）

土坑３　調査区北東部において検出した遺構である。北東－南西方向に主軸をもつ土坑で，西半部を土坑１に切られて失う。平面形状は楕円形を呈していたと見られる。断面形状はいびつな鉢形で，最大深度は0.36ｍを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを主体とし，細かい地山ブロックと炭化物を含む。埋土から，須恵器甕の体部が１点出土した。調整痕から６～７世紀の製品であると判断される。遺構の性格は不明である。

土坑４　同じく土坑１に切られる遺構で，残存状態は非常に悪い。土坑３とほぼ同じ主軸をもつ平面楕円形を呈する土坑である。残存深度は0.1ｍ程度，埋土は土坑３に近似する。遺物の出土は確認できなかった。

ピット５　調査区南東隅において検出したピットである。平面形状は径0.25ｍを測る円形で，残存深度は0.15ｍを測る。埋土は黒色微砂混じりシルトを主体とする。付近の精査を重ねて行ったが，少なくとも対となるような遺構は確認することができなかった。遺物は出土していない。

溝６　調査区西半部において検出した遺構である。北東から南西に向かってやや湾曲しながら延び，調査区外へ続く。下層遺構である溝10と交差する地点に最大幅を有するが，概ね0.4～0.55ｍの溝幅をもって連続する。断面形状は碗形，最大深度は0.5ｍを測る。埋土は黒色細砂混じりシルトを主体とし，一部に巻き上げた地山ブロックを含む。遺構底面は北から南へ向かい緩やかに下がるものの，流水痕跡はほとんど認められない。埋土の状況からは，人為的に埋め戻された様相を呈する。施釉陶器甕（柿釉）の破片と平瓦が１点出土した。近世の遺構である。

溝７　調査区西端部において検出した溝状況である。北東－南西方向に主軸をもち，溝６とはほぼ並行して延びる。断面形状は逆台形で，部分的に壁面がオーバーハングする箇所が認められる。検出長5.6ｍ，最大幅は0.55ｍを測る。埋土は上下に大別できるがともにガラス片等を含む近代の堆積である。溝６を埋め戻した後，新たに掘りなおしたものか。なお，遺構面はこの溝より東へ段をもって大きく下がる。土地割に伴う区画溝と考えられる。

溝８　調査区の北西端で検出した遺構である。溝６と溝７に切られるため全体形状は明らかではないが，北西－南東方向に主軸をもつ溝状に観察しうる。最大幅は0.5ｍ，最大深度は0.18ｍを測る。埋土はブロック土と炭化物を一定量含む。遺物の出土は確認できていない。

溝９　調査区西端において検出した溝状遺構である。溝７に切られるものの，検出長は調査区西端から1.0ｍを測るところで完結する。最大幅0.4ｍ，残存深度は溝７より西で0.5ｍ，東で0.15ｍを測る。埋土はブロック土の混合層で，基盤層である暗色シルトと黒色シルト，地山である黄褐色シルトブロックを細かく含む。埋土から須恵器壷の肩部（もしくは鉄鉢の口縁部）と土師器甕の破片が１点出土した。飛鳥～奈良時代の遺構である。

溝10　調査区西半部において検出した遺構で，北東－南西方向に主軸をもつ溝状遺構である。検出長さ1.5ｍ，最大幅は1.3ｍを測る。残存深度は0.15ｍである。埋土は黒色粘土シルトを主体とする水成層で，溝９，溝12とは主軸をそろえるものの別遺構と判断される。埋土から遺物の出土は確認できていない。

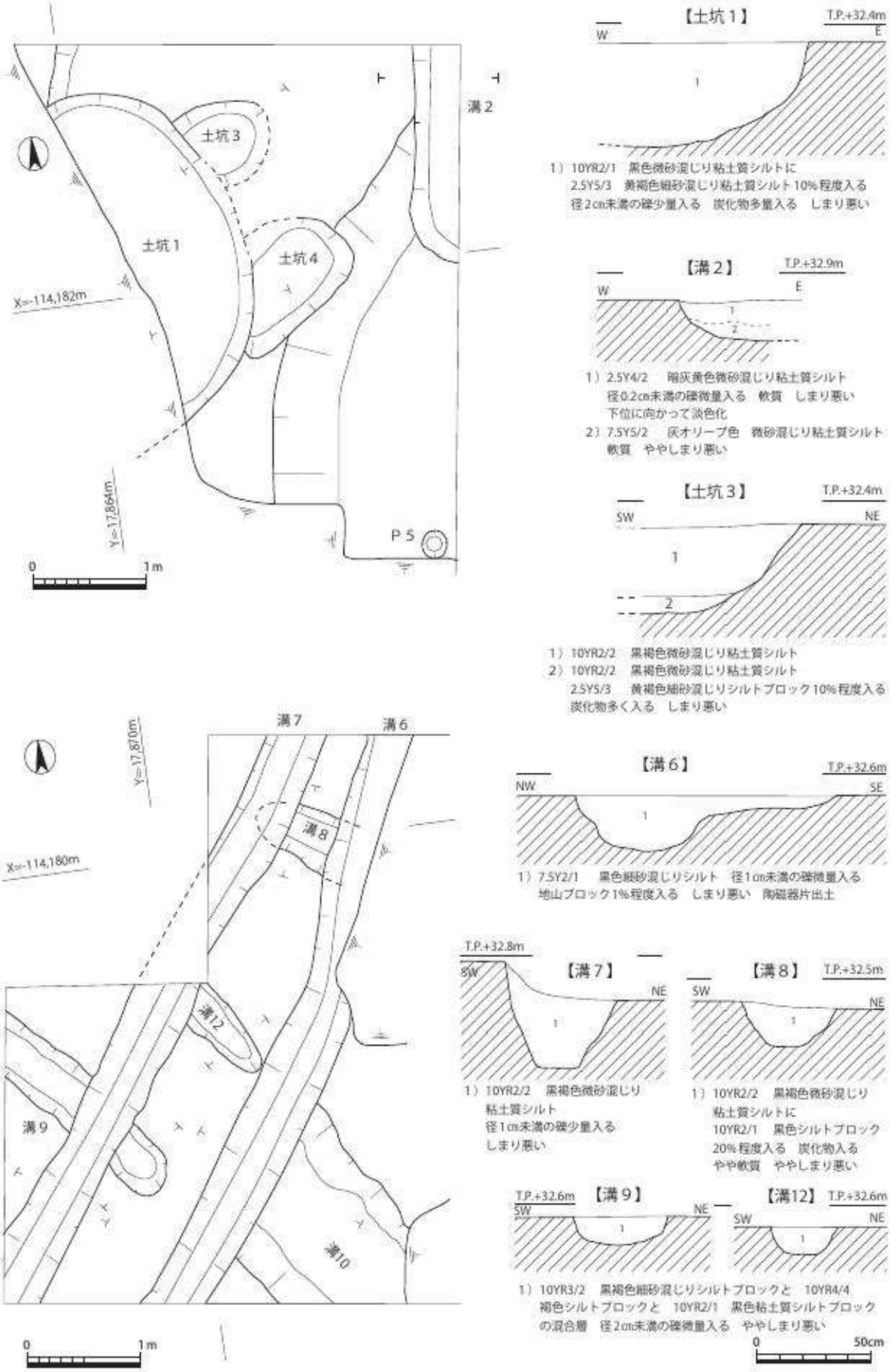


図9　遺構平・断面図（1：50，1：25）

（3）遺　物

今回の調査では，僅かではあるが古墳時代後期～飛鳥時代の遺物が出土した。

1，2は須恵器杯身である。ともに口径10cm程度の小型品で，口縁が外方へ開く器形をもつ。調整は内外面ともにナデ，胎土は良好で焼成は堅緻である。外面には窯内での降灰の付着により濃淡が認められる。7世紀後半の製品である。ともに遺構面検出時に出土した。

3は須恵器壷の体部である。小片であるが，体部下半にヘラケズリが認められる。胎土は精密であるが焼成は甘く，内面はセピア色を呈する。7世紀末～8世紀初頭の製品であろう。溝9埋土より出土した。

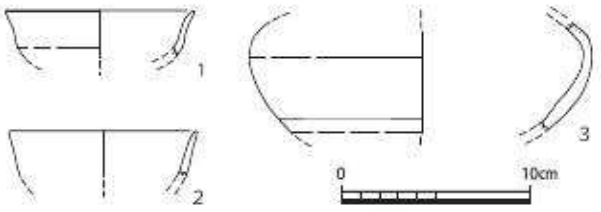


図10　出土遺物実測図（1：4）

表3　遺物概要表

時代	内容	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数	コンテナ合計
古墳時代後期～飛鳥時代	須恵器・土師器	3点			
近世末期～近代	施釉陶器・瓦	0点			
合計		3点（1箱）	0箱	1箱	2箱

4．まとめ

以上，中臣遺跡・中臣十三塚の発掘調査成果について報告した。

今回の調査地では，小谷が及ぼす微地形にあわせて大規模な段造成が成されたため，本来存在するべき包含層が大きく損なわれていた。しかし，ごく僅かではあるが飛鳥時代～奈良時代の遺構の残存を確認したことから，当該時期の集落及び墓域が展開する証左を得ることができた。中臣遺跡の歴史的環境復元を行う上で，一定の成果であると考える。

なお，今回の調査では，下層に存在すると予測された弥生時代の遺構を検出することができなかった。当該時期の集落の広がりを掴む上でも，より周辺の調査が進むことを期待したい。

（黒須　亜希子）

Ⅷ　伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡

1．調査経過

調査地は，京都市伏見区桃山町泰長老所在の近畿財務局桃山東合同宿舎内に位置し，周知の埋蔵文化財包蔵地である「伏見城跡」・「指月城跡」・「泰長老遺跡」に該当する。当該地は，指月城跡の中枢部付近に想定されているものの，遺構の残存状況を含め不明な点が多い。そのため，平成28年度より遺構の残存状況およびその内容を確認する目的で範囲確認調査を実施し，今回の調査は第３次調査である。

今回の調査では，指月城中枢部推定範囲の北側の利用状況を明らかにする目的で５区を，推定範囲南東部の利用状況を明らかにする目的で６区を設定した。調査の結果，指月城跡周辺に特有の方位の溝や，伏見城期の遺物群を検出した。最終的な調査面積は約126㎡である。調査は平成30年8月20日から開始し，9月28日に現地での全ての作業を終了した。なお，9月22日に地元向けの

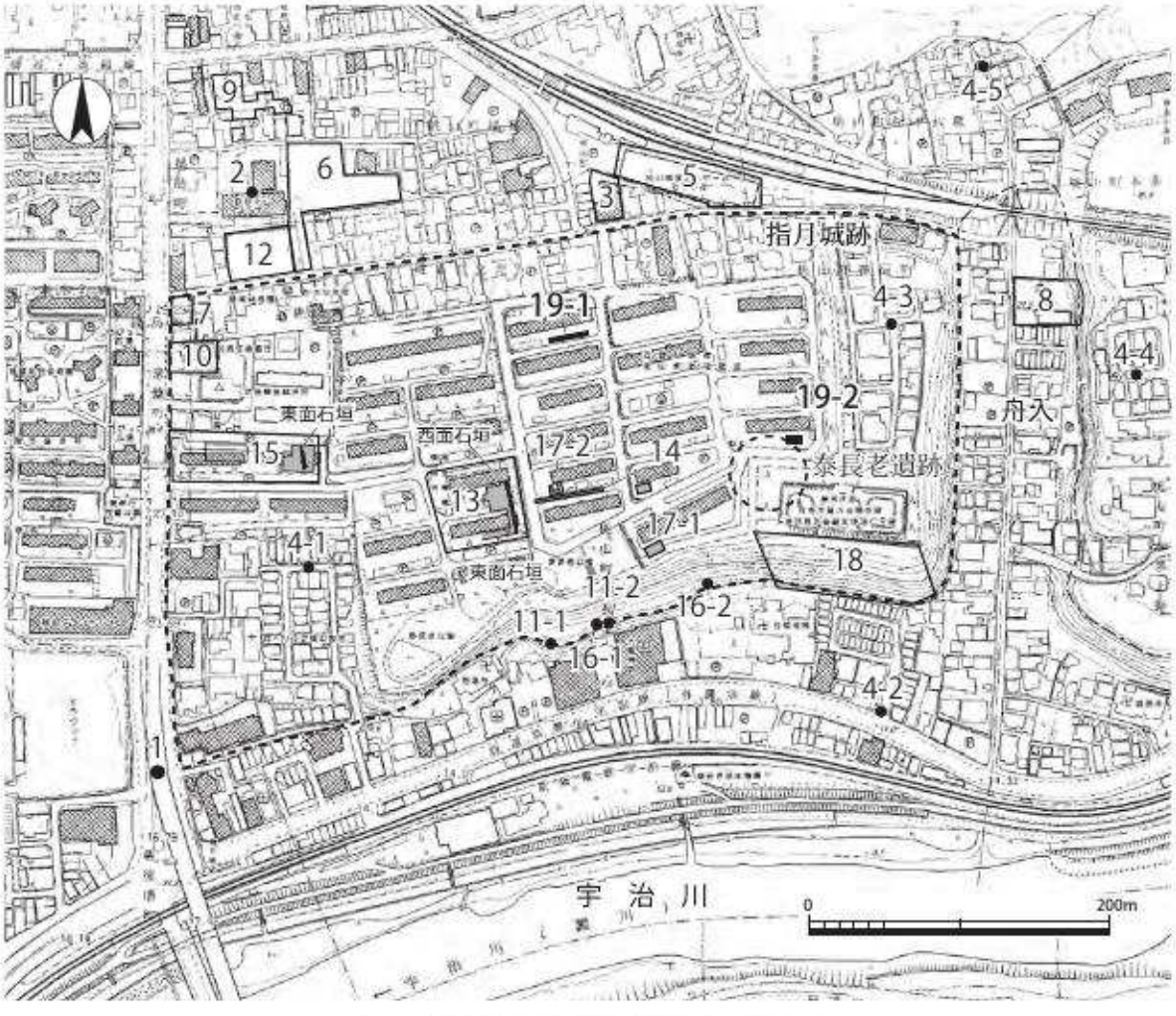


図１　調査地と周辺調査位置図（1：5,000）

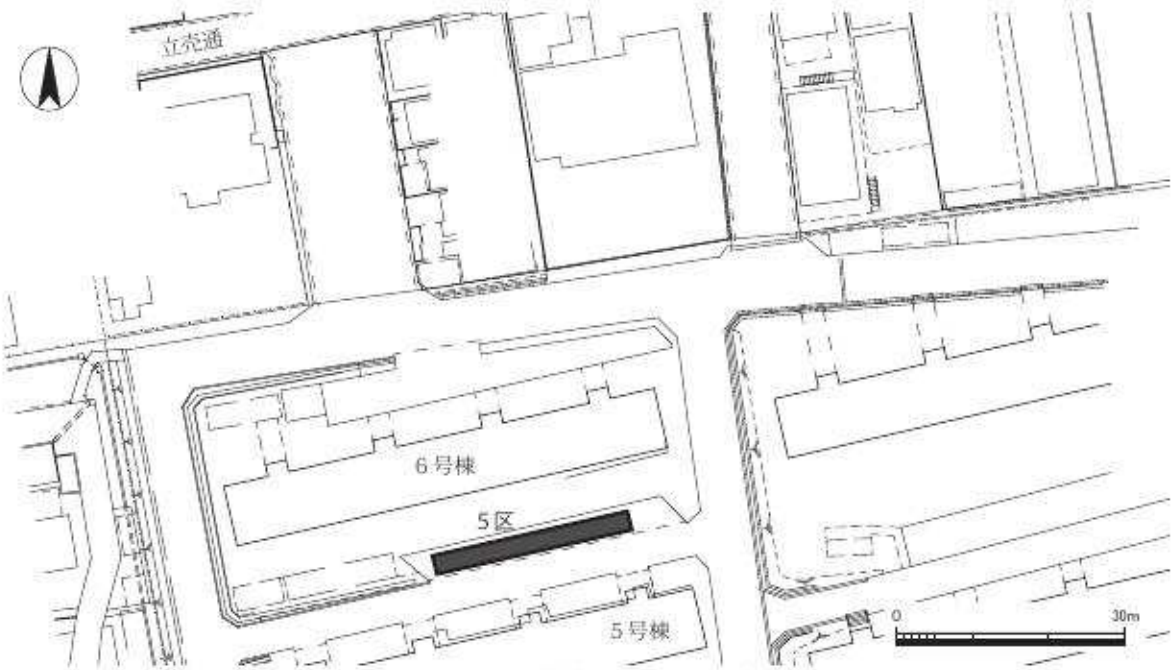


図2　5区配置図（1：1,000）

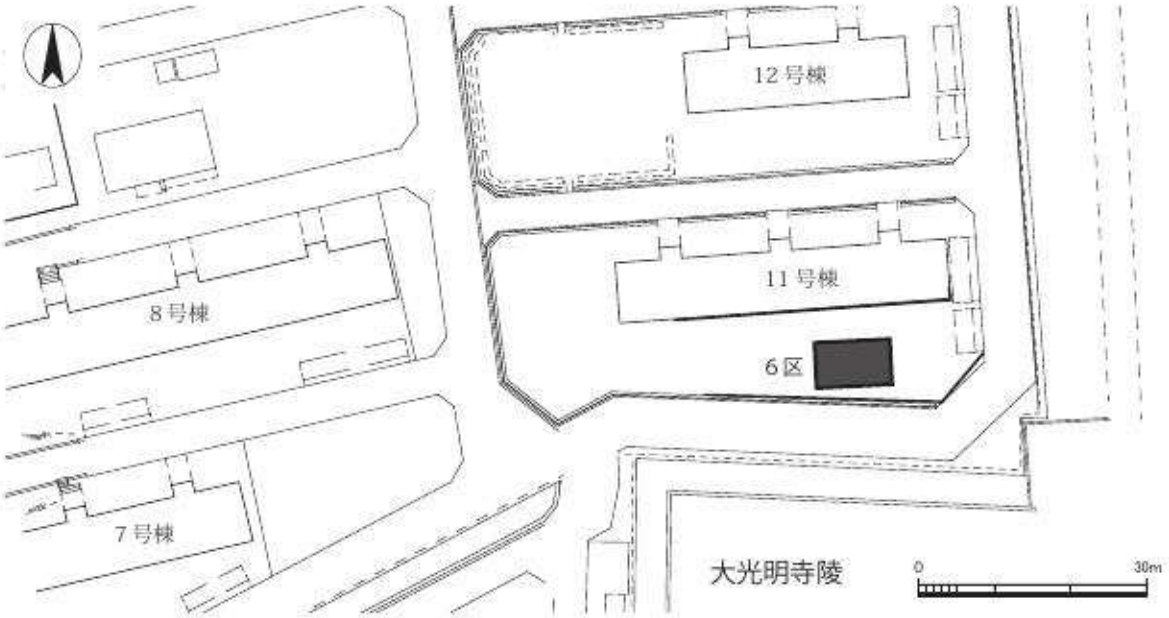


図3　6区配置図（1：1,000）

現地説明会を開催し，約50名の参加を得た。また，調査期間中7名の学生ボランティアを受け入れた。

2．遺　跡

（1）立地と歴史的環境

調査地は，桃山丘陵南端の丘陵上に位置する。現在の標高は5区で38.0m前後，6区で41.3m前後である。調査区を設定している近畿財務局桃山東合同宿舎敷地の南側は宇治川に面した急峻な斜面であり，高低差は約25mある。

図４　５区調査前全景（東から）

図５　６区調査前全景（東から）

図６　調査風景（北東から）

図７　近隣説明会風景（南東から）

近隣では，伏見城築城以前の遺構検出例は多くないが，埴輪などの古墳に関わる遺物が複数地点で確認されており，丘陵地にかつて古墳が存在したことが推察されている[1]。６区は遺跡地図上において，古墳時代の貝塚とされる泰長老遺跡の範囲を一部含んでいる。この遺跡は昭和11年に陸軍工兵隊作業場に掘られた塹壕内で，藤岡謙二郎・星野猷二両氏が不時発見した貝塚であり[2]，詳細は明らかではない。しかし，星野氏が記した貝塚の発見地点は，遺跡地図の範囲よりも西側の現在の泰長老公園あたりのようである。また，平安時代には橘俊綱の山荘が営まれ，その後白河上皇領となって以降，皇室，とりわけ持明院統に伝領された。その中で，後白河上皇の御所や後深草上皇の「伏見殿」が造営され，南北朝時代に光厳上皇らが居住した後，伏見宮家へと伝領される。調査地南東に位置し，現在，光明天皇，崇光天皇の御陵および治仁王の墓とされる大光明寺陵は，伏見殿と関連して営まれた大光明寺の旧地が当地であったと考えられていたことから，幕末から大正期に順次治定されたものである[3]。

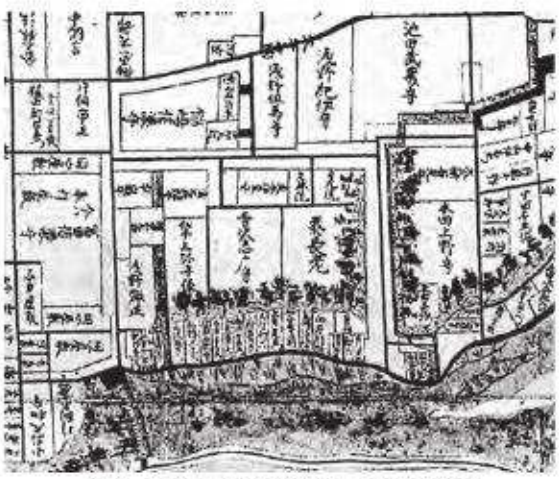


図８　「伏見古御城絵図」調査地周辺

伏見城の歴史は，文禄元年（1592），甥の秀次に関白職を譲った豊臣秀吉が指月丘に隠居屋敷を構えたことに始まり，４つの時期に分けて理解されている。すなわち，第１期（豊臣期指月屋敷），第２期（豊臣期指月城），第３期（豊臣期木幡山

城），第４期（徳川期木幡山城）[4]である。文禄２年（1593），大坂城に秀頼が誕生すると，秀吉は伏見に転居し，文禄3年（1594）正月から屋敷の大幅な改修を開始する【第２期】。また，文禄の役終結のために来日する明の使節との接見に合わせ，さらに豪華に修築を行なった。しかし，文禄５年（1596）閏七月十三日に発生した大地震（慶長伏見地震）によって，完成して間もない指月城は倒壊した。秀吉は本丸を木幡山に移し，ただちに城の再建を開始する【第３期】。秀吉は，慶長３年（1598）に亡くなるまでこの城で晩年を過ごした。秀吉亡き後，徳川家康が大老の名目で入城していたが，慶長５年（1600），関ヶ原の戦いの前哨戦で焼失してしまう。関ヶ原の戦いで勝利し政権の座についた家康は，伏見城の再建に取り掛かった【第４期】。慶長８年（1603）には，家康はこの城で征夷大将軍宣下を受けることになる。大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡すると，伏見城はその役割を終え，元和９年（1623）に三代将軍家光がこの地で将軍宣下を受けた後は，廃城となった。

指月城の範囲は，南北約250m・東西500mに復元する案[5]と，南北約250m・東西約400mに復元する案[6]が存在する。今回の調査地は，第１・２期伏見城の中枢部に位置する。城が木幡山に移って以降（第３・４期）は大名屋敷地になったと考えられ，「伏見古御城絵図」（図７）[7]には，当該地付近西側に「寺沢志摩守（初代唐津藩主・寺沢広高）」，東側には「泰長老（相国寺の僧侶・西笑承兌）」の屋敷が描かれる。伏見城廃城後の土地利用に関する詳細は不明だが，明治初め頃には畠になっていたようである。明治27年（1894）には練兵場，大正～終戦までは工兵隊作業場として塹壕掘りなどが行なわれていた[8]。戦後，1960年代後半から団地が立ち並び，ほぼ現在の景観となった。

（２）周辺の調査（図１・表１）

指月城の中枢部には団地や陵墓などが存在することから，面的な調査に限界があるが，地形の観察や近隣の調査事例をもとに復元が進められている。以下で，主要な調査を紹介する。No.３では，指月城の北堀北肩と考えられる落込み９）が確認された。一方，その北東にあたるNo.５では木幡山城期の遺構の下層では遺構が確認されず，指月城の堀の外にあたると考えられている。No.７では，指月城北西角と推定される石垣が確認され，その北側は北堀と想定される。No.13-1では，西面石垣（東側石垣）と東面石垣（西側石垣）が確認された。西側石垣は，出土状況から慶長伏見地震で倒壊した指月城の石垣と想定される。東側石垣は，No.13-2の調査成果から，地震後の整地以降に建てられた大名屋敷に伴う石垣と考えられる。No.15では堀に伴う東面石垣を良好な状態で検出した。堀の中から木製品や瓦が出土しており，地震後に埋められたと推定されている。南斜面地で実施したNo.16-1では，崖の裾部で南面石垣を検出し，No.16-2では裏込めと造成土を確認した。No.18の測量調査では竪堀状の遺構を確認しており，南側斜面部に遺構が遺存していることが近年の調査で判明してきている。

平成28年度から文化財保護課で実施している指月城跡の範囲確認調査では，桃山町泰長老の地内で伏見城期の遺構を検出している。平成28年度に実施したNo.14では，伏見城期の造成土と北

表1　近隣調査事例一覧（図1に対応）

No.	調査年度	調査方法	所在地：伏見区	調　査　概　要	文献番号
1	1974	発掘	豊後橋町地内	東西方向の石垣および旧路面，金箔瓦を含む土坑を確認。	1
2	1978	発掘	桃山町鍋島2-1他	伏見城期の整地層，室町時代前期の遺構面を確認。	2
3	1987	発掘	桃山町立売21-4	焼土層を挟んで，桃山時代の２面の遺構面を確認。築地状遺構を境に南と北で様相が異なる。２面目下層で，大規模な落込みを確認。水分の多いシルト層で，桃山時代に埋没していることが判明。	3
4	1989	立会	桃山町泰長老地内他	4-3で包含層と地山，4-2・5で舟入りに関連する湿潤な堆積を確認。	4
5	1999	発掘	桃山町立売1-6他	江戸時代の立売通路面と北側溝，立売通に面した町屋の跡，町屋と武家屋敷の境界を示す石垣の痕跡を確認。また，慶長10年の火災面を確認し，町屋が火災によって焼失したことが判明。	5
6	2006	試掘	桃山町立売44他	伏見城期の造成土を確認。	6
7	2009	詳細	鍋島町24	北と西に面をもつ石垣の北西角を確認。石垣の北側は堀と推定される。	7
8	2009	試掘	桃山町本多上野9-1	濠状遺構及び斜面の造成過程，郭を三箇所確認。	8
9	2013	発掘	桃山町鍋島1-1	掘立柱建物５棟などを確認。武家屋敷の一部か。	9
10-1	2014	試掘	桃山町泰長老179-1他	石垣の裏込めと考えられる石材と造成土を確認。	10
10-2	2015	詳細	同上	10-1の補足調査。２面の遺構面を確認。各面で成立する土坑を確認。	10
11	2015	詳細	桃山町泰長老地内	金箔瓦を含む土坑を確認。	11
12	2015	試掘	桃山町立売44-1	町屋と武家屋敷を区切る段差を確認。	12
13-1	2015	発掘	桃山町泰長老176-6	西面する石垣（東側石垣）と，東面する石垣（西側石垣）の２時期の石垣などを確認。	13
13-2	2015	詳細	同上	13-1の補足調査。西側石垣の裏込めを確認。西側石垣の上面を造成土が覆っていること，東側石垣を構築するための造成土中に金箔瓦が含まれることなどを確認。	13
14	2016	発掘	桃山町泰長老地内	伏見城期の造成土，石垣，旧地表面を確認。	14
15	2016	発掘	桃山町泰長老176-5他	東面する石垣と堀を確認。石垣は最大７段の石が残存し，長さ14.5m以上，高さ2.8m以上である。	15
16	2017	詳細	桃山町泰長老地内	16-1で石垣を、16-2で伏見城期の造成土を検出。	16
17	2017	発掘	桃山町泰長老地内	17-1で伏見城期の造成土と土坑・溝などを検出。17-2で溝を検出。	17
18	2017	測量	桃山町泰長老地内	大光明寺陵南側の斜面を測量。	18
19	**2018**	**発掘**	桃山町泰長老地内		**本章**

面石垣を確認した。また，平成29年度のNo.17-1地点では，伏見城期の造成土や土坑，溝などを検出している。

指月城は現状地形からも，南は宇治川に面した斜面，東は大規模な舟入で城域を画しており，発掘調査成果から北側には堀が存在したと考えられる。一方，内部構造については不明な点が多く，近年確認された石垣などが復元のための重要な資料となる。

3．遺　構

遺構は将来的な再検証に備え，完掘せずに畔を残したものや，断割りにとどめたものも多い。そのため，規模や深さについては掘削した範囲において確認できた数値である。遺構番号は５区，６区でそれぞれ１から付している。また，掘削後の再検討等によって，遺構番号には欠番が生じているが，調査段階の番号をそのまま用いている。以下，５区，６区の順に，主要遺構について報告する。

（１）５区（図９・10）

基本層序

調査前の地表面は，標高約38.0mで西から東へとわずかに高くなる地形である。アスファルト・砕石を含め，現地表面化0.15～0.2mが現代盛土である。現代盛土直下で成立する土坑等も複数確認しているが，これらは陸軍練兵場段階から団地造成までに掘り込まれたものであろう。その下層には地点によって土質は異なるものの，0.15～0.45m程度の堆積が全体に確認できる。礫の多い土質で，近代の盛土の可能性が高い。調査区東側には，GL-0.2～0.4m程度で灰褐色シルト層（21層，図10アミ掛け範囲）が広がる。この層には土師器の細片や小礫が含まれ，整地層であると考えられる。土師器は小片のため，判断が難しいが13～14世紀ごろとみられるものもある。GL-0.6～0.7mで，遺物を含まない黒褐色シルト層（22層）が調査区全体に広がり，地山の可能性があるが，断定できない。その下層では浅黄色から黄褐色のシルト層となる。遺構検出は21層の確認できた範囲では21層上面で，この層のない範囲では22層上面でおこなった。

遺　構

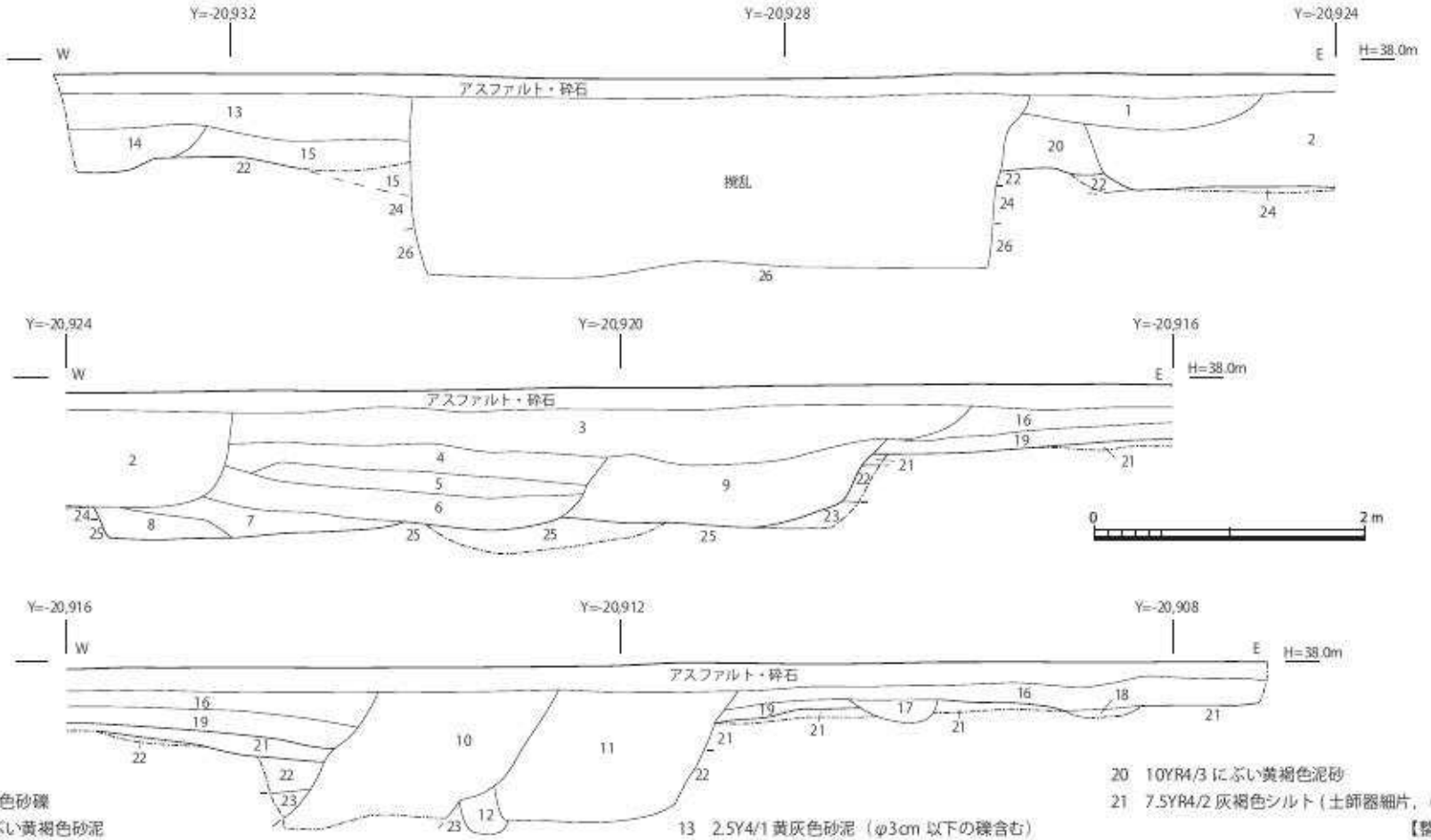
５区では15基の遺構を検出した。以下，主要なものについてその概略を記す。

SX1　調査区中央西寄りで検出した土坑状の遺構である。東西３m弱，南北1.2mで検出し，北側は調査区外となる。検出面からの深さは約0.2mだが，北壁では表土直下から0.7m程度掘り込まれていることが確認できる。

SX2-4・5　調査区中央付近で検出した落ち込み群である。土質の違いによって，３基の遺構としたが，SX2-4は単一の落ち込み内に埋土が斜めに堆積したものを平面的に分離して検出した可能性が高い。北壁７・８層も一括して取り扱っている。なお，SX2はSX1に切られることから北壁断面に

表２　遺構概要表

時　代	５区遺構	６区遺構
桃山時代以前	整地層	Pit16
伏見城廃城以降	SX1・2-4・5, SK6・8・9, Pit10・11・12, SD14	SX9・12・18・19, SD10・21・22・23・26・27, Pit24・28



1　2.5Y4/1 黄灰色砂礫
2　10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥（φ1 ～ 3cm の礫含む）【SX1】
3　10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥（弱粘性あり）
4　7.5YR4/3 褐色泥砂 ┐
5　10YR6/6 明黄褐色泥砂 ├【SX4】
6　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 ┤
7　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 ┘
8　10YR4/2 灰黄褐色泥砂【SX4】
9　10YR6/4 にぶい黄橙色砂泥（φ5cm の礫含む）【SX5】
10　10YR7/3 にぶい黄橙色砂泥【SK8】
11　10YR6/6 明黄褐色砂礫【SK9】
12　10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥
13　2.5Y4/1 黄灰色砂泥（φ3cm 以下の礫含む）
14　2.5Y5/1 黄灰色砂泥（小礫含む）
15　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂（φ3cm 以下の礫含む）
16　10YR7/6 明黄褐色砂泥（礫含む）
17　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト【Pit11】
18　7.5YR5/4 にぶい褐色シルト【Pit12】
19　10YR4/1 褐灰色泥砂（炭化物含む）
20　10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
21　7.5YR4/2 灰褐色シルト（土師器細片，小礫含む【整地層か】
22　7.5YR3/2 黒褐色シルト
23　2.5Y7/3 浅黄色シルト
24　10YR5/6 黄褐色泥砂
25　2.5Y7/3 浅黄色シルト（φ2 ～ 5cm の礫含む）
26　2.5Y7/6 明黄褐色砂泥（φ5cm 以下の礫多量に含む，粘性あり）

図9　5区北壁断面図（1：50）

は現れない。出土遺物は，17世紀前半の大名屋敷時代のものが大半であるが，上層（図9-3層）の東側の落ちから，SX5の落ち（同9層）が連続的である。本来的には表土直下からの全体をひとつとする掘り込みで，埋め戻しの単位が異なっている可能性もある。その場合には陸軍練兵場・作業場段階の掘り込みとなろう。

SK6　調査区中央南側で検出した土坑である。東西2m，南北1mの範囲で検出し，南側は調査区外となる。約0.75mで底に達するが，東側には大きくオーバーハングしていく。安全確保のため，東側は完掘していない。表土直下から掘り込まれていることが壁面で確認できることから，陸軍の練兵場・作業場であった時期に掘削されたと考えている。

SK8　調査区東側の北壁際で検出した土坑である。SK9を切る。検出時点では東西1.2m，南北0.4m程度であったが，掘削を進めると，西側に大きくオーバーハングしていき，少なくと0.7mは西に広がっていることを確認している。安全確保のため，完掘していないが，壁面で表土直下からの掘り込みが確認できることから，陸軍による掘り込みの可能性が高い。

SK9　調査区東側の北壁際で検出した土坑である。SK8に切られる。東西1.6m，南北0.7m程度であり，深さは検出面から0.75m，壁面では1.0m程度である。表土直下から掘り込まれており，陸軍練兵場時代以降のものと考えている。

Pit10　調査区東側で検出したピットである。撹乱によって切られ，南半は遺存せず，東西0.35m程度の大きさである。検出面から0.15m程度の深さで，柱当たりは確認できなかった。

Pit11・12　調査区東端近くで検出したピットである。単層で，柱当たり等は確認できない。上層（図9-16層）は近代の造成土と見ており，古い段階のものではないと考えている。

SD14　調査地中央付近，SX1の下層で検出した溝である。SX1の東際よりも西側に位置することから，SX2との間に切り合い関係は生じない。北壁では埋土を確認することができず，検出範囲と北壁との間でSX1の底よりも浅くなるか，遺構が消滅するかのいずれかであろう。

（2）6区（図11～15）

基本層序

調査区の現地表面は標高約41.2mである。現地表面下1.0m前後は地盤改良をおこなった団地造成段階の盛土で，その下0.2mの褐色泥砂層（1層）も団地造成盛土の可能性が高い。第1面は1層上面に設定した。1層下面からは，近代と考えられる盛土が0.7～0.9m程度堆積しているが，調査区南東隅にのみ近代盛土とは異質な褐色シルト層（南壁12層，東壁13層）が残る。この褐色シルト層は面的な広がりが追えず，第2面の遺構は地山上面で検出したが，Pit16がこの層上面で成立していることが壁面で確認できるため，本来はこの層上面に遺構が展開していた可能性もある。近代の盛土上面は，南側に位置する大光明寺陵内の地表面レベルに近く，大光明寺陵の整備や，それに近い時期におこなわれたものと見ている。地山はGL-1.8m，標高約39.5mで検出しており，上述した通り，この上面を第2面として調査を進めた。

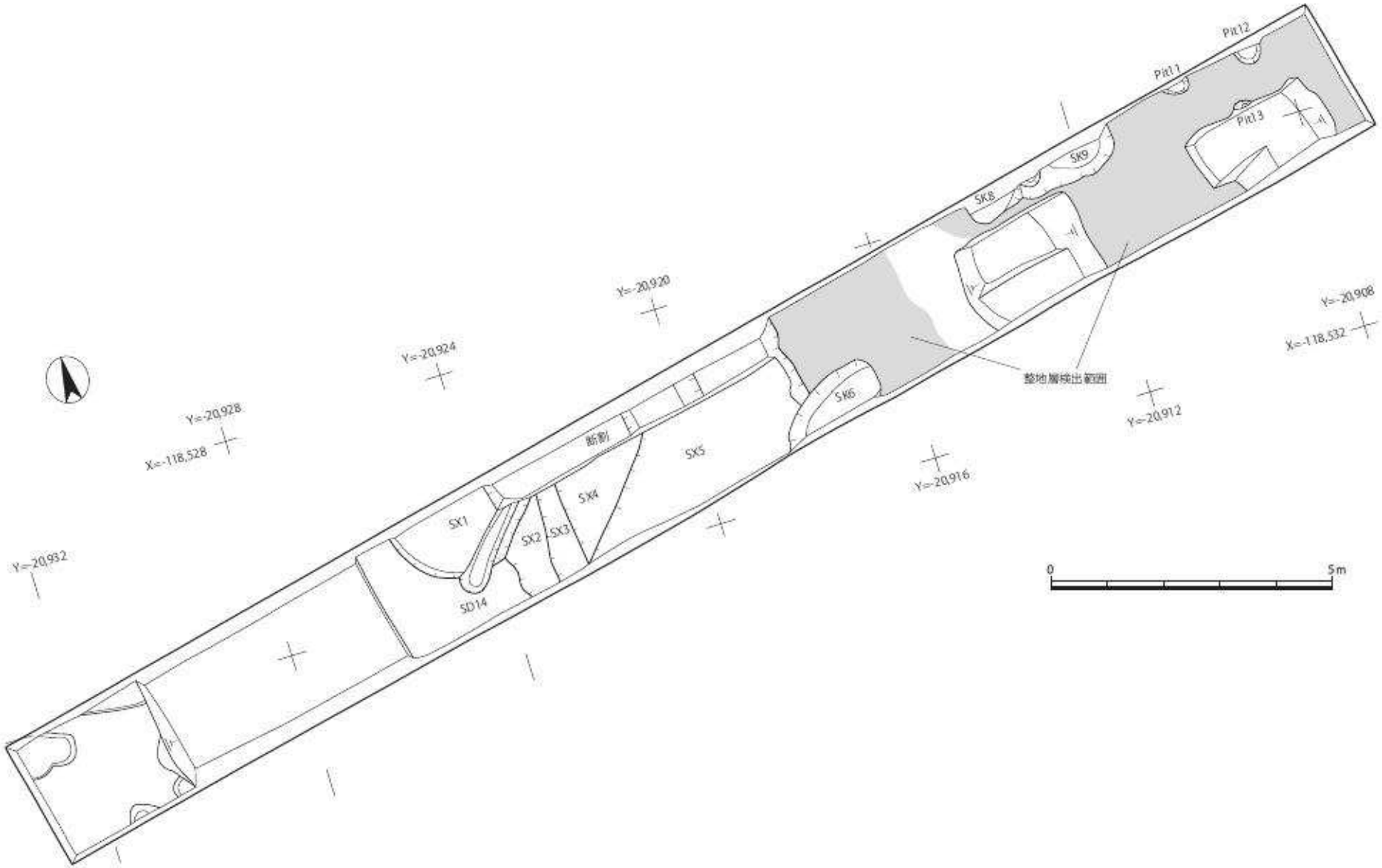
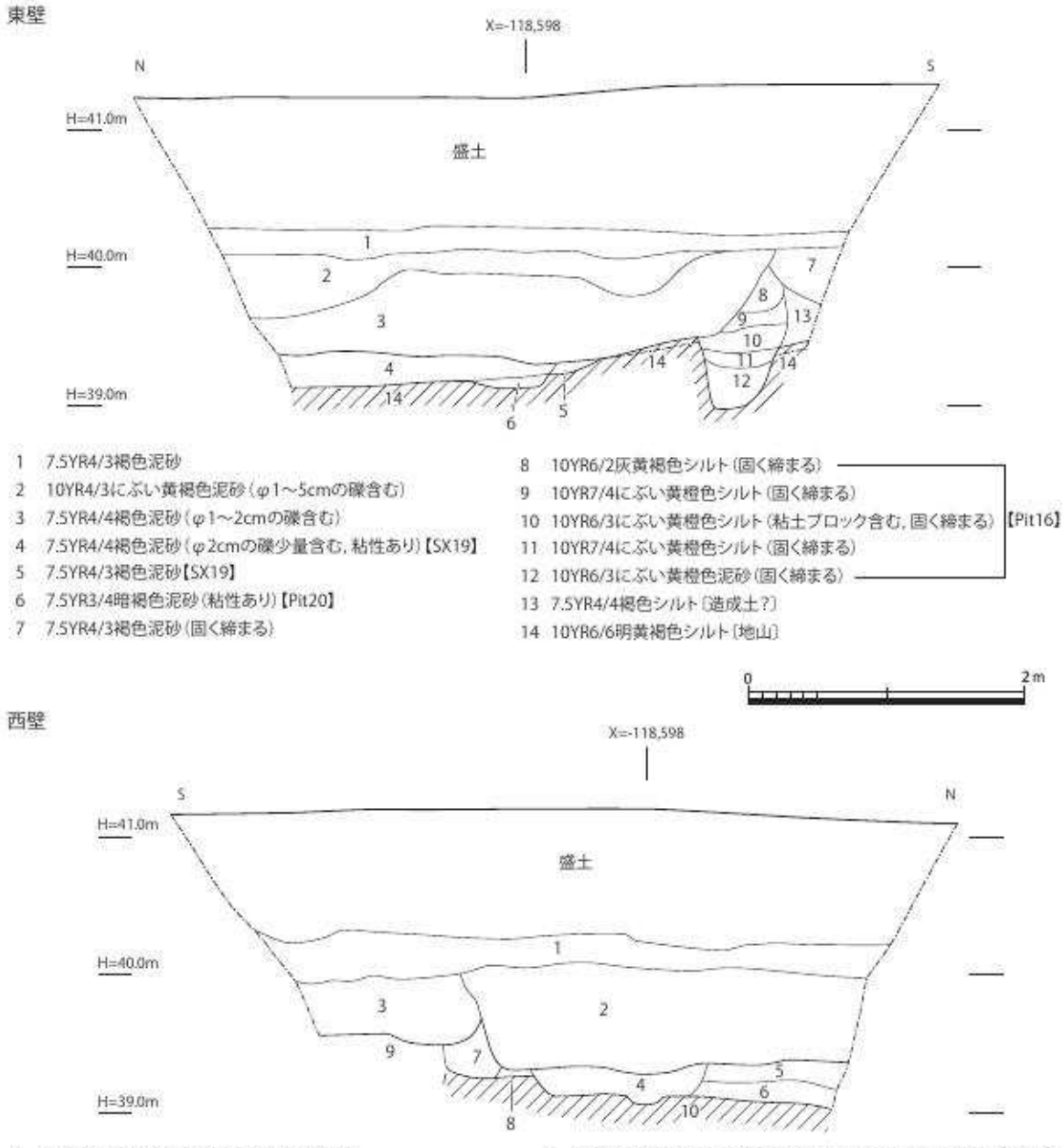


図10　5区平面図（1：100）

遺　構

6区では第1面で8基，第2面で20基の遺構を検出した。第1面の遺構は調査の結果，近代以降のものであることが判明したため，第2面の主要遺構について，その概略を記す。

SX9・SX19　SX9は調査区北西で検出した落ち込みであり，SX19は調査区北東で検出した落ち込みである。それぞれ，西壁および東壁の堆積状況から，宅地化以前の盛土単位のひとつであることが分かる。これらの下層で検出したSX18に切られるSD21からは江戸時代後期と考えられる陶磁器が出土しており，盛土は明治時代前後におこなわれた可能性が高い。



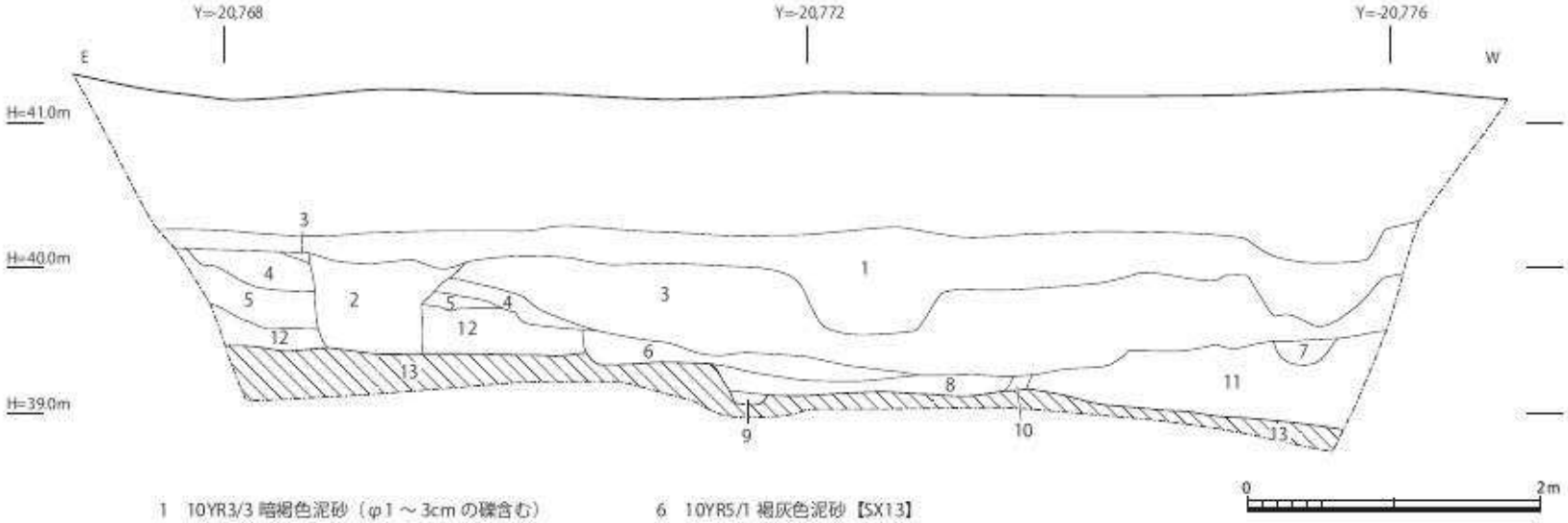
東壁

1　7.5YR4/3褐色泥砂
2　10YR4/3にぶい黄褐色泥砂（φ1～5cmの礫含む）
3　7.5YR4/4褐色泥砂（φ1～2cmの礫含む）
4　7.5YR4/4褐色泥砂（φ2cmの礫少量含む，粘性あり）【SX19】
5　7.5YR4/3褐色泥砂【SX19】
6　7.5YR3/4暗褐色泥砂（粘性あり）【Pit20】
7　7.5YR4/3褐色泥砂（固く締まる）
8　10YR6/2灰黄褐色シルト（固く締まる）
9　10YR7/4にぶい黄橙色シルト（固く締まる）
10　10YR6/3にぶい黄橙色シルト（粘土ブロック含む，固く締まる）【Pit16】
11　10YR7/4にぶい黄橙色シルト（固く締まる）
12　10YR6/3にぶい黄橙色泥砂（固く締まる）
13　7.5YR4/4褐色シルト〔造成土？〕
14　10YR6/6明黄褐色シルト〔地山〕

西壁

1　10YR4/4 褐色泥砂（φ1～4cm の礫含む）
2　7.5YR3/4 暗褐色泥砂（酸化鉄，φ1～3cm の礫含む）【SX9】
3　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（粘質土，φ1～10cm の礫含む）
4　7.5YR4/3 褐色泥砂（粘性あり，φ1～7cm の礫含む）【SX18】
5　7.5YR3/3 暗褐色砂泥（粘性あり）【SX18】
6　7.5YR3/4 暗褐色砂泥（粘性あり，φ5cm 以下の礫含む）【SX18】
7　7.5YR3/3 暗褐色泥砂（粘性あり，φ1～3cm の礫含む）【SD10】
8　7.5YR4/3 褐色砂泥（砂礫含む）
9　7.5YR5/2 灰褐色砂泥（7.5YR5/6 明黄褐色泥砂のブロック含む）
10　10YR6/6 明黄褐色シルト〔地山〕

図11　6区東壁・西壁断面図（1：50）



1　10YR3/3 暗褐色泥砂（φ1 ～ 3cm の礫含む）
2　7.5YR3/4 暗褐色砂泥
3　7.5YR4/4 褐色砂泥（φ1 ～ 3cm の礫含む）
4　10YR7/6 明黄褐色シルト
5　7.5YR4/3 褐色泥砂（φ1 ～ 3cm の礫含む）
6　10YR5/1 褐灰色泥砂【SX13】
7　7.5YR4/2 灰褐色泥砂【SD10】
8　7.5YR4/3 褐色泥砂【SD21】
9　7.5YR4/4 褐色砂泥【SD23】
10　7.5YR4/4 褐色砂泥【SD22】
11　7.5YR5/2灰褐色砂泥（7.5YR5/6明黄褐色粘質土ブロック含む）【SX12】
12　7.5YR4/4褐色シルト
13　10YR6/6明黄褐色シルト〔地山〕

図12　6区南壁断面図（1：50）

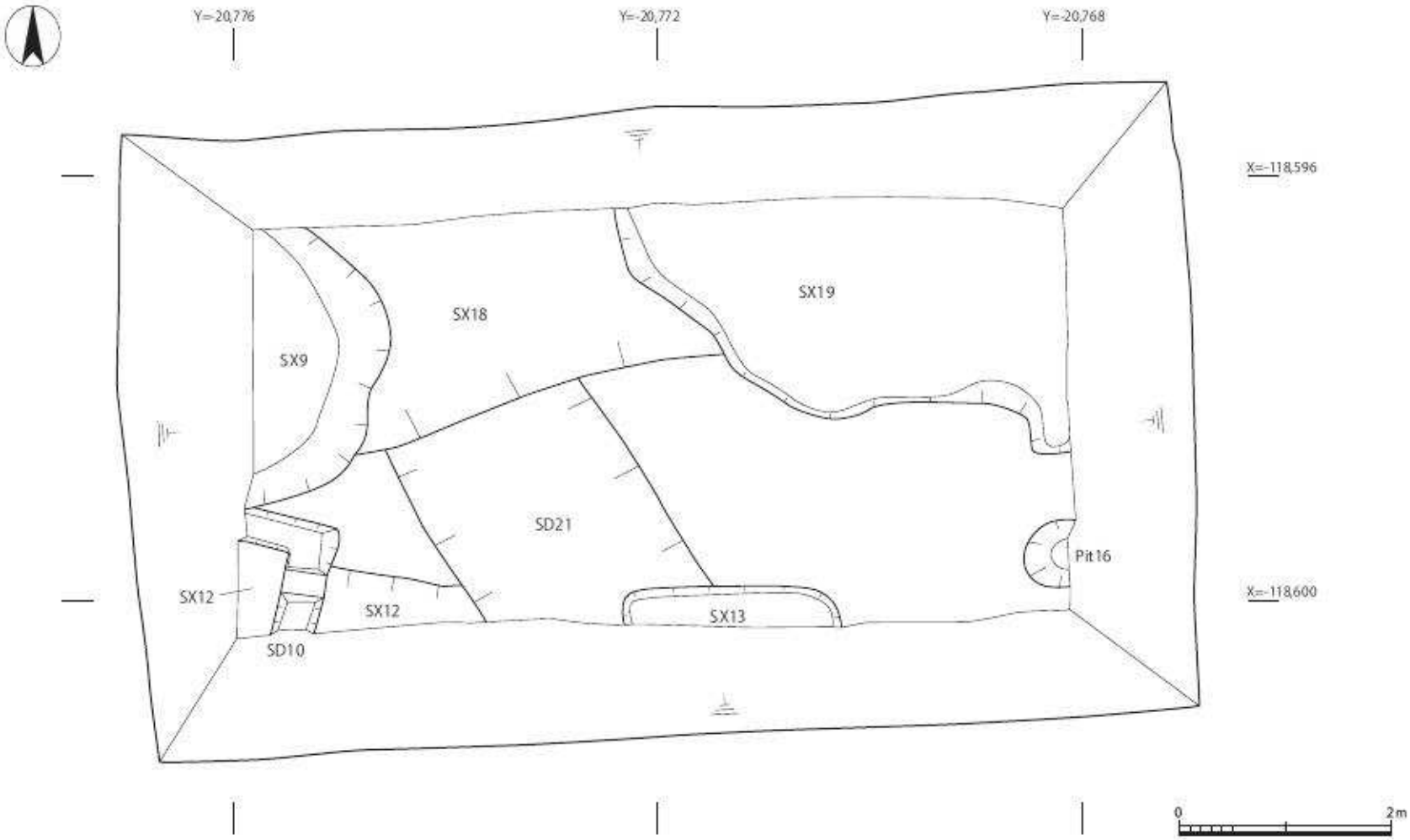


図13　6区第2-1面平面図（1：60）

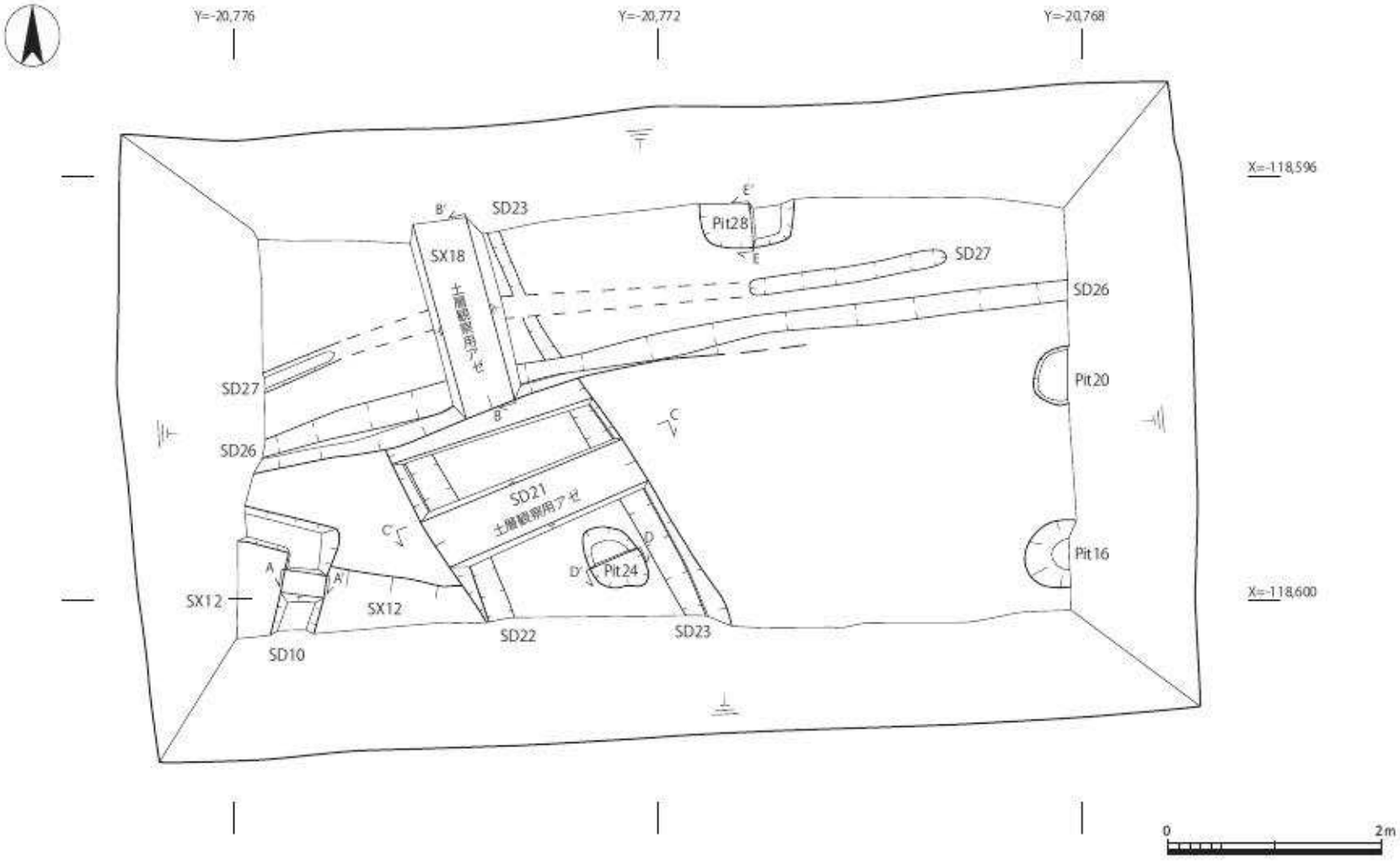


図14　6区第2-2面平面図（1：60）

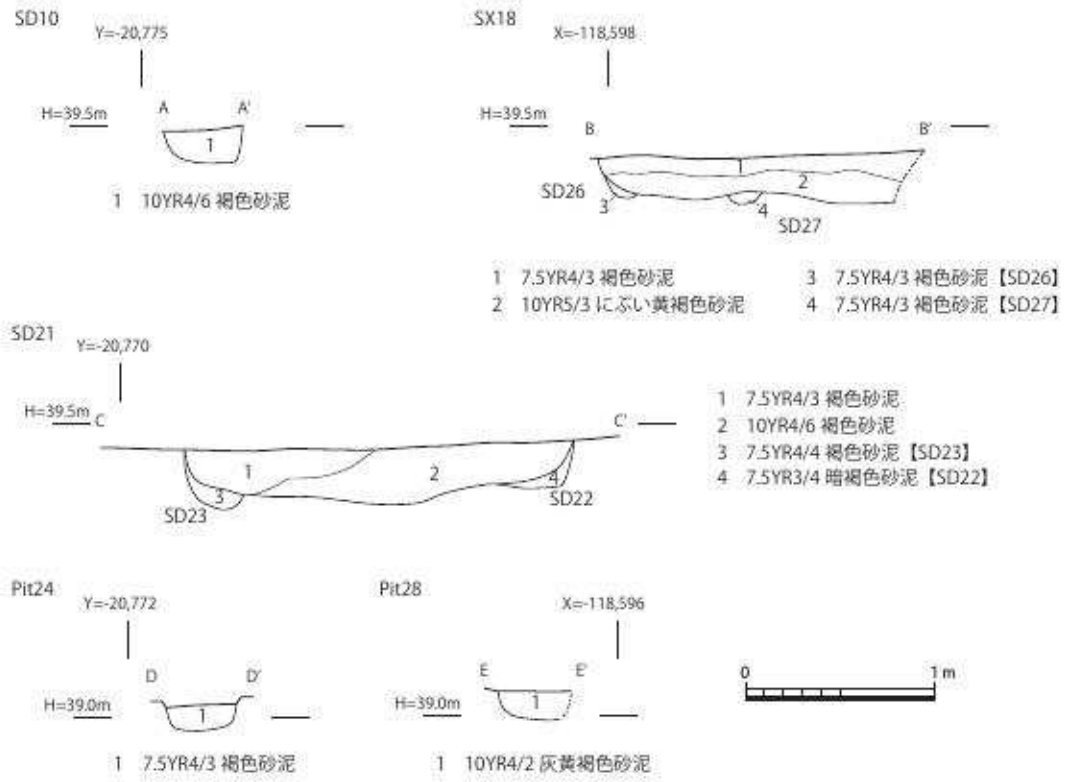


図15　6区遺構断面図（1：40）

SD10　調査区南西隅で検出した溝で，幅約0.4m，深さ約0.2mである。東西方向から南北方向へと直角に折れる。

Pit16　調査区南東で検出したピットである。やや濃色の土と薄色の土が交互に堆積し，固く締まっている。柱当たりは確認できなかった。出土遺物は土師器皿の小片で，桃山時代ごろのものと考えられるが，絞り込むだけの根拠には欠ける。また，Pit16が切っている褐色シルト層（東壁13層）は近代の造成土とは異質である。Pit16の互層で固く締まった堆積状況と，この遺構が切っている造成土の土質から，伏見城期の遺構および伏見城期の造成土である可能性もある。

SX18　調査区北半で検出した東西溝である。東で北に12°ほど振っている。深さは0.25～0.3mであり，幅は北側が調査区外となるため，不明である。埋土には粘性がある。出土遺物は桃山時代の瓦のみだが，SD21を切っており，SD21の出土遺物からみて江戸時代後期以降に埋没したものと考える。伏見城廃城後におこなわれていた耕作に関連するものか。

SD26・27　SX18の下面で検出した溝である。ともに幅は約0.2mで，深さは0.1m程度である。ともにSX18に並行し，特にSD26はSX18の南側ラインとほぼ一致するため，両者は関連する可能性が極めて高い。SX18の埋土とは分層できるため，これらが先に埋没していたと考えられる。なお東にむかって極めて浅くなり，平面的にはわずかに認識できるが，東壁断面には埋土は現れていない。機能については不明である。

SD21　調査区西寄りで検出した南北溝で，北で西に約30°振っている。幅は約2.0mで深さは約0.3mである。埋土には粘性がある。出土遺物の大半は桃山時代の瓦であるが，江戸時代後期と考え

られる陶磁器片が少数出土しており，埋没はこの時期以降と考えられる。SX18に切られているが，特徴は共通しており，機能も一致すると考えられる。

SD22・23　SD21の東西両端に並行して検出した溝であり，SD21の下面遺構である。埋土は分層でき，SX18に対するSD26・27と同様の関係となる。機能は不詳とせざるを得ない。

Pit24　SD21下面で検出したピットである。長軸が北で西に振れる楕円形で，長軸0.6m，短軸0.48m，深さ0.18mである。出土遺物はなく，年代は不明である。

Pit28　調査区中央北壁際で検出したピットである。隅丸方形で東西0.9m，北側は調査区外になるが，確認した範囲では南北約0.4mで，検出面からの深さは0.14mである。単層で柱当たり等は確認できなかった。出土遺物はなく，年代は不明である。

4．遺　物（表3）

出土した遺物は整理箱にして6箱である。内訳は土師器，瓦塼，施釉陶器，焼締陶器，輸入陶磁器，金属製品などである。平安時代後期から近代の幅広い時期の遺物が出土している。中でも，桃山時代から江戸時代初期ごろのものが多く，平成28年度からの一連の調査の中ではもっとも多くの陶磁器が出土している。以下，その概略を報告する。

（1）土器・陶磁器・金属製品（図16）

5　区

表土・造成土　1から4は土師器の皿である。1・4は口縁部に煤が付着しており，灯明皿として用いたものと考えられる。概して遺存状況は悪く，点数も少ないことから年代比定には慎重にならざるを得ないが，京都Ⅹ期新段階からⅩⅠ期古段階ごろのものとみる。5は土師器の羽釜口縁部である。6は土師器で，小型の高杯である。古墳時代のものか。

7から10は国産施釉陶器である。7は瀬戸美濃産の皿である。8から10は唐津焼で，9は胎土目が残り，10は鉄絵による草花文が描かれる。11は輸入陶磁器で，白磁の椀である。平安時代後期の所産である。伏見城築城に伴い，下層遺構から混入したか，あるいは造成のための客土に含まれたものであろう。12・13は焼締陶器で備前焼である。12は壺の類であり，13は擂鉢である。擂目は斜め方向に入る。14は菊紋を表現した金属鋲である。年代についての確証はないが，陸軍練兵

表3　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代以前	土師器，輸入陶磁器，瓦類		土師器1点，白磁1点，平瓦1点		
桃山時代～江戸時代初期	土師器，施釉陶器，焼締陶器輸入陶磁器，瓦類		土師器7点，施釉陶器6点，焼締陶器5点，輸入磁器2点，瓦類13点		
明治時代以降	陶磁器，金属製品		磁器1点，金属製品1点		
合　計		6箱	38点（1箱）	1箱	4箱

※　コンテナ箱数の合計は，整理後，Aランク遺物の抽出，詰め直しのため，出土時より2箱多くなっている。

場時代のものと考えている。

SX1　15は土師器で，焼塩壺である。焼成が甘く，きわめて軟質である。

SX2-4　16・17は国産施釉陶器で唐津焼である。17の内面には鉄絵が確認できるが，文様は不明である。18・19は輸入陶磁器で青花の椀および皿である。20・21は焼締陶器の擂鉢である。20は信楽焼で，21は備前焼である。

SX5　22は土師器の焙烙である。23は焼締陶器の擂鉢で備前焼である。

6　区

造成土　近代造成土（南壁３層など）の掘り下げ時に出土したものである。24は白磁の小杯であ

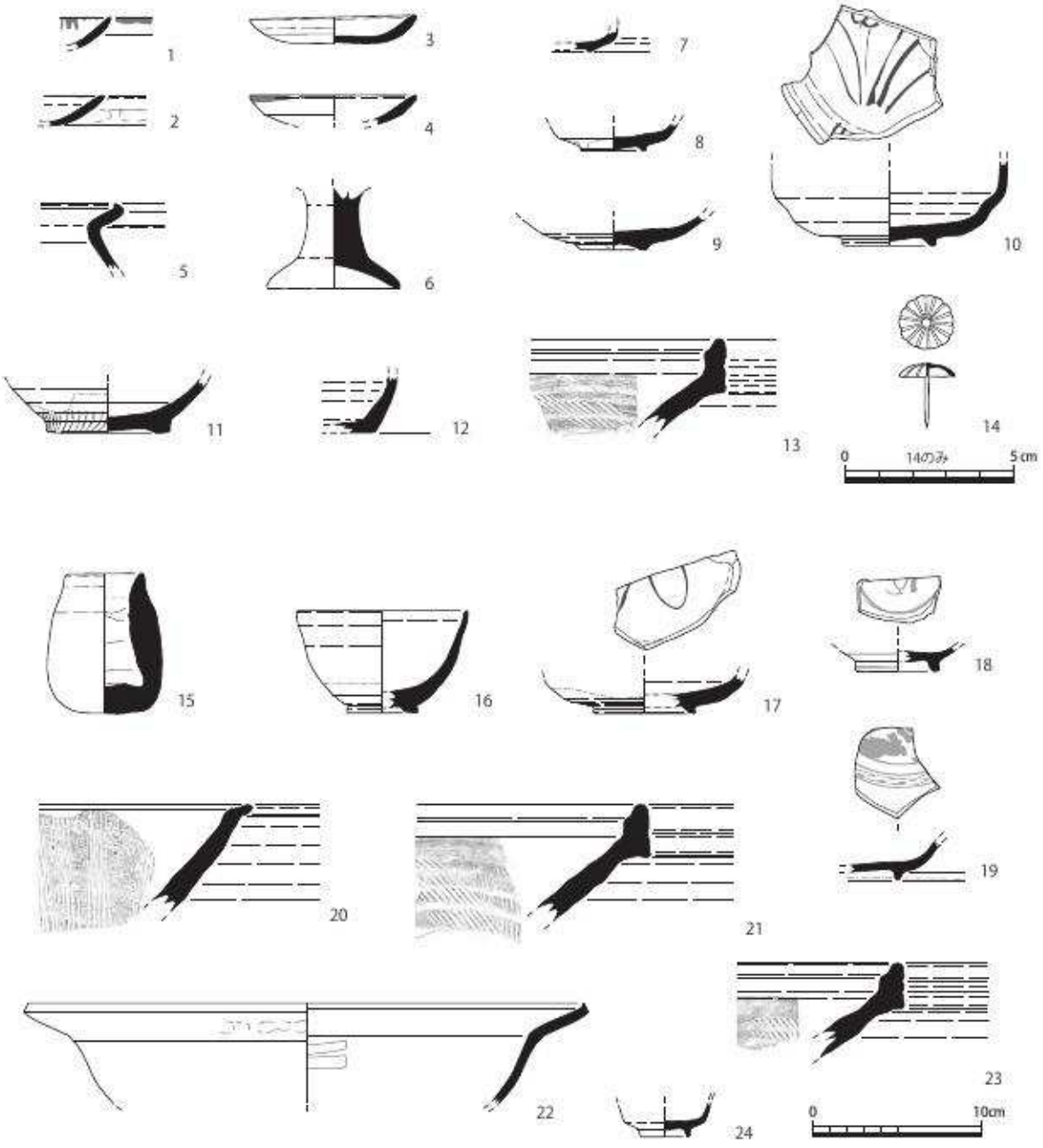


図16　出土遺物実測図（１：４，１：２）

る。近代以降の所産であろう。

（2）瓦　類（図17・18）

金箔瓦

瓦１は菊文軒丸瓦である。表土掘り下げ中に出土した。わずかながら金箔が付着している。瓦２も菊文軒丸瓦で，重機による表土掘削中に出土した。花弁部分にわずかに金箔が付着する。瓦３は巴文軒丸瓦である。表土掘削中に出土した。巴部分にわずかながら金箔が残る。焼成は甘く，軟質である。いずれも桃山時代のものである。

軒丸瓦

瓦４は菊文軒丸瓦である。表土掘削中に出土した。遺存部分から見るに，８弁で，弁間からのぞき弁を表現する。瓦５は巴文軒丸瓦で，SX5から出土した。瓦６は巴文軒丸瓦で，SX５から出土した。瓦５と比較して，やや小振りである。瓦７は巴文軒丸瓦で，表土掘削中に出土した。珠文がめぐらないものである。瓦８は巴文軒丸瓦で，表土掘削中に出土した。瓦９は巴文軒丸瓦で，SX2-4

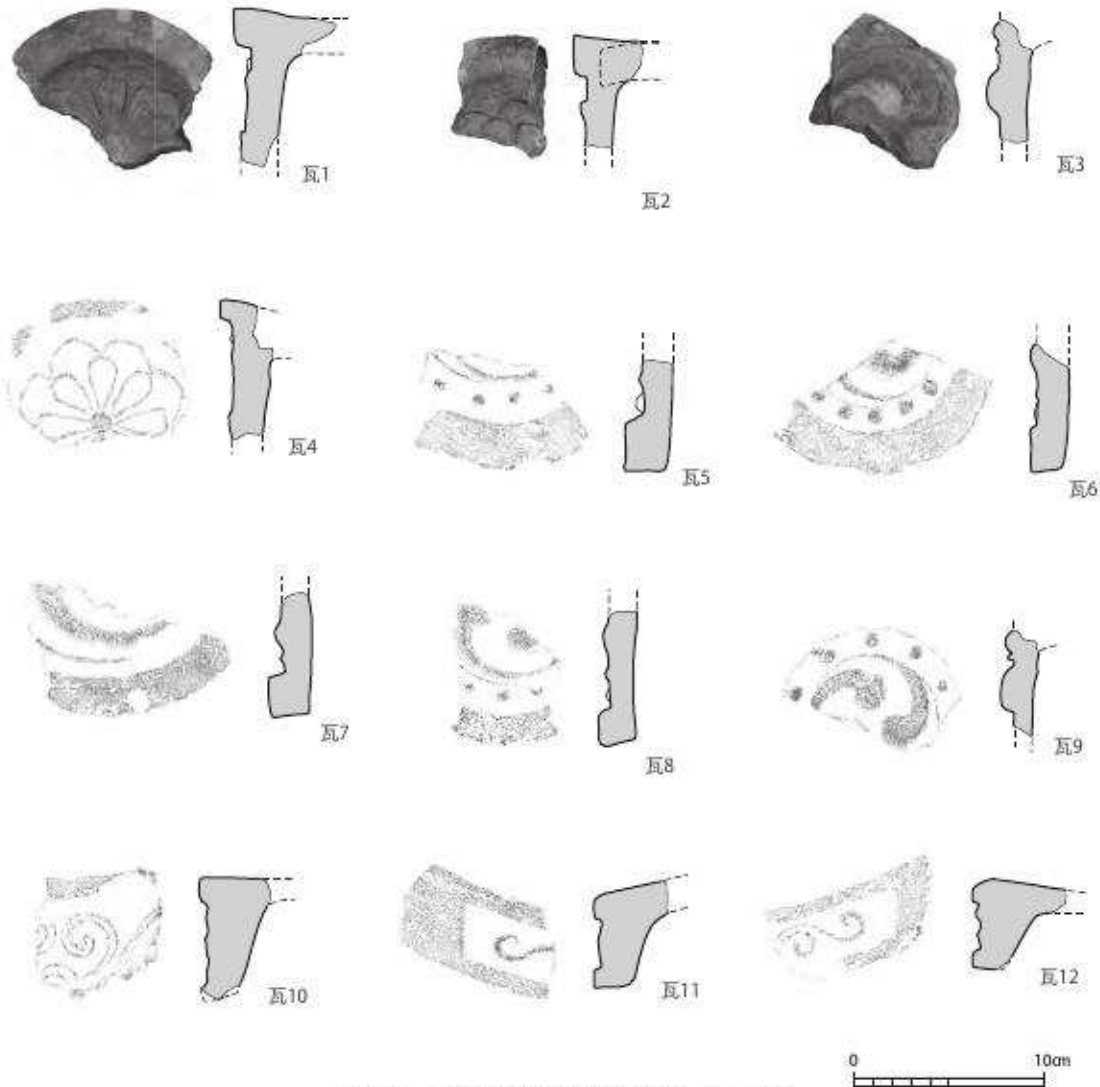


図17　出土瓦実測図及び拓影１（１：４）

の埋土中から出土したものである。いずれも桃山時代のものである

軒平瓦

瓦10は唐草文軒平瓦で，SX5から出土した。瓦当中央部が大きく下方に張り出す。瓦11・12はともに唐草文軒平瓦である。いずれもSX5から出土した。いずれも桃山時代のものである。

丸　瓦

瓦13は丸瓦で，凹面はコビキAの痕跡が観察できる。桃山時代のものである。

平　瓦

瓦14は平瓦で，SX5から出土した。凸面に格子目のタタキ痕が確認できる。焼成は堅緻で，鎌倉時代ごろの所産と考えられる。伏見城造営に伴う造成で運ばれてきた客土に由来する可能性もあるが，伏見殿やそれに伴う寺院群（大光明寺や光厳院）に由来する可能性もあり，平安時代後期の白磁椀（図16-11）と合わせ，「指月城以前」を考えるための材料となろう。

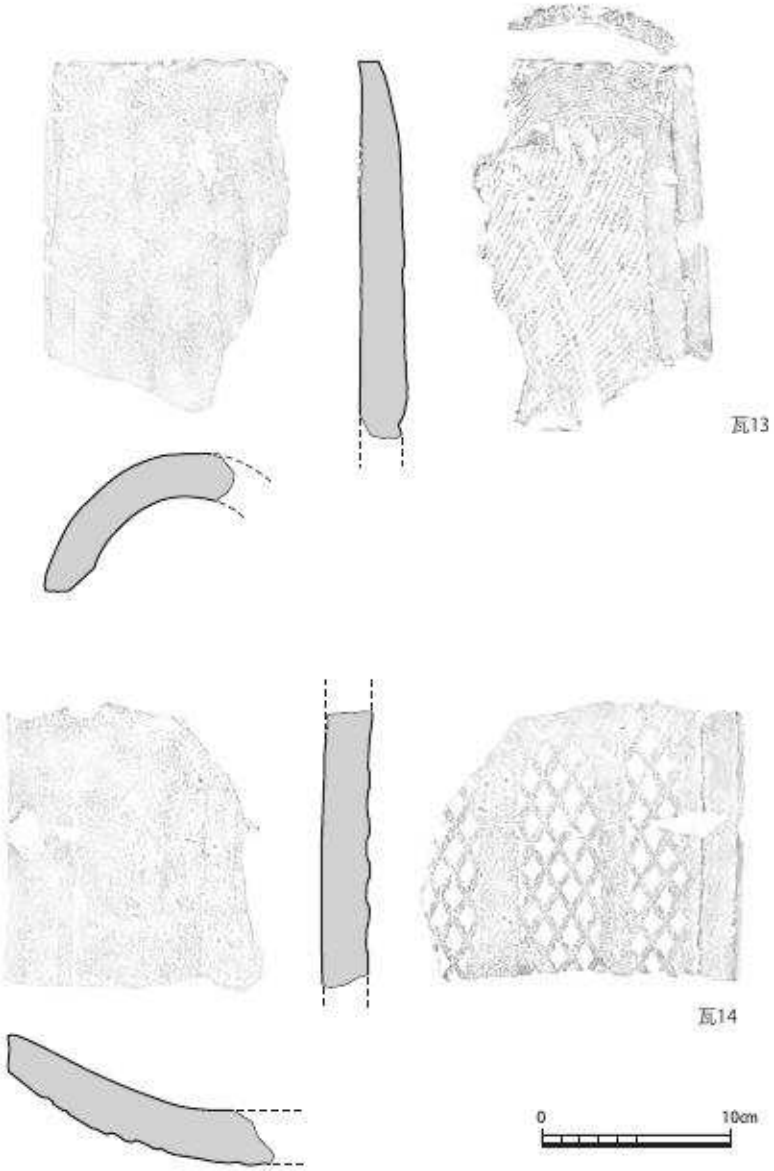


図18　出土瓦実測図及び拓影２（１：４）

5．まとめ

５区SX2・4・5は遺構そのものは近代以降の掘削であると推定しているが，埋土中から桃山時代の遺物が多数出土した。内容は，土師器，国産施釉陶器，焼締陶器，輸入陶磁器，瓦類と多様である。遺物は広い意味での伏見城期には含まれるが，今回の調査目的からは指月城段階のものか否かが問題となろう。出土した土師器皿は直線的な体部で，口縁端部内面にナデによって面ができており，Ｘ期新段階からXI期古段階ごろと見られるが，点数が少なく，年代を絞り込むには材料不足の感が否めない。国産陶器には多くの唐津焼が含まれており，年代的な根拠としうる。一般に，唐津焼は秀吉による朝鮮出兵（1592-1598）の際に，朝鮮半島から連れ帰った工人たちによって，生産が大きく変革し，全国的な流通製品として確立したと理解される。従って，指月城の段階，あるいは秀吉が没した慶長３年（1598）までの段階で，今回出土したほどの量の唐津焼が普及したとは考えがたい。出土遺物の多くは，伏見城４期以降，すなわち徳川政権下の大名屋敷の時代のものと考えられる。なお，５区の位置する地は，唐津藩主寺沢広高の屋敷地である。

６区で検出したSX18やSD21は北で西に振る，ないし東で北に振るものである。伏見城下はほぼ正方位の地割が施工されているが，桃山町泰長老一帯を中心に，北で西に振る斜行地割が残っている。この斜行地割は指月城に由来するものと考えられ，調査15（図１・表１）で検出した石垣も北で西に約10°振っている。大光明寺陵の整備や，公務員宿舎の造成に伴い，調査区付近の地割は正方位に近くなっているが，今回検出した遺構から，江戸時代までは斜行地割が生きていたことが判明した。これは，間接的ながら当地が指月城の旧地であることを示すと考える。６区では，標高39.5mほどで地山の明黄褐色シルトを検出した。これまでの調査区での地山検出レベルは１区で35.3m，２区で37.1m，３区で36.5m，４区で36.0mであり，６区の検出レベルは群を抜いて高い。現状地形からみても指月城推定範囲の東側は明らかに高く，天守などの主要施設は東側に存在した可能性が高い。近代以降に削平された範囲が広く，指月城期にさかのぼる遺構は検出できなかったが，今後，この付近での主要施設の検出に期待がかかる。

５区では，平安時代後期の白磁椀（図16-11）や鎌倉時代の平瓦（図18-瓦14），13～14世紀の可能性のある整地層など，伏見城造営をさかのぼりうる時期の遺物・遺構を確認した。伏見城造営は大規模な造成を伴っており，客土中に含まれていた遺物である可能性も排除できず，整地の時期も絞り込むことは難しい。しかし，これまでの調査と比較して，古手の遺物がやや集中している感はある。指月城造営の地は，古くは橘俊綱が山荘「臥見亭」を営み，『源氏物語』宇治十帖では，薫中将や匂宮は木幡山を越えて宇治へ通った。また後白河院から伏見宮家へと伝わる伏見殿が営まれた地であり，南北朝から室町時代の歴史的位置は無視できない。指月城・伏見城もその歴史的重層性の中に位置するものであり，今回の出土遺物はその長い歴史の一端を捉えうるものである。

（新田　和央）

註

1） 宇野隆志「伏見城下に眠る古墳－古墳時代遺物の出土分布による復元－」『立命館大学考古学論集Ⅵ』立命館大学考古学論集刊行会，2013年。なお，周辺では，調査２・３地点で埴輪が出土している。

2） 星野猷二・三木善則『器瓦録想　其の二　伏見城』伏見城研究会，2006年。

3） 清喜裕二ほか「光明天皇ほか　大光明寺陵の外形調査」『書陵部紀要』第69号〔陵墓編〕，宮内庁書陵部，2018年。

4） 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都－聚楽第・御土居と伏見城－』文理閣，2001年。

5） 山本雅和「伏見・指月城の復元」『リーフレット京都』No.261，（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館，2010年など。

6） 前掲４）

7） 谷直樹編『大工頭中井家建築指図集　中井家所蔵本』思文閣，2003年。

8） 部隊史編集委員会『工兵第十六（聯）隊史』，伏見工兵会，1989年。

9） 森島康雄「それでも伏見指月城はあった」『京都府埋蔵文化財論集』第６集，京都府埋蔵文化財調査研究センター，2010年。

文献一覧（表１　周辺調査一覧表）番号は表１に準拠する

1　鈴木重治編『伏見城豊後橋北詰の調査』伏見城研究会，1975年。

2　網伸也編「伏見城跡１」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2011年。

3　小森俊寛「伏見城々下町」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1991年。

4　吉村正親「伏見城跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年。

5　桜井みどり「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2000年。
桜井みどり・南孝雄「伏見城跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，2002年。

6　馬瀬智光「伏見城跡 No.13」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成18年度』京都市文化市民局，2007年。

7　山本雅和「伏見城跡（09FD133）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成21年度』京都市文化市民局，2010年。

8　馬瀬智光「伏見城跡 No.106」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局，2013年。

9　田邉一元編『伏見城跡－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』イビソク京都市内遺跡調査報告第９輯，㈱イビソク，2014年。

10　京都市文化市民局「試掘調査一覧表　No.22」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』2016年。
京都市文化市民局「調査一覧表　FD095」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成28年度』2017年。

11　熊谷舞子「伏見城跡・指月城跡（14F018）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』京都市

文化市民局，2016年。
12　京都市文化市民局「試掘調査一覧表　No.100」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』2016年。
13　（有）京都平安文化財『伏見城跡（指月城）発掘調査』現地説明会資料（報告書執筆中）
奥井智子「伏見城跡・指月城跡（14F529）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成27年度』京都市文化市民局，2016年。
14　熊谷舞子「伏見城跡・指月城跡（16A001）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成28年度』京都市文化市民局，2017年。
15　関西文化財調査会　近隣説明会資料，2016年。（報告書執筆中）
16　熊谷舞子・清水早織「伏見城跡・指月城跡（17F158）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』京都市文化市民局，2018年。
17　熊谷舞子「伏見城跡・指月城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成29年度』京都市文化市民局，2018年。
18　清喜裕二・有馬伸・横田真吾「光明天皇ほか　大光明寺陵の外形調査」『書陵部紀要』第69号〔陵墓編〕，宮内庁書陵部，2018年。

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　へいせい30ねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成30年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・黒須亜希子・清水早織・廣冨亮太
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2019年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょううきょうくじょういち 平安京右京九条一 ちぼうじょうさんちょうあと・さい 坊十三町跡・西寺 こあと・からはしいせき 跡・唐橋遺跡	きょうとしみなみくからはしさい 京都市南区唐橋西 寺町11番　地内	26100	1 755 756	34度 58分 48秒	135度 44分 11秒	2018年10月 1日～2018 年11月8日	119㎡	範囲確認
へいあんきょううきょうくじょういち 平安京右京九条一 ぼうじょうに・じゅうさんちょうあと・し 坊十二・十三町跡・史 せきさいじあと・からはしいせき 跡西寺跡・唐橋遺跡	きょうとしみなみくからはしさい 京都市南区唐橋西 寺町57	26100	1 A751 756	34度 38分 50秒	135度 44分 16秒	2018年10月 2日～2018 年11月2日	117㎡	範囲確認
しょくぶつえんきたいせき 植物園北遺跡	きょうとし　さきょうく　しもがも 京都市左京区下鴨 みなみしばちょう 南芝町30-1	26100	146	35度 03分 07秒	135度 46分 22秒	2018年11月 5日～2018 年11月21日	106㎡	個人住宅 兼 共同住宅
むろまちどのあとはなのご 室町殿跡（花の御 しょ）・上京遺跡	きょうとしかみぎょうくつきやま 京都市上京区築山 きたはんちょう 北半町230	26100	224 230	35度 01分 48秒	135度 45分 28秒	2018年4月 9日～2018 年5月18日	54㎡	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京九条一 坊十三町跡・西寺 跡・唐橋遺跡	都城跡 寺院跡 集落跡	平安時代	道路 溝 鋳造関連土坑	土師器，須恵器，瓦，鋳型，炉壁	西大宮大路と鋳造関連遺構を確認した。
平安京右京九条一 坊十二・十三町跡・史 跡西寺跡・唐橋遺跡	都城跡 寺院跡 集落跡	平安時代	基壇土 階段跡 整地層	土師器 瓦 銭貨	西寺講の堂基壇土・正面階段及び抜き取り溝，整地層を確認。
植物園北遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物 柱穴	土師器	古墳時代中期の掘立柱建物を確認した。
室町殿跡（花の御 所）・上京遺跡	邸宅跡 都城跡	室町～江戸時代	礎石，柱穴，溝，土坑，濠	土師器，須恵器，瓦，陶磁器，鉄製品，銭貨	室町殿の西限を示すと考えられる南北方向の濠を確認。

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく　へいせい30ねんど
書　　名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成30年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	馬瀬智光・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・黒須亜希子・清水早織・廣冨亮太
編集機関	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
所在地	〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y・J・Kビル２階
発行所	京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課
発行年月日	西暦2019年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しらかわがいくあと 白河街区跡	きょうとしさきょうくにょうごいんなかまち 京都市左京区聖護院中町8-4, 9-3, 9-4, 9-5, 9-8, 9-9, 9-11	26100	417	35度 01分 10秒	135度 46分 53秒	2018年1月 22日～2018 年2月28日	109㎡	個人住宅 兼 店舗
なかとみいせき 中臣遺跡	きょうとしやましなくにのうちこしちょう 京都市山科区栗栖野打越町33-1	26100	632	34度 58分 10秒	135度 48分 23秒	2018年4月 9日～2018 年4月18日	105㎡	個人住宅
なかとみいせき・なかとみじゅうさんつか 中臣遺跡・中臣十三塚	きょうとしやましなくにしのやまなかとみちょう 京都市山科区西野山中臣町71-29	26100	632 632-2	34度 55分 50秒	135度 48分 15秒	2018年6月 18日～2018 年6月26日	59.5㎡	個人住宅
ふしみじょうあと・しげつじょうあと・たいちょうろういせき 伏見城跡・指月城・泰長老遺跡	きょうとしふしみくももやまちょうたいちょうろうももやまひがしごうどうしゅくしゃしきちない 京都市伏見区桃山町泰長老　桃山東合同宿舎敷地内	26100	1172 1180 1182	34度 55分 50秒	135度 46分 21秒	2018年8月 20日～2018 年9月28日	126㎡	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
白河街区跡	寺院跡 邸宅跡	平安時代前期 ～鎌倉時代	井戸 ピット 落ち込み	土師器, 須恵器, 瓦器, 陶磁器	平安時代後期の遺物が多量に出土した。
中臣遺跡	集落跡	江戸時代	溝, 柱列, 井戸, 土坑	土師器, 陶磁器, 土製品, 銭貨, 瓦	江戸時代末期の住宅跡を確認。
中臣遺跡・中臣十三塚	集落跡 古墳	古墳時代後期～飛鳥時代, 江戸時代	溝 土坑 ピット	須恵器, 土師器, 陶器, 瓦	
伏見城跡・指月城・泰長老遺跡	平城跡 集落跡	桃山～江戸時代	溝 落ち込み ピット	土師器 陶磁器	指月城の地割を踏襲した溝を確認した。

図　　版

図版１　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡　遺構

１　第５調査区犬行３・東側溝６（北から）

２　道路４（北から）

図版２　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）・唐橋遺跡　遺構

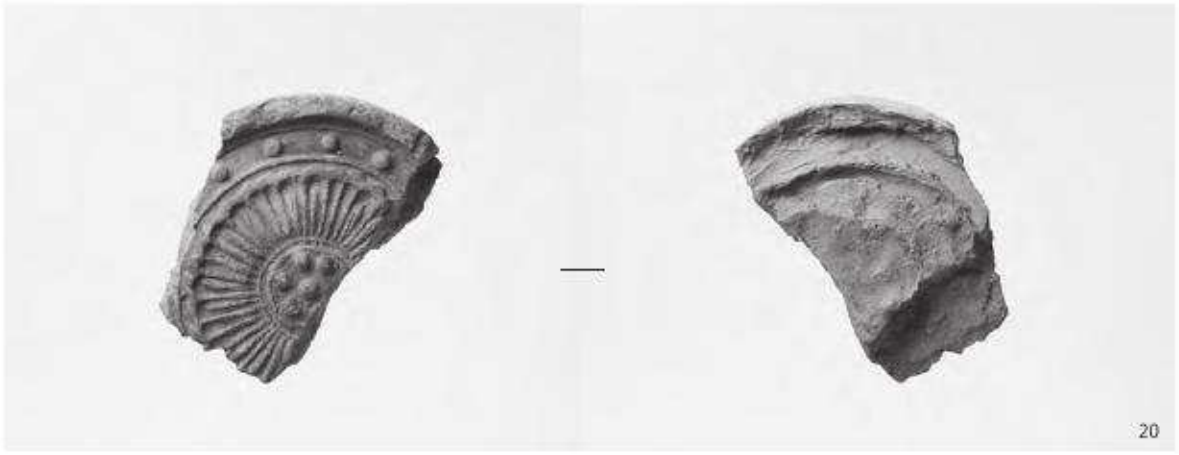
１　第６調査区全景（北から）

２　内溝３断割り（北東から）

図版３　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）唐橋遺跡　遺物

3

16


20

22

23

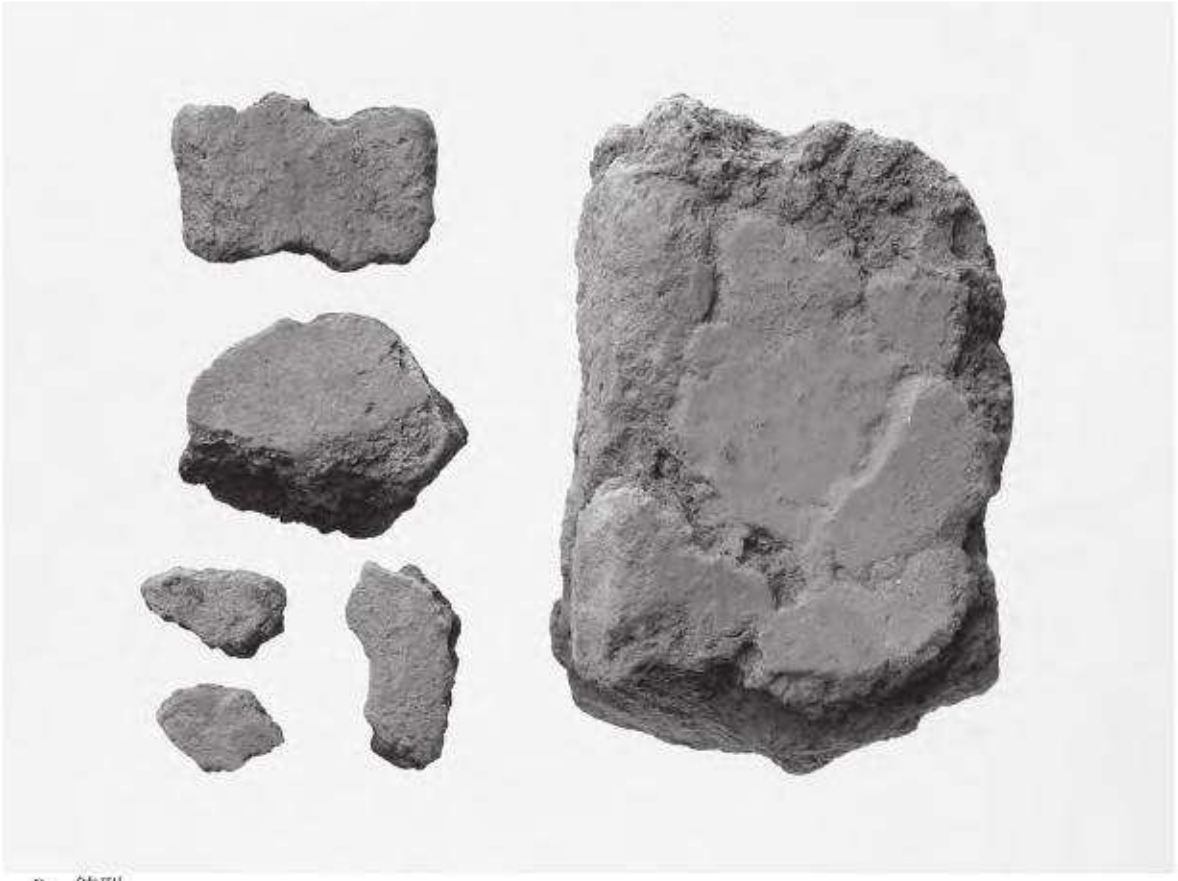
30

31

1　出土遺物

図版４　平安京右京九条一坊十三町跡・西寺跡（34次）唐橋遺跡　遺物

1　炉壁



2　鋳型

図版５　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡　遺構

１　２区全景（西から）

２　礫敷き整地層（北西から）

３　礫敷き整地層と階段（南から）

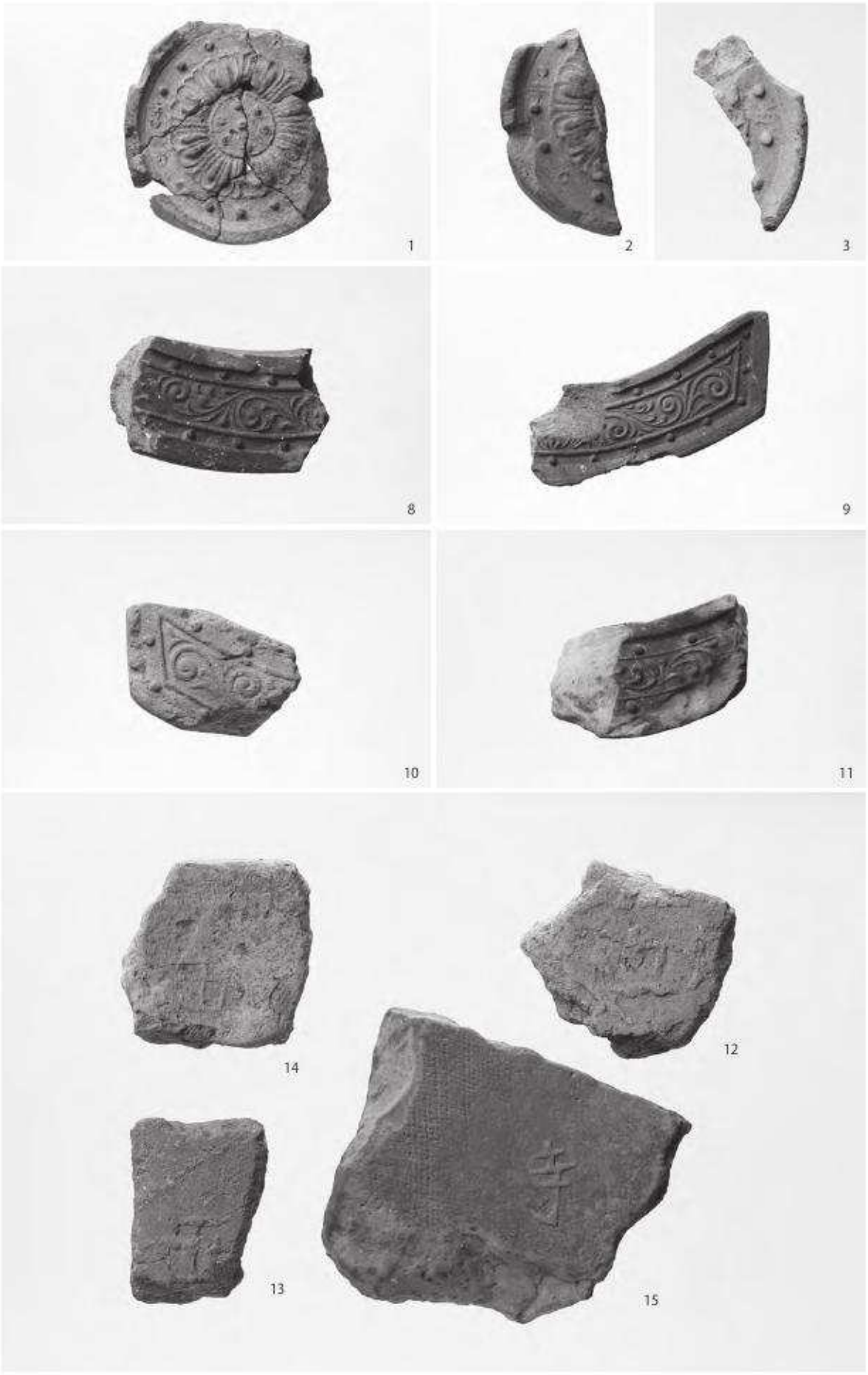
図版６　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡　遺構

1　３区全景（南東から）

2　３区西壁９層と基壇土の高まり（北東から）

3　１区瓦溜り10（南西から）

図版７　平安京右京九条一坊十二・十三町跡・史跡西寺跡（35次）・唐橋遺跡　遺物



1　出土遺物

図版８　植物園北遺跡　遺構

1　調査区全景（西から）

2　建物１全景（北西から）

図版９　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　遺構

1　第１面全景（東から）

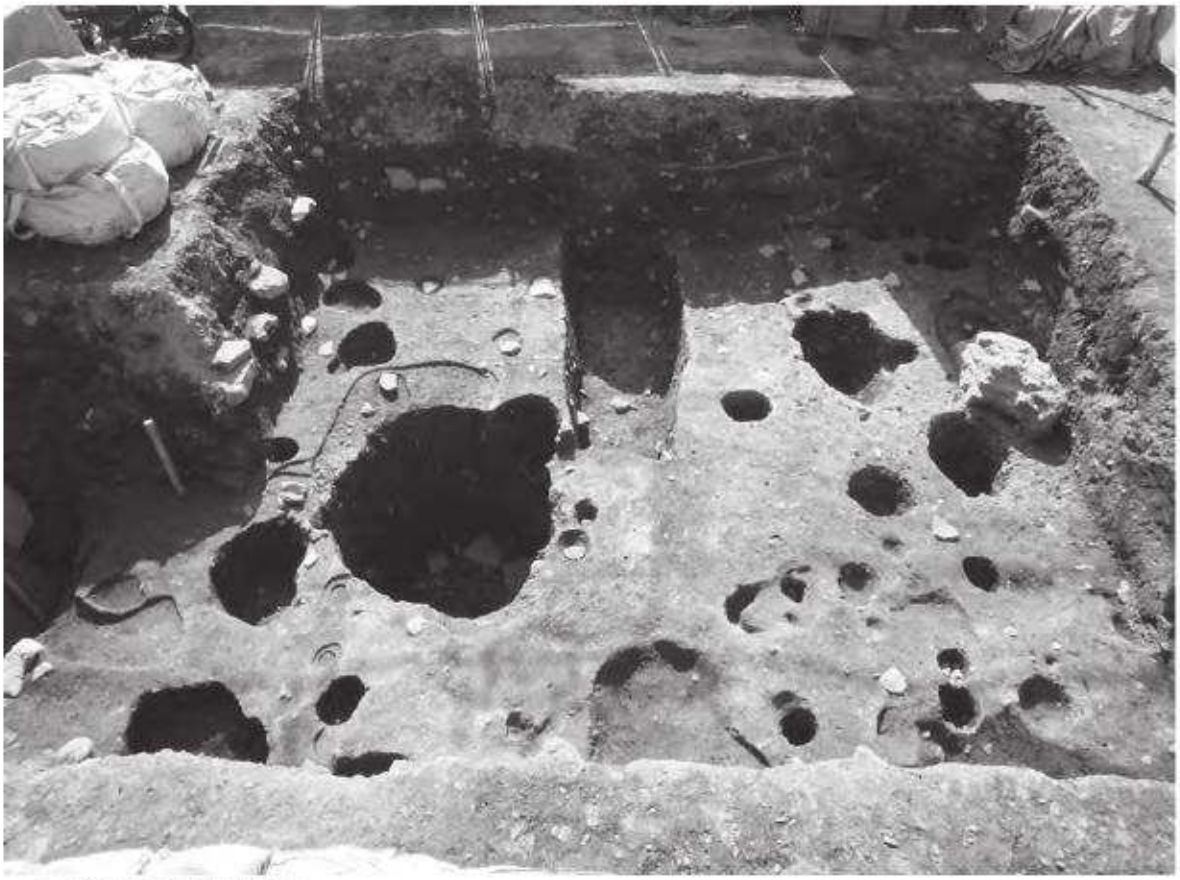
2　第２面全景（東から）

1　第２面　柱列Ｃ（東から）

2　第２面　土坑２７・５８（南東から）

1　第２面　建物Ｄ（東から）

図版11　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　遺構



1　第３面全景（東から）

2　第５面　濠124検出状況（南東から）

図版12　室町殿跡（花の御所）・上京遺跡　遺物

17

19

24

30

64

68

70

71

89

110

1　出土遺物

図版13　白河街区跡　遺構

1　第１面全景（西から）

2　第２面全景（西から）

図版14　白河街区跡　遺構

1　SE80（東から）

2　SX91中層下端遺物出土状況（南西から）

3　SX91完掘状況（北西から）

24

74

101

102

143

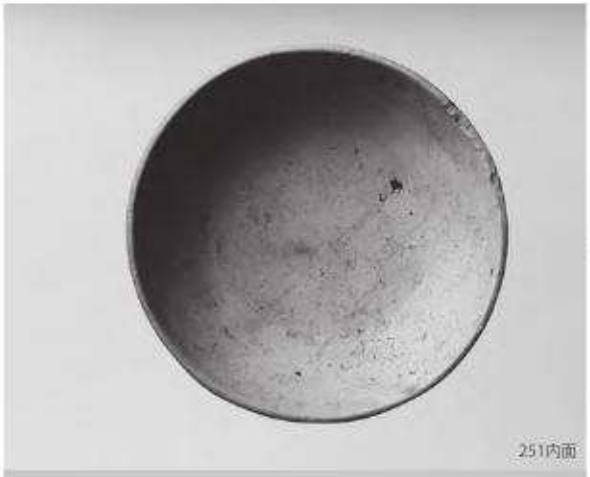
77墨書

171

153

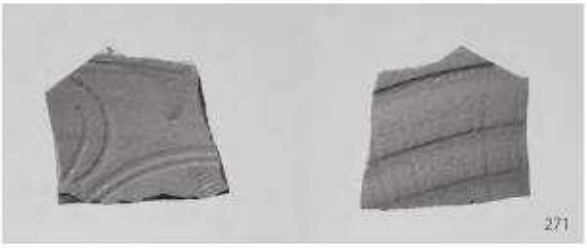
172

図版16　白河街区跡　遺物

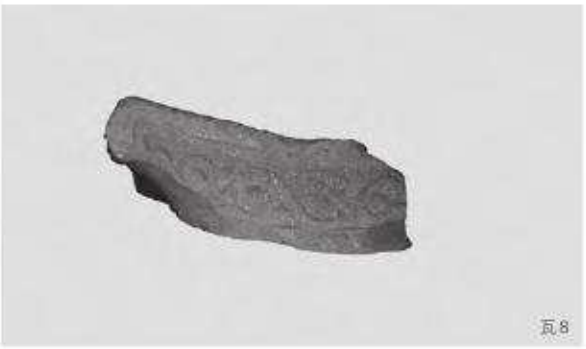

251内面

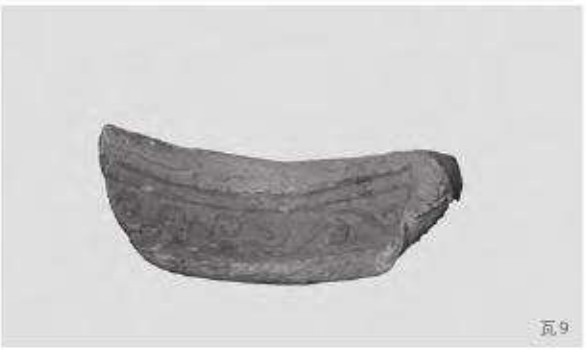
251

251外面


271

瓦7


瓦8


瓦9

瓦13

1　第1調査区全景（南東から）

2　第2調査区全景（東から）

3　第3調査区完掘状況（西から）

図版18　伏見城跡・指月城跡・泰長老遺跡　遺構・遺物

1　5区全景（西から）

2　6区全景（東から）

3　出土遺物

京都市内遺跡発掘調査報告
平成３０年度

発行日　２０１９年3月３１日
発　行　京都市文化市民局
編　集　京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住　所　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町３９４番地
Y・J・Kビル２階
TEL：（０７５）－３６６－１４９８
印　刷　株式会社　昭英社
TEL：（０７５）－３５１－１８１１